

南あわじ市

# 汁谷窯跡群・汁谷遺跡

— 広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅱ —



2006年3月

兵庫県教育委員会

南あわじ市

# 汁谷窯跡群・汁谷遺跡

広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅱ

2006年3月

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本報告書は広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴い淡路県民局地域振興部洲本土地改良事務所の委託を受けて平成16年度に発掘調査を実施した汁谷窯跡群および汁谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 兵庫県教育委員会が発掘調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の森内秀造と藤田 淳が発掘調査を担当した。
3. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所における遺跡調査番号は下記の通りである。

汁谷1号窯	2004143
汁谷2号窯	2004143
汁谷遺跡	2004144
4. 遺跡の所在地は南あわじ市（旧三原郡三原町）神代黒道100-3・101、103-1・135-1他である。
5. 遺物番号の表示は本文・図版・図面を通して統一した。
6. 南あわじ市地域地図は、旧三原町および南あわじ市編集発行のものを使用した。このほか、三原平野周辺の地質図については旧通産省地質調査所平成7年の「地質図 徳島」をもとにして作成した。また、使用地図はすべて北を上になっている。
7. 本報告書については、森内と藤田が共同で執筆し、編集については非常勤嘱託員杉本淳子・藤川紀子・加藤裕美・豊田貞代の協力を得て行った。
8. 遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、航空写真および遺物写真は株式会社アコードに撮影委託したものである。
9. 汁谷窯跡については平成15年度に三原町教育委員会（現、南あわじ市教育委員会）によって灰原の一部の調査が行なわれている。遺跡の詳細は未報告ではあるが、今回の成果をより有効とするために、調査担当者の山崎裕司氏より特別にその概要報告を頂いた。
10. 須恵器については、三辻利一鹿児島国際大学客員教授に胎土分析を行なって頂き、また、独立行政法人産業技術総合研究所主任研究員 寒川旭氏に噴砂痕跡について、現地指導の上、所見を頂いた。
11. 花粉分析ならびに炭化材の樹種同定については株式会社古環境研究所に依頼した。
12. 整理後の遺物については、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館に保管しているが、資料番号0132の円面硯については南あわじ市教育委員会に保管されている。
13. 調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。

鹿児島国際大学	三辻利一
独立行政法人産業技術総合研究所	寒川 旭
洲本実業高等学校元教諭	岡本 稔
独立行政法人奈良文化財研究所	巽 淳一郎・西口壽生・神野 恵
京都府立大学	菱田哲郎
小松市教育委員会	望月精司
大野城市教育委員会	舟山良一・石木秀啓
大津市教育委員会	須崎雪弘・田中久雄
大阪歴史博物館	佐藤 隆
洲本市教育委員会	浦上雅史
南あわじ市教育委員会	坂口弘貢・山崎裕司・定松佳重・的崎 薫・谷口 梢
南あわじ市神代黒道自治会	同自治会長 安田 剛

(順不動・敬称略)

# 本文目次

第1章 調査の経緯	(藤田)	1
第1節 調査に至る経過		1
第2節 確認調査		2
第3節 本発掘調査の経過		2
1 汁谷窯跡群の調査経過		2
2 汁谷遺跡の調査経過		3
3 調査成果の公開と2号窯の保存		4
第4節 整理作業		4
第2章 遺跡の歴史的環境	(森内・藤田)	5
第1節 地理的環境		5
第2節 歴史的環境		5
第3章 遺構の概要		9
第1節 遺跡の立地	(藤田)	9
第2節 遺跡の概要	(藤田)	12
第3節 汁谷1号窯灰原(1号A窯・1号B窯)	(森内・藤田)	15
1 灰原の詳細		15
2 灰層の検討による2基の窯跡の存在		17
第4節 汁谷2号窯	(森内)	20
1 窯体		20
2 前庭部・灰原(1号A窯土坑205)		23
第5節 汁谷遺跡	(藤田)	25
1 基本層序		25
2 歴史時代の遺構		25
3 弥生時代の遺構		33
第4章 出土遺物の概要		35
第1節 汁谷1号窯灰原出土遺物	(森内)	35
1 遺物の出土層位と器種分類		35
2 上部灰層(1号A窯灰原)出土遺物		37
3 下部灰層(1号B窯灰原)出土遺物		41
4 土坑205出土遺物		45
第2節 汁谷2号窯出土遺物	(森内)	46
第3節 汁谷遺跡出土遺物	(森内・藤田)	47
1 歴史時代の遺構出土遺物		47
2 弥生時代の遺構出土遺物		49
第5章 自然科学分析		51
第1節 汁谷遺跡で検出された地震の痕跡について	(寒川 旭)	51
第2節 汁谷窯跡群出土須恵器の化学特性	(三辻利一)	54
第3節 汁谷窯跡群における樹種同定	(古環境研究所)	57
第4節 汁谷窯跡群・汁谷遺跡における花粉分析	(古環境研究所)	62
第6章 総括	(森内)	65
第1節 遺構		65
1 遺構からみた窯跡の構築順序		65
2 窯跡と関連遺構		65
3 窯体の構造		66
第2節 遺物		67
1 GK層の遺物について		67
2 各窯における器種構成の特徴		69

3	各窯の遺物年代の検討	72
第3節	汁谷窯跡群における地震痕跡について	74
1	SH201の噴砂痕跡と出土遺物の問題	74
2	2号窯における地震被災と推断される痕跡について	78
第4節	まとめにかえて	80
1	淡路島の窯跡群と汁谷窯跡群	80
2	今後の課題	81
付 載	圃場整備事業に伴う汁谷窯跡・汁谷遺跡の発掘調査概要 (山崎裕司)	85
	出土遺物一覧表	95 ~ 100

## 挿 図 目 次

挿図1	広域営農団地農道整備事業南淡路地区	1	挿図36	庄慶山1号窯跡 窯体図	67
挿図2	遺跡の位置	5	挿図37	杯H蓋身天地逆転例	68
挿図3	三原平野周辺遺跡分布図	6	挿図38	窯跡各層出土蓋・杯分類図	70
挿図4	浦壁大池採集のナイフ形石器実測図	8	挿図39	窯跡各層出土甕分類図	71
挿図5	南あわじ市周辺の地質図	9	挿図40	難波編年図および汁谷窯跡群出土須恵器	73
挿図6	調査位置と周辺の地形	10	挿図41	出土甕当て具相互関係図	75
挿図7	遺跡周辺の微地形と調査位置	11	挿図42	窯跡各層出土甕当て具痕拓本(1)	76
挿図8	汁谷窯跡群1区	12	挿図43	窯跡各層出土甕当て具痕拓本(2)	77
挿図9	溝201断面図	12	挿図44	淡路島の須恵器窯跡 分布図	80
挿図10	汁谷窯跡群・汁谷遺跡 全体図	13	挿図45	庄慶山1号窯跡および土生寺窯跡出土遺物	81
挿図11	汁谷窯跡群 全体図	14	挿図46	確認調査区設定図	85
挿図12	汁谷1号窯 灰原断面図	16	挿図47	A地区遺構図	86
挿図13	汁谷1号窯 灰原断面模式図	17	挿図48	灰原4-b中層 出土遺物	87
挿図14	窯跡位置想定図	18	挿図49	A地区出土須恵器(1)	88
挿図15	土坑204断面図	19	挿図50	A地区出土須恵器(2)	89
挿図16	汁谷2号窯 窯体図	21	挿図51	A地区出土須恵器(3)	90
挿図17	汁谷2号窯 遺物出土状況	22	挿図52	A地区出土須恵器(4)	91
挿図18	汁谷2号窯 全体図	24	挿図53	A地区出土須恵器(5)	92
挿図19	汁谷遺跡調査区東壁 土層断面図	25	写真1	発掘調査風景	3
挿図20	SK201	26	写真2	寒川主任研究員現地指導	3
挿図21	SH201	27	写真3	神代小学校の現場見学	4
挿図22	SB201	28	写真4	工事完成後の遺跡周辺	4
挿図23	SK204・206・207・210・211	30	写真5	浦壁大池採集のナイフ形石器	8
挿図24	SD205・206・210~213	31	写真6	2号窯出土窯壁片	23
挿図25	SD209・Po201	33	写真7	汁谷遺跡作業風景(1)	32
挿図26	1号窯灰原地区割と土層断面図	35	写真8	汁谷遺跡作業風景(2)	32
挿図27	杯・蓋・甕分類図	36	写真9	酒船石遺跡の石垣の崩壊跡	52
挿図28	汁谷遺跡で検出された地震の痕跡(噴砂B)	51	写真10	汁谷窯跡群の炭化材I	60
挿図29	坂尻遺跡で検出された地震の痕跡	51	写真11	汁谷窯跡群の炭化材II	61
挿図30	南海地震と東海地震の発生年表	52	写真12	汁谷窯跡群・汁谷遺跡の花粉・孢子	64
挿図31	淡路群の両分布図	55	写真13	A地区遺構	93
挿図32	戸川池窯跡 出土須恵器の両分布図	56	写真14	A地区出土甕	94
挿図33	汁谷窯跡 出土須恵器の両分布図	56			
挿図34	戸川池群と汁谷群の相互識別(K, Ca, Fe, Na)	56			
挿図35	戸川池群と汁谷群の相互識別(K, Ca, Rb, Sr)	56			

## 表 目 次

第1表	汁谷・戸川池窯跡出土須恵器の分析データ	55
第2表	汁谷窯跡群における樹種同定結果	59
第3表	汁谷窯跡群・汁谷遺跡における花粉分析結果	63

## 図 面 目 次

第1図	1号窯	Y層出土遺物
第2図	1号窯	Y層出土遺物
第3図	1号窯	E・F層出土遺物
第4図	1号窯	E・F層出土遺物
第5図	1号窯	E・F・R層出土遺物
第6図	1号窯	F・K層出土遺物
第7図	1号窯	F・K層出土遺物
第8図	1号窯	G層・K層出土遺物
第9図	1号窯	K層出土遺物
第10図	1号窯	L・M・N層出土遺物
第11図	1号窯	土坑205出土遺物
第12図	2号窯	窯体出土遺物
第13図	汁谷遺跡	SK201下層出土遺物
第14図	汁谷遺跡	SK201上層・SH201出土遺物
第15図	汁谷遺跡	SK・SD群出土遺物
第16図	汁谷遺跡	SD209出土遺物

## 遺構写真図版目次

遺構図版1	a) 汁谷窯跡群・汁谷遺跡遠景 (西から)	b) 汁谷窯跡群・汁谷遺跡全景 (西から)
遺構図版2	a) 1・2号窯全景 (灰原検出時) 西から	b) 1・2号窯全景 (調査後) 西から
遺構図版3	a) 1号窯灰原縦断面	b) 1号窯灰原縦断面細部 (中央より東)
	c) 1号窯灰原縦断面細部 (中央より西)	
遺構図版4	a) 1号窯灰原全景	b) 1号窯灰原横断面 (中央排水溝より北)
	c) 1号窯灰原横断面 (中央排水溝)	d) 1号窯灰原横断面 (中央排水溝より南)
	e) 1号窯灰原横断面 (南端)	
遺構図版5	a) 1号窯前庭部排水溝	b) 1号窯完掘状況 (北西から)
遺構図版6	a) 2号窯前庭部 (1号窯土坑205) 縦横断面	
	b) 2号窯前庭部 (1号窯土坑205) 縦断面	
	c) 2号窯前庭部 (1号窯土坑205) 完掘状況	
遺構図版7	a) 2号窯全景	b) 2号窯全景
遺構図版8	a) 2号窯断面1 (西から)	b) 2号窯断面1 (西から)
	c) 2号窯断面2 (西から)	d) 2号窯断面2細部 (西から)
	e) 2号窯断面2細部 (西から)	f) 2号窯断面3
	g) 2号窯断面3細部	h) 2号窯断面3細部
遺構図版9	a) 2号窯舟底状ピット検出状況 (南から)	b) 2号窯舟底状ピット (西から)
	c) 2号窯舟底状ピット縦横断面 (北から)	d) 2号窯舟底状ピット横断面 (西から)
	e) 2号窯右側壁 (西から)	f) 2号窯右側壁 (西から)

	g) 2号窯右側壁(北東から)	h) 2号窯左側壁(西から)
遺構図版10	a) 汁谷遺跡全景(西から)	b) 汁谷遺跡全景(東から)
遺構図版11	a) SK201全景(北から)	b) SK201土器出土状況(西から)
遺構図版12	a) SK201東西断面(南から)	b) SK201南北断面(西から)
	c) SK201東西断面(南から)	d) SK201焼土(東から)
	e) SK201土器出土状況(東から)	f) SK201土器出土状況(南から)
	g) SK201東辺土器出土状況(西から)	h) SK201上層土器出土状況(北から)
遺構図版13	a) SH201全景(西から)	b) SH201周壁溝検出状況(西から)
	c) SH201断面(北から)	d) SH201周壁溝内土器出土状況(西から)
遺構図版14	a) SB201全景(西から)	b) SB201ピット1断ち割り(西から)
	c) SB201ピット2断ち割り(南から)	d) SB201ピット4断ち割り(西から)
	e) SB201ピット5断ち割り(北から)	
遺構図版15	a) SK204断面(北から)	b) SK206断面(北から)
	c) SK207断面(南西から)	
遺構図版16	a) SK210完掘状況(南から)	b) SK210断面(南から)
	c) SK211土器出土状況(南から)	
遺構図版17	a) SD205断面(北から)	b) SD205断面(北から)
	c) SD206断面(東から)	d) SD206断面(東から)
	e) SD210断面(南から)	f) SD211断面(東から)
	g) SD212断面(西から)	h) SD213断面(西から)
遺構図版18	a) SD209全景(南から)	b) SD209断面(北から)
	c) SD209内土器出土状況(北西から)	
遺構図版19	a) 噴砂A断面(北から)	b) 噴砂A断面(北から)
	c) 噴砂B断面(西から)	

## 遺物写真図版目次

遺物図版 1	a. 1号窯Y E F層出土須恵器	b. 1号窯G K層出土須恵器
遺物図版 2	a. 1号窯MN層出土須恵器	b. 2号窯出土須恵器
	c. 遺跡SK201出土須恵器	
遺物図版 3	1号窯Y層出土須恵器 1	
遺物図版 4	1号窯Y層出土須恵器 2	
遺物図版 5	1号窯E・F層出土須恵器 1	
遺物図版 6	1号窯E・F層出土須恵器 2	
遺物図版 7	1号窯E・F層出土須恵器 3	
遺物図版 8	1号窯F K層出土須恵器	
遺物図版 9	1号窯G・K層出土須恵器 1	
遺物図版10	1号窯G・K層出土須恵器 2	
遺物図版11	1号窯M・N層出土須恵器	
遺物図版12	1号窯土坑205出土須恵器	
遺物図版13	2号窯出土須恵器	
遺物図版14	汁谷遺跡SK201下層出土須恵器 1	
遺物図版15	汁谷遺跡SK201下層出土須恵器 2	
遺物図版16	汁谷遺跡SK201上層出土須恵器	
遺物図版17	汁谷遺跡SH201出土土器	
遺物図版18	汁谷遺跡SD209出土弥生土器	
遺物図版19	汁谷遺跡出土石器	

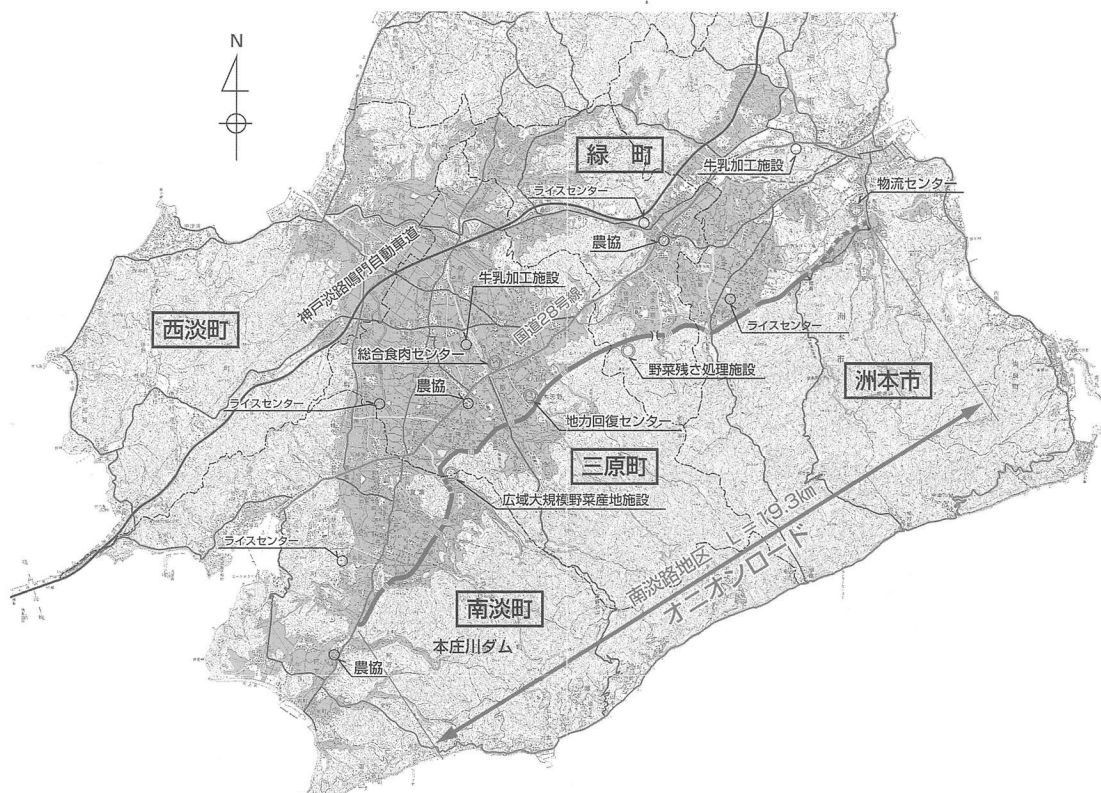
# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

兵庫県南部に位置する淡路島は、西は播磨灘、東は大阪湾と紀伊水道に囲まれた瀬戸内海最大の島である。山が多く耕地率は19%に過ぎないが、温暖で肥沃な三原平野をかかえる南淡路地域は、耕地面積も広く全国的にも有数の農業地帯となっている。三原川流域に広がる三原平野では、恵まれた地理条件と気候条件、高度な農業技術を生かし、酪農を基幹として多毛作による水稻・生鮮野菜・玉ねぎなどが栽培され、生産性の高い農業が営まれている。農産物は京阪神方面へ出荷され、阪神都市圏の「食」の供給基地として重要な役割を果たしている。

しかし、当地域の主要な道路は一般交通が多く、渋滞も頻繁に発生している上、平成10年4月の明石海峡大橋開通以来、島内の交通量は増加傾向にあり、農産物輸送に支障が生じている。このため、「淡路広域営農団地整備計画」にもとづき、交通の安全確保と輸送の効率化を図る広域的な農道を建設し、農業生産基盤と農村の生活環境を一体的に整備する事業が展開されることとなった。

本事業は、広域営農団地農道整備事業 南淡路地区（通称「オニオンロード」）として、兵庫県淡路県民局地域振興部洲本土土地改良事務所によって平成6年度から開始されたが、これに伴い、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では、平成8年4月15日～18日、洲本市～旧南淡町間の事業予定地約16kmについて分布調査を行った。この結果、11ヶ所の地点で遺物散布地が把握されたが、南あわじ市神代黒道では、淡路最古の窯跡として周知されていた汁谷窯跡の近接地が事業予定地となっており、遺跡の存在が有力視される場所であった。その後、ルート変更に伴う再分布調査などを経て、平成15年11月に



挿図1 広域営農団地農道整備事業南淡路地区



確認調査が行われた。汁谷窯跡周辺では黒道地区の氏神を祭る神社の南面で遺構・遺物が検出され、翌平成16年に本発掘調査を実施することとなった。

なお、本事業と並行して周辺のは場整備が県営土地改良総合整備事業として展開され、これに伴い旧三原町教育委員会によって、平成14年10月10日～25日に確認調査が、同年12月10日～平成15年3月13日に本発掘調査が実施された。その結果、神社の南西斜面下の調査区（A地区）において汁谷窯跡の灰原が検出され、多数の須恵器が出土した。また、農道建設予定地北側の調査区（B地区）では新たに弥生時代中期の遺物包含層と若干の遺構が発見され、「喜来遺跡」と命名された。

## 第2節 確認調査

調査期間：平成15年11月26・27日

調査面積：61㎡

調査担当：主査 山上雅弘

汁谷窯跡群は現地踏査や旧三原町教育委員会の発掘調査によっておおよその位置が推定できる。工事範囲も狭いことから、窯跡そのものを対象とした確認調査は行わず、東側の丘陵上と山裾部の耕地についてトレンチあるいはグリッドを設けて調査を行った。丘陵上および窯跡群より東側の耕地では、遺構・遺物とも発見されなかったが、西側の耕地では、柱穴や溝が検出され、窯跡群に最も近いと考えられるトレンチからは多量の須恵器が出土した。発見された遺構や遺物は汁谷窯跡群とほぼ同時期のものである可能性が高く、窯跡群に関連する遺跡（汁谷遺跡と命名）が広がっていることが予想された。

## 第3節 本発掘調査の経過

調査期間：平成16年5月25日～8月1日

調査面積：812㎡（汁谷窯跡群：143㎡ 汁谷遺跡：669㎡）

調査担当：主査 森内秀造 主査 藤田 淳

調査工事請負：株式会社太田土建、航空測量委託：株式会社アコード

現場補助：榎本康孝 室内作業：阿部由香子、藤原妙美、川向久美、高谷文子、森西真琴

調査対象地はオニオンロード本線部分と神社への参道新設部分があり、前者が主に汁谷遺跡の調査範囲に相当し、後者が汁谷窯跡群の調査範囲に相当する。

### 1. 汁谷窯跡群の調査経過

汁谷窯跡群については旧三原町教育委員会による発掘調査によって灰原の末端部分が検出されている。周辺のは場整備事業によって、現地形が改変されてしまっていたため、調査担当者である山崎氏とともに調査時に設置された基準杭などの位置を確認したところ、今回の調査範囲に灰原の中心部分が広がるのが確認されることとなった。

汁谷窯跡群の調査区は山裾斜面であるが、神社境内を造成する際に大規模な盛土が行われており、表土と盛土については重機によって除去した。その後、人力によって精査を試みたところ、調査区の南半で灰原の広がりを確認することができた。灰原には幅50cmの畦を十文字に残し分層発掘を試みたが、調

査範囲が狭い上に傾斜があることから、十分な調査は行えなかった。そこで、最後に残った畦の堆積状況を詳細に検討し、それぞれの層ごとに遺物を取り上げ、これを基準として遺物整理作業の中で再検討することとした。1号窯では窯体は検出されなかったが、境内の盛土下から山裾にかけて残存していることが予想された。

次に、調査区の北半では灰原が収束し、地山の岩盤も露呈し始めたことから、当初、窯跡は存在しないと考えていた。しかし、北端付近で岩盤の急激な落ち込みが見られたため掘削を進めたところ、窯体であることが判明した。先に調査した灰原を1号窯、新たに発見された窯体を2号窯と命名することとした。2号窯では通常の窯跡で見られるような灰原は形成されておらず、窯体前面に厚さ数cm程度の薄い炭層が小さく広がるにすぎなかった。また、炭層下には大きな土坑が掘削されていた。

2号窯の検出範囲は、焚き口付近から2mあまりで、後方は調査区外へ続いている。中央に横断の畔を1本のみ設定して窯体内の掘削を進めた。遺物は少なく、床面からも数点の須恵器が出土しただけであったが、舟底ピットも確認できた。

2号窯では灰原がほとんど形成されていないものの、窯壁は良く焼成されていた。窯壁の断ち割りについては、後述のように遺構の地下保存が決定されたことから、ごく部分的な調査に留めた。

さらに、2号窯の北側は参道工事ではほとんど掘削が行われなかったため、調査対象から除外した。しかし、道路本線にかかる部分については三角形の範囲を調査した。近世以降と考えられる溝一条が発見されただけで、新たな窯跡は存在しないことが確かめられた。

これら窯跡の概要が判明した後、窯体の残存状況を調査するために神社境内周辺の磁気探査が当事務所の西口和彦調査専門員によって行われたが、盛土が厚く良好な結果は得られなかった。

## 2. 汁谷遺跡の調査経過

汁谷遺跡の調査対象地は3段の耕地からなる。延長約50mに対して各段の段差は50cm程度で、開墾以前は山裾から延びる緩やかな傾斜地であったと思われる。上段と中段では薄い遺物包含層が認められる部分もあったが、下段は、耕作土の直下で遺構面（地山）に達した。したがって、耕作土のみを機械で掘削し、それ以下は人力での調査となった。

確認調査の結果によれば、汁谷窯跡群とほぼ同時期の遺物が出土しており、掘立柱建物なども存在するようであった。大半の遺構は埋土の色調が地山と明瞭に異なり、遺構密度も低かったことから、調査は比較的順調に進んだ。しかし、遺構周縁部の埋土が地山と極めて類似している遺構（SK201・SH201）もあり、SH201などは、当初、半円形状の土坑と考えていたものが、方形の竪穴住居跡に修正することとなった。SB201やその周辺の柱穴も地山に似た埋土のものが多く、検出に苦労した。

また、確認調査では未確認であった弥生時代の遺構も新



写真1 発掘調査風景

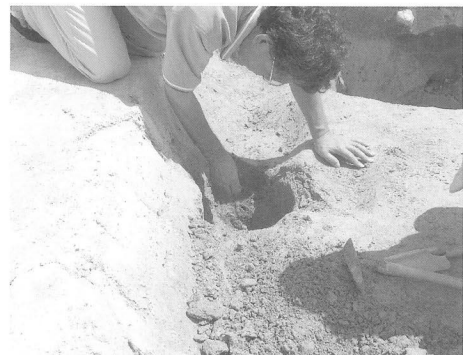


写真2 寒川主任研究員現地指導

たに発見され、弥生時代と歴史時代の2時期の遺跡であることが判明した。

さらに、SH201の直下では噴砂と思われる砂の帯が土層断面で確認され、産業技術総合研究所の寒川主任研究員に現地指導を仰いだ。降雨による遺構の水没などにより、断面の状況は良くなかったが、近辺にも同様な砂の帯があり、噴砂であることが確認できた。

### 3. 調査成果の公開と2号窯の保存

汁谷窯跡群は淡路最古の須恵器窯である。その出土品から古墳時代から飛鳥時代への須恵器生産の移り変わりが追えることや、工房跡と考えられる遺構も検出されるなど、貴重な成果が得られた。こうした成果を公開するために、6月30日に記者発表を行い、7月3日には現地説明会を実施した。

説明会には地元黒道地区の住民22名をはじめ、約90名の見学者があった。また、地元小学校を対象とした現場見学会も開催し、6月15日には三原町立神代小学校児童及び担任教諭71名、7月8日には三原町立市小学校4～6年生及び父兄15名が参加した。

このように、淡路では数少ない窯跡が良好に遺存していることや、地元住民の遺跡に対する意識の高まりを受け、2号窯の地下保存について洲本土地改良事務所と協議を行った。窯跡群周辺の工事は、オニオンロードの建設によって失われる神社への参道を確保するために施工される。南（1号窯側）から北（2号窯側）に向かったの登り傾斜の参道となり、2号窯周辺の掘削はごく浅く、盛土が中心の工事となる。そこで、重機などの走行によって窯跡が損壊しないよう慎重に工事を実施することで、2号窯の保存が図られることとなった。このため、現地の管理引き継ぎに先だて、窯体内に土嚢を充填し補強した。



写真3 神代小学校の現場見学



写真4 工事完成後の遺跡周辺

## 第4節 整理作業

発掘年度の16年度に水洗いから接合までの作業を実施し、平成17年度に実測からトレース・レイアウトの諸作業を行ない、報告書の刊行を行なった。

接合・復元作業：吉田優子・西口由紀・蔵 幾子・大仁克子・宮野正子・河上智晴・早川有紀・荻野麻衣・西谷美保

実測作業：杉本淳子・藤川紀子・加藤裕美・八木和子・増田麻子・佐々木誓子・高橋朋子・木村理恵

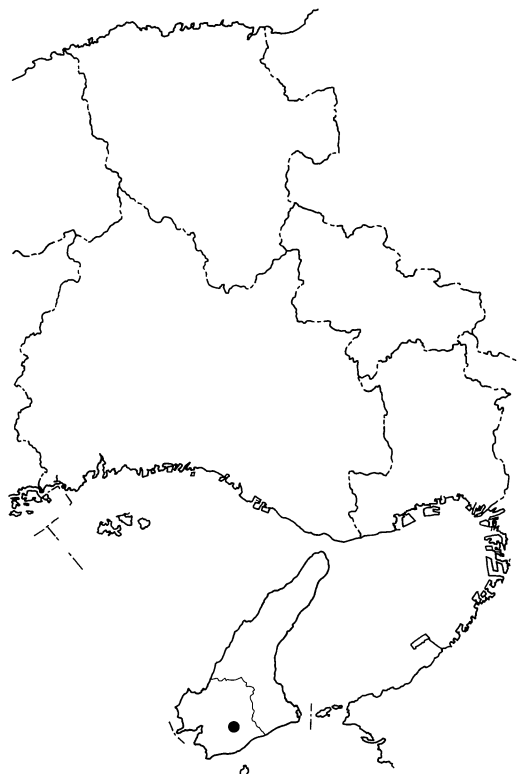
トレース・レイアウト作業：杉本淳子・藤川紀子・加藤裕美・豊田貞代

## 第2章 遺跡の歴史的環境

### 第1節 地理的環境

兵庫県淡路島は、周囲174km、総面積597km<sup>2</sup>を有する。古代においては津名郡と三原郡の2郡からなり、三原郡に国府がおかれた。三原郡4町（緑町・三原町・西淡町・南淡町）は平成17年1月11日に合併して、人口54,763人、面積229.14km<sup>2</sup>の南あわじ市となり、津名郡5町（淡路町・北淡町・津名町・東浦町・一宮町）も平成17年4月1日に合併して淡路市となった。津名郡で残る五色町も平成18年2月11日に洲本市と合併して洲本市となり、津名と三原の郡名は行政区画上の名称から姿を消した。

淡路島の地質は、花崗岩から構成される北部の津名山地と和泉砂岩や頁岩から構成される南部の諭鶴羽山地に大別される。諭鶴羽山地の北西側には、三原川や大日川などの流域に低位段丘化した扇状地が広がっており、島内最大の三原平野が形成される。三原平野の南東半分は段丘化した扇状地が、北西半分には低平な沖積地が広がり、大日川・三原川・成相川などの各河川が南東から北西方向の播磨灘に流れている。

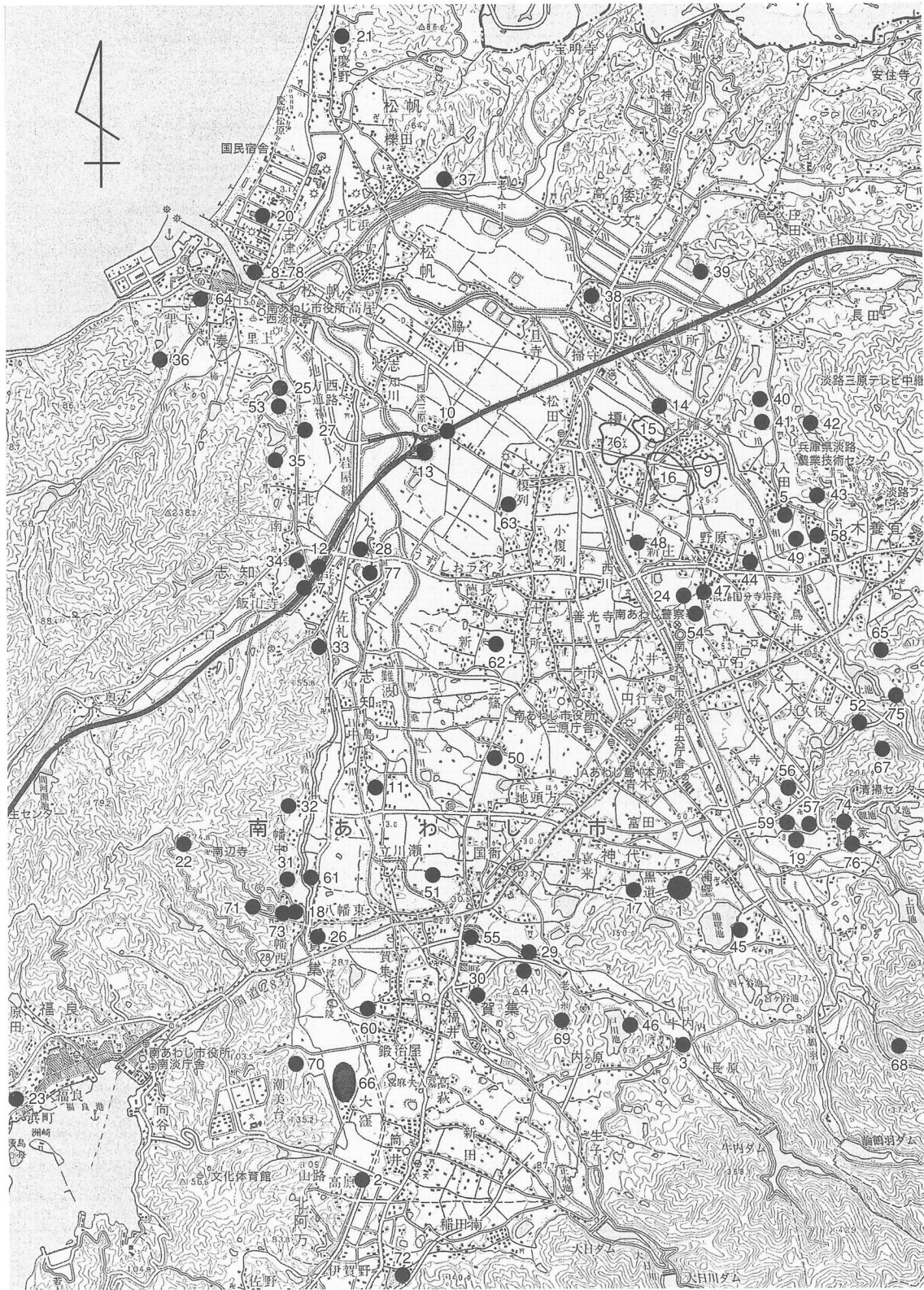


挿図2 遺跡の位置

### 第2節 歴史的環境

旧石器時代の遺跡としては、神代浦壁の浦壁池遺跡<sup>うらかべいけ</sup>や筒井曾根遺跡<sup>そね</sup>があり、ナイフ形石器が採集されている。浦壁池遺跡のナイフ形石器は後述のように瀬戸内沿岸地域では類例の少ないチャートの縦長剥片を素材とするものである。これに対し、曾根遺跡のナイフ形石器は淡路市岩屋のまるやま遺跡と同様に国府系のナイフ形石器で、淡路島内でもようやくナイフ形石器文化期の資料が散見されるようになった。

縄文時代の遺跡としては、まず、八木養宜中の南畑遺跡<sup>みなみはた</sup>や牛内川流域の長原遺跡<sup>ながはら</sup>（賀集牛内）や楠谷遺跡<sup>くすだに</sup>（賀集野田）<sup>みなみはた</sup>があげられる。南畑遺跡では多量のサヌカイト製石鏃と前期の爪形紋の土器片が採集され、長原遺跡からはサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。また、榎列下幡多のおのころ島遺跡<sup>しま</sup>（三原町）<sup>なごら</sup>では中期の船元・里木式、志知鉦の谷町筋遺跡<sup>たにまちすじ</sup>では後期の縁帯文、松帆古津路の叶堂遺跡<sup>かなど</sup>では中期前葉から後期後葉、榎列上幡多の幡多遺跡<sup>はた</sup>（若宮地区）<sup>わかみや</sup>では中期末～後期初頭の縄文土器がそれぞれ出土している。なお、洲本南淡線道路改良事業に伴い賀集鍛冶屋の神子曾遺跡<sup>かじや</sup><sup>みこそ</sup>の発掘調査が行われ、島内でもまだ例の少ない縄文時代中期の遺構が発見されている。このうち、土坑4基から土壌の水洗選



- |               |                 |             |           |             |          |
|---------------|-----------------|-------------|-----------|-------------|----------|
| 1 汁谷窯跡        | 14 幡多遺跡 (下内田地区) | 27 片山遺跡     | 40 長田山古墳群 | 53 大畑遺跡     | 66 神子曾遺跡 |
| 2 曾根遺跡        | 15 幡多遺跡 (行当地地区) | 28 辻ノ内遺跡    | 41 宮田古墳   | 54 桜ヶ地遺跡    | 67 上田城跡  |
| 3 長原遺跡        | 16 幡多遺跡 (野水地区)  | 29 小山古墳     | 42 由ヶ谷古墳  | 55 上久保遺跡    | 68 中の子城跡 |
| 4 楠谷遺跡        | 17 喜来遺跡         | 30 野田山古墳    | 43 上八木古墳群 | 56 外かち遺跡    | 69 丹生山城跡 |
| 5 南畑遺跡        | 18 護国寺東遺跡       | 31 西山南古墳    | 44 徳野塚村古墳 | 57 戎添遺跡     | 70 古城山城跡 |
| 6 おのころ島遺跡     | 19 海築子遺跡        | 32 西山北古墳    | 45 浦壁池遺跡  | 58 養宜遺跡     | 71 城が丸城跡 |
| 7 お町筋遺跡       | 20 西原遺跡         | 33 佐礼尾古墳群   | 46 戸川池窯跡  | 59 上田土居城跡   | 72 珉平焼窯跡 |
| 8 叶堂遺跡        | 21 中の御堂遺跡       | 34 ハノ古墳     | 47 国分寺跡   | 60 賀集城の腰城跡  | 73 護国寺跡  |
| 9 幡多遺跡 (若宮地区) | 22 西山遺跡         | 35 庚申塚古墳    | 48 国分尼寺跡  | 61 西山南殿土井館跡 | 74 覚住寺跡  |
| 10 雨流遺跡       | 23 岩谷遺跡         | 36 山の口古墳    | 49 戒壇寺跡   | 62 階出屋敷館跡   | 75 安国寺跡  |
| 11 嫁ヶ淵遺跡      | 24 国分遺跡         | 37 樺田山古墳    | 50 山慈庵寺跡  | 63 高木城跡     | 76 唐草遺跡  |
| 12 鉾田遺跡       | 25 後山遺跡         | 38 掃守岡山寺古墳群 | 51 国衛庵寺跡  | 64 湊城跡      | 77 志知城跡  |
| 13 志知川沖田南遺跡   | 26 平松遺跡         | 39 倭文委文古墳   | 52 佐保谷瓦窯跡 | 65 前山城跡     | 78 叶堂城跡  |

挿図3 三原平野周辺遺跡分布図 S=1:60,000 (南あわじ市管内図5万分の1)

別によって、小片ながら獣骨や魚骨が検出され、廃棄土坑であることが明らかとなった。住居跡は認められなかったが、南あわじ市埋蔵文化財担当者による周辺の分布調査では、広範囲から縄文時代の石鏃などが多数発見されており、周辺に縄文時代の集落が展開していることが予想される。

弥生時代の遺跡についてみると、まず、前期の遺跡として水田が検出された榎列大榎列の雨流遺跡<sup>うりゅう</sup>や前期～中期初頭の竪穴住居や自然流路が確認された賀集立川瀬の嫁ヶ淵遺跡<sup>よめがぶち</sup>がある。中期から後期にかけては大日川下流域の志知鉦所在の谷町筋遺跡<sup>たたらだ</sup>・鉦田遺跡<sup>しちがわおきたみなみ</sup>・松帆志知川の志知川沖田南遺跡などの他に幡多遺跡<sup>きらい</sup>・喜来遺跡<sup>ごくじひがし</sup>・護国寺東遺跡<sup>かいどうじ</sup>・海棠子遺跡（神代社家）など河川の中・上流域にも遺跡が展開するようになる。幡多遺跡（野水地区）では中期の方形周溝墓群、幡多遺跡（行当地地区）では大阪湾型銅戈が出土している。銅戈以外の青銅器では銅剣・銅鐸の存在が古くから知られており、松帆古津路の西原遺跡<sup>にしはら</sup>や松帆慶野の中の御堂遺跡<sup>なか みどう</sup>など大半が瀬戸内海に面する海岸部に立地する遺跡から出土している。また南辺寺山山頂には高地性集落と思われる西山遺跡<sup>にしやま</sup>（賀集八幡南）がある。このほか賀集鍛冶屋の神子曾遺跡では弥生時代中期の周溝墓18基や木棺墓や土坑墓、土器棺墓が発見され、弥生時代の周溝墓群としては島内最大級の規模を有する。

古墳時代の集落遺跡としては中期の雨流遺跡を始め、鉦田遺跡<sup>ひらまつ</sup>・谷町筋遺跡<sup>かたやま</sup>・平松遺跡（賀集八幡）<sup>つじのうち</sup>・幡多遺跡（下内田地区）<sup>つじのうち</sup>・片山遺跡（松帆西路）<sup>つじのうち</sup>・おのころ島遺跡<sup>つじのうち</sup>・辻ノ内遺跡（志知志知）があり、平野を囲む西から北にかけての丘陵上・山地裾部には、小山古墳（賀集野田）<sup>こやま</sup>・野田山古墳（賀集野田）<sup>のだやま</sup>・西山南古墳（賀集八幡南）<sup>にしやまみなみ</sup>・西山北古墳（賀集八幡北）<sup>にしやまきた</sup>・佐礼尾古墳群（志知佐礼尾）<sup>されお</sup>・ハバ古墳（志知志知南）<sup>しちしちなん</sup>・庚申塚古墳（松帆西路）<sup>やま ぐち</sup>・山の口古墳（湊里）<sup>いちだやま</sup>・櫛田山古墳（松帆櫛田）<sup>かみりおやま</sup>・掃守岡山寺古墳群（榎列掃守）<sup>しとおりのぶん</sup>・倭文委文古墳（倭文委文）<sup>ながたやま</sup>・長田山古墳群（倭文長田）<sup>みやた</sup>・宮田古墳（八木入田）<sup>やぐだに</sup>・由ヶ谷古墳（八木入田）<sup>かみやぎ</sup>・上八木古墳群（八木養宜中）などの後期古墳が分布する。なお、国分寺北東の平野部に単独で立地する徳野塚村古墳<sup>とくのつかむら</sup>（八木徳野）は、淡路島では唯一の陶棺を埋葬施設としている。

歴史時代の遺跡としては、まず、最初に重弧文軒平瓦が採集されている八木養宜中の戒壇寺跡<sup>かいだんじ</sup>があげられ、近年調査が行なわれた淡路市志筑の志筑廃寺跡と並ぶ島内最古の寺院跡と考えられている。また、八木国分に国分寺跡<sup>こくぶんじ</sup>、八木新庄に国分尼寺跡<sup>こくぶんにじ</sup>が所在しており、近年の発掘調査によって国分寺創建期の瓦窯2基が発見されている。南海道については東西に走る現在の県道三原西淡線の北側が推定されており、大型建物などが発見されている幡多遺跡（野水地区）<sup>みわもと</sup>が神本駅家推定地とされている。また、また奈良時代前半期の大型建物群が発見された嫁ヶ淵遺跡は、河川を利用した郡衙附属の物資集散施設と考えられている。このほか、瓦の散布地として神代地頭方の山惣廃寺跡<sup>やまそう</sup>や神代国衙の国衙廃寺跡<sup>こくが</sup>がある。集落遺跡としては、片山遺跡<sup>かたやま</sup>・鉦田遺跡<sup>たたらだ</sup>・幡多遺跡（野水地区）のほか、賀集鍛冶屋の石田遺跡<sup>いしだ</sup>・才門遺跡<sup>さいもん</sup>があり、掘立柱建物跡や溝などが発見されている。

平安時代の終わりから中世にかけて、河川の中・上流域の再開発と開発によって序々に集落が形成されていったと考えられ、遺跡は急激に増加すると同時に平野東半へ広がりを見せている。主な集落遺跡としては、大畑遺跡<sup>おおはた</sup>（松帆西路）<sup>おおはた</sup>・後山遺跡<sup>ごさん</sup>・谷町筋遺跡<sup>たたらだ</sup>・おのころ島遺跡<sup>おのころ</sup>・幡多遺跡（若宮地区）<sup>わかみや</sup>・桜ヶ地遺跡<sup>さくらがち</sup>（八木国分）<sup>かみやぎ</sup>・国分遺跡<sup>こくぶん</sup>・上久保遺跡（賀集野田）<sup>かみやぎ</sup>や三原川の上流には外かち遺跡<sup>そと</sup>（八木寺内）<sup>やま</sup>・海棠子遺跡<sup>たばこ</sup>・戒添遺跡<sup>えいぞえ</sup>（八木寺内）<sup>やま</sup>などがある。また養宜館跡（養宜中）<sup>やま</sup>を中心に上田土居城跡<sup>こうだとい</sup>（神代社家）<sup>かみりおやま</sup>・賀集城の腰城跡<sup>しる こし</sup>（賀集賀集）<sup>かみやぎ</sup>・西山南殿土井館跡<sup>とののどい</sup>（賀集八幡南）<sup>かみやぎ</sup>・階出屋敷館跡<sup>かいでやしき</sup>（市徳長）<sup>いちとくなが</sup>・高木城跡<sup>たかぎ</sup>（榎列大榎列）<sup>えんれい</sup>・湊城跡<sup>みなと</sup>（湊里）<sup>みなと</sup>など土塁や堀など小規模な防御施設を伴う城館などが配置されている。さらに成相寺跡<sup>なりあいじ</sup>（八木馬廻）<sup>やま</sup>・護国寺跡<sup>ごこくじ</sup>（賀集八幡）<sup>かみやぎ</sup>・覚住寺跡<sup>かくじゅうじ</sup>（神代社家）<sup>かみりおやま</sup>・安国寺跡<sup>あんこくじ</sup>

(八木大久保)などの寺院の建立が行なわれ、周辺には護国寺東遺跡や唐草遺跡(神代社家)などの寺院関連遺跡も認められる。このほか賀集鍛冶屋の神子曾遺跡では鞆の羽口やスラッグなど鍛冶関連の遺物を埋蔵した遺構が発見されている。

なお、淡路島における須恵器窯についてみると、そのほとんどが三原平野周辺に分布している。この中で最も古く遡る窯跡が今回報告の汁谷窯跡である。その後<sup>しるたに</sup>に続く窯跡として、洲本市大野の7世紀末から8世紀にかけての庄慶山1号窯跡、土生寺窯跡があり、土生寺窯は藤原宮に瓦を供給した窯跡として知られる。大野周辺では、このほかに8世紀後半の新宮窯跡、9世紀代の木戸窯跡(2基)が発見されており、8世紀から9世紀にかけての窯跡が集中している。また、三原平野には、8世紀代の戸川池窯跡(賀集牛内)、洲本市五色町の角床窯跡および奥の池窯跡などがある。瓦窯には、国分遺跡の瓦窯2基をはじめ佐保谷瓦窯跡(八木大久保)などが所在する。

【参考文献】坂口弘貢他『国分遺跡発掘調査報告書』2005年

浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 1977年

#### 【浦壁大池採集のナイフ形石器】

この資料は昭和44年10月19日、岡本稔氏が浦壁大池南東部の池底から採集されたものである。

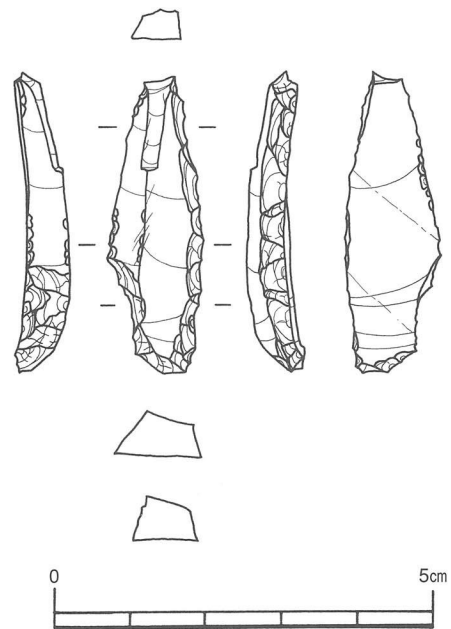
暗緑灰色の良質なチャートが用いられており、中央に稜をもつ石刃状の縦長剥片を素材とし、側面観は緩く彎曲している。背面は2面で構成され、主剥離面と同方向から剥離されていると判断したが、フィッシャーの状況から左側の剥離面は逆方向からの剥離である可能性もある。剥片の末端側を基部とし、先端部は折れに伴う剥離が稜に沿って小さくのびている。二次加工は、一側縁と基部に行われており、いわゆる斜め整形のナイフ形石器に仕上げられている。いずれも急角度な調整で、基部には両極打法も用いられているようである。刃角はやや鈍く $50^{\circ}\sim 60^{\circ}$ となるが、腹面側に連続する微細な剥離痕が使用を物語っている。

このナイフ形石器は、淡路島内で初めて確認された旧石器時代の資料であるが、その後、まるやま遺跡(淡路市)や曾根遺跡(南あわじ市)などで、サヌカイト製の国府系ナイフ形石器が出土し、ようやく、島内でも旧石器時代遺跡の存在が明確になりつつある。そうした中でも、瀬戸内系旧石器文化圏の中であって、チャート製の縦長剥片素材のナイフ形石器は特異な例であり、島外から持ち込まれたものと判断される。長さ39mm、巾12mm、厚さ6mm、3.3g。

#### 【参考文献】

兵庫県教育委員会 2002年 『まるやま遺跡Ⅱ』

兵庫県教育委員会 1998年 「曾根遺跡」『平成9年度 年報』



挿図4 浦壁大池採集のナイフ形石器実測図

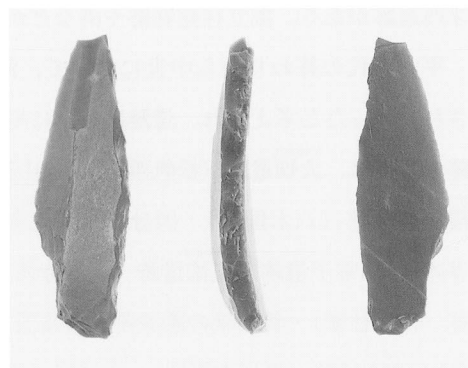


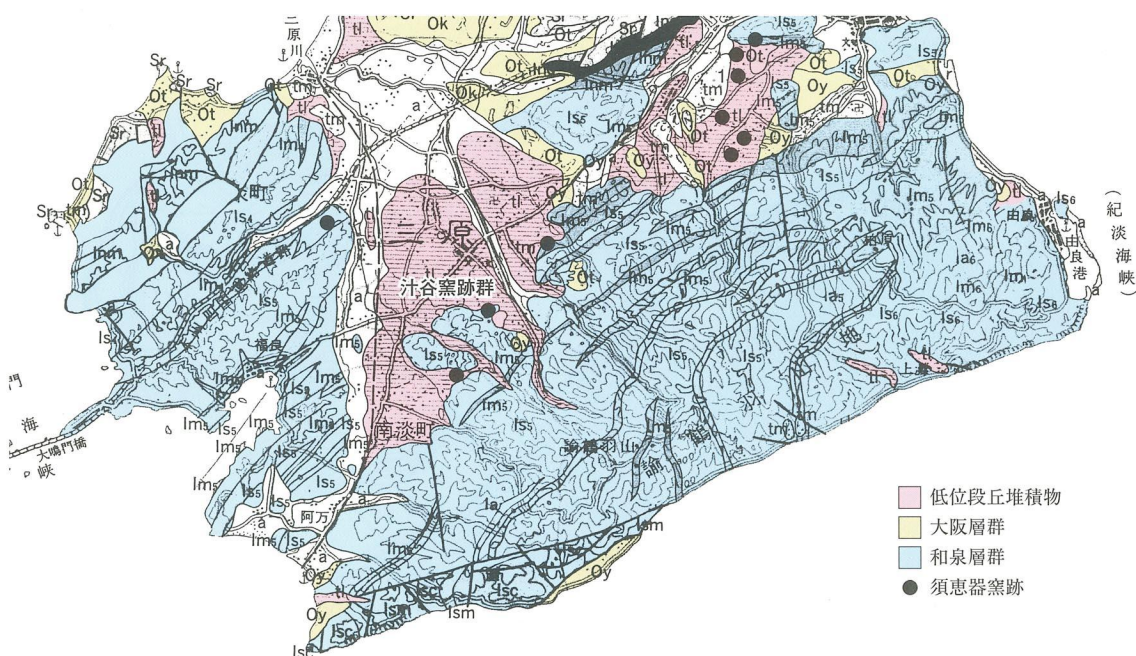
写真5 浦壁大池採集のナイフ形石器

# 第3章 遺構の概要

## 第1節 遺跡の立地

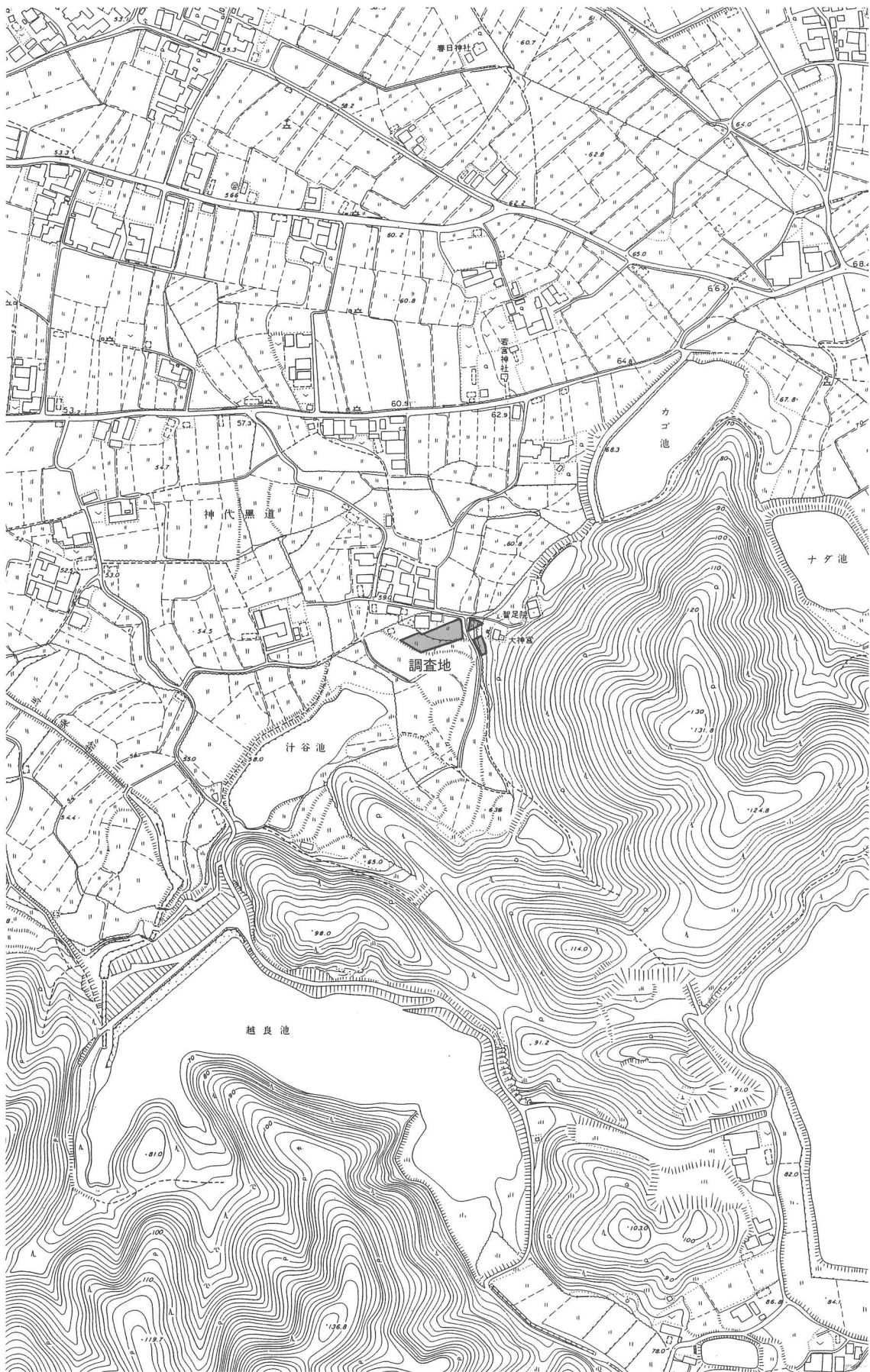
汁谷窯跡群は三原川上流部、諭鶴羽山系から北西に向かったのびる丘陵の末端部に立地している。諭鶴羽山系や旧西淡町を中心とする南辺寺山系など島内南部の山々は白亜紀に海底に堆積した地層が隆起してできたもので、砂岩を主体とする堆積岩で構成されている。和泉層群と呼ばれるこの堆積岩の層は、いくつかの累層に細分されるが、諭鶴羽山系では砂岩および砂岩優性の砂岩泥岩互層で構成される北阿万累層が主となっている。また、諭鶴羽山地の北西側には、三原川や大日川などの流域に低位段丘化した扇状地が広がっており、汁谷窯跡群の前面に展開する汁谷遺跡はこうした扇状地の最奥部に立地する。つまり、汁谷窯跡群および汁谷遺跡は地質学的にも、ちょうど山地と扇状地との地形変換点に立地していることになる。

汁谷窯跡群付近の地形は、神社境内の造成や山道の切り通しなどで過去に改変を受けており、当初、窯体は失われてしまっているのではないかと危ぶまれたが、幸いにも比較的良好な状態で遺存していることが判明した。また汁谷遺跡周辺では、ほ場整備前には旧地形をよくとどめており、当時の測量図から等高線を復元した(挿図7)。調査区の北側に隣接して舌状の微高地が西に向かって張り出している様子が観察され、この付近の民家は2軒ともその中央部に建てられている。汁谷遺跡の調査区はこの微高地の南面にあり、その南には小さな谷が入り込んでいる。調査区南西にある汁谷池は、この小さな谷を堰き止め、ため池としたものであろう。また、微高地の北側にも小さな谷があり、旧三原町教育委員会による確認調査では、この谷の中央に沿って配された調査区8・12・15で、弥生時代中期の流路状落ち込みが発見されている。微高地中央部の調査は行われていないが、弥生時代の集落はこの上に立地している可能性が高く、汁谷遺跡で発見された弥生時代中期の溝(SD209)などもその一部を構成する遺構であったと思われる。



挿図5 南あわじ市周辺の地質図(原図 地質図徳島)





挿図6 調査位置と周辺の地形 S=1:5,000



挿図7 遺跡周辺の微地形と調査位置

## 第2節 遺跡の概要

汁谷窯跡群では、7世紀中葉から後半代の窯跡を調査した。調査区は南側の1区と北側の2区に分かれる。窯跡群は2区でのみ検出され、南半に1号窯の灰原が広がり、北端に2号窯がある。1号窯は出土遺物の時期差と灰原堆積状況から南北2基（北側の窯を1号A窯、南側の窯を1号B窯とする）の窯体の存在を推定した。1号A窯と2号窯は約10m離れている。2号窯では窯体が検出されたが、灰原はほとんど見られなかった。この他、作業場と考えられる土坑状の落ち込み2基（土坑204、205）がある。また、1区では近世以降と考えられる溝状遺構（溝201）が検出された。

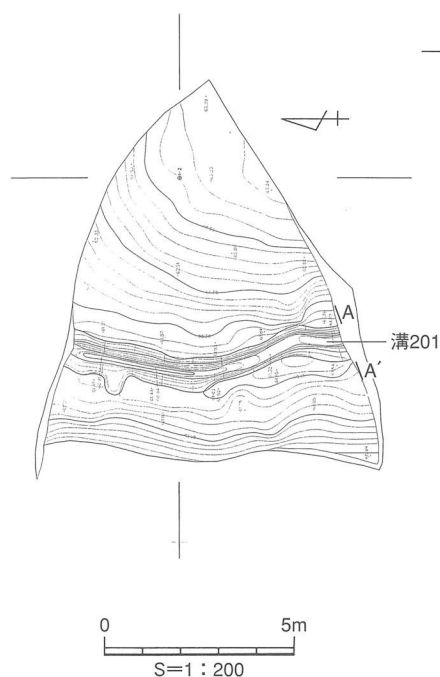
汁谷遺跡で発見された遺構には、窯跡群とほぼ同時期に比定できるものと弥生時代に属するものがある。前者には、工房等の作業場と考えられる土坑1基（SK201）、竪穴住居跡1棟（SH201）、掘立柱建物跡1棟（SB201）、その他の土坑6基（SK204、206、207、208、210、211）や溝6条（SD205、206、208、210、211、213）がある。

主要な遺構であるSK201やSH201は窯跡群に近く遺物量も多いが、他の不整形な土坑や小規模な掘立柱建物跡は少し離れた位置にあり、遺物も少ない。中でも特筆される遺構はSK201で、床面および埋土から多量の土器が出土しており、窯跡群に関連する仮設住居か工房跡のような性格の遺構ではないかと想定される。

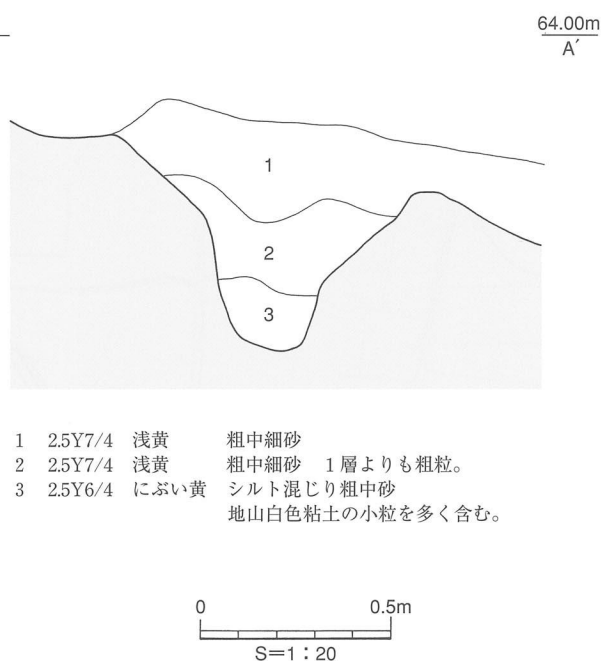
溝にはSD205やSD206のように箱掘りでしっかりと掘削されているものがある。分岐したり交差したりしながら、山側を起点として下手に向かって直線的に走る。しかし、その多くは中段までしか続かず、下段では後世に削平されてしまっている。

弥生時代に属する遺構は、溝3条（SD209・214・215）に単独出土の土器1個体（Po201）とわずかである。遺物も少なく、小規模な集落の周縁部に相当するのであろう。

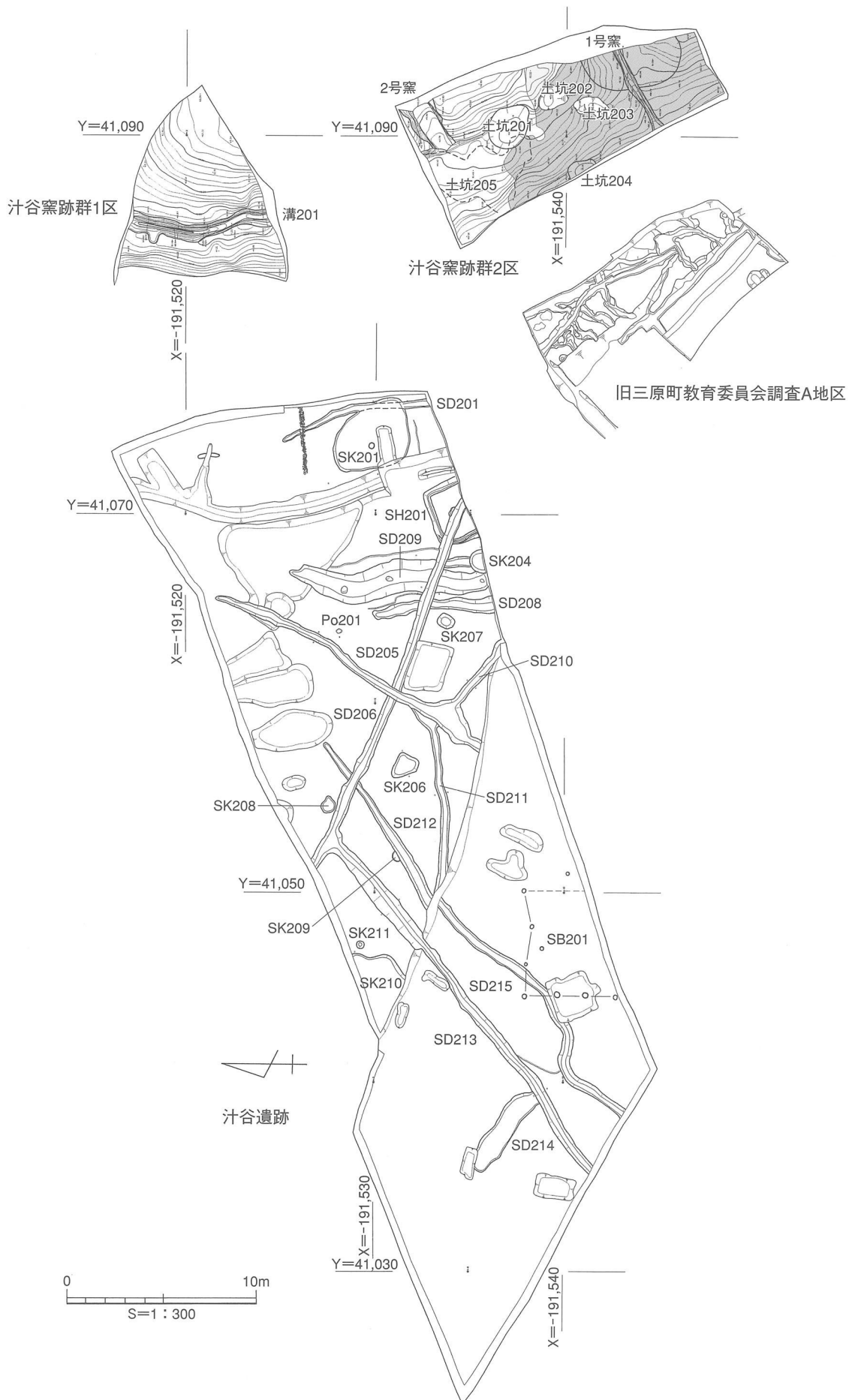
なお、汁谷窯跡群と汁谷遺跡で遺構の呼称を和名とアルファベットに分けている。



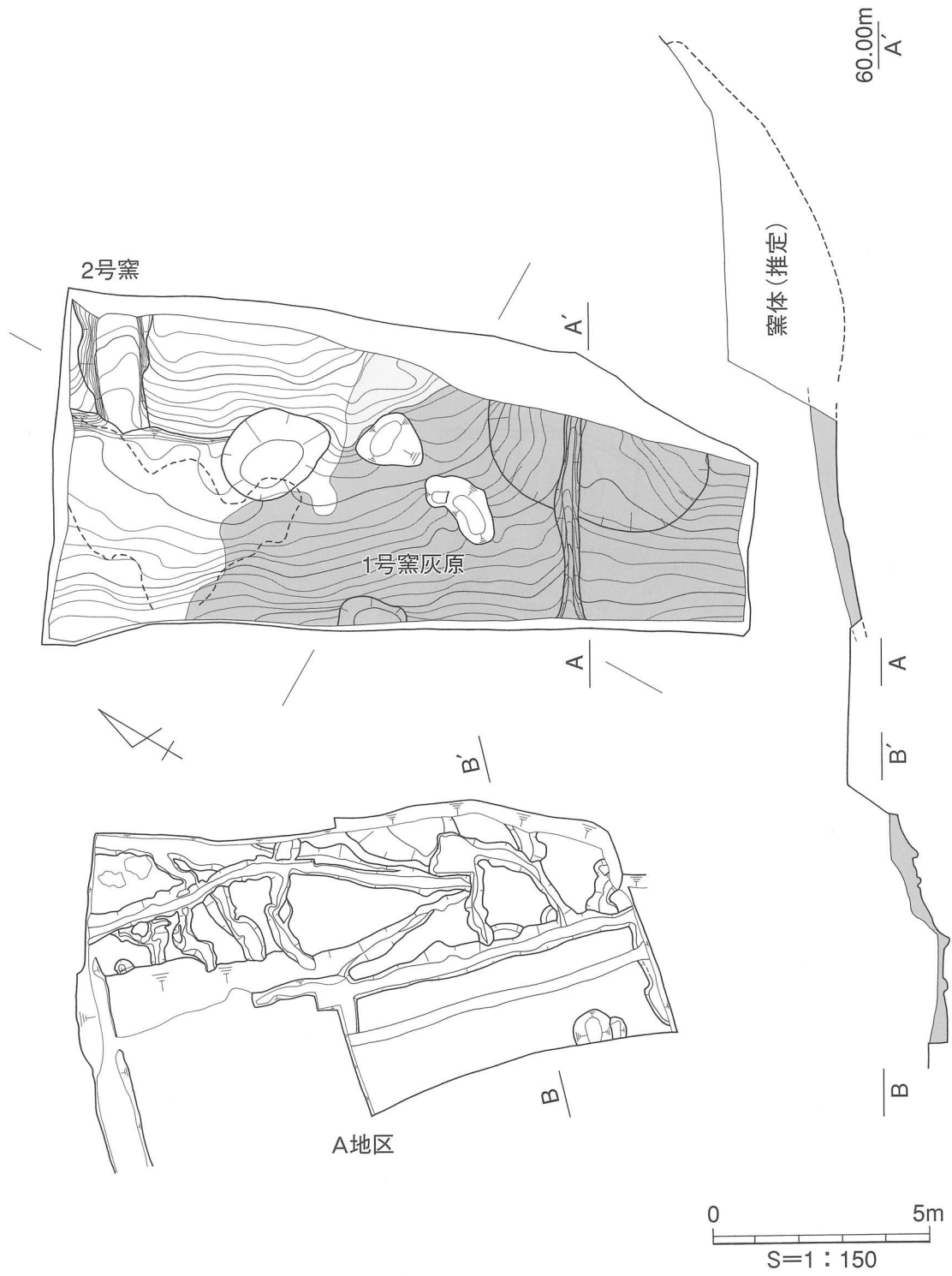
挿図8 汁谷窯跡群1区



挿図9 溝201断面図



挿図10 汁谷窯跡群・汁谷遺跡 全体図



挿図11 汁谷窯跡群 全体図

## 第3節 汁谷1号窯灰原（1号A窯・1号B窯）

### 1. 灰原の詳細

窯体は調査対象地区外にあり、窯の前庭部及びこれに続く灰原の調査を実施した。灰原は扇形に広がり、その範囲は現農道から農道下の水田部に及ぶ。農道下の水田部の灰原については、平成15年度に三原町教育委員会（現南あわじ市教育委員会）によって発掘調査が行われている。

灰原の詳細は以下の通りである。

1号窯灰原の調査では、まず、十字に残した土層観察用の畦と調査区東壁の断面の土層をそれぞれ出来る限り細分し、その後、各層の特徴やつながり、相互の堆積関係などを考慮しながら、いくつかのグループにまとめていくという方法をとった。グルーピングの際には、整理作業の過程で明らかとなった出土遺物の特徴も反映させることとし、12群47層に分類したが、灰原形成層はY層以下の10群である。

A層：腐植土および盛土層で、盛土は神社境内の広場を造成する際に厚く盛られたものである。外部から運び込まれた砂礫層（A2層）を主体とするが、下部には地山岩盤の掘削土が見られる（A3層）。

C層：浅黄色を呈する細粒の地山流土である。窯跡群に関連する遺物は出土していないが、サヌカイトのチップがわずかながら出土していることが注目される。山側の調査区外に弥生時代の遺構が存在するものと思われる。

Y層：にぶい黄色系の流土で、灰原中央部山側にのみ認められ、横断面2までは達していない。Y1層には窯壁が混在しており、窯体天井部の崩落に伴う流土である。

E層：灰原周辺部を中心に小単位で堆積する灰層で、横断面北半ではE2～E4層のように部分的な純灰層を形成している。縦断面では下位のF層の2次堆積層として把握できる。

D層：窯壁を主体とする灰層で、縦断面下手にのみ部分的に認められる。同様な特徴をもつG層が横断面2にあるが、間にF3層を挟むため、両者は別個に堆積した層であることが理解できる。

F層：大部分が黒色の純灰層である。灰原中央部から北側にかけて厚く堆積しており、最も厚い部分では50cm近い層厚がある。F層では中央山側の窯前庭部と考えられる部分に堆積したF3・F4層に極めて遺物が少なく、掻き出した熾きだけが堆積したものである。F層でも横断面2より下手では遺物量が多くなる。

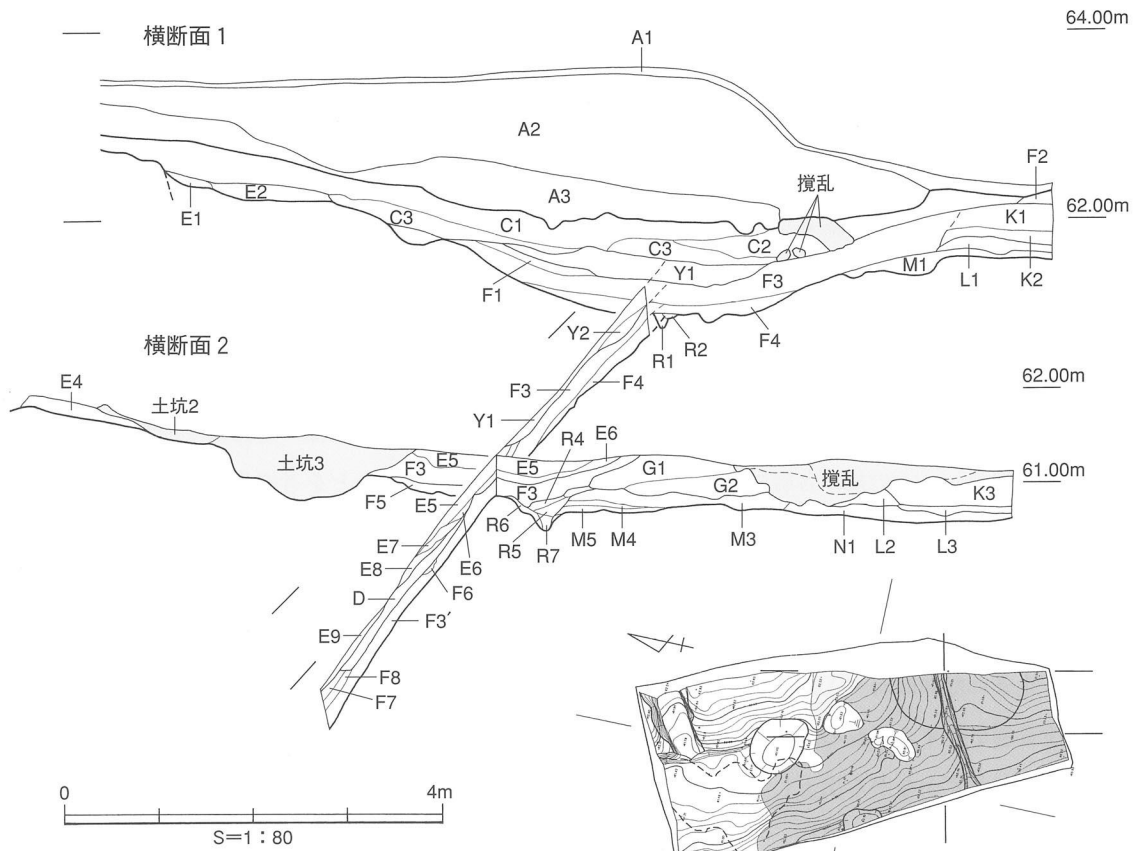
R層：灰原中央部に掘削された小さな排水溝の埋土である。ごく限られた堆積層であるにもかかわらず、ややまとまった遺物の出土が見られる。

G層：窯壁を主体とする層で横断面2にのみ認められ、層厚が40cmと厚いが、平面的に大きく広がる層ではない。図ではE・F層の下位に堆積していることが明瞭に理解できる。

K層：灰原南側に広がる漆黒の純灰層で、層厚40cmと厚く、多量の遺物を含む。層相はF層と類似しており、東壁ではF3層とK1層を明確に分層することは困難であった。しかし、遺物量や横断面2でのG層の介在、南側への偏在などから、F層と分離しようと判断した。

L層：K層と同様に灰原南側に偏在する。地山の黄色土を多く含み、K層とM・N層を隔てる薄い間層である。

M・N層：排水溝以南の最下層に偏在し、純灰層を主体とする薄い層である。横断面1のM1層からは多くの遺物が出土した。横断面2の南半では窯壁の小片が多く含まれており、N層としてM層とは区別することとした。



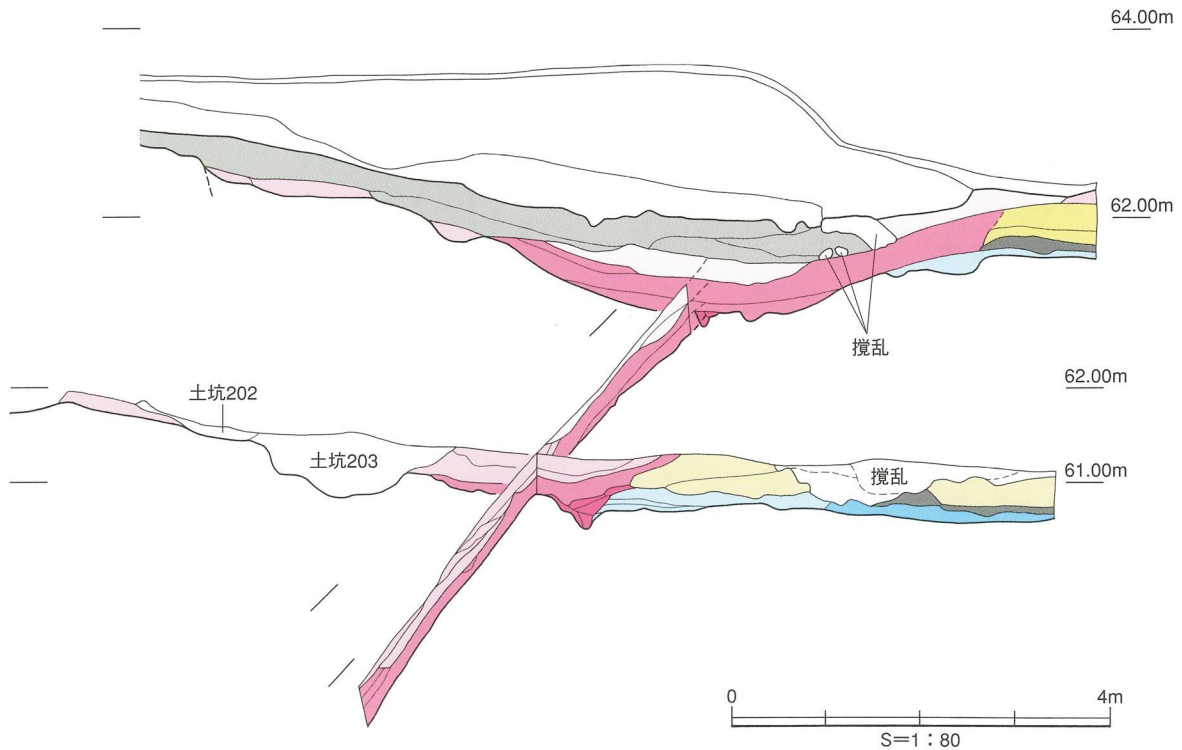
1号窯灰原横断面1 (調査区東壁)

A1	腐植土		
A2	盛土 (砂礫)		
A3	盛土 (地山岩盤掘削土)		
C1	2.5Y7/4	浅黄	細砂混じりシルト
C2	2.5Y7/3	浅黄	シルト (締まり良。地山の脈状粘土に類似している)
C3	2.5Y5/2	暗灰黄	細砂混じりシルト
Y1	10YR5/4	にぶい黄褐	細砂混じりシルト (窯壁片を多く含む)
E1	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂混じりシルト (粗砂若干含む)
E2	2.5Y2/1	黒	細砂混じりシルト 【純灰層】粗砂若干含む。
E3	2.5Y2/1	黒	細砂混じりシルト 【純灰層】粗砂若干含む。
F1	2.5Y3/1	黒褐	細砂混じりシルト 【純灰層】
F2	10YR4/2	灰黄褐	細砂混じりシルト (小塊状に崩れる)
F3	10YR2/1	黒	シルト質中細砂 【純灰層】須恵器をほとんど含まない。
F4	N2/1	黒	シルト質中細砂 【純灰層】須恵器をほとんど含まない。
R1	2.5Y5/1	黄灰	シルト混じり粗中砂 【排水溝埋土】
R2	2.5Y6/1	黄灰	シルト混じり粗中砂 【排水溝埋土】
K1	10YR2/1	黒	細砂混じりシルト 【純灰層】須恵器を多く含む。
K2	10YR2/1	黒	シルト質中細砂 【純灰層】地山の黄色砂岩小粒を多く含む。須恵器を多く含む。
L1	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂混じりシルト
M1	2.5Y4/1	黄灰	細砂混じりシルト 【純灰層】須恵器を多く含む。

1号窯灰原横断面2 (中央東壁)

E4	5Y4/1	灰	細砂混じりシルト	【灰層】
E5	10YR4/1	褐灰	シルト混じり粗中砂	【二次堆積の灰層】
E6	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト混じり粗中砂	
F3	10YR2/1	黒	シルト混じり粗中砂	【純灰層】窯壁の小ブロック含む。
F5	5YR5/4	にぶい赤褐	シルト質細砂	
R3	10YR5/2	灰黄褐	シルト	【焼土層か?】
R4	10YR4/1	褐灰	シルト質粗中砂	
R5	10YR2/1	黒	シルト質粗中砂	
R6	2.5Y5/1	黄灰	シルト混じり粗中砂	【排水溝埋土】地山土・焼土・炭のブロックを含む。
R7	2.5Y4/1	黄灰	シルト質粗中砂	【排水溝埋土】M3層に類似するが、炭の混入が少なく色調もやや淡い。
G1	10YR4/2	灰黄褐	シルト混じり粗中砂	【窯体ブロック層】
G2	10YR4/2	灰黄褐	シルト混じり粗中砂	【窯体ブロック層】G1層よりも炭が多く、やや黒っぽい。
K3	10YR2/1	黒	シルト混じり粗中砂	【純灰層】
L2	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質粗中砂 (地山のブロックを多く含む)	
L3	2.5Y4/1	黄灰	シルト質細砂 (地山土・焼土のブロックを多く含む)	
M3	10YR2/1	黒	シルト質粗中砂	【純灰層】
M4	7.5YR5/4	にぶい褐	シルト質細砂	
M5	10YR3/1	黒褐	シルト質粗中砂	【純灰層】
N1	10YR4/1	褐灰	シルト質粗中砂 (窯壁の小ブロックを多く含む)	

挿図12 汁谷1号窯 灰原断面図



1号窯灰原縦断面（中央南壁）

Y1	10YR5/4	にぶい黄褐	細砂混じりシルト	（窯壁片を多く含む）	□ A層	盛土
Y2	10YR4/2	灰黄褐	シルト混じり細砂		■ C層	流土
E5	10Y3/1	黒褐	シルト混じり中細砂	【二次堆積の灰層】	□ Y層	窯体天井部崩落に伴う流土
E6	10YR4/2	灰黄褐	シルト混じり中細砂		■ E層	上部灰層
E7	10YR4/2	灰黄褐	シルト混じり中細砂		■ D層	上部灰層（窯壁を主とする層）
E8	10Y3/1	黒褐	シルト混じり中細砂	【二次堆積の灰層】	■ F層	上部灰層
E9	10YR2/1	黒	シルト混じり中細砂	【二次堆積の灰層】	■ R層	排水溝の埋土
D	10YR4/2	灰黄褐	シルト質中細砂	（窯壁片を多く含む）	■ G層	中部灰層（窯壁を主とする層）
F3	横断面1のK1と同じ。			【純灰層】	■ K層	中部灰層
F3'	A3層に連続する。横断面2のF3層とも同一。			【純灰層】	■ L層	地山土を主とする間層
F4	横断面1のL2層と同じ。			【純灰層】	■ M層	下部灰層1
F6	5Y4/2	灰オリーブ	シルト		■ N層	下部灰層2
F7	10YR2/1	黒	シルト質中細砂	【純灰層】		
F8	Y3/1	黒褐	シルト混じり粗中砂	（窯壁片を多く含む）		

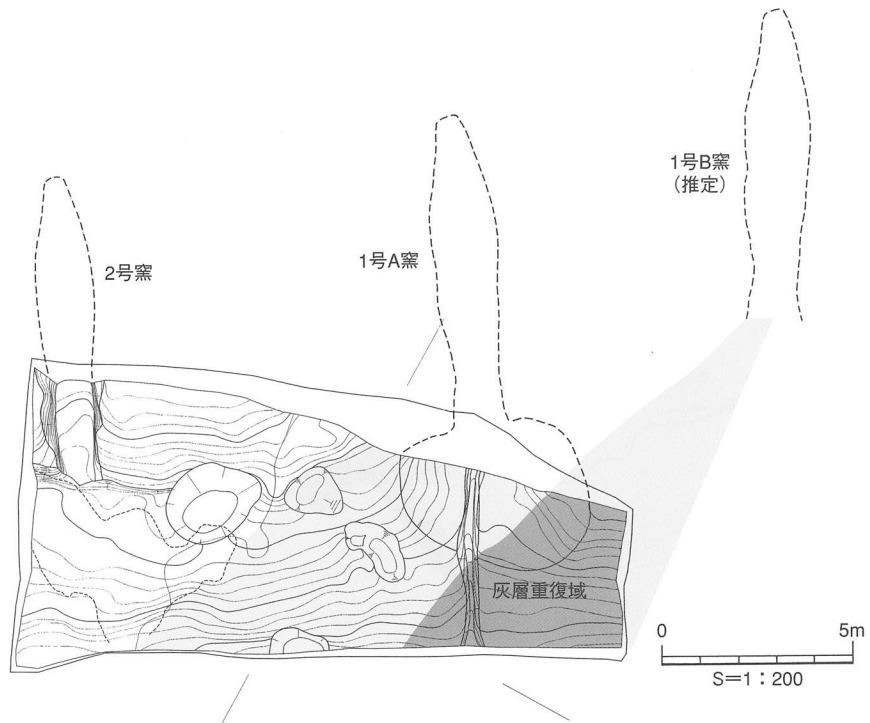
挿図13 汁谷1号窯 灰原断面模式図

## 2. 灰層の検討による2基の窯跡の存在

以上の通り、表土層を除いた灰原形成層は細かくは41層に分かれるが、大きく分けるとY層以下10層に分層できる。灰原からの出土遺物には、立ち上がりのある杯H、かえりを有する杯蓋、高台をもつ杯Bがあり、7世紀中葉から後半代までの時代幅のある遺物相を見せる。各層の包含遺物から、杯Bを包含する上層のY～R層と杯Hを主体器種とする中層G K層および下層のMN層の大きく3つに分かれ、土器様式の差が層序に反映している。すなわち、上層の遺物群が新しい様相、中下層の遺物群が古い様相を示している。このような年代幅を有する層序の存在について想定し得る状況は、単独窯での時代幅を考えるか、複数の窯跡が存在するかのいずれかである。結論を先に言えば、灰層の重なり状況から判断して複数の窯跡の存在を考えている。以下、その根拠を簡単に示す。



まず、上層のY～R層の堆積箇所は斜面の一部を掘り下げて設けられた窯の前庭部であり、東壁の奥に窯体の存在を想定してよい。このことは灰原の最上層のY層に多量の窯体崩落土が含まれていることから首肯できる。窯跡の場合、特別の立地にある場合を除いて、灰原は焚口から下方の斜面部に左右ほぼ均等に扇形に広がるのが通常



挿図14 窯跡位置想定図

の姿である。然るに、本窯の場合、灰原の広がりおよび灰層の厚みは窯の前庭部の右側すなわち南側に偏している。南側に堆積する灰層は、杯Hを主体とする中・下部灰層のGK・MN層であり、南に行くほど層厚となる。この灰層の広がりやの明確な範囲は確認していないが、調査区外の斜面上方に広がっていることは間違いがないので、南側上方に杯Hの焼成窯が存在しているものとは判断してよい。また、窯跡が1基であれば、前庭部の北側斜面下にも杯Hを含んだGK・MN層に該当する灰層の広がりが認められるはずであるが、そのような層が存在していない。したがって、確実なことは将来の調査を待たざるを得ないが、以上の状況から新古の2基の存在が推測できる。そこで、ここでは2基の窯跡の存在を前提に、Y・D・E・F・R層の上部灰層に伴う新窯を1号A窯、GK・MN層の中・下部灰層に伴う古窯を1号B窯と仮名称を与え、以下この仮名称に従って概要報告を行なう。

#### 1号A窯 (Y・D・E・F・R層)

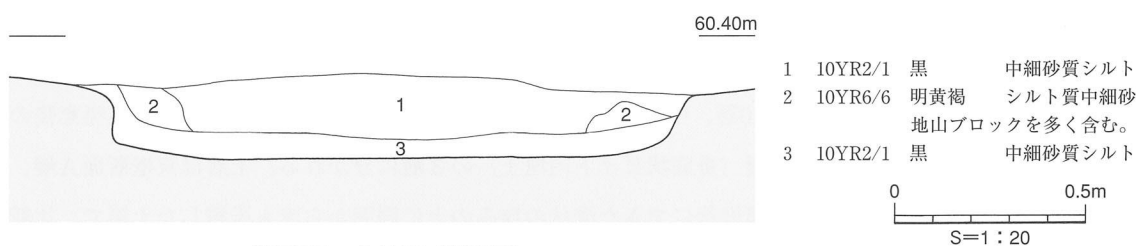
今回発掘の範囲は前庭部および前庭部から広がる灰原斜面の先端部にあたる。前庭部は窯体前の地盤を溝状に掘り下げて作られており、焚口側の地盤を1m以上掘り下げることによって、焚口の高さを確保し、底面が平坦な作業スペースを作り出している。前庭部の幅は上端で6.5m、下端で3.5m、奥行は検出長で4.1mを測る。底面の標高は61.0mで、斜面裾部との比高差は4.5m前後ある。また、前庭部の底面には幅0.3m、深さ0.2mのV字形の排水溝が設けられている。窯体周辺は砂岩の風化土を基盤層としており、降雨時には雨水を透水する。窯体は筒形の構造故に雨水が集まりやすく、排水施設を必要としていたと思われる、排水溝は窯体内から続くものと判断してよい。この排水溝は最終操業時には灰層下に埋没している。

窯体は調査区外にあるためにその構造については知ることはできないが、灰原に多量に含まれているスサ混じりの窯壁片の存在によって半地下式の窖窯であることは明らかである。焚口の位置について

は、調査区東壁付近での前庭部の深さが約1mあり、焚口の設置に必要な深さを確保していることから、東壁より1m～2m奥にはいったところに設けられていると判断してよい。挿図14は、同時期の洲本市庄慶山1号窯を参考にして作成した想定図である。もし、汁谷窯の想定図の通りならば、窯体は神社境内の盛土の下に埋没し、比較的良好な状態で残存していることになる。

前庭部および灰原の堆積層は、最上層に多量の窯体崩落土を含んだY層があり、その下にE・D・F層を挟んで黄色の地山ベース面となる。前庭部の底面には、黄色の地山ベース面を開削して黄灰色の埋土のR層を含んだ排水溝が設けられている。前述の通り、Y層からE・D・F、排水溝内のR層の各層の包含器種は杯Bおよびかえりのある蓋を中心器種としており、杯Bを含まないG K層以下の灰層群と区分できる。東壁断面および中央横断面をみるとEF層はG K層を肩口としたレンズ状の堆積を示し、その堆積範囲は前庭部の掘削範囲と一致する。このことは、1号A窯の前庭部がもともとあった1号B窯の灰原の北端、すなわち、G K層を切って造成されたことを示す。

灰原は前庭部から扇形に広がる。北への広がりにはセンターラインより約8.5mの範囲であるが、南については、調査範囲が南端まで及んでおらず、また、1号B窯と重複しているので明確な範囲は提示できないが、北への範囲と同程度とすると8～9mくらいになる。なお、灰原の北端からわずかにはずれて、不定形の掘り込みの土坑205がある。詳細は2号窯の項で記すが、当該箇所はもともと2号窯の前庭部があった箇所ので、2号窯の前庭部を破壊して設けられている。埋土中から1号窯の遺物が出土しており、1号窯の作業スペースと理解できる。また、土坑204は半分以上が農道下であり、全掘を行っていない。一見、土坑状の形状を呈するが、旧三原町教育委員会のA調査区では階段状の土坑(SK106・SK109)が検出されており、この種の土坑になる可能性が高い。土坑204の位置からみて、A調査区のSK109から階段状に連結して続く土坑群の最頂部の土坑かもしれない。土坑204がSK109から続く掘り込みと仮定すると、灰原の縁辺部を巡ることになり、作業ステップとして設けられた可能性が高い。



挿図15 土坑204断面図

### 1号B窯

杯Hを主体とし杯Bを含まない中・下部灰層のG K・MN層の存在から想定した窯で、詳細はすでに述べた通りである。東壁断面ではK層の層厚が約40cmあり、上方への広がりを見せることから窯体は1号A窯よりやや高い位置に立地するものと思われる。灰層は中部灰層のG K層と下部灰層のMN層の上下層に分かれるが、この間に黄褐色のL層が間層として存在している。遺物の項で詳細に述べるが、下部灰層中の器種構成は杯Hの蓋身のセットを主体とし、蓋の天地が逆転した形態の無台の杯(杯Ghと仮称)を含まない。これに対して、中部灰層のG K層では、杯Hの身と蓋の天地上下を逆転した形態の杯身・蓋のセット(蓋Gh・杯Gh)が主体を占めており、明らかに遺物相が異なっている。さらに新古の窯が重複している可能性もあるが、いまのところ1基の窯と想定しておく。なお、下部灰層のMN層操業時の関連遺構として汁谷遺跡のSK201がある。

## 第4節 汁谷2号窯

### 1. 窯体

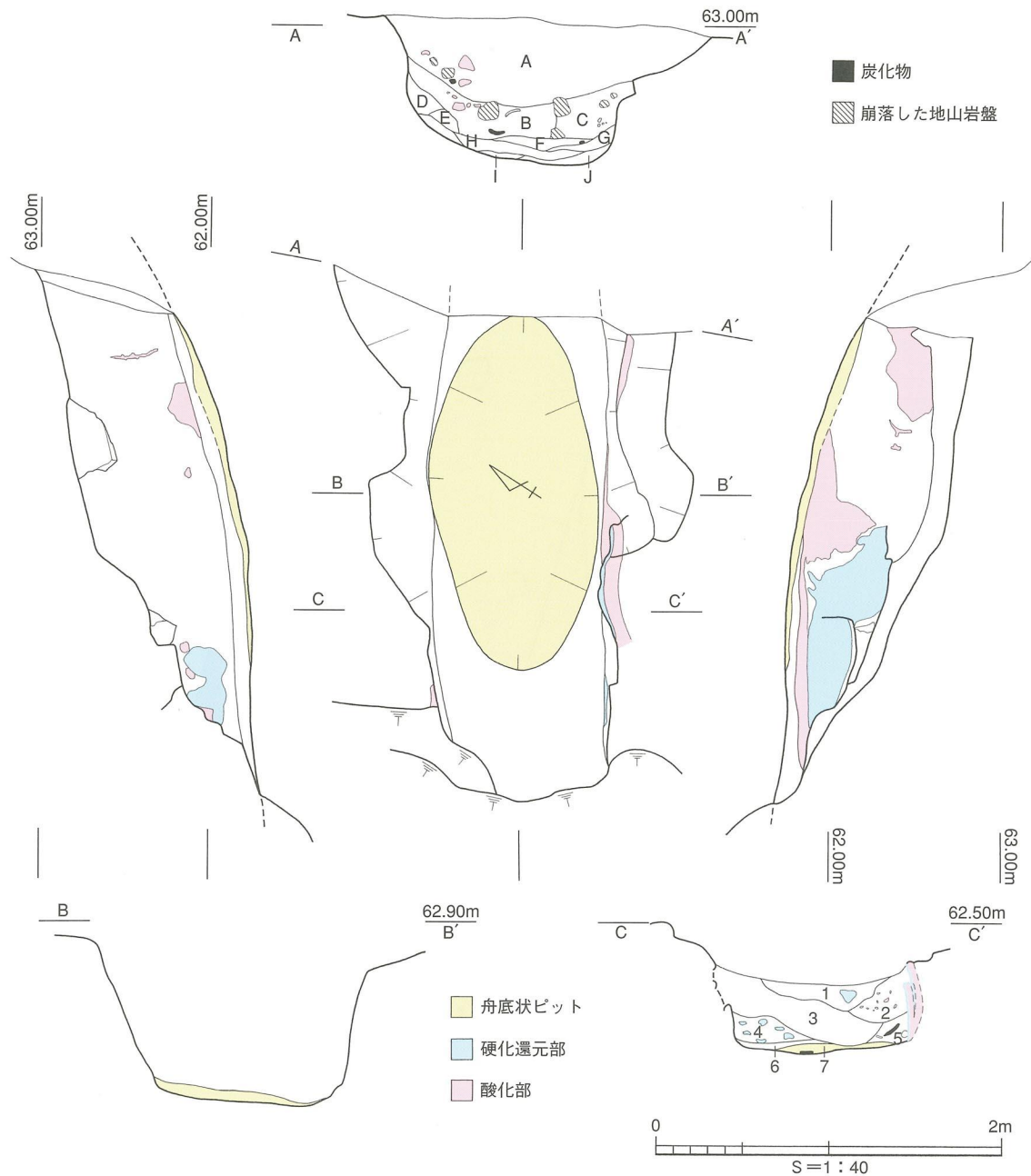
窯体の一部と灰原の調査を実施した。窯体の検出長は2.8mである。検出した窯体の部位は燃焼部で、焼成部は調査区外にあり調査を実施していない。検出された燃焼部の側壁および床面は被熱酸化層および地山層が露呈しており、還元層が焚口の一部を除いて全く認められない。窯体内から還元焰焼成された須恵器が出土しているので、被熱酸化層の露呈が酸化焰で焼成された痕跡を示すものではないことは明らかである。また、スサ混じりの粘土塊が出土しているので、地下式ではなく天井架構式の半地下窯であることがわかる。窯体埋土には天井や側壁の崩落塊がほとんど含まれていないことから、これらは操業停止後に、窯体外へ持ち出された結果によるものと判断してよい。

1号A窯構築時に作業スペースとして設けられた土坑205の造成によって、前庭部が破壊されており、この時に焚口の一部も破壊されている。焚口の幅は0.9mで、燃焼部の幅は中央で0.95mを測るが、内壁が完全に残存しておれば、実幅は0.9m前後になるろう。また、焚口付近の右側壁は地山が被熱によって硬化し、青灰色に発色した還元層が残存するが、青灰色の範囲は床から15cmの高さのところまでで、それより下は幅5cm前後の赤褐色の被熱酸化層が帯状に広がる。還元層と被熱酸化層との境付近が本来存在していた床面の高さであり、明らかに床の削り取りが行なわれていることがわかる。

燃焼部床面には長径2.10m、短径0.82m、深さ5cm前後の長楕円形の浅い土坑状の窪みが検出された。埋土中には赤褐色の焼土や須恵器片を包含し、底面は被熱が及んでいない。このような特徴から浅い土坑状の窪みは舟底状ピットと判断される。操業時の舟底状ピットはもう少し深さがあったものと思われるが、上述の通り、床面の削り取りにより、同ピットの底に近い部分だけが残存したものであろう。焼成部と燃焼部の境は焼成部が調査区外にあり明確ではないが、舟底状ピットの長軸の頂点を焼成部と燃焼部との境とすると、燃焼部の奥行は2.8mとなる。また、床面は焚口付近では水平で傾斜角度はないが、焚口より1.3mはいったところから傾斜が始まり、約15°の角度で立ち上がる。焚口の標高は61.90mで、斜面下の汁谷遺跡との比高差は約4.5mである。

窯体内の土層は、東壁断面では10層、中央断面では7層に分かれるが、大きくは上層（窯体廃棄後の流入土層）、中層（窯体埋土）、下層（舟底状ピット内埋土）の3層に分かれる。上層は東壁断面A層、中央断面第1層が該当する。窯体埋没後にできた溝状の窪みの上に周囲から流入堆積した土層で、比較的まとまった量の須恵器が出土したが、2号窯で焼成された製品以外の遺物が含まれている。中層は東壁断面ではB層～E層、中央断面では第2層～第5層が該当する。窯体廃棄後の側壁の被熱酸化面の剥落もしくは側壁背後の地山の崩落土で、ほとんど遺物を含まない。

下層は窯体燃焼部の舟底ピットに溜まった埋土層である。通常の舟底状ピットは30cm前後の深さがあるが、当該の舟底状ピット深さは10cmも満たない。床が削り取られた際に舟底状ピットも同時に上面部が削り取られてしまったものと思われる。東壁断面ではF層～J層、中央断面では第6層・第7層が該当する。通常、舟底状ピットは何度も掘り返されるためにピット内の埋土は窯壁片や遺物・炭化物などを包含し複雑な堆積状況を示すが、当該ピットは基本的には上下2層の比較的単純な堆積状況を呈する。上位層は東壁断面ではF層・G層、中央断面では第5層～第6層が該当し、下位層は東壁断面ではI層・J層、中央断面では第7層が該当する。上下位層ともに遺物を包含しているが、下位層の包含遺物は細片（遺物番号1201・1202）のみである。これに対して、上位層では遺構写真図版7・9でわか



2号窯東壁断面

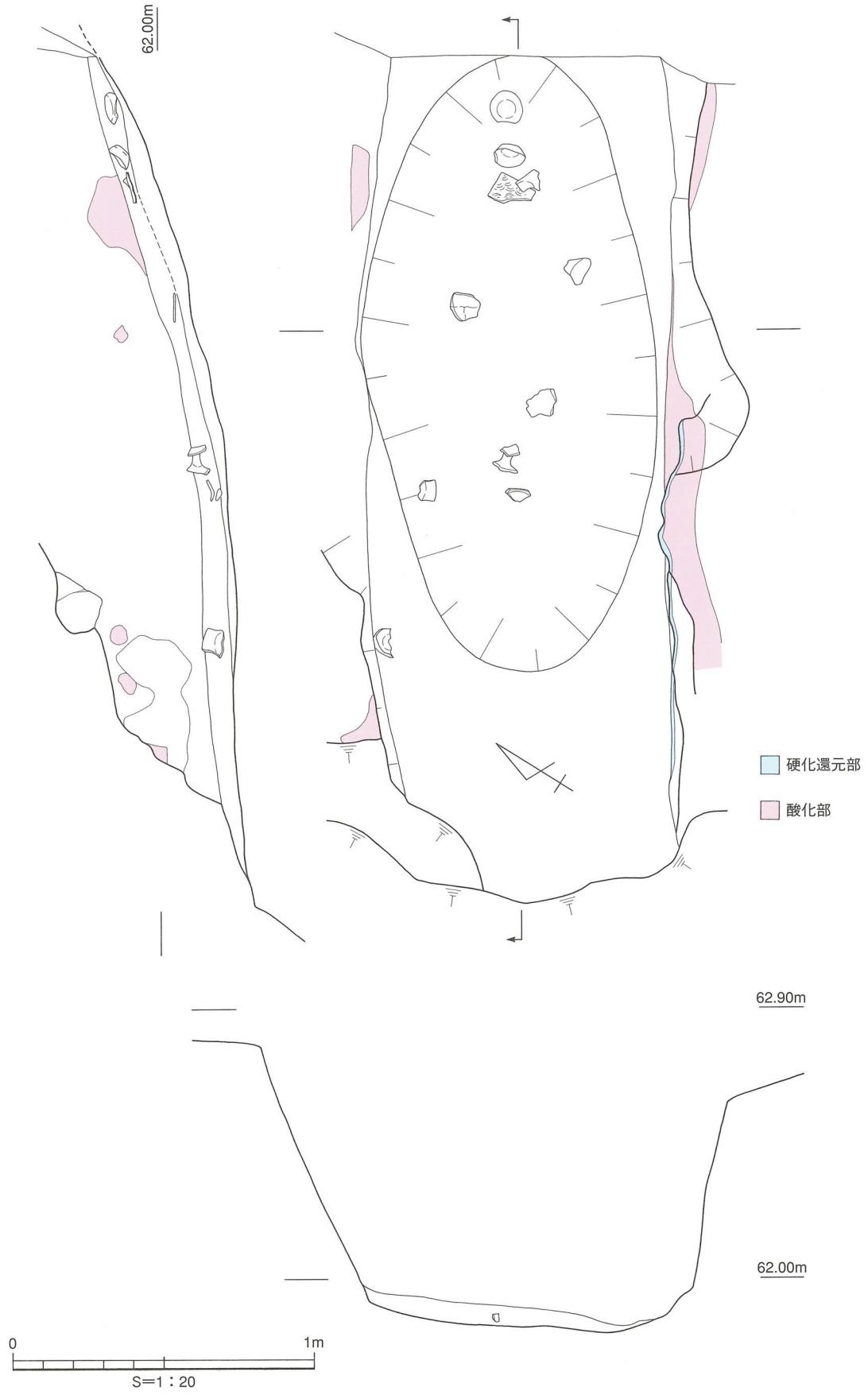
A	2.5Y5/4	黄褐	シルト混じり中細砂	(左方に赤変した砂岩片を含む)
B	2.5Y6/6	明黄褐	シルト混じり中細砂	(左方に赤変した砂岩片を含む)
C	2.5Y7/6	明黄褐	シルト混じり中細砂	(やや締まりあり。岩盤の小片や脈状粘土の細粒を多く含む)
D	2.5Y7/4	浅黄	細砂混じり粘土	(左側壁の脈状粘土が崩れて堆積したもの)
E	2.5Y6/6	明黄褐	シルト混じり中細砂	
F	7.5YR5/4	にぶい褐	シルト質中細砂	(上面が窯の床面か?)
G	2.5Y7/6	明黄褐	シルト混じり中細砂	(C層と同じ)
H	7.5YR5/4	にぶい褐	シルト質中細砂	(F層と同じ。上面が窯の床面か?)
I	2.5Y7/4	浅黄	細砂混じり粘土	
J	2.5Y6/4	にぶい黄	シルト混じり中細砂	

2号窯中央部断面

1	2.5Y6/4	にぶい黄	シルト混じり中細砂	
2	2.5Y6/4	にぶい黄	シルト混じり中細砂	(砂岩の崩れた赤色小粒含む)
3	2.5Y5/3	黄褐	シルト混じり中細砂	
4	2.5Y5/2	暗黄褐	シルト混じり中細砂	(砂岩の崩落片多く含む)
5	2.5Y6/4	にぶい黄	シルト混じり中細砂	(大型炭化物と赤色砂岩片含む)
6	7.5Y7/4	浅黄	シルト混じり中細砂	
7	2.5Y6/3	にぶい黄	シルト混じり中細砂	(やや赤みを帯び、炭化物の小片を含む)

【舟底状ピット埋土】

挿図16 汁谷2号窯 窯体図



挿図17 汁谷2号窯 遺物出土状況

るように形のある比較的大きな破片を包含しており、これらの遺物は攪拌された状況が認められない。舟底状ピットの上面が残存していないので断定はできないが、ピット埋土と出土遺物の状況から判断する限り、焼成回数は2回程度と推測する。

右側壁の地山の硬化還元部の残存から、左右の側壁ともに素掘りのままであったことがわかるが、全体に側壁の残存状況がきわめて悪い。左側壁は焚口付近にわずかに被熱酸化層の一部が残る以外は、還元層はもとより被熱酸化層も存在しない。その中でも、中央断面付近では壁背後の地山土そのものが崩壊している。また、右側壁についても、焚口付近に地山の被熱硬化還元部が残存するが、これ以外の箇所については、還元部は残存しない。このうち、壁背後の地山層が砂岩からなる箇所では崩落までには至らず、わずかに被熱酸化層の一部が残存するが、中央断面付近では風化土からなる地山土が大きく崩れ、側壁の原形を留めない。なお、側壁背後の地山土の崩壊については、左側壁に関しては土層断面から窯放棄以後におきた可能性が高いと判断されるが、右側壁に関しては土層の堆積状況からは、発生が窯放棄以前か以後かは判断できなかった。

以上のように、還元部は右側壁の焚口部を除き、全く残存していない。通常このような状況は、窯の修復に伴う場合か新しく構築する窯の壁材に混ぜる混和材（シャモット）の採取を目的として、使用を止めた窯体壁の剥ぎ取りが行なわれた結果を示すことが多い。しかしながら、窯壁の剥ぎ取りは碎いて細粒にしやすいつまみじりの粘土被覆土を中心に行なわれ、硬くて砕きにくい礫を多く含む地山の硬化還元部は対象とされない。然るに、本窯のように、シャモットとしては利用に適さない砂岩礫を多く含んだ地山の硬化還元部の大半が残存していないという状況は、人的行為ではなく、自然的要因による壁面の崩壊によるものと考えざるを得ない。

こうした点から注目しておきたいことは、焚口から約90cmのところ側壁が縦方向に裂け、焚口側の被熱硬化層（幅約10cm）が背後の基盤層から剥離し、左隣の側壁と被熱硬化部幅分約10cmのずれを生じていることである。（C-C'断面）この焚口側の被熱硬化層は上端が内側に傾いて全体が前にずれるだけでなく、東奥にもずれ、左端の一部が左隣の側壁前に重なる。すなわち、左隣の側壁の亀裂口が焚口側の側壁の背後にまわり、引き違い戸の重なりのような形となる。このような状況は大きな土圧を受けたことにより焚口側の側壁の上部が内側に押し出された結果を示している。窯体側壁全体の硬化還元部の不存在はこのような状態で被熱硬化部が背後の基盤層から離れ崩壊した結果の可能性が高い。土圧の発生要因については、地震によるものと推断しており、詳細な検討については第6章第3節で行なっている。

## 2. 前庭部・灰原（1号A窯土坑205）

前庭部は、1号A窯の作業スペース（土坑205）確保のために、大きく掘り下げられており、原形を留めない。また、灰原については、土坑205の掘り下げの際に前庭部に近い部分が失われた可能性はあり得るにせよ、土坑205の掘削範囲外にある斜面部においてもその形跡が全く認められない。現農道下に存在している可能性がないわけではないが、農道下の旧三原町教育委員会調査A地区及び今回の調査地区においても、2号窯の灰原の広がりとは認められず、明確な灰原が形成

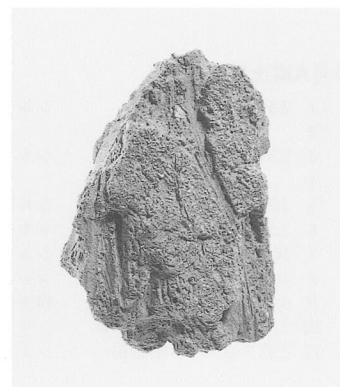
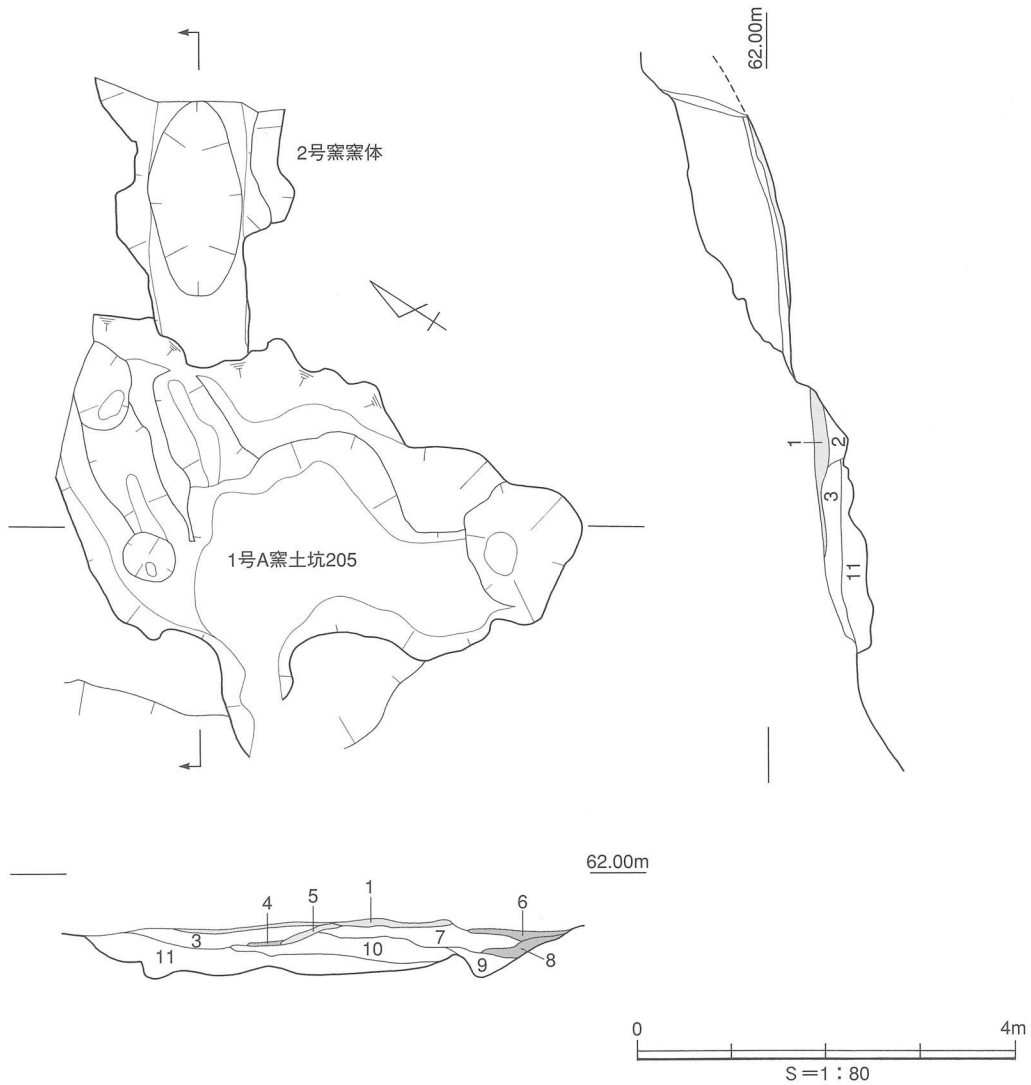


写真6 2号窯出土窯壁片

されていない可能性の方が高い。このことから2号窯の作業期間が極めて短いことが想定される。

なお、土坑205について若干の説明を加えておく。土坑205は東西2.8m、南北5.0mを測る。平面プランはやや不整形であるが、雨水等の浸食によって壁面の砂岩風化層の露出部が失われたことによるものと思われる。土坑205は2号窯の前庭部全体を掘り下げて作られており、土坑の東端が2号窯の焚口に接する。埋土層上面と南面に灰の堆積層があるが、土坑の埋没時に1号窯の灰原末端部から流下したものである。遺物は南よりに集中して出土した。比較的形のあるものも多く、一次的な置場に使用されたものとする。甕1129は体部中央で折れ、口縁部が体内に落ち込んでいる特徴をもつ。このような特徴は旧三原町調査A地区SK106出土甕類と共通しており、遺構の共通性が窺える。



1号A窯土坑205

1	2.5Y4/1	黄灰	シルト混じり粗中砂	【灰層+地山土混じり】
2				【風化砂岩流土層】
3	2.5Y8/4	浅黄	シルト混じり粗中砂	【地山流入土層】
4				【灰層】
5	2.5Y6/4	にぶい黄	シルト混じり粗中砂	【灰層+地山土混じり】
6	2.5Y6/2	灰黄	シルト混じり粗中砂	【灰層】
7	10YR5/3	にぶい黄褐	シルト混じり粗中砂	【灰層+地山土混じり】被熱した酸化砂岩が多数混じる。
8	10YR2/1	黒	シルト混じり中細砂	【純灰層】
9	2.5Y6/4	にぶい黄	粗中砂	【風化砂岩の流土層】若干の灰混じる。
10	2.5Y6/3	にぶい黄	シルト混じり粗中砂	【地山流入土層】砂岩のブロック片が多数混じる。
11	2.5Y7/6	明黄褐	シルト混じり粗中砂	【地山の風化砂岩流土層】砂岩ブロックはほとんど混じらない。

挿図18 汁谷2号窯 全体図

## 第5節 汁谷遺跡

### 1. 基本層序

遺構はすべて淡黄色の地山面上で検出されており、層位的に分離することはできない。

3段の段差がある調査区のうち最上段と2段目では、挿図19に示したように、地山面の上に灰色の遺物包含層（3層）が最大で約10cmの厚さで堆積していたが、最下段では遺物包含層は認められず、床土直下が地山すなわち遺構検出面となる。

### 2. 歴史時代の遺構

#### 【工房状遺構】

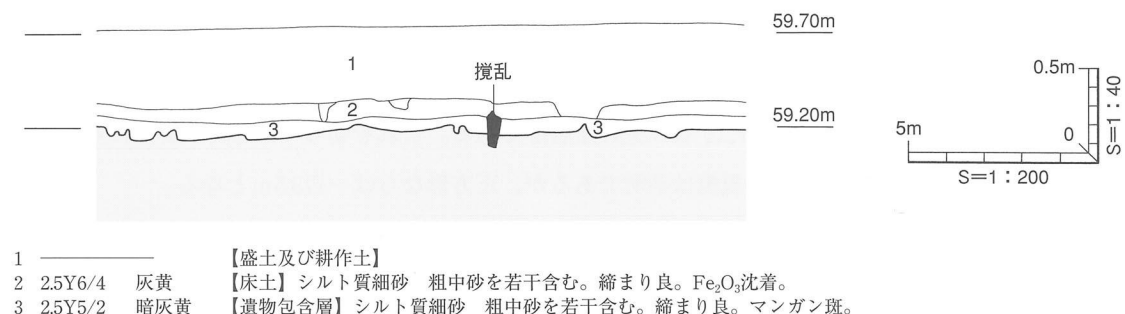
SK201

最上段の南寄り、窯跡群から20m以内の位置にある歪な楕円形を呈する浅い土坑である。規模は長径4.8m、短径3.5mあり、深さは南西端から中央あたりが約30cm、山側に向かって浅くなり10cmほどの深さとなる。つまり、床面は水平ではなくわずかながら傾斜をもつ。

埋土は褐灰色系土（3層）を主とするが、壁際には灰黄色系土（5層）が堆積している。この層は地山と極めて類似しているため、遺構の平面検出に苦勞し、壁際からの土器の出土によって、再三、遺構が外へ広がることとなった。

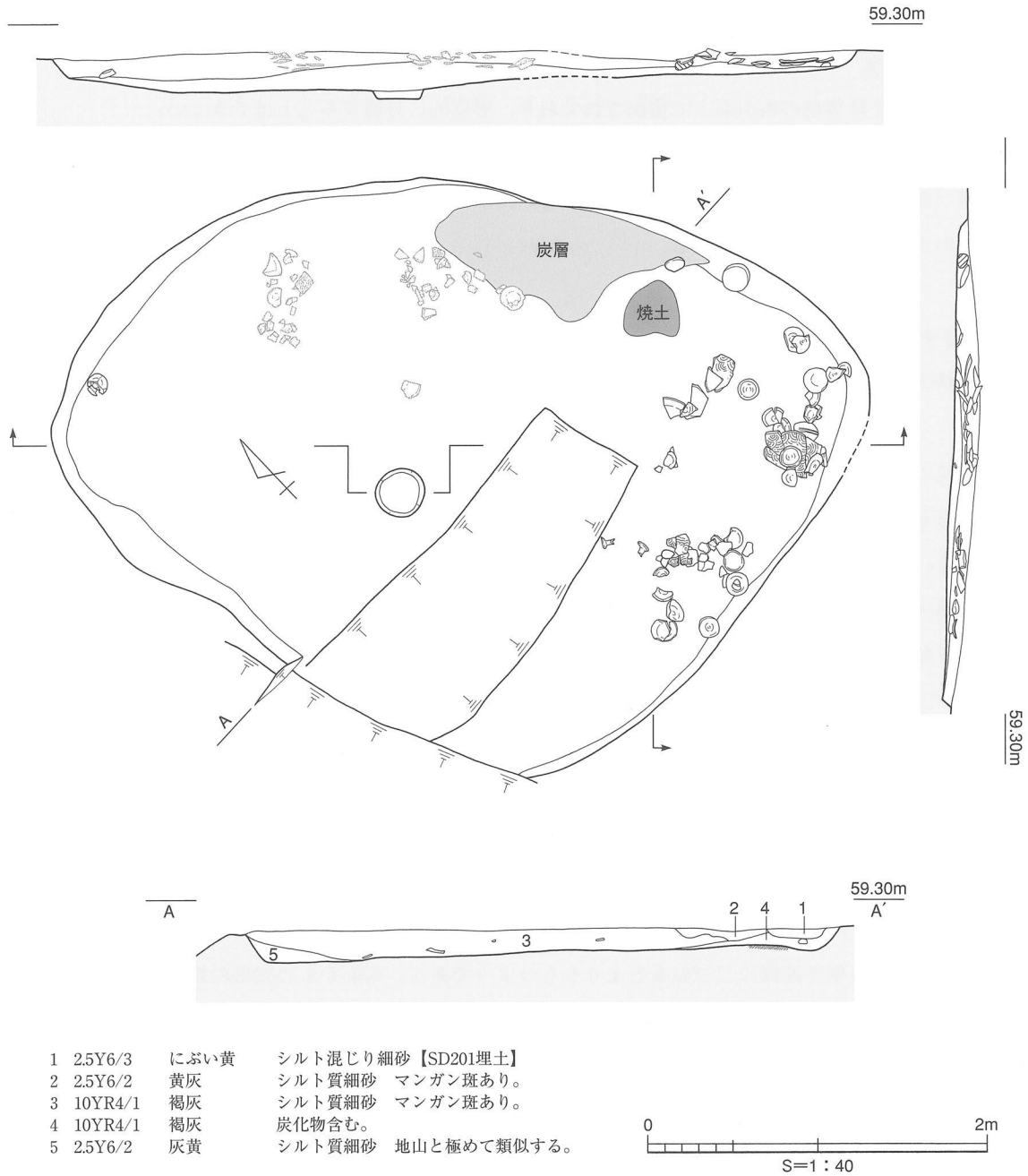
土坑の中央付近では深さ5cm程度の浅いピット状の窪みが1基発見されたが、これ以外には明確な柱穴などを見いだすことはできなかった。また、東壁近くには炭化物を多く含む4層が広がっており、それに接して径40cmほどの焼土面が認められた。焼土の脇には焼けて赤変した礫もあり、土坑内で火が使用されたことを物語っている。

遺物は土坑の南端付近の床面直上から、蓋杯を中心に完形に近い須恵器のみがまとまって出土し（1301～1333）、東側と西側に二つのまとまりをもつようである。床面からの完形の須恵器は土坑の北端からも1点単独で出土している。また、これらとは離れて、中央部から北東部にかけての埋土上層からは、破片土器がいくつかのまとまりをもって出土している（1401～1412）。挿図20では北東部の遺物群のみを図示しているが、実際には、遺構図版12最上段に示すように、土坑中央付近にも一群がある。このうち、壺1点（1412）だけがほぼ完形に接合できたが、他はせいぜい1/2程度まで接合したにすぎなかった。後述のように床面出土土器と埋土上層出土土器には時期差が認められ、出土状況からも上層の破片土器は土坑の廃絶後に投棄あるいは流入したものと考えられる。



挿図19 汁谷遺跡調査区東壁 土層断面図





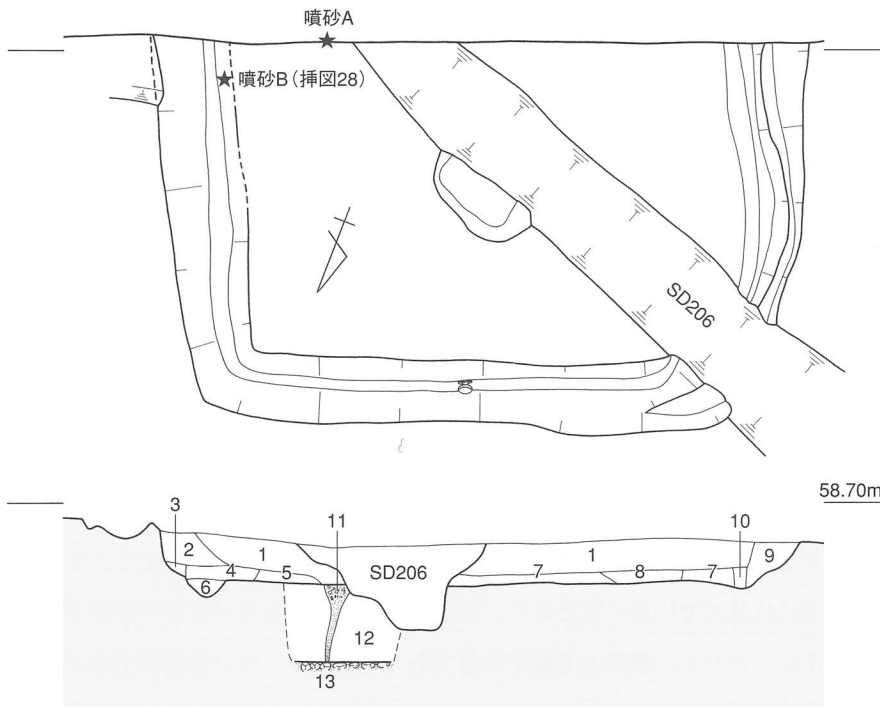
挿図20 SK201

【竪穴住居跡】

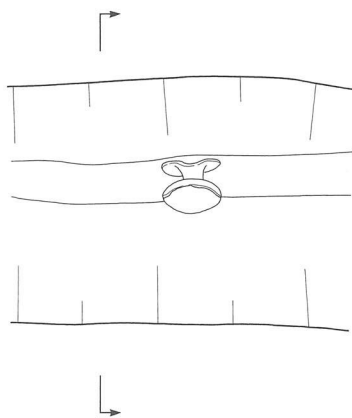
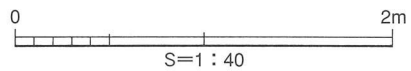
SH201

SK201の西側に近接して発見された方形の竪穴住居跡である。これを切ってSD206が斜めに走る。南半分が調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが、正方形ならば一辺3.5mとなる。

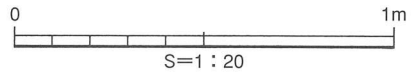
住居跡の深さは約30cmで、床面には厚さ約5cmの貼り床（5・7・8層）を施し、壁際に幅約20cm、深さ約10cmの周壁溝を巡らせる。調査区南壁では西辺の周壁溝断面に、暗灰黄色土（10層）が縦方向の入るのが観察され、板状のものを立てた痕跡かと思われたが、東辺の断面では確認できず、平面的な広がりも把握できなかった。柱穴は認められず、中央付近には深さ3～5cm程度の浅い窪みがあるが、貼



平面図・断面図



周壁溝内須恵器



SH201 (調査区東壁)

1	2.5Y4/1	黄灰	細砂質シルト	
2	2.5Y6/2	灰黄	シルト質細砂	地山と極めて類似する。
3	2.5Y6/2	灰黄	シルト質細砂	地山と極めて類似する。
4	2.5Y6/1	黄灰	細砂質シルト	
5	2.5Y7/3	浅黄	シルト質細砂	【貼り床】
6	2.5Y7/3	浅黄	シルト質細砂	【周壁溝埋土】
7	2.5Y7/3	浅黄	シルト質細砂	【貼り床】
8	2.5Y6/1	黄灰	細砂質シルト	【貼り床】
9	2.5Y6/2	灰黄	シルト質細砂	地山と極めて類似する。
10	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質細砂	板状のものを立てていた痕跡か？
11	5Y6/2	灰オリーブ	シルト混じり極細砂	下部はシルト混じり中細砂で、上部は14層をブロック状に含む。【噴砂】
12	2.5Y6/4	にぶい黄	シルト質細砂	【地山】
13	5Y6/1	灰	シルト混じり砂礫 (10cmφ以下礫)	【扇状地の基盤礫層】

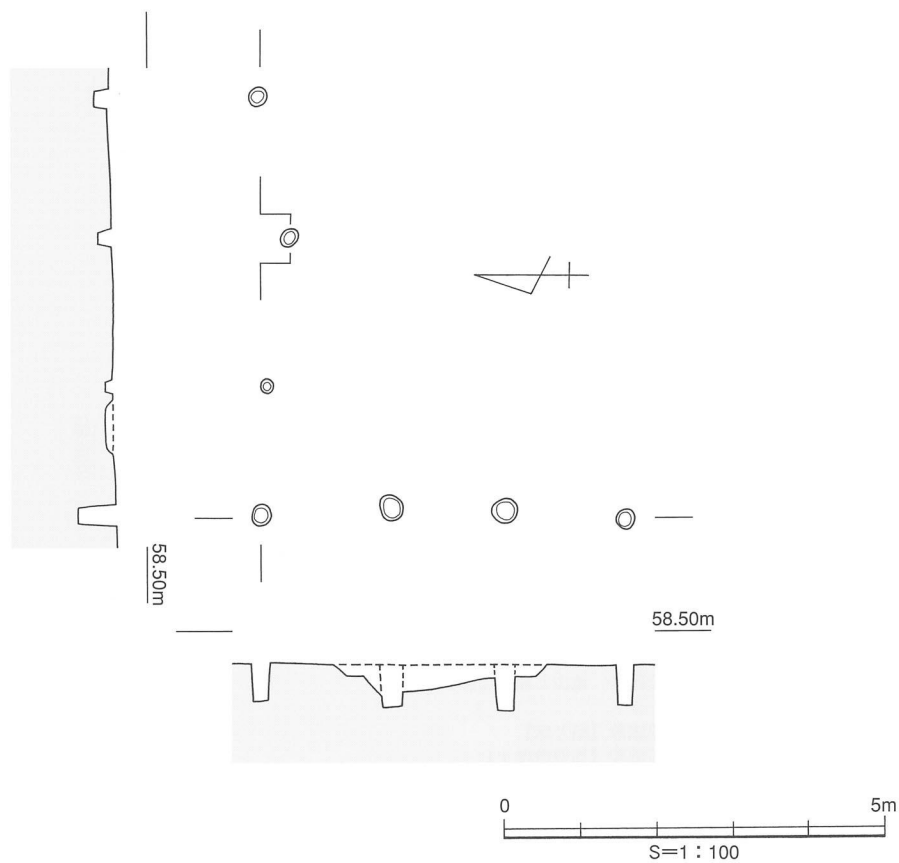
挿図21 SH201

り床の一部を掘り下げた可能性もある。

住居跡の埋土は基本的に2層に分かれ、周辺部に地山と極めて類似した黄色系の2・9層が、内側に褐灰色系の1層が堆積している状況は、SK201と同様である。当初、1層にのみ目を奪われて平面形を見誤っていたが、遺物の出土状況から修正することができた。

遺物は周溝内から完形に近い須恵器高杯(1426)1点や甕(1427・1428)が出土している。他の遺物は主に1層からの出土で、須恵器杯・蓋など(1419~1423)と土師器の甕(1425・1426)がある。このうち須恵器甕(1427)は周溝内出土の破片と1層出土の破片が接合している。SK201とは異なり土師器の甕が出土していることから、煮炊きを伴う営みが行われたと考えられる。須恵器では杯と蓋に時期に異なるものが混在しており、どちらが本来の時期をしているか、調査時の記録には確たるものがない。

なお、南壁断面を精査したところ、噴砂が認められたため、礫層までの断ち割りをを行った。噴砂は床面から約40cm下方の礫層から上がっており、上方に向かってラッパ状に開く。住居跡と噴砂の前後関係については、即断はできないが、貼り床と考えられる5層が噴砂の上面で途切れたようになっていることと、これより上の1層には及んでいないことから、使用中か廃絶後間もない住居の床面が噴砂によって引き裂かれたと考えたい。ただし、噴砂の上面が平坦であることから、古い時期の噴砂が住居を築造する際に削平された可能性も否定できない。



挿図22 SB201

### 【掘立柱建物】

#### SB201

梁行き3間(5.6m)、桁行き3間(4.9m)あるいはそれ以上の掘立柱建物で、柱間は75cm～1mとばらつきが大きい。主軸は真北を向く。西面の柱は通りがよく、深さも50cm前後あってしっかりと掘り込まれているが、北面の柱は通りが揃わないものがあり、深さも20cm以下と浅い。東面の柱列は北面の状況から削平されたと考えたが、柵列のような遺構であったかもしれない。

遺物が全く出土していないため時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から窯跡群と並行する時期の遺構と考えておきたい。

### 【土坑】

#### SK204

SH201の西に並ぶ円形土坑でほぼ半分を調査した。径1.25m、深さ70cmあり、底は砂礫層に到達している。埋土は上部が褐灰色系の砂質土を主とし、下部はこれより少し白っぽく、よりシルト質となる。壁面が崩落したと思われるような黄色系土もブロック状に堆積している。平面形が円形を呈することと、砂礫層まで到達していることから、素掘りの井戸である可能性があげられるが、調査時に湧水は見られなかった。

遺物は須恵器の小片が出土したのみである。

#### SK206

調査区のほぼ中央にある不整形な浅い土坑で、最大長は約1.6m、深さは約20cmである。埋土は灰褐色系のシルト質土を主とする。小さな土坑にもかかわらず、埋土上部からは比較的多くの須恵器が出土したが、いずれも破片である(1501～1506)。

#### SK210

調査区中段の西隅にある土坑で、西側は下段によって削平され、北側は調査区外にのびるため、平面形は不明である。長さ4.1m以上、深さ20cmの浅く大きく広がる土坑である。底には溝、柱穴など認められず、遺物も少なく、実測しうるものは須恵器杯蓋1点のみであった(1507)。遺構というより、包含層的な溜まりかもしれない。

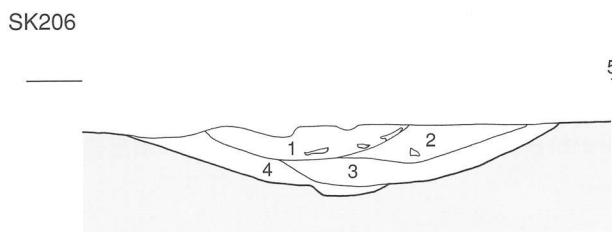
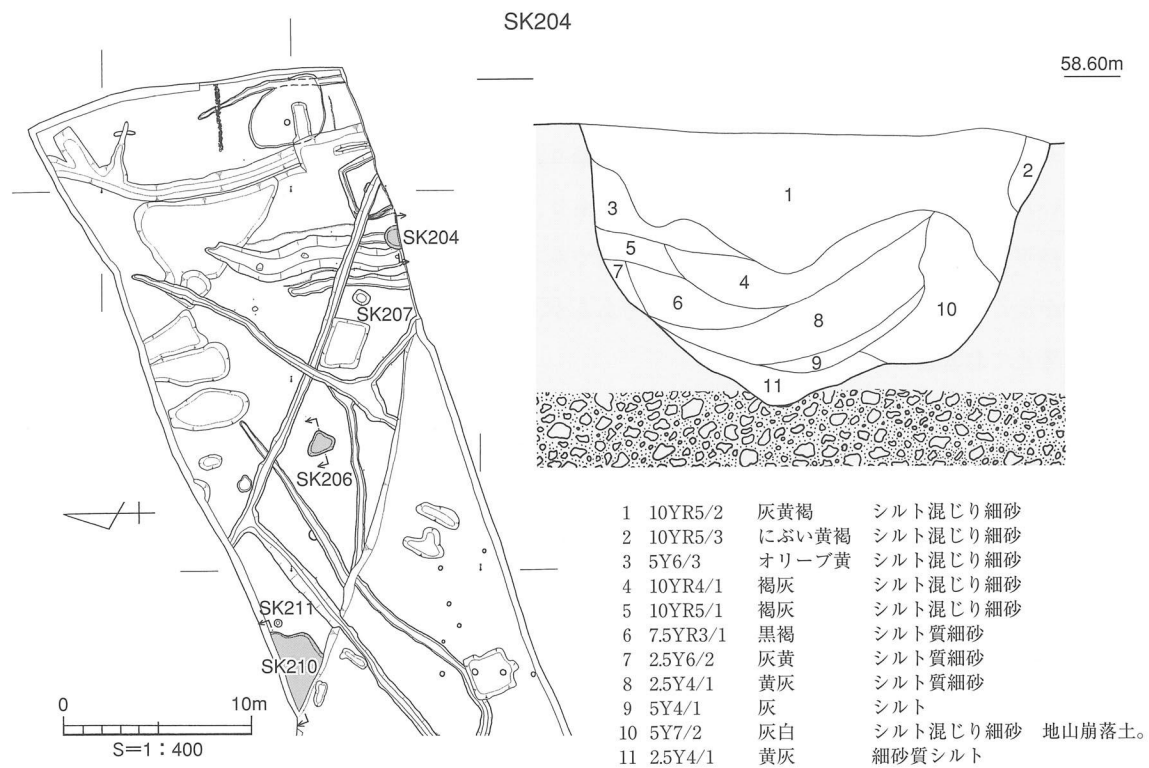
#### SK211

SK210の東に接した位置にある円形土坑で、径40cm、深さ5cmと浅く小さい坑である。調査時には須恵器杯(1508)の口縁部が顔を出しており、もう少し大きな土坑の底だけが残存したものと思われる。1508はほぼ完形で正置された状態で出土した。

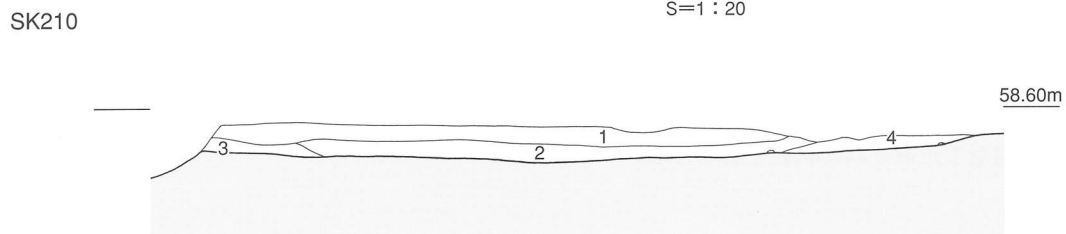
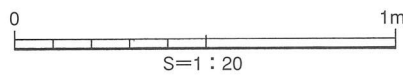
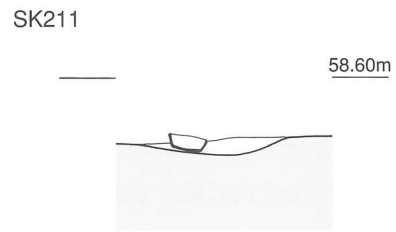
### 【溝】

#### SD205・210・211

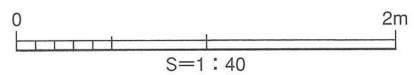
SD205は北東から南西にほぼ直線的に走行する箱掘りの溝で、幅約35cm、深さ約20cmである。北端と下段の調査区では削平され途切れているものの、しっかりと掘削された溝である。埋土は最下部の5層と中程の3層がシルト混じりの砂層で、やや早い水流があったことが推察される。他はシルト質砂層である。調査区の中央でSD206と交差するが、SD206よりも新しい。その先ではSD210とSD211が分岐する。



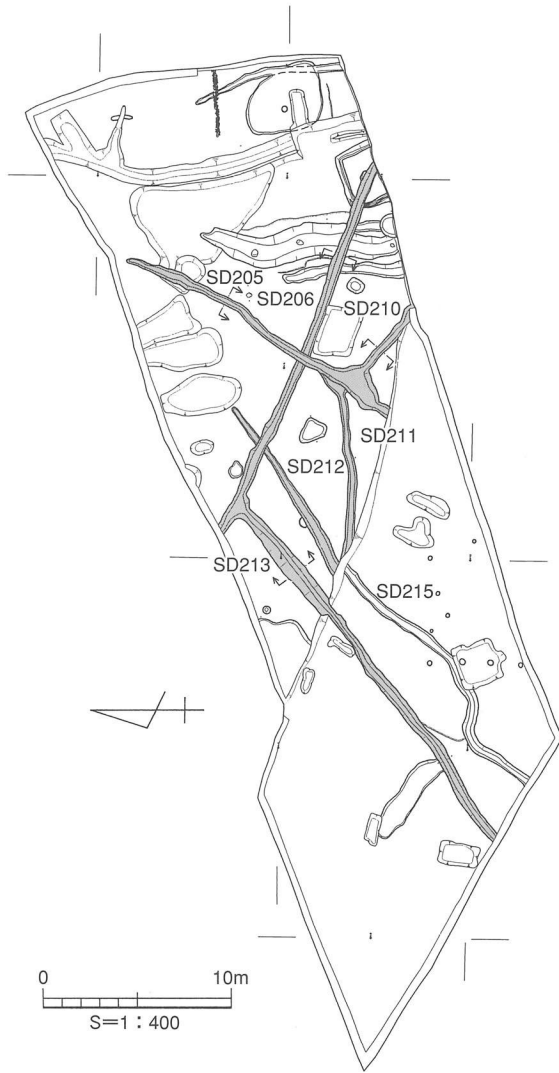
- |   |         |      |         |                |
|---|---------|------|---------|----------------|
| 1 | 10YR4/1 | 褐灰   | シルト     | 締まり良く須恵器片多く含む。 |
| 2 | 2.5Y6/2 | 灰黄   | シルト     | 締まり良い。         |
| 3 | 2.5Y5/1 | 黄灰   | 粘土      |                |
| 4 | 2.5Y6/3 | にぶい黄 | シルト質極細砂 |                |



- |   |         |     |         |                      |
|---|---------|-----|---------|----------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐  | シルト     | 締まり良い。               |
| 2 | 10YR2/2 | 黒褐  | シルト     | 締まり良い。5mm角以下の炭化物を含む。 |
| 3 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄 | シルト質極細砂 |                      |
| 4 | 2.5Y6/1 | 黄灰  | シルト     | 締まり良い。               |

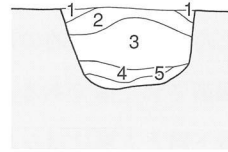


挿図23 SK204・206・207・210・211



SD205

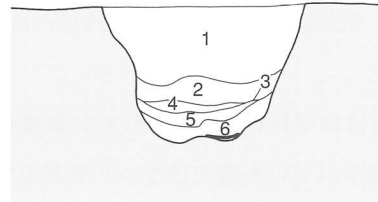
58.70m



- |   |          |      |  |
|---|----------|------|--|
| 1 | 5Y7/1    | 灰白   | シルト混じり細砂<br>Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 沈着。マンガン班。<br>締まり良好。 |
| 2 | 2.5Y5/2  | 暗褐黄  | シルト質細砂 締まり良好。  |
| 3 | 2.5Y5/3  | にぶい黄 | シルト混じり細砂   |
| 4 | 10YR4/1  | 褐灰   | シルト質細砂   |
| 5 | 2.5YR6/2 | 灰黄   | シルト混じり細砂   |

SD206

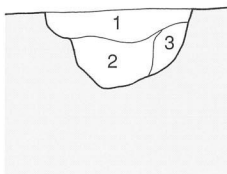
58.70m



- |   |         |      |                          |
|---|---------|------|--------------------------|
| 1 | 10YR5/1 | 褐灰   | シルト 土器片を含む。              |
| 2 | 10YR4/1 | 褐灰   | シルト混じり中細砂                |
| 3 | 2.5Y6/2 | 灰黄   | 粗中砂混じりシルト<br>地山の黄色土粒を含む。 |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐   | シルト混じり中細砂                |
| 5 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄  | シルト質極細砂                  |
| 6 | 2.5Y6/3 | にぶい黄 | シルト<br>最下部に黒色シルトの薄層を挟む。  |

SD210

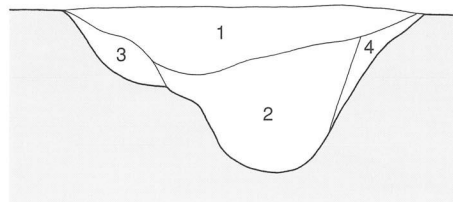
58.70m



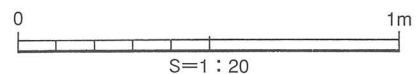
- |   |         |      |          |
|---|---------|------|----------|
| 1 | 2.5Y6/2 | 灰黄   | シルト質極細砂  |
| 2 | 2.5Y6/1 | 黄灰   | シルト混じり細砂 |
| 3 | 2.5Y6/3 | にぶい黄 | シルト混じり細砂 |

SD213

58.70m



- |   |          |      |         |
|---|----------|------|---------|
| 1 | 2.5YR5/1 | 黄灰   | シルト     |
| 2 | 2.5YR4/1 | 黄灰   | シルト質極細砂 |
| 3 | 2.5Y6/2  | 灰黄   | シルト質極細砂 |
| 4 | 2.5Y6/3  | にぶい黄 | シルト質極細砂 |



挿図24 SD205・206・210～213

SD210とSD211はSD206の半分程度の深さしか無く、埋土もシルト質で穏やかな流れの溝であったと思われる。

遺物は須恵器の小片が主にSD205から出土している (1510~1512)。

#### SD206・213

東南東から西北西にほぼ直線的に走行する箱掘りの溝で、幅約55cm、深さ約35cmである。SD205と同様にしっかりと掘削された溝である。調査区の東端ではSH201の埋土を切って掘削されている。埋土は6層に分かれ、最下層と上層にはシルト層 (1層・6層) があるが、中層の2・4・5層は砂を主とする層でやや早い水流があったことが推察される。西端付近で約120°の角度をもってSD213が分岐する。

SD213は直線的に延びる溝で、幅約90cm、深さ約45cm、断面はU字形で部分的に2段に掘削されている。埋土はシルト質極細砂が主体で、SD206の中層よりは少し細粒である。分岐して流れが穏やかになっていることが推測される。

遺物は、ともに須恵器の小片が出土している (1513~1518、1523・1524)。

#### SD208

他の溝とは異なり、北から南へ走行する浅い溝で、調査区の中程で削平により途切れている。

遺物は、須恵器の小片が出土している (1519~1522)。

#### SD212

SD213とほぼ平行して掘削されている浅く幅の狭い溝である。SD206に切られているため、これらと同時に使用されていた溝ではない。平面図ではSD215と繋がっているように見えるが、別の溝である。須恵器の小片がわずかに出土したのみである。

これらの溝は、山裾を起点として掘削されていると考えられ、主となるSD205やSD206はほぼ直線的に延びる。降雨時などには一時的に発生する山水を取水するための溝であったと考えておきたい。



写真7 汁谷遺跡作業風景 (1)



写真8 汁谷遺跡作業風景 (2)

### 3. 弥生時代の遺構

#### 【溝】

##### SD209

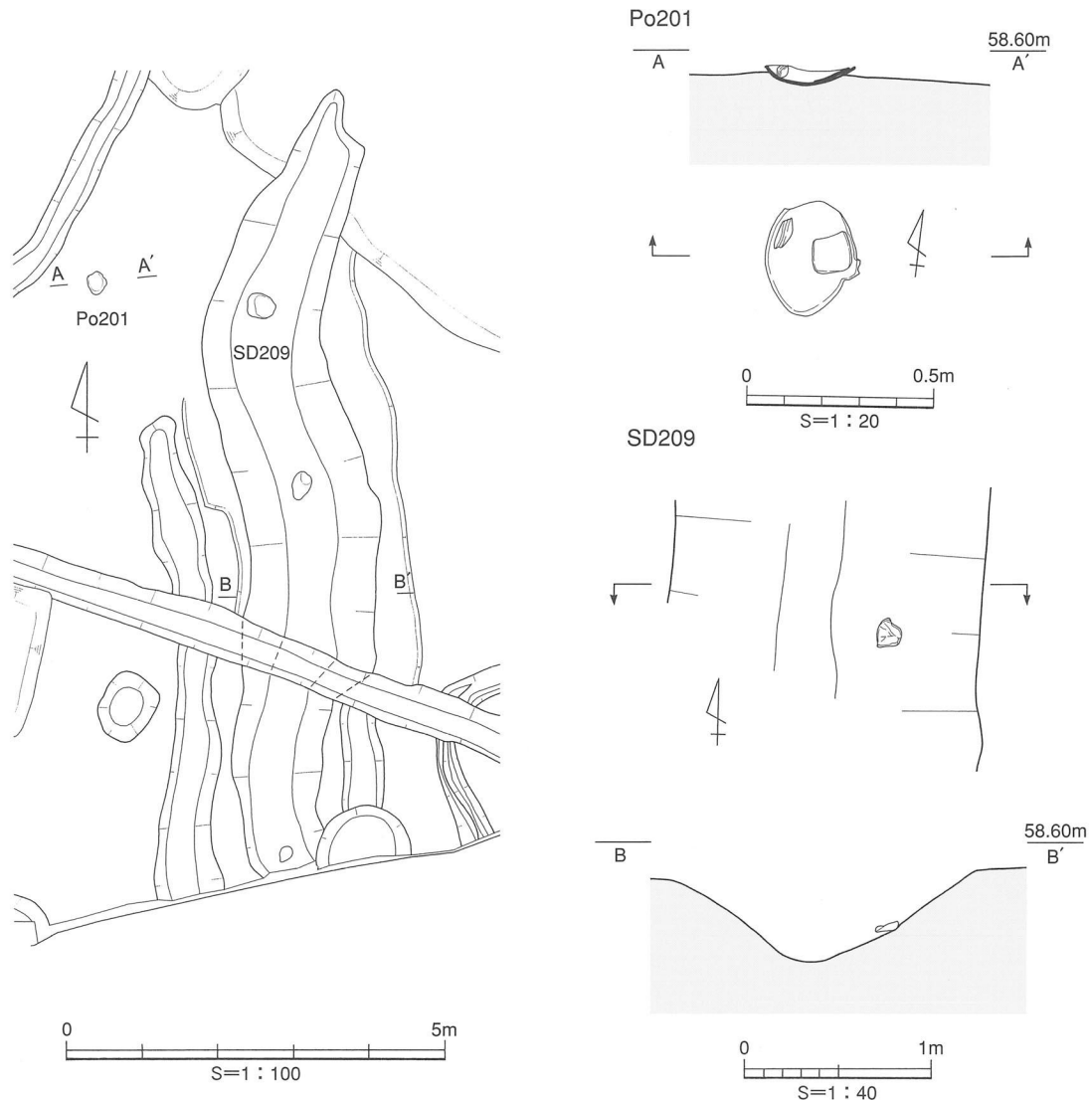
調査区の東部にあり北から南に緩く蛇行しながら走る幅の広い溝である。北端は浅くなって、削平により調査区の中程で途切れているが、南端は深く、60cmほどの深さがある。

遺物は、弥生土器や石器が少量出土しており、土器（1603～1613）には壺や甕、高杯などがあり、中期後葉と考えられる。石器（S1～S6）には石鏃、石錐、削器などがある。また、溝底近くからは人頭大ほどの礫が数個出土している。

##### SD215

下段の調査区で検出された溝で、蛇行しながら北東から南西に走る。北東端は中段にも続くはずであるが、飛鳥時代の遺構の検出面ではプランが確認できなかったことと、遺物が極めて少ないことから掘削は行わなかった。

遺物は、中期のものと思われる弥生土器の小片が出土しているのみである。



挿図25 SD209・Po201



### 【単独出土の土器】

Po201

SD209の西側に約1.5m離れた所から、甕（1601）が横たわった状態で出土した。上部は削平によって失われ、体部の1/4程度が残存するにすぎず、残存状態が悪く下半は図化できなかった。掘り方は確認できなかったが、周辺の地山が削平されていることから、本来は、小さな土坑に埋納され、その底に接しているものと考えられる。こうした遺構の状況から土器棺である可能性が考えられる。

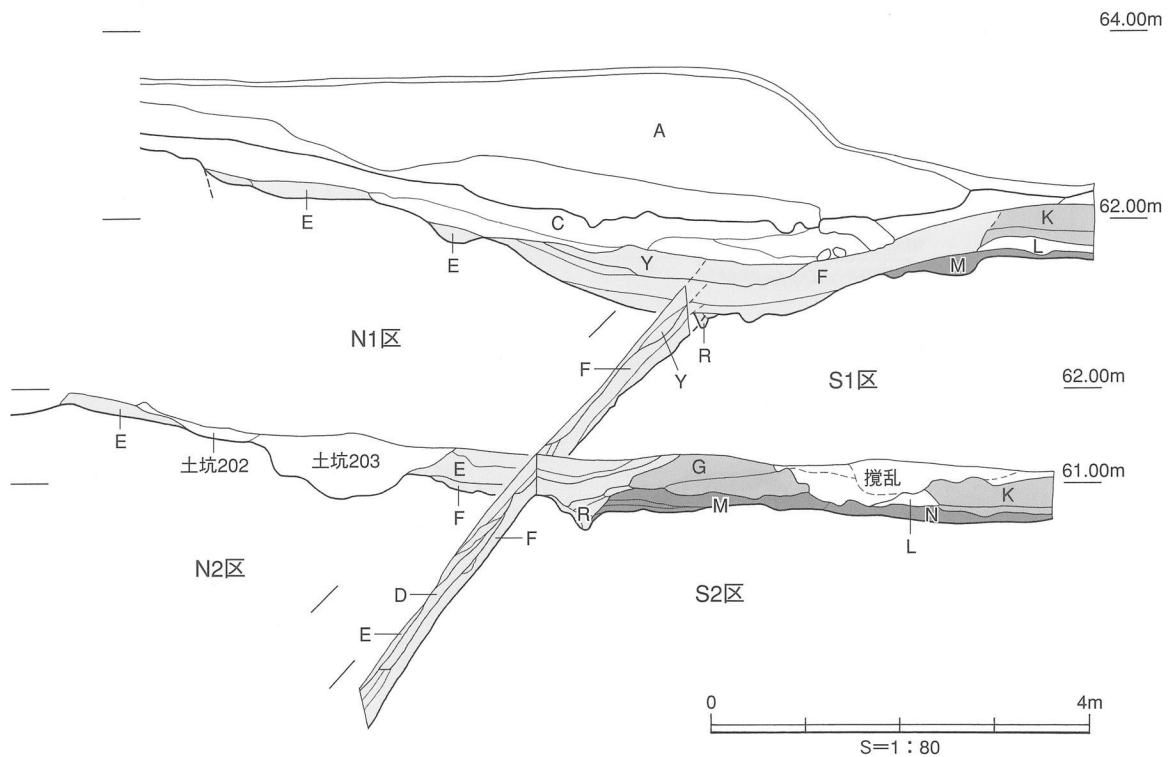
# 第4章 出土遺物の概要

## 第1節 汁谷1号窯灰原出土遺物



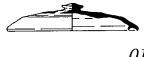
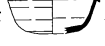






### 1. 遺物の出土層位と器種分類

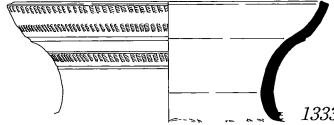
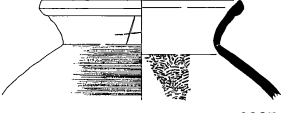
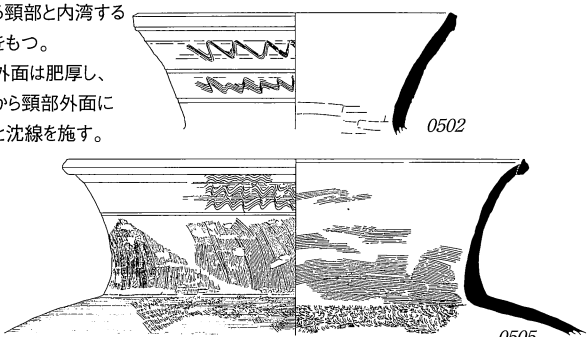
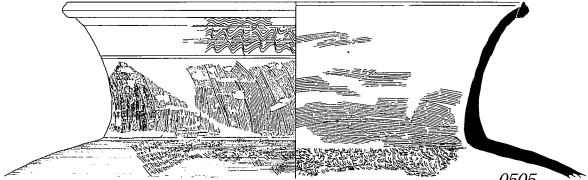

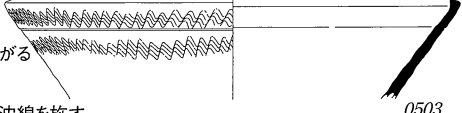
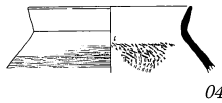
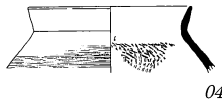
#### 遺物の取り上げと整理の方法

土層観察用の縦横断畦を区境として、北側に2区(N1区・N2区)、南側に2区(S1区・S2区)の4区に分割して灰層の掘り下げをおこなった。灰原の調査にあたっては、土層断面観察用の畦を設定し、適宜、土層観察のためのサブトレンチを併用して掘り下げを行った。しかしながら、土層識別については、灰原という性格上、土層断面では可能であっても、平面プランではよほど明瞭な色調や質の違いがない限り、かなり困難である。また、当該灰原は2基の灰原が重なっており、新しく構築された窯(1号A窯)の前庭部が古窯(1号B窯)の灰原を削平して作られている。このために、各区の灰層の堆積が一様ではなく、2つの窯の灰層が重なりあった複雑な堆積状況を示しており、層ごとの遺物の取り上げは、土層断面観察用畦以外では行なうことができなかった。従って、遺物整理にあたっては、土層断面観察用畦から採取した遺物を中心に基本分類を行なったうえ、これを基にして土層図と比較照合しながら全体の遺物整理を進め、遺物図については土層断面観察畦出土遺物を中心に掲載した。但し、2基の窯跡の灰原の重複による新旧の遺物の混入混在の問題は避けられず、明らかに混入と思われる遺物については割愛するか、掲載点数を最小限に留めたが、混入かどうか判断に迷う遺物については可能な限り実測掲載した。なお、遺物の出土に関する個々の問題については各層出土遺物の項で取り上げる。



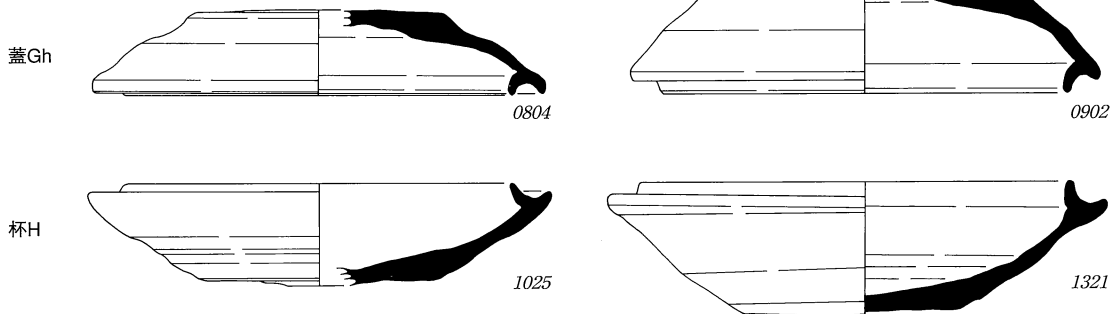
挿図26 1号窯灰原地区割と土層断面図

蓋		杯	
蓋B	かえりのない蓋。  0104	杯B	高台をもつ杯。  0116
蓋Gb	かえりのある蓋で、口径が大きい。 杯Bと組み合わせる。  0111	杯Gg	無台の杯。底部には基本的にヘラ削りを施すがナデのみのももある。 蓋Ggと組み合わせる。いわゆる金属写し。  0818  0913
蓋Gg	かえりのある蓋で、口径が小さい。 基本的には杯Ggと組み合わせるが、杯Ghとも組み合わせる。  0304	杯Gh	蓋Hの天地を逆転させた形態。 蓋Ghと組み合わせる。または無蓋。  0124  0336
無蓋		杯H	立ち上がりのある杯身。 蓋Hと組み合わせる。  1030
蓋H	杯Hの蓋。  1018		

甕A1	外反する頸部と内湾する口縁部をもつ。 外面に列点文を施す。  1333	甕B	 0925
甕A2	外反する頸部と内湾する口縁部をもつ。 口縁部外面は肥厚し、口縁部から頸部外面に波状文と沈線を施す。  0502  0505	甕C	短く外反する頸部をもち、口縁部外面は丸くおさめる。  0426
甕A3	直線的に立ち上がる口頸部をもつ。 外面に波状文と沈線を施す。  0503	甕D	直立する口縁を有する。  0425
		甕D	「く」の字状に屈曲する口縁をもつ。 肩の張りが無い。  0425

S = 1 : 8

蓋Ghと杯Hの形態差



S = 1 : 2

挿図27 杯・蓋・甕分類図

## 2. 上部灰層（1号A窯灰原）出土遺物

### Y・D・E・F層出土遺物

Y・D・E・F層は上部灰層、すなわち1号A窯の灰原形成層である。出土遺物はいずれも杯Bを主体とした遺物相を有しており、基本的な器種構成も一致しているので、ここでは全体をまとめて1号A窯上部灰層の遺物群として概要を述べる。

Y層は窯体内に残されていた遺物や窯壁片が窯体架構土とともに前庭部に堆積した層で、黄褐色土中に窯壁片を含んでおり、下層の灰層と明確に区分できる。最終操業時の可能性の高い遺物群であり、出土遺物を第1図、第2図に掲載している。E層とF層は前庭部に堆積した灰層で、S区とN区にまたがる。S区ではE層とF層はG・K・M・N層と切り合い、または、その上に重なるという複雑な堆積状態であるのに対して、N区ではE・Fの上部灰層のみで他層の存在はない。従って、E層とF層の遺物は他層と混在の少ないN区から抽出し、実測図を作成した。E層とF層の遺物図は第3図から第5図まで示したが、発掘時においては、土層観察用畦以外はE層とF層の明確な区分は不可能であり、両層の遺物を一括して取り上げている。

なお、1号A窯の前庭部が1号B窯の灰原を削平して作られているために、1号B窯の遺物が1号A窯の灰層中に混入している。1号B窯の器種構成は杯Hを中心としている。杯Hについては杯Bの出現後にも引き続き生産されている生産地域もあるので、1号A窯での生産の可能性も検討してみたが、1号B窯からの遺物の混入の確率が低いN1区の灰層においては、杯Hの包含点数が極めて少なく、1号A窯の操業時には杯Hの生産は行われていないと判断される。よって、杯B主体の1号A窯の灰層（上部灰層Y・D・E・F層）出土の杯Hについては、1号B窯灰層（中下部灰層G・K・M・N）からの混入遺物とみなし、実測図版での掲載を最少量にとどめている。但し、これ以外の壺・甕類については、どちらの窯の時期に帰属するか区別し難いものもあるので、分類のうえ実測可能なものについてできる限り掲載している。

### 蓋B (0101~0104・0301~0303)

かえりを持たない杯Bの蓋の一群である。Y層からは4点、E・F層から3点出土している。このうち、つまみ部分から口縁まで全体が復元できたのは0104と0301である。傘蓋形態のものと平蓋形態のものがある。傘蓋形態のものにはY層0104があり、口径12.0cmを測る。扁平な笠形の天井部に、宝珠形のかえりを付し、頂部はヘラ削りを施す。端部はやや内側にはいる。

平蓋形態のものにはY層0101・0102とE・F層の0301・0302がある。つまみ部分から口縁まで全体が復元できたのは0301で、端正な宝珠形のかえりを付す。焼成時の高温による収縮のために、天井中央部が内側に落ち込んでいる。0302はつまみ部を欠くが、0301と同じく天井中央部が内側に落ち込んでいる。0301・0302ともに口縁部は薄く仕上げられている。また、ともに天井部に別器種が重ね積みされて焼成された痕跡を残す。別器種の径は0301が6.5cm、0302が6.0cm前後であり、痕跡の状況から判断して杯Bと思われる。0103・0303はそれぞれ口径19.2cm、19.7cmと口径が大きく、口縁端部の折り曲げはわずかで、天井部はヘラ削りの最終調整はなく、雑な作りである。杯Bの蓋ではない可能性もある。

### 蓋Gg (0105・0106・0304~0307)

かえりのある蓋のうち口縁部径が10.0cm前後と小さく、天井部が丸みをもつ一群である。天井部周縁が屈曲するタイプと天井部が丸く傘形をなすタイプおよび天井部がやや扁平な傘形のタイプがある。

天井部周縁が屈曲するタイプには0105・0304～0306があり、天井部周縁が屈曲して口縁部に至り、口縁部は水平に開く。このためにかえりは口縁部よりも下側に出ている。つまみは宝珠形ではあるが、尖頭形をなすのが特徴で、壺蓋の可能性もある。0306の天井の最終調整はナデのみで削り等の調整は認められない。また、0105・0304・0305は天井部に自然釉が厚くかかっているため削り等の最終調整については不明である。

天井部が丸く傘形をなすタイプには0106・0307がある。いずれも天井部周縁の屈曲がなく、傘形の天井部をもつ。天井部にヘラ削りを施し、扁平な宝珠つまみを付す。かえりは下側に突出しない。

#### 蓋Gb (0107～0113a・0308～0321)

かえりのある蓋Gのうち、口縁部径が11.2cm～16.3cmの大きな一群で、杯Bとセットになる蓋である。天井部は扁平な傘形を呈する。内面のかえりは小さく、口縁端部と同じ高さである。つまみは小さな宝珠形のもの(0109・0308・0316など)とやや形の大きい扁平な宝珠つまみをもつもの(0110・0111・0311・0319など)がある。0110は頂部が平らな天井部をもち、内面のかえりは比較的内側に付く。0310はかえりの内側にヘラによる調整跡若しくは掻き取り痕が認められる。天井部外面は比較的にいねいなヘラ削りを施す。また、0112・0318・0309のように歪みによって天井部が内側に陥没し、口縁部が反りあがっているものもある。0113は蓋と杯が融着したもので、蓋Gbとのセット関係が確認できる資料である。遺物写真図版3で示したようにX線撮影によって、高台の存在が判明した。0107・0108および0309は、器壁が薄く、口縁端部とかえり端部の幅が極端に狭いのが特徴で、他の蓋との識別が可能である。このタイプの蓋は土坑205・SK201上層から出土している。

#### 杯B (0113b～0120・0322～0332)

口径10.8cm～16.3cm、器高2.2cm～5.0cmで、大きさは様々である。高台は外側に踏ん張るが、高さはあまり高くない。高台は底部の周縁からはなれた中央部寄りに貼り付けられている。高台内側は貼り付け後の強いナデ、またはヘラ状工具による整形が行われており、このために高台底面の端部が内側に突出するのが特徴である。また、0120の高台は外側に大きく踏ん張り、一見すると壺底部の形状を呈するが、内面の調整等から杯Bと判断できる。

#### 杯Gh (0121～0128・0333～0339)

無台の杯である。口径10.2cm～12.0cm、器高は3.5cm～4.1cmであるが、器高の高い0126(4.4cm)・0128(4.3cm)・0338(5.2cm)がある。底部はヘラ切りのままで調整を行わない。平らな底部から湾曲して立ち上がる。口縁部は強い横ナデにより稜ができていいる。基本的に重ね積みをして焼成されており、0128・0335・0336・0339は複数枚数が融着し、口縁部や体部内外面に重ね焼きの痕跡を残す。

#### 杯Gg (0129・0130・0340～0343)

0129は体部と底部の境が明瞭で体部は直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り後、ヘラまたはナデによってヘラ切り痕を消す。0341・0342は体部中央から直上に立ち上がる。口縁部周囲に降灰がなく蓋を伴って焼成された形跡をもつ。底部はナデのみである。0343は体部が湾曲して立ち上がり、口縁部周囲を外反させ、金属器模倣的な形態を示す。口縁部周囲に降灰がなく、共蓋を伴って焼成された形跡をもつ。調査区南端表土層からの出土で、G K層の遺物の可能性が高い。0340は湾曲する体部と外反する口縁をもち、0343と似た形態を有するが、調整はあまりていねいではない。

#### 椀 (0131)

口径 10.8 cm、器高 9.1 cm、体部上半が直立し、口縁部外面に沈線状の段を有する。体部下半から底部外

面にかけて手持ちのヘラ削りを行う。

#### 円面硯 (0132)

当該層出土破片と旧三原町教育委員会調査A地区出土の破片が接合したものである。外縁径14.4cm、面径10.0cm、脚高8.4cmを測る。陸部と海部との境の堤は設けられていない。脚台上部に1条単位3本の沈線を巡らす。側面に十字の透かしを穿つが、十字の横画部が縦画部よりも短い。透かしの数は4個と推定される。

#### 皿 (0133)

径22.6cm。底部外面は周縁部を除いてロクロ削りを行う。ロクロ削りは中心部まで及ぶ。高台付の皿の可能性もある。

#### 高杯 (0134～0137・0401～0403・0414)

長脚の高杯 (0134・0136) と低脚の高杯 (0137・0401～0403) がある。前者はG K層からの混入品の可能性が高い。0135は台付皿と思われる。0414は椀の脚部の可能性がある。

#### 甗 (0404・0405)

0404・0405はともに自然釉の掛かり具合などよく似るが、別個体である。0404は口縁部を欠く。頸部には1条の沈線を施す。0405は体部中央に円孔を穿ち、中央に列点文を巡らす。

#### 短頸壺 (0201～0203・0207・0407)

いずれも口縁から肩部の破片のみで、全体を知るものはない。0201は肩部から体部までの破片で肩と体部の境に稜をもつ。また、0203は共蓋が融着した破片である。この共蓋は遺物図版4で示したように口径11.6cmのかえりのある蓋である。0207は深い緑色の釉がかかる。算盤形の体部をなし、稜線付近に2条の沈線を施す。

#### 平瓶 (0205・0206・0406・0411)

いずれも口縁端部を丸く納める。0206・0406は頸部に沈線を巡らす。0406は肩部に閉塞円盤の痕跡を残す。0411は体部下半より底部外面全体にロクロ削りを施す。

#### 壺蓋 (0204・0408・0409)

0204は口縁端面が平坦で、天井部外面に降灰がある。天井中央部を欠いており、つまみの有無は不明である。

#### 壺体部他 (0410・0413・0417)

0410は短頸壺と思われ、平底で底部内面に自然釉がある。0417は体部と肩部の境は稜をなす。稜線付近に1条の沈線を巡らし、この沈線を挟んで上下に列点文を巡らす。列点文は上下で向きが異なり、矢羽の形状を呈する。体部下半はヘラ削りを施す。長頸壺の可能性が高い。

#### 不明土器 (0412)

底部が平らで、体部内面が段状になっている。器種ならびに全体の形状については不明である。

#### 蛸壺 (0415・0416)

2個体出土しているが口縁部を欠く。ともにつり手の内面には成形時の引き絞りの痕跡を残す。

#### 鉢 (0418・0419)

体部に1条の沈線を有し、口縁部が内湾する0418と外反する口縁を有する0419がある。

#### 横瓶 (0420)

口縁部の破片で外面を丸く、端部を上方につまみ上げる。このほかに図化はしなかったが、側面の閉

塞側の破片が出土している。

#### 甕A<sub>1</sub> (0209・0501)

長く外反気味に立ち上がる頸部と内湾する口縁部をもつ。0501は口縁部に列点文を巡らす。0209は頸部にやや簡略化した山形の波状文を巡らす。

#### 甕A<sub>2</sub> (0210～0212・0502・0504・0505)

長く外反気味に立ち上がる頸部と内湾する口縁部をもつが、A<sub>1</sub>のように口縁部の内湾は大きくはなく、また、口縁部を板状に肥厚させるのが特徴である。0210は口縁部に列点文と頸部に1条の沈線を巡らし、0211は口縁部に列点文と頸部に3段以上の波状文を巡らす。0502は頸部に2段の波状文と1条単位2本の沈線を巡らす。0504は頸部に2段の波状文と1条単位2本の沈線を巡らす。2段目の波状文帯の下の沈線は明瞭であるが、1段目と2段目の間の沈線は不明瞭である。0212は頸部に4段の波状文と波状文帯の下に1条の沈線を巡らす。0505は口縁部外面を丸く仕上げ、頸部に4段の波状文を巡らす。口縁部の形態は甕B形態であるが、長い頸部に波状文帯を巡らすという特徴からA<sub>2</sub>類に含めた。波状文帯下の頸部外面には縦方向のハケ目調整、内面には横方向のハケ目調整を行う。

#### 甕A<sub>3</sub> (0208・0503)

直線的に立ち上がる頸部をもち、口縁端面は平坦である。0208は1条単位2本の沈線のみであるが、0503は2段の波状文帯と波状文帯の間に1条の沈線が巡らされ、口縁端部が内側に突出する。

#### 甕B (0214～0216・0421～0424・0427)

短く外反する頸部をもつ。0214・0216・0421・0422の口縁部は肥厚し、内面側の強いナデにより、端部は内側または上方に突出する。0214・0421・0422の肩部は叩きの後に丁寧な掻き目調整が施されている。0215の口縁部は丸くおさめられている。0423は口縁端面が平坦で、端部は内側に突出する。0424は口縁端部が平坦である。

#### 甕C (0213・0426)

直立する口縁部をもつ。0213の口縁端部は丸いが、0426の口縁端面は平坦で、端部は内側に突出する。体部外面は掻き目調整が施されている。

#### 甕D (0425)

「く」の字状に屈曲する口縁をもち、肩の張りはない。外面にカキ目調整を行なう。

#### その他 (0217～0224・0506～0511)

G K層からの混入品と考えられる。蓋Gg (0506)、蓋Gh (0217～0220・0507～0511)、杯H (0221～0224)がある。蓋Gg (0506)は蓋Ghと似た形態をもつが、天井部の頂部のヘラ削りを行い、つまみを付す(欠失)。蓋Gh (0217～0220・0507～0511)は外面全体に釉がかかり、天井部はヘラ切り不調整である。0220・0511はともに器壁が厚く粗雑な作りである。0506は頂部にヘラ削りを施す。中心部を欠くが、つまみの剥落痕の一部が残る。かえりは口縁部より下に突出する。

#### R層出土遺物 (0512～0518)

前庭部に設けられた排水溝の埋土からの出土遺物である。蓋Gb (0512～0514)はいずれも細片で全体を知るものはないが、0513は天井部にヘラ削りが施されている。杯0515は体部が直線的に立ち上がるので、高台をもつ杯Bの可能性が高い。また、杯0516は体部が直線的に立ち上がり、底部外面にヘラ削りが施されているので、杯Ggに分類しておく。杯H (0517・0518)はG K層またはMN層からの混入品であろう。

### 3. 下部灰層（1号B窯灰原）出土遺物

G K層ではいわゆる杯Hの身と蓋のセットの天地を逆にして焼成している。この例は九州北部の諸窯例がよく知られている。近年では北陸地方でもその存在が指摘されているが、畿内周辺ではほとんど報告例を聞かない。生産の段階から上下の転倒を意識していたとみるか、焼成時の単なる置き方の逆転のみの現象と見なして従来通りの杯Hの形態とみなすか見解の分かれるところであるが、本稿では、九州北部の諸窯例の通り、杯Hの身形態を蓋に、蓋形態を身にして実測図を作成している。その根拠は、(1) 杯H身とすれば立ち上がりの高さが口縁よりも低いのが圧倒的に多く、形態は明らかに蓋のかえりを示している（挿図27参照）。また、0605・0611など杯H身としては考え難い形態のものが存在する。このほか、口縁端部を内側に巻き込んでいる点など明らかにMN層の杯Hの形態とは異なる。(2) かえりのある蓋が一定量存在し、蓋Hが逆転した形態の無台の杯（杯Gh）が多数存在している。無台の杯Ghには重ね焼きの痕跡を示すものが多数含まれており、明らかに従前の杯Hの杯蓋のセット関係が崩れているという点が上げられる。このほかにはMN層の杯Hの杯蓋が通常の状態の状態で焼成されているのに対して、杯Hの杯蓋セットを逆転して焼成しているのがG層・K層の特徴であることを図において区別しておきたいという意図もある。

なお、杯H蓋と無台の杯身Ghの区別については、重ね焼きの痕跡の有無以外に、天井部外面の降灰の有無を目安としている。すなわち天井部外面の降灰の有無が認められるものを杯H蓋としているが、区別が難しいものもあり、杯H蓋を無台の杯身にあるいはその逆に行っている場合もあり得る。

### F K層出土遺物

S 1・S 2区については、2つの窯の灰層が重なりあった複雑な堆積状況を示しており、上層・中層・下層および最下層に分けて遺物の取り上げを行なったが、F層とG層及びK層との分別はできなかったので、一括して取り上げる。但し、器種から明らかにF層に帰属する遺物については、F層に掲載した。蓋Gg (0601~0604)

天井部はヘラ削りを施し、宝珠形の小さなつまみを載せる。

蓋Gh・杯Gh (0605~0616・0623)

外面全体に緑色の自然釉がかかる。かえりは口縁部より突出しない。口縁端部は内側に巻き込む。0605は天井部ヘラ切りのちナデ仕上げで、かえりは痕跡程度である。0611はかえりとしても痕跡程度で、明らかに杯Hではありえない。杯Ghの0623は杯身同士重ね合わせている。

杯H (0617~0622)

立ち上がりは低く、底部ヘラ切り不調整。0619と0621は黒灰色の色調で、MN層のものであろう。0617・0618は灰白色で、口縁端部を内側に巻き込む。外面に釉はないが、蓋Ghの可能性はある。

杯Gg (0624)

口縁部外反。体部と底部の境にヘラ削りを施す。底部外面はヘラ切りの後ナデ調整を行う。体部から底部外面にかけて火襷の痕を残す。

椀 (0625・0626)

体部上半に沈線、底部外面ヘラ削りを施す。

台付皿・台付椀・高杯 (0627~0634)

0628~0630はいずれも上部を欠くが、台付の椀になると思われる。0630は幅2.8cmの透かしを有するが、



その数は細片のため、不明である。0631は低脚の高杯、0632～0634は長脚の高杯である。0632は幅の狭い縦長の透かしを有するが、透かしを有する高杯は本窯では唯一である。

その他 (0635～0639・0701～0719)

平瓶 (0635)、横瓶 (0636・0637)、甗 (0638)、鉢 (0639)、壺 (0701～0708)、甕A<sub>1</sub> (0715・0716)、甕A<sub>2</sub> (0717)、甕B (0709～0714・0718)、甕D (0719) がある。

## G層 (土層観察畦) 出土遺物

蓋Gg (0801)

1点出土している。三角錐形の宝珠つまみを付す。かえりは口縁部よりも下に下がる。天井部の調整は降灰により見えない。天井部の上には別器種が付着している。

蓋Gh (0802～0806)

杯Hの天地を逆転した形態である。天井部はヘラ切り不調整で、緑色の自然釉がかかる。口縁端部を内側に巻き込む。0802・0806は杯の口縁の破片が付着し、0804は天井部に窯壁片が落下付着する。

蓋H (0807)・杯H (0808～0810)

蓋Hは天井部ヘラ切り不調整。杯Hは底部ヘラ切り不調整で、口縁端部の内側への巻き込みはない。蓋H・杯Hともに黒灰色で、灰白色の蓋Ghとは色調が異なる。MN層からの混入品の可能性が高い。

杯Gh (0811～0814)

いずれもヘラ切り不調整で底部は平坦である。0812は体部がやや丸みをもち、口縁部は直上方向に立ちあがる。0814の底部には窯詰め時の砂混じりの粘土塊が付着する。

杯Gg (0818)・椀 (0820)

0818の底部外面はヘラ切り後ナデまたはヘラ状工具で調整しており、口縁部には蓋のかえりの破片が付着している。0820は体部中央に稜をもち、稜線付近にごく浅い沈線を巡らす。

甗 (0815～0817)

0817は体部下半をヘラ削りし、中央の稜線部に沈線が退化したような段をもつ。0815・0816は口縁部と頸部の境に浅い沈線状の段をもつ。

高杯 (0819)・壺蓋 (0821)

壺蓋 (0821) の天井部外面はヘラ切りのちナデを施す。外面全体に降灰がある。

## K層 (土層観察畦) 出土遺物

蓋Gg (0822～0824)

0822は三角錐形の宝珠つまみを付す。外面は自然釉により、天井部の調整は降灰により見えない。0823・0824はともに口縁部の破片である。0823は天井部にヘラ削りの痕跡がかすかにみえる。内面のかえりはあまり下に突出しない。0824は降灰などにより天井部外面の調整は見えない。かえりは下方に突出し、口縁とかえりの間には杯の口縁部の付着痕がある。

蓋Gh (0825・0826)

0825は外面に自然釉がかかり、口縁部は下方に突出する。0826は外面に緑色の自然釉がかかる。口縁部とかえりの間は狭く、杯の破片が付着する。かえりは突出せず、口縁部より低い。

蓋H (0827・0828)

0827は外面全体に降灰があり、口縁端部は内側に屈曲する。0828は外面全体に淡い緑色の自然釉がかかり、自然釉により口縁部と杯口の受部が融着したために杯口側の受部の剥離痕跡が付着している。

#### 杯H (0829~0831)

0829は受部の幅が狭く口縁端部は丸く上方に立ち上がる。受部に自然釉がかかるので杯口としたが、外面に自然釉が掛かるので蓋Ghになるかもしれない。0830と0831は底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。底部はヘラ切り不調整で、ともに暗灰色を呈しており、MN層からの混入品の可能性が高い。

#### 杯Gh (0832~0837)

底部はヘラ切り不調整で、体部との境が明瞭である。0832・0834・0835のように口縁部をわずかに内側に曲げるものと0833のように曲げないものがある。0832は口縁部に蓋Ghの破片が付着する。蓋Ghのかえりは口縁部より下に突出する。0834も口縁端部に降灰がないので蓋Ghを伴っていたものと思われる。0835は3個体分が融着し、0837は底部外面に窯詰め時の粘土塊が付着している。

#### その他 (0838~0843)

平瓶 (0838)、甗 (0839)、高杯 (0840)、長頸壺 (0841)、短頸壺 (0842)、甕B (0843) がある。

## K層出土遺物

#### 蓋Gh (0901a~0904)

口縁部径は11.8cm~12.4cmである。0901は蓋Ghと杯Ghが完全に融着しており、X線撮影によって図面を起こした。かえりは口縁部より下に突出している。天井部には明るい緑色の自然釉がかかり、甕の破片が融着している。杯の体部は底部から直線的に立ち上がり、中位くらいで屈曲し直上方向に立ち上がる。体部側面には窯詰め時の砂混じりの粘土塊が付着する。0902・0904ともに天井部外面全体に明るい色の自然釉がかかる。0902は天井部が平らで、かえりは口縁部より下に突出するが、0904は天井部が丸みを持ち、かえりは口縁部より突出しない。0903は蓋Ghの上に杯Ghを重ね焼成している。外面には明るい緑色の自然釉がかかる。かえりは口縁部より下に突出している。

#### 杯Gh (0901b・0905~0912)

無台の杯である。底部はヘラ切り不調整である。口径10.5cm~11.8cm、器高は2.8cm~3.2cmであるが、0909のように器高の高いもの(5.1cm)もある。底部は平らで、体部との境が明瞭である。底径が広く、体部の中程から直上方向に立ち上がるもの(0905・0907)とやや湾曲しながら立ち上がるもの(0909・0911)がある。0910は重ね積みの3個体分が融着し、また、0912は底部外面に火襷痕があるので重ね焼きを行っていることがわかる。0907は底部外面に窯詰め時の粘土塊が付着している。

#### 杯Gg (0913)

直立する体部をもつ。底部はヘラ切り不調整。口縁端面から内面全体に自然釉がかかるが、外面には釉はまったくないので、重ね積みをして焼成されたことがわかる。

#### 蓋H (0914~0916)

天井部外面はヘラ切り不調整で、0914・0915の天井部は平坦であるが、0916は丸みをもつ。0915の天井部は自然釉が掛かり、口縁部に流下する。0914は暗灰色で、MN層からの混入品の可能性がある。

#### 杯H (0917・0918)

ともに底部はヘラ切り不調整。0917は受部径12.2cm、全体に扁平で、0918は受部径12.6cm、体部は平

らな底部から直線的に立ち上がる。

#### 蓋 (0919)

天井部頂部外面のヘラ削りを行なう。頂部周縁に沈線を巡らす。口縁端部を内側に屈曲させる。

#### 鉢 (0920)

口縁部はわずかに外反し、体部は湾曲する。体部中央に沈線状の段をもつ。

#### 提瓶 (0921)

口縁部外面は丸く、端部を上方につまみ上げる。短い頸部をもち、肩部内面はヘラ削りによって仕上げ、叩きの痕は認められない。形態から一応提瓶としたが、時代的にみて別の器形になるかもしれない。

#### 壺蓋 (0922)・短頸壺 (0923)

0922は天井部外面ヘラ削りを施す。つまみは中心部がくぼみ、周縁部が高い。0923は肩部に共蓋の痕跡を残す。

#### 甕A (0928・0924)

A<sub>1</sub>(0928)とA<sub>2</sub>(0924)がある。A<sub>1</sub>(0928)は長く外反気味に立ち上がる頸部と内湾する口縁部をもつ。頸部に沈線とその間に2段の波状文を巡らす。A<sub>2</sub>(0924)は口縁部は板状に肥厚し、3本の沈線の間に2段の波状文を施す。

#### 甕B (0925～0927)

0925は口縁部外面が丸く肥厚し、頸部にはヘラ記号が刻まれている。体部外面に掻き目調整を施す。0927は口縁部外面が肥厚するが、端部は内面の強いナデにより端部が内側に突出する。0925・0927ともに緑色の自然釉がかかる。

### L層出土遺物 (1001～1013)

蓋G (1001)、蓋Gh (1002)、杯Gh (1003)、杯Gg (1004)、蓋H (1005)、杯H (1006～1008) 壺底部 (1009)、甕 (1010)、高杯 (1011)、短頸壺 (1012)、甕A<sub>2</sub> (1013) がある。

1003は体部外面から底部内面にかけて緑色の自然釉が掛かる。1004は体部と底部の境が明瞭で、口縁部はわずかに外反する。杯H (1006～1008)は平らな底部から直線的に立ち上がる体部を有し、底部はヘラ切り不調整である。1009は底部外面をヘラ削りによって仕上げる。1013は口縁部が肥厚し、口縁部外面に1段、頸部に2段の波状文を巡らす。

### M・N層出土遺物

#### 蓋H (1014～1020)

天井部は平坦で、ヘラ切り後ナデまたは不調整のままである。口縁端部は短く内側に屈曲する。暗灰色を呈する。口径は9.6cm～11.8cmである。

#### 杯H (1021～1033)

受部径10.9cm～13.8cmである。大半は暗灰色を呈し、底部と体部の境は明瞭で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。底部はヘラ切り不調整である。このうち、1023・1027・1032の体部外面は緑色の自然釉がかかり、1030と1033は灰白色の色調を示す。1021は外面に緑色の自然釉が掛かり、杯Hの天地を逆にして焼成している。蓋Ghとして扱うべきかもしれないが、MN層では杯Hとしておく。但し図では焼成時の置き方の通り、天地を逆にして掲載している。1027も天地逆の焼成の可能性もある。また、

1024は灰白色で受部端部を内側に巻き込んでおり、G K層の蓋Gh的な様相をもつ。

#### 杯Gg (1034)

底部外面ヘラ切り後、ヘラ削りを施す。底部外面には火襌痕が残る。口縁端面は降灰がなく、蓋を伴うものと思われる。調査では出土していないが、かえりをもつ蓋が被されていた可能性が高い。

#### 椀 (1035)

口縁部は体部下位からまっすぐ立ち上がり、稜線付近に沈線を施す。底部は手持ちのヘラ削りで整形している。

#### その他 (1036~1048)

平瓶 (1039・1040)、台脚 (1041)、短頸壺 (1036・1045)、椀 (1037)、高杯 (1042~1044)、甕 (1038)、甕B (1046~1048) がある。甕Bは口縁部外面丸く、端部突出する。

## 4. 土坑205出土遺物

#### 蓋Gg (1101)・蓋Gb (1102~1105)

蓋Gb (1102~1105) は天井部は扁平な傘形を呈する。天井部外面は比較的ていねいなヘラ削りを施す。1102は天井部外面に緑色の自然釉がかかる。口縁端部は内側に巻き込まれている。1103も天井部外面に緑色の自然釉がかかるが、かえりはまっすぐ下に向く。器壁は厚い。1105は器壁が薄く、受部の幅が極端に狭いのが特徴で、Y層0107などと同じタイプの蓋である。

#### 杯B (1106)

高台が脱落した痕跡を残しており、杯Bと判断される。

#### 杯Gh (1107~1114)

無台の杯である。底部はヘラ切りのままで調整を行わない。平らな底部をもつものと底径が小さく、蓋Hを逆転させた形態のものがある。基本的に重ね積みをして焼成されており、1114は3個体分が融着している。また、1112は杯身の口縁同士が融着している。

#### 杯Gg (1115~1118)

1115~1117は杯Ghと同じ無台の杯であるが、底径が広く、体部が直立する。底部のヘラ切り跡をナデ消すが、あまりていねいではない。1118はやや深手の杯で、底部外面にはヘラ削りの痕が残る。

#### 壺 (1119~1122)

1119は徳利形の肩の張らない形状で、外面に搔き目を施す。1121は肩部に2条、体部中央に1条の沈線を施す。底部は削り調整を行なう。1120は壺底部で、2号窯体の流土出土破片と接合した。1122は底部内面に自然釉が落下している。底部には外面手持ちのヘラ削り、肩部は搔き目調整を施す。底部に砂混じりの粘土塊が付着している。

#### 甕 (1126~1129)

1129は体部上半部が内面側に陥没している。口縁部を欠く。底部外面に杯Ghが付着しており、焼台として利用されている。外面に搔き目調整を施す。1128は酸化焰焼成のために赤褐色を呈する。ほぼ1個体に近い破片があるが、全体を復元するには至らなかった。口縁部を丸く納める。

#### その他 (1123~1125)

横瓶 (1123)、高杯 (1124)、壺脚台 (1125) が出土している。1125は方形透かしの痕跡がわずかに残るが、大きさ・数については細片のため不明である。

## 第2節 汁谷2号窯出土遺物

### 舟底状ピット出土遺物

蓋Gb (1201・1202・1220・1221)

ともに口縁端部の小片である。かえりはいずれも小さく短い。特に1201のかえりは小さく、痕跡程度のものである。1220の天井部周縁は段をもつ。

蓋G (1218・1219)

つまみは算盤玉形の宝珠を呈し、天井部はヘラ削りを施す。

杯 (1203)

口径12.7cm。体部下半はヘラ削り調整を行う。底部外面は輪高台が脱落したと思われる痕跡が残されており、杯Bの可能性が高い。

杯Gg (1204・1223)

酸化焰焼成により赤褐色を呈し、土師質の焼結状態である。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。底部は切り離し後、ロクロヘラ削りを行う。1223の底部はヘラ切り後、ナデ調整が施されている。底部と体部の境は丸く、体部は直立し口縁部をわずかに外反させる。

杯Gh (1205~1209・1224・1225)

1205は酸化焰焼成により黄褐色を呈し、土師質の焼結状態である。体部は直線的に斜め上方に立ち上がるが、摩滅が著しく調整不明である。1207・1208・1209は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに内側に屈曲する。器高が高く、底部径は小さい。1208は底部ヘラ切り不調整で、器壁も厚く作りは粗雑である。1207は焼け歪みが大きく、口径等はやや不正確である。1206・1209は底部ヘラ切り後、ナデ調整を行なう。1206は体部が直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部をわずかに屈曲させる。1224・1225はともに口縁部を欠く。ヘラ切り後ナデ調整を行う。1225は内外面に自然釉がかかる。

椀 (1210・1211)

1210は底部が平底で、ヘラ削りを施す。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁部はわずかに「く」の字状に屈曲する。1211は口径14.8cm、底部はヘラ削りを施す。体部は直上方向に立ち上がる。

高杯 (1212・1226)

杯部を欠く。脚はハの字に開き、脚端部も外側に開く。

平瓶 (1214・1215)

1214は平瓶の口縁の破片で、1215は平瓶もしくは短頸壺の体部片である。

甕B・体部片 (1213・1216・1217・1227~1230)

1213の口縁部外面は丸く納め、内面はヘラ状工具または強いナデによって仕上げるために口縁端部が尖る。1216の当て具痕はG K層出土甕、1217の当て具痕はG K層およびE F層出土甕、1219の当て具痕はE F層およびY層出土甕の当て具痕とそれぞれ一致する。(第6章第3節参照)

### 流土層出土遺物 (1222・1231~1236)

窯体廃棄後に流入した土層出土遺物で、蓋G (1231)、蓋H (1232)、杯Gg (1233)、高杯 (1234)、甕A<sub>3</sub> (1235)、甕B (1236)がある。このほかに杯Hの細片も出土しているが、蓋H (1232)ともども色調等はMN層の遺物の特徴を示すものであり、2号窯で焼成された製品以外の遺物が混入している。

## 第3節 汁谷遺跡出土遺物

### 1. 歴史時代の遺構出土遺物

#### SK201出土遺物

##### 【床面出土遺物】

##### 蓋H (1301~1312)

ほとんどが完形品(1309のみ破片)であるが、その大半が焼け歪んでいる。変形が少なくほぼ本来の形をとどめているものは、1301・1304・1311くらいで、口径11.1cm~12.2cmを測る。他は対面する2方向の口縁が内側に収縮し、口縁部全体が楕円形状に変形しているため、計測の口径は正確を期し難い。頂部は平らで頂部径は6cm前後である。天井部はヘラ切り後、軽くナデを行う程度で、ヘラ削りの調整を行わない。形態には次の3つのタイプがある。1つ目は口縁端部を短く内側に傾けるもので、1301~1303がある。2つ目は天井部と口縁部の境に稜をもつもので、口縁部は稜線部からほぼまっすぐに下に向く。1304~1307が該当する。3つ目は天井部と口縁部の境が不明瞭で、口縁部が外に開く一群である。1308~1312が該当する。

##### 杯H (1313~1323)

蓋同様ほとんどが完形品であるが、その大半が焼け歪んでいる。変形が少なくほぼ本来の形をとどめているものは、1313~1317くらいで、口径11.1cm~12.2cmを測る。他は対面する2方向の口縁が内側に収縮し、口縁部全体が楕円形状に変形しているため、計測の口径は正確を期し難い。底部は平らで底部径は6cm前後である。天井部はヘラ切り後、軽くナデを行う程度で、ヘラ削りの調整を行わない。

形態には2つのタイプがある。1つは立ち上がりが低く、受部よりもやや高いか低い一群で、1313・1314・1322が該当する。2つ目は立ち上がりの高さが受部より高いもの。1315~1321・1323が該当する。

##### 杯Gg (1324)

口径11.0cm、器高4.4cm。体部は直上方向にわずかに内傾して立ち上がる。口縁部外面に重ね焼きの痕跡を残す。底部ヘラ削りを施す。

##### 椀 (1325~1327)

杯Gより深さのある器形である。体部は底部境から湾曲しながら立ち上がり、中央または中央よりやや下がった位置から直上方向に立ち上がる。底部ヘラ削りを施す。中央の稜線付近に沈線を巡らす。1325は2条、1326は稜線を挟んで上下に2条、1327は1条の沈線をそれぞれ巡らす。

##### 有蓋高杯 (1328~1330)

3個体出土している。杯部の受部径は13.2cm~14.2cmで、脚柱部に2条の沈線を巡らす。1329は脚部端部、1330は口縁部を欠く。1328は器高12.9cmを測る。

##### 壺 (1331・1332)

1331は短頸壺の口縁であるが、1332と同一個体の可能性がある。底部はヘラ削り調整を施す。

##### 甕A<sub>1</sub> (1333)

長く伸びる頸部に内湾する口縁部を有する。頸部と口縁部の境には沈線状の段を有する。口縁端部は平坦で、内側にわずかに突出する。頸部には2本の沈線に挟まれた列点文、口縁部外面に2段の列点文を施す。

## 【上層出土遺物】

SK201の埋没後にできた浅い凹地に埋積した遺物群である。

### 蓋Gb (1401~1405)

内面にかえりを有する。かえり内面に整形時の工具跡を残す。天井部はヘラ削りを施し、宝珠つまみを付す。1405は天井部のふくらみのない平蓋形で、かえりはきわめて短く痕跡程度である。1404は天井部に杯Ghが付着し、三角錐形の宝珠つまみを付す。

### 蓋Gg (1406)

0107と同じタイプの蓋で器壁が薄く、受部の幅が極端に狭いのが特徴である。

### 杯Gh (1407・1408)

底部が平らで、ヘラ切り後ナデ調整を行なう。口縁部周辺を強くナデて口縁部を屈曲させる。1408は底部が平らで、体部は湾曲して立ち上がり、口縁部を外反させる。底部はヘラ切り後、ヘラでナデ調整を行なう。内面にわずかに自然釉がかかる。焼成・色調から見て下層の遺物の可能性もある。

### 杯B (1409)

口縁部を欠く。高台は外側に踏ん張り、Y E F層の杯Bに見られるように高台端部が内側へ突出する形態ではない。当該窯の杯Bの高台としては数の少ない形態である。

### 壺 (1410~1412)

1410は上半部を欠く。底部外面はロクロ削りを施す。底部内面には自然釉が溜まる。短頸壺であろう。1411は底部手持ちのヘラ削りを施し、稜線部に1条の沈線を巡らす。1412は短頸壺で完形品である。体部下半ヘラ削り。体部上位の稜付近に1条の沈線を巡らす。

### 甕 (1413~1415)

1413は肩部に凹線状の段が見えるが、緑色に発色した自然釉が掛かり、沈線か成形・調整に伴う段か不明である。

### その他 (1416~1418)

低脚の高杯 (1417・1418)、壺蓋 (1416) がある。上層の遺物群と下層の遺物群が重なる箇所からの出土で、どちらの層に帰属するかは不明であるが、一応上層に含めておく。

## SH201出土遺物

### 【暗褐色土層出土遺物】

住居跡の埋土は基本的に2層に分かれ、周壁部には地山と極めて類似した黄色系の灰黄シルト質細砂(第2層・第9層)が、内側には黄灰色細砂質シルト(第1層)が堆積している。このうち内側の暗褐色土層は住居廃棄後の流入土と考えられるが、発掘時には黄色系の2・9層と区別せずに遺物を取り上げたために、住居に伴う遺物と流入土の遺物が区別できなくなっている。

### 蓋Gg (1419)

つまみを欠く。天井部ヘラ削りを施す。内面のかえりはわずかに突出するのみである。

### 蓋H (1420)

天井部はヘラ切り不調整で、口縁部を小さく曲げる。

### 杯H (1421・1422)

1421は底部外面が平らで、ヘラ切り不調整である。底部には焼成時の亀裂痕があり、焼成不良品であ

る。

#### 平瓶 (1423)

小片である。稜線部に2条の沈線、肩部に波状文とヘラ記号が刻まれている。

#### 土師器甕 (1424・1425)

口縁部が「く」の字形に屈曲する甕である。破片がまとまって出土しているが、摩滅が著しく一部しか復元できなかった。住居に伴うものであろう。

### 【周溝出土遺物】

住居跡の周溝から出土した遺物群で、住居使用時の遺物である。

#### 高杯 (1426)

焼成が甘く灰白色を呈する。短い脚柱部から水平に開く脚端部を有する。杯部口縁端部は短く屈曲する。

#### 甕B (1428)

口縁部は丸く仕上げる。焼成は甘く、酸化焰焼成により、赤褐色を呈する。

#### 甕 (1427)

口縁部を欠く。焼成甘く灰白色を呈す。外面は叩きの後、板状工具で整形し、内面は青海波のあて具跡を残す。K層出土甕の当て具痕と一致した。(第6章第3節参照)

### SK206・210・211出土遺物 (1501~1509)

比較的まとまった量が出土しているのはSK206で、蓋Bb (1501)、杯Gg (1502)、杯Gh (1503)、杯B (1504)、甕 (1505・1506)、高杯 (1507) が出土している。1502は底部ヘラ切り後、ナデ調整を行なう。SK210出土の蓋Bb (1508) はほぼ完形である。SK211出土杯Gg (1509) もほぼ完形で、体部は直立し底部は底部ヘラ切り後、ナデ調整を行なう。

### SD205・206・208・213出土遺物 (1510~1524)

各溝とも杯Hなど古い段階の遺物も出土しているが、杯Bなど新しい段階の遺物もそれぞれ包含している。

### 包含層出土遺物 (1525~1528)

蓋 (1525)・すり鉢 (1526) などが出土している。

## 2. 弥生時代の遺構出土遺物

### 【Po201出土遺物】

#### 甕 (1601)

「く」の字に外反する頸部をもつが、口縁部を欠く。体部外面は叩き後にハケ調整を施す。弥生後期のものであろう。



## 【土坑205出土遺物】

### 甕 (1602)

1号窯関連遺構の土坑205の埋土中から出土したものである。底部片のみで全体は不明である。胎土に砂粒を多く含む。後期のものであろう。

## 【SD209出土遺物】

### 土器

弥生中期の土器群である。1603・1605・1608は高杯で、このうち1603は屈曲気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端面は平坦で、外面に2条の凹線を巡らす。小片のため口径は正確を期し難いので、有段の広口壺になる可能性もある。1604は裾部に2条の凹線を巡らす。器台の脚であろう。1606はゆるやかに外反しながら上方に伸びる頸部をもつ壺である。頸部には2条の凹線を巡らす。口縁部の端面は平坦で、端部は内側に肥厚する。頸部外面にハケ目の調整痕、口縁部内面に板状工具による調整痕が認められる。1607は台付鉢もしくは台付無頸壺の脚部で、端部付近に凹線を2条施し、多数の小円孔を穿つ。外面は磨き、内面は削り調整を施す。1609は「く」の字に外反する頸部をもつ甕である。端部を少し誇張させる。摩滅のため調整は不明である。このほか、1610～1613の壺または甕の底部が出土している。このうち、1610は大型の甕で、内面に煤が付着する。

### 石器

弥生時代中期の流路であるSD209から出土した石器は、すべてサヌカイト製の小型剥片石器類で、石鏃、石錐、削器、楔形石器がある。

S1は有茎式石鏃である。裏面の一部を除いてほぼ全面に調整剥離が及んでおり整った形態に仕上げられている。基部～体部にかけてはやや厚みがあるが、先端部は薄く鋭利である。長さは3cmを越えるが重量は1.6gとやや軽い。

S2とS3は石錐である。S2は柳葉形で細身の凸基式石鏃とも考えられるが、基部に比べ先端部が厚く仕上げられていることから石錐とした。錐部の摩耗は認められない。S3は厚手の剥片の折れを利用し、粗雑な調整剥離で錐部を作出している。

S4は削器である。縦折れした横長剥片の末端に小剥離を連続させ、弧状の刃部としている。

S5とS6は楔形石器である。S5は上下左右に各一对、S6は上下一対の作用部がある。ともに折れや階段状剥離が顕著で、S5では折れ面からの加撃が行われている。

これらのサヌカイト製石器は産地分析を行っていないが、肉眼で見る限り金山産の可能性が高いと考えられる。

# 第5章 自然科学分析

## 第1節 汁谷遺跡で検出された地震の痕跡について

産業技術総合研究所 主任研究員 寒川 旭

### 1. 汁谷遺跡の地震痕跡

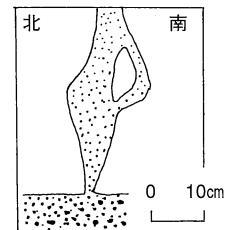
汁谷遺跡発掘調査において、小規模ながら地震が原因と考えられる痕跡が、住居跡（SH201）の東端で検出された（挿図21参照）。挿図28のように、高さ35cmで中央部が少し広がるような亀裂（最大幅9cm）で、内部は砂、および、側面から落下したと思えるシルトのブロック（長さ8cm、幅4cm）で満たされていた。亀裂の下端は砂礫層（最大径10cmの礫を含む）に連続しており、亀裂の内部では下部が細粒砂で上端は極細粒砂と上ほど粒子が細くなる「級化」が認められており、この砂が上昇した可能性が高い。

このため、砂礫層で液状化現象が生じて噴砂が上昇した痕跡（砂脈）と考えられる。

兵庫県教育委員会の検討結果から（本報告書の第6章第3節参照）、砂脈は住居跡SH201の床面の張り床部を引き裂いているものの、住居跡に堆積した埋土には覆われていることがわかった。埋土は住居廃絶後に堆積したと考えられるので、住居が建てられた後に地震が生じ、住居が廃絶されて埋土が堆積したものと推測される。

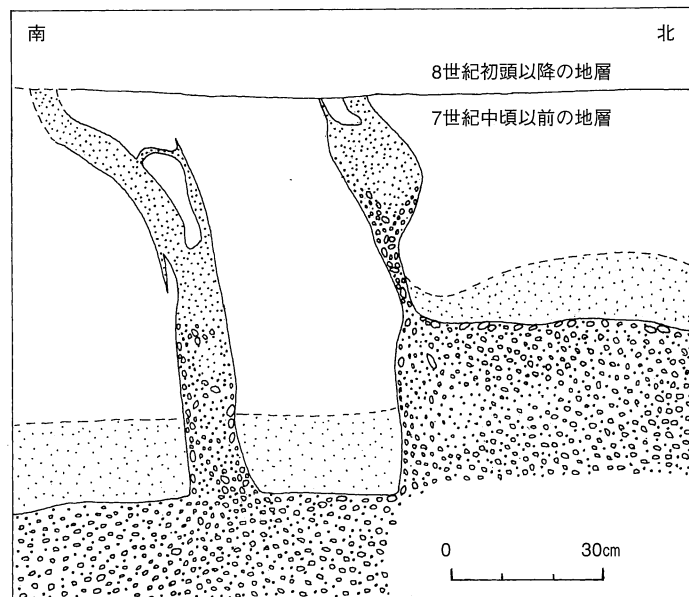
一方、2号窯跡にも変形が確認されている（本報告書の第6章第3節参照）。焚口から約90cmの位置で側壁の硬化層が約10cm食い違っており、これも、強い地震動が原因となった可能性がある。

住居跡SH201は2号窯に関わる住居であるが、2号窯は7世紀第4四半期に操業を開始して、すぐに廃絶したことがわかっている（本報告書の第6章第3節）。住居跡SH201の地震痕跡と2号窯の変形が同一の地震によって生じて、共に地震後に廃絶したと考えるなら、地震の年代も7世紀の終わり頃と推測される。



挿図28 汁谷遺跡で検出された地震の痕跡（噴砂B）

図中のドットの大きさは粒子の大きさに対応している。  
（挿図21、遺構写真図版19-c参照）



挿図29 坂尻遺跡で検出された地震の痕跡  
（寒川、1992より）

## 2. 白鳳南海地震とその痕跡

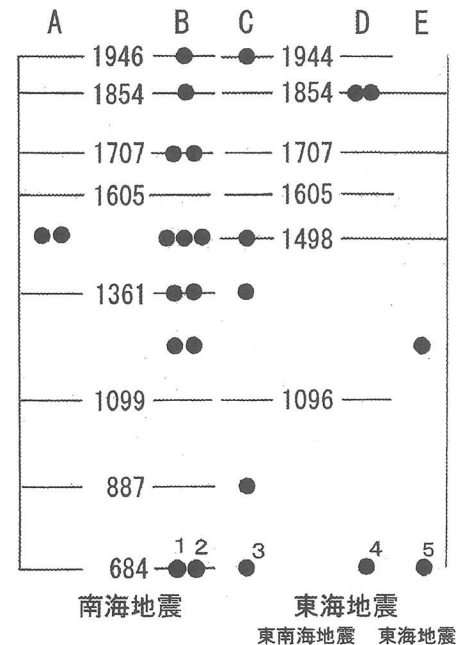
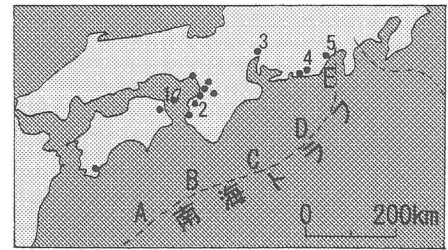
このような年代の地震が、『日本書紀』の天武13年条(西暦684年)、10月14日(西暦の11月29日)に記録されている。その内容は、「人定(午後10時)に速りて大きに地震る。国挙りて男女叫び唱ひて不知東西ひぬ。則ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官舎、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て数ふべからず。是に由りて、人民及び六畜、多に死傷はる。時に伊豫温泉、没れて出でず。土左國の田苑50余万頃(約10万平方キロメートル)、没れて海と為る。古老曰く、『是の如く地動くこと未だ會より有らず』といふ(中略)土左國司言さく、大潮高く騰りて海水飄蕩ふ。是に由りて調運ぶ船、多に放れ失せぬ」である。

これは、太平洋沿岸のプレート境界である「南海トラフ」から発生する南海地震に関する最古の記録と考えられており、『日本書紀』の記述には近畿・四国地域が激しく揺れ、太平洋沿岸へは津波が押し寄せ、高知平野が沈んで、道後温泉の湯が止まったと、南海地震の4つの特徴がもれなく含まれている。

この「白鳳南海地震」に対応する液状化現象の痕跡は和歌山県文化財センターが発掘した和歌山市の川辺遺跡で検出されており(寒川、1992;など)、紀ノ川下流地域が激しく揺れたことがわかる。

一方、明日香村教育委員会による酒船石遺跡の発掘調査では、齊明天皇が築いた石垣の一部が「達磨落とし」のように、真ん中の部分が大きく飛び出しながら一気に崩れ落ちた痕跡が認められたが、背後には地割れの痕跡が刻まれており、白鳳南海地震の爪痕と考えられている(写真9:相原、1995;埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会編、1996;寒川、1997;など)。

この年代の地震痕跡はさらに東海地域でも認められており、愛知県一宮市の田所遺跡(愛知県埋蔵文化財センター)では、古墳時代の水田を引き裂きながら上昇し、奈良から平安時代にかけての遺構に削られる噴砂が認められた(服部、1998;)。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所・袋井市教育委員会による袋井市坂尻遺跡の調査では、古墳時代後期(七世紀中頃)の多くの住居跡とその



挿図30 南海地震と東海地震の発生年表  
数字は記録からわかる発生の西暦年で●は遺跡で地震痕跡が認められたもの  
1. 汁谷遺跡 2. 川辺遺跡  
3. 田所遺跡 4. 坂尻遺跡  
5. 川合遺跡



写真9 酒船石遺跡の石垣の崩壊跡  
石垣が崩壊し、背後には地割れが生じている。

埋土を引き裂き、八世紀に入ってすぐに造られた住居群には、逆に砂脈が削られていた（図2 寒川、1992；など）。また、静岡県埋蔵文化財調査研究所による静岡市の川合遺跡では、液状化現象に伴う砂脈によって七世紀中頃の遺構と埋土が引き裂かれ、八世紀の遺構は逆に砂脈を切断する状況が認められた（寒川、1992；静岡県埋蔵文化財調査研究所、1995；）

田所・坂尻・川合の各遺跡の地震跡は、7世紀後半を含む時代に限定されており、白鳳南海地震に対応する東海地震（南海トラフの東半分から発生）の痕跡と考えられる、このような成果から、684年頃に南海地震と東海地震が一緒に発生したことが考えられる（寒川、1992、2001；）。

白鳳南海地震に関しては、前述のように四国の被害（広い範囲での地震動・地盤沈降・温泉の湧き出し停止・津波）が『日本書紀』に具体的に書かれている。和歌山・奈良両県で地震痕跡が認められていたが、今回、淡路島南部から、この地震によると考えられる地震痕跡と窯・住居の廃絶が認められたことは、この地震の全体像を把握することへの大きな貢献である。これからも、この地域周辺でこの地震の痕跡や被害の証拠が見つかる可能性も高い。

### 3. 将来の南海地震・東海地震

挿図30は東海（東南海）地震と南海地震の発生を示した年表である。西暦で示したのは記録からわかる両地震の発生年代で、挿図30は両地震のものと思われる地震跡を検出した遺跡の位置と地震跡の年代を示している。これによると、2つの地震は200年以内の間隔で、ほぼ同時（2年以内の間隔）に発生し続けているように思われ、21世紀中頃までに東海（東南海）地震と南海地震と一緒に発生する可能性が高い。このような状況下で、過去の南海地震の被害を出来るだけ詳しく把握することが肝要となる。この意味で、過去の地震記録や地震痕跡に関する資料を多く得ることには重要な意義がある。

#### 文献

- 相原嘉之（1995）飛鳥地域における地震の痕跡 酒船石遺跡と白鳳南海地震。古代学研究、131、36-39。  
服部俊之（1998）愛知県の地震と遺跡。古代学研究、144、52-61。  
埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会編（1996）発掘された地震の痕跡。825p。  
文部省震災予防評議会編（1941）増訂大日本地震史料 第1巻。鳴鳳社。945p。  
寒川 旭（1992）地震考古学 遺跡が語る地震の歴史。中公新書、251p。  
寒川 旭（2001）地震 なまぜの活動史。大巧社、173p。  
静岡県埋蔵文化財調査研究所（1995）川合遺跡 八反田地区Ⅱ。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告、63集。419p。  
宇佐美龍夫（2003）最新版日本被害地震総覧 [416]-2001。東京大学出版会、605p。

## 第2節 汁谷窯跡群出土須恵器の化学特性

鹿児島国際大学 三辻 利一

### 1. はじめに

淡路島には洲本市を中心とした半径20kmの範囲内に20基程度の須恵器窯跡が発見されている。しかし、これらの窯跡出土須恵器はK-Ca、Rb-Srの両分布図上でまとまって分布するので、これらの窯跡出土須恵器の供給先を追跡する場合には、一括して淡路群として把握することができる。しかし、南あわじ市内の戸川池窯跡と汁谷窯跡出土須恵器は両分布図上で、淡路領域を少しずれることが分析データでわかったので、改めてここに報告する。

### 2. 分析法とデータ処理法

今回改めて分析した試料は戸川池窯跡（8C前）と汁谷窯跡（7C前）出土の須恵器試料である。また、同じ南あわじ市の佐札尾瓦陶窯跡（12C末）出土須恵器の分析データは前回分析したものを使用した。

須恵器小片の表面をタングステンカーバイド製の手動式研磨機で研磨して付着物を除去し、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は塩化ビニル製のリングを枠にして10トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成した。

錠剤試料はそのまま、蛍光X線分析装置に連結されている自動試料交換器の所定の位置に置かれた。この自動試料交換器には50試料が同時に搭載でき、その中の一つは定量分析のための標準試料である、岩石標準試料、JG-1である。

蛍光X線分析には理学電機製、RIX-2100（波長分散型）の装置が使用された。この装置には3枚の分光結晶（TAP、Ge、LiF）が付属しており、それぞれ、Na；K、Ca；Fe、Rb、Srの蛍光X線を分光するために、自動的に交換される仕組みになっている。また、軽元素Na、K、Caの蛍光X線強度を測定するために比例計数管を、中重元素Fe、Rb、Srの蛍光X線強度を測定するためにシンチレーションカウンターを自動的に交換できる。分析値は各元素の蛍光X線強度をJG-1の対応する元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示した。

試料処理法、分析法、データ解析法は前回の報告（註1）と同じである。

### 3. 分析結果

分析データは第1表にまとめられている。はじめに、前回分析した試料（註1）を使い、淡路島内の窯跡出土須恵器をすべて両分布図上にプロットした。その結果は挿図31に示されている。よくまとまって分布することがわかる。これらを包含するようにして淡路領域を描いた。そして、今回分析した戸川池窯跡および汁谷窯跡出土須恵器のデータと比較することにした。

挿図32には、戸川池窯跡出土須恵器の両分布図を示す。Ca、Srが比較的少なく、淡路領域から少し左側にずれることがわかる。

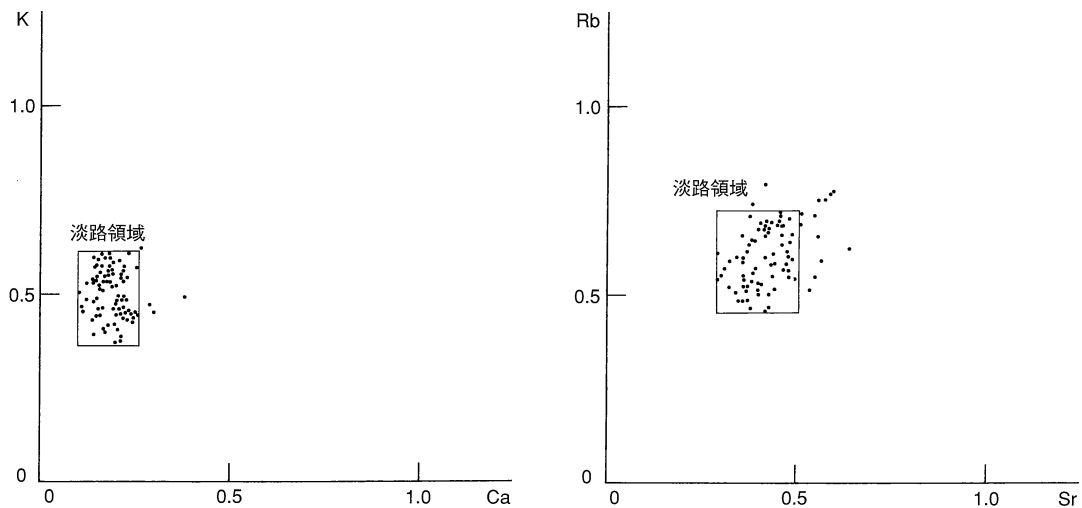
一方、挿図33には、汁谷窯跡出土須恵器の両分布図を示す。K-Ca分布図では汁谷窯の須恵器は淡路領域内に分布するが、Rb-Sr分布図ではSr量が多く、淡路領域の右側に少しずれることがわかる。同じ

南あわじ市内でも戸川池窯と汁谷窯の須恵器は淡路領域を挟んで、互いに反対方向に少しずれ、化学特性が異なることがわかった。

前回のデータ（註1）をみると、南あわじ市の佐札尾瓦陶窯跡の須恵器も汁谷窯跡の須恵器と同様、Sr量がやや多く、淡路領域の右側に少しずれることがわかった。すなわち、同じ南あわじ市内の汁谷窯跡の須恵器と佐札尾瓦陶窯の須恵器とは同じ化学特性をもっているが、戸川池窯跡の須恵器の化学特性とは少し異なることが明らかになった。

この結果、戸川池窯跡の須恵器と汁谷窯跡の須恵器は相互識別出来る可能性がでてきた。K、Ca、Rb、Srの4因子を使った2群間判別分析の結果は挿図34に示されている。両者は完全に相互識別できることを示している。なお、両者はNa因子でも異なることが第1表から予想されるので、因子を入れて替えて、K、Ca、Fe、Naの4因子をつかって判別分析にかけた結果は挿図35に示されている。やはり、相互識別は十分可能であることがわかった。

註1 三辻利一「下内膳遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」『下内膳遺跡』1996年 兵庫県教育委員会



挿図31 淡路群の両分布図

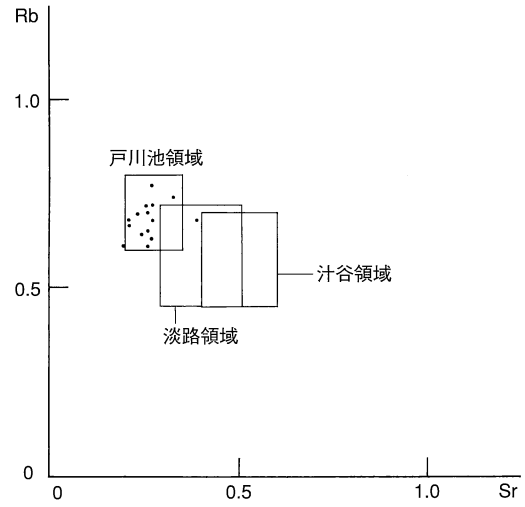
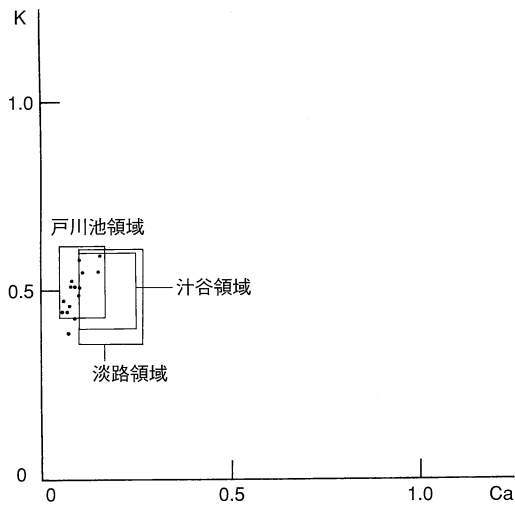
汁谷窯跡

資料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
No. 56	0.402	0.168	2.18	0.464	0.407	0.218
No. 57	0.497	0.193	1.88	0.512	0.550	0.275
No. 58	0.431	0.175	2.10	0.500	0.413	0.231
No. 59	0.517	0.245	2.14	0.642	0.531	0.297
No. 60	0.490	0.183	1.83	0.613	0.432	0.288
No. 61	0.498	0.169	1.85	0.610	0.501	0.328
No. 62	0.522	0.217	2.02	0.601	0.546	0.316
No. 63	0.482	0.188	2.05	0.565	0.495	0.331
No. 64	0.507	0.193	1.91	0.563	0.548	0.306
No. 65	0.539	0.133	1.87	0.654	0.493	0.295
No. 66	0.544	0.201	1.91	0.648	0.508	0.307
No. 67	0.556	0.188	2.25	0.650	0.555	0.301
No. 68	0.526	0.202	1.84	0.560	0.580	0.348
No. 69	0.483	0.110	2.08	0.602	0.412	0.254
No. 70	0.553	0.193	2.23	0.644	0.543	0.324
No. 71	0.571	0.207	1.84	0.613	0.548	0.314
No. 72	0.529	0.132	1.91	0.641	0.456	0.287
No. 73	0.508	0.195	2.18	0.602	0.483	0.314
No. 74	0.556	0.185	1.99	0.653	0.570	0.361
No. 75	0.570	0.113	2.00	0.625	0.472	0.266
No. 76	0.474	0.219	1.79	0.609	0.448	0.268
No. 77	0.527	0.141	1.83	0.665	0.503	0.277
No. 78	0.526	0.148	1.99	0.596	0.372	0.222
No. 79	0.496	0.213	1.74	0.625	0.473	0.286
No. 80	0.563	0.177	1.97	0.660	0.505	0.314

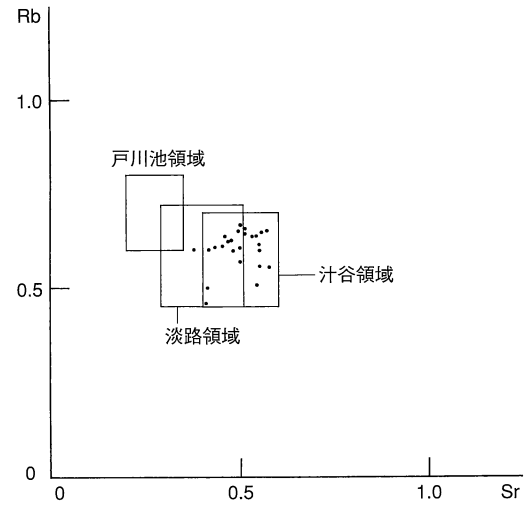
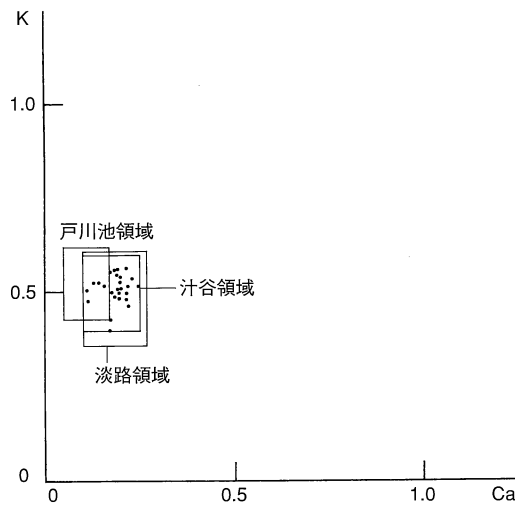
戸川池窯跡

資料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
No. 1	0.515	0.079	1.55	0.612	0.257	0.233
No. 2	0.552	0.150	1.66	0.738	0.325	0.252
No. 3	0.462	0.076	1.61	0.682	0.213	0.164
No. 4	0.526	0.079	1.52	0.645	0.257	0.275
No. 5	0.455	0.071	1.70	0.671	0.270	0.153
No. 6	0.582	0.102	1.50	0.676	0.267	0.246
No. 7	0.588	0.155	1.42	0.680	0.390	0.278
No. 8	0.549	0.106	1.60	0.720	0.274	0.203
No. 9	0.511	0.100	1.63	0.701	0.259	0.255
No. 10	0.488	0.104	1.65	0.721	0.261	0.200

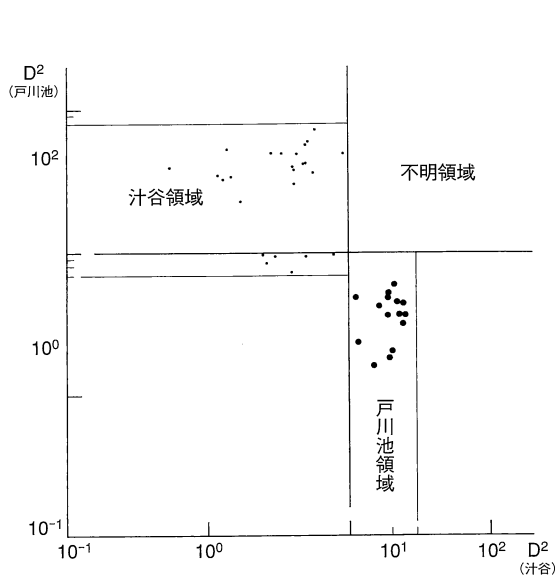
第1表 汁谷・戸川池窯跡出土須恵器の分析データ



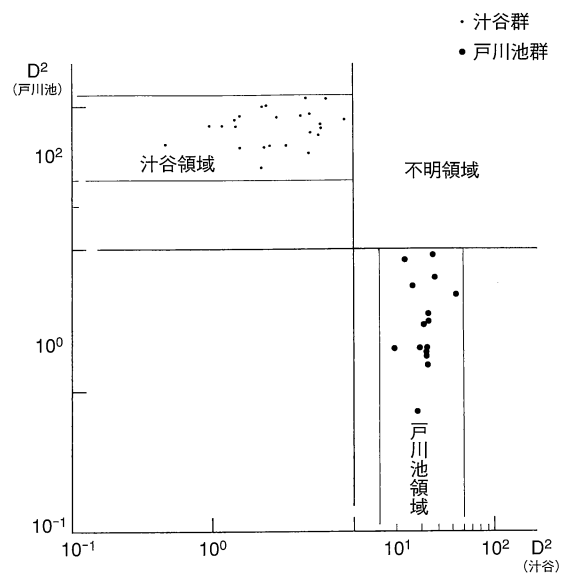
挿図32 戸川池窯跡 出土須恵器の両分布図



挿図33 汁谷窯跡 出土須恵器の両分布図



挿図34 戸川池群と汁谷群の相互識別  
(K、Ca、Fe、Na)



挿図35 戸川池群と汁谷群の相互識別  
(K、Ca、Rb、Sr)

## 第3節 汁谷窯跡群における樹種同定

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2. 試料

分析試料は、1号窯および2号窯から採取された炭化材20点である。

### 3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科（写真10-1）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

#### クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Carpinus* カバノキ科（写真10-2）

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。接線断面：放射組織は同性で1～3細胞幅のものと集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

#### シイ属 *Castanopsis* ブナ科（写真10-3）

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管



が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。なおシイ属にはスダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片で広範囲の観察が困難であることから、シイ属の同定にとどめた。

#### コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科（写真11-1）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アバマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

#### コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科（写真11-2）

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

#### ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的ではあるが大型の道管が見られた。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科のうちのクリ、シイ属、コナラ属のいずれかである。なお、本試料は小片で広範囲の観察が困難であることから、ブナ科の同定にとどめた。

#### ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科（写真11-3）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性

に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

## 5. 所見

分析の結果、汁谷窯跡群の1号窯と2号窯から採取された炭化材では、マツ属複維管束亜属5点、シイ属4点、コナラ属クスギ節4点、ケヤキ3点、コナラ属アカガシ亜属2点、クマシデ属イヌシデ節1点、ブナ科1点が同定された。

マツ属複維管束亜属は二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがあるが、ここではアカマツが生態的にも妥当と考えられる。マツ類の木材はいずれも樹脂を多く含み、現在においても窯業に好んで用いられる。シイ属とコナラ属アカガシ亜属は照葉樹林の主要構成要素であるが、アラカシやシイ類は二次林要素でもある。コナラ属クスギ節は乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。ケヤキは温帯の森林下の谷側などに生育する落葉広葉樹で適潤性の土壌を好む。クマシデ属イヌシデ節は、温帯の山地等に広く分布する落葉広葉樹である。いずれも当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

### 文献

佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.20~48

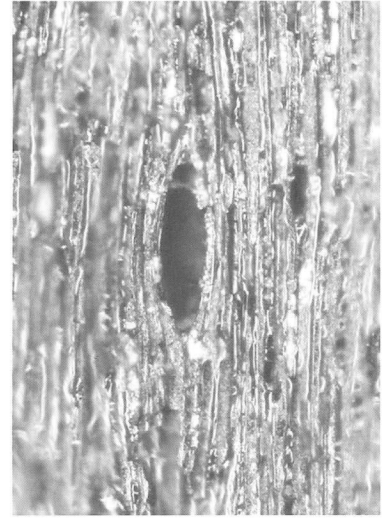
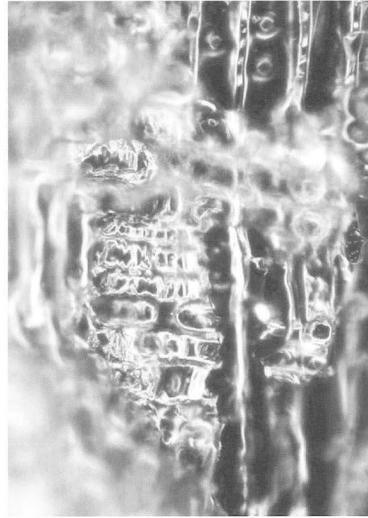
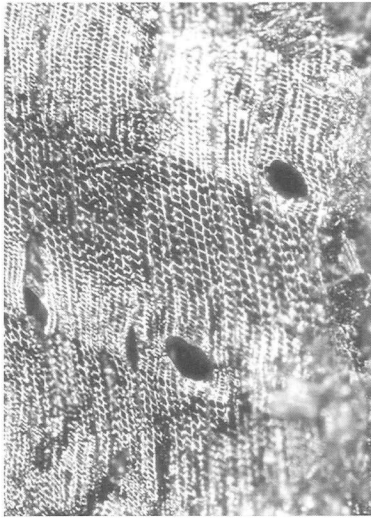
佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.49~100

鳥地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

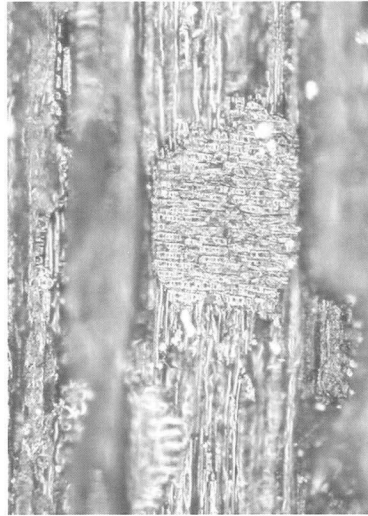
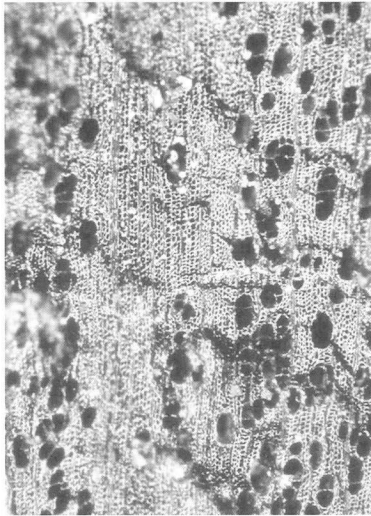
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242

通番	採取位置・層	試料	結果 (学名/和名)
No.1	1号窯灰原 横断面1 F3層	sp1	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
No.2	1号窯灰原 横断面1 F3層	sp1	<i>Zelkova serrata Makino</i> ケヤキ
No.3	1号窯灰原 横断面1 F3層	sp1	<i>Zelkova serrata Makino</i> ケヤキ
No.4	1号窯灰原 横断面1 F3層	sp1	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属
No.5	1号窯灰原 横断面1 F3層	sp1	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
No.6	1号窯灰原 横断面1 F4層	sp2	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クスギ節
No.7	1号窯灰原 横断面1 F4層	sp2	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クスギ節
No.8	1号窯灰原 横断面1 F4層	sp2	<i>Castanopsis</i> シイ属
No.9	1号窯灰原 横断面1 F4層	sp2	<i>Zelkova serrata Makino</i> ケヤキ
No.10	1号窯灰原 横断面1 F4層	sp2	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属
No.11	1号窯灰原 排水溝南側の焼土下 (M5層相当)	sp3	<i>Carpinus sect. Carpinus</i> クマシデ属イヌシデ節
No.12	1号窯灰原 排水溝南側の焼土下 (M5層相当)	sp3	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クスギ節
No.13	1号窯灰原 排水溝南側の焼土下 (M5層相当)	sp3	<i>Quercus sect. Aegilops</i> コナラ属クスギ節
No.14	1号窯灰原 排水溝南側の焼土下 (M5層相当)	sp3	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属
No.15	1号窯灰原 排水溝南側の焼土下 (M5層相当)	sp3	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属
No.16	2号窯 東壁A層	①	<i>Castanopsis</i> シイ属
No.17	2号窯 東壁B層	②	<i>Castanopsis</i> シイ属
No.18	2号窯 東壁F層	③	<i>Fagaceae</i> ブナ科
No.19	2号窯 窯内床面付近	④	<i>Castanopsis</i> シイ属
No.20	2号窯 土坑205 第8層	⑤	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属

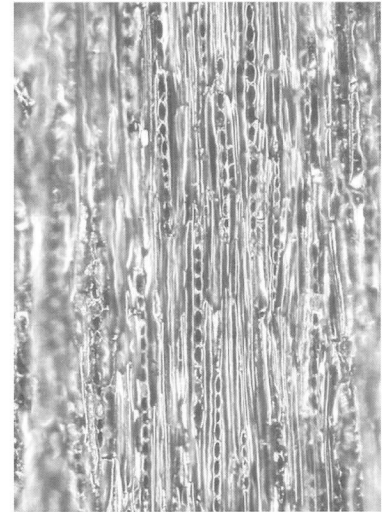
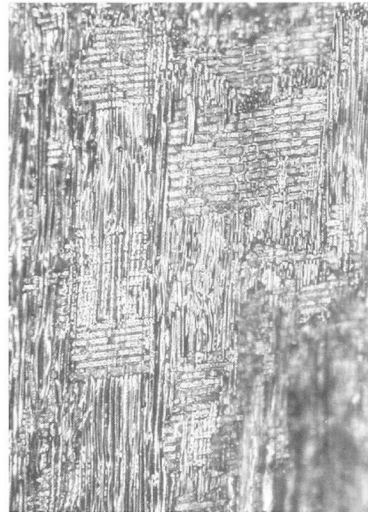
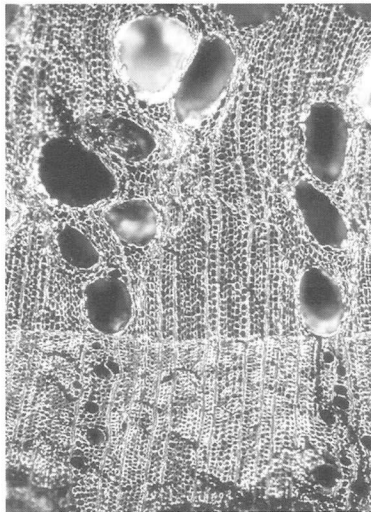
第2表 汁谷窯跡群における樹種同定結果



横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.1mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 10-1. No.4    1号窯灰原 横断面1    F3層 sp1    マツ属複維管束亜属

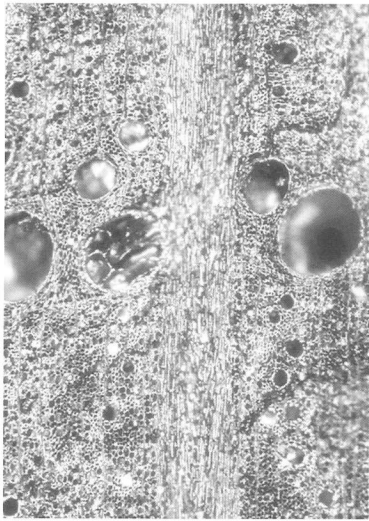


横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.2mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 10-2. No.11    1号窯灰原 排水溝南側の焼土下 (M5層相当) sp3    クマシテ属イヌシテ節

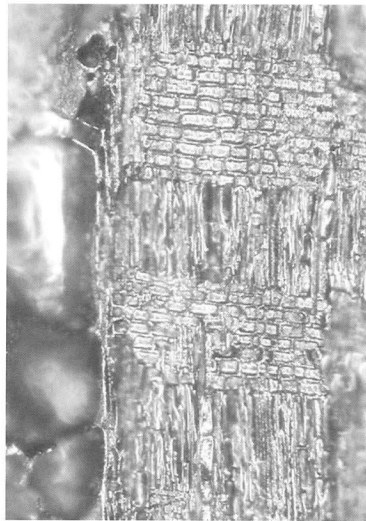


横断面 ————— : 0.4mm      放射断面 ————— : 0.4mm      接線断面 ————— : 0.2mm  
 10-3. No.16    2号窯 東壁A層 ① シイ属

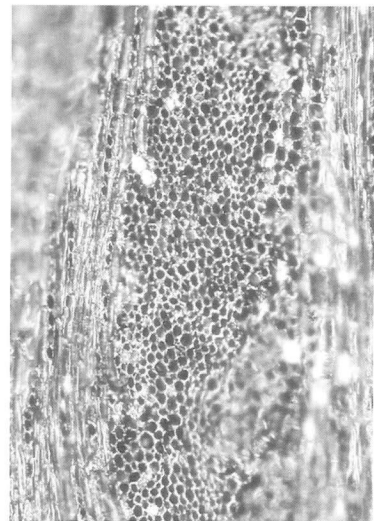
写真10 汁谷窯跡群の炭化材 I



横断面 ————— : 0.4mm

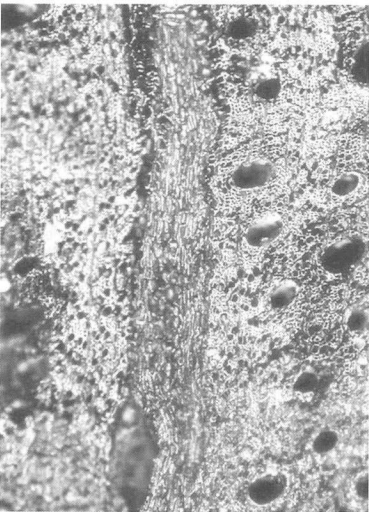


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

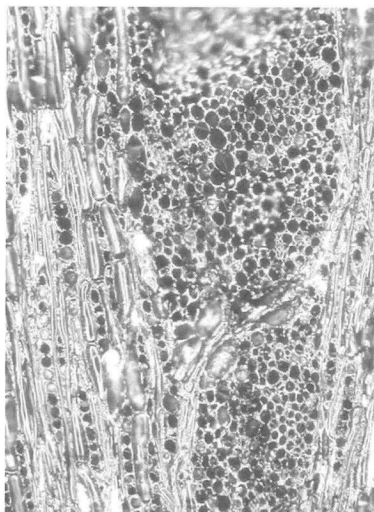
11-1. No.6 1号窯灰原 横断面1 F4層 sp2 コナラ属クスギ節



横断面 ————— : 0.4mm

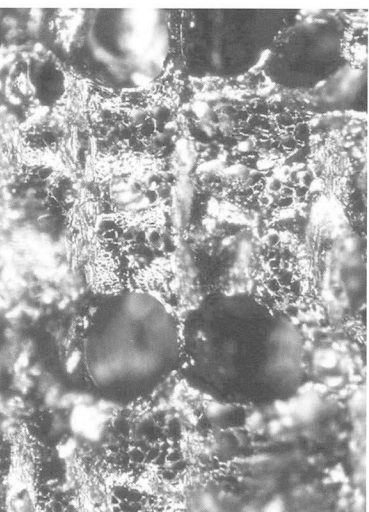


放射断面 ————— : 0.2mm

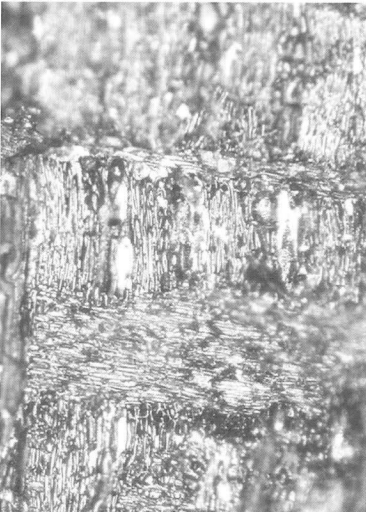


接線断面 ————— : 0.2mm

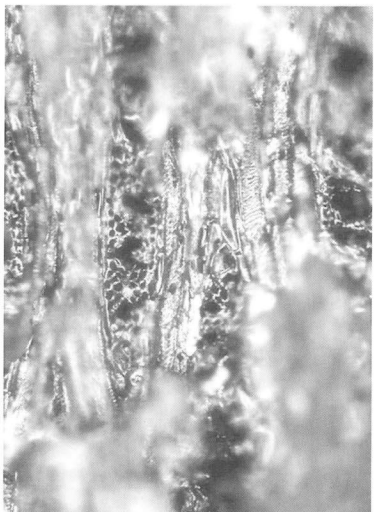
11-2. No.5 1号窯灰原 横断面1 F3層 sp1 コナラ属アカガン亜属



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.4mm



接線断面 ————— : 0.2mm

11-3. No.3 1号窯灰原 横断面1 F3層 sp1 ケヤキ

写真11 汁谷窯跡群の炭化材Ⅱ

## 第4節 汁谷窯跡群・汁谷遺跡における花粉分析

株式会社 古環境研究所

### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### 2. 試料

分析試料は、汁谷窯跡群の黄色土地山、1号窯灰原、汁谷遺跡のSD206埋土（調査区南壁断面）、SH201（調査区南壁断面）から採取された計8点である。試料の詳細を第3表に示す。

### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉2、草本花粉3、シダ植物胞子2形態の計7である。分析結果を第3表に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す（写真12）。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) 1号窯灰原東壁断面

試料2～6では、部分的にマツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、イネ科、ヨモギ属、およびシダ植物胞子などが検出されたが、いずれも少量である。試料1では、花粉が検出されなかった。

2) SD206埋土（調査区南壁断面）

試料7では、イネ科やヨモギ属が検出されたが、いずれも少量である。

3) SH201（調査区南壁断面）

試料8では、イネ科やヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、調査区周囲はイネ科やヨモギ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、遺跡周辺にはマツ類（マツ属複維管束亜属）やナラ類（コナラ属コナラ亜属）などの樹木が生育していたと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

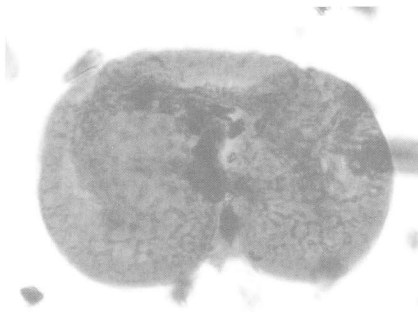
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p

中村純（1980）日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p

分類群	学名	和名	1号窯灰原 横断面1						7	8
			1	2	3	4	5	6	SD206	SH201
			黄色土地山	R1Py	F4Py	F3Py下部	F3Py上部	Y1Py	1Py	1Py
Arboreal pollen		樹木花粉								
	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属				3		1		
	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属				1		1		
Nonarboreal pollen		草本花粉								
	Gramineae	イネ科		2	1	4	1	1	2	5
	Cyperaceae	カヤツリグサ科			1	2				
	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属			4	1	1		1	1
Fern spore		シダ植物胞子								
	Monolate type spore	単条溝胞子						2	1	1
	Trilate type spore	三条溝胞子					2			2
Arboreal pollen		樹木花粉	0	0	0	4	2	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	0	2	6	7	2	1	3	6
Total pollen		花粉総数	0	2	6	11	4	1	3	6
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	0	2	0	2	0	1
Fern spore		シダ植物胞子	0	0	0	2	2	1	0	3
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

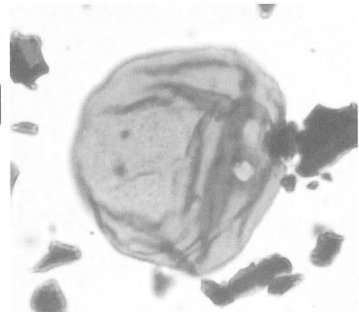
第3表 汁谷窯跡群・汁谷遺跡における花粉分析結果



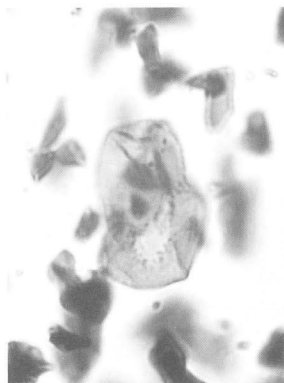
1 マツ属複維管束亜属



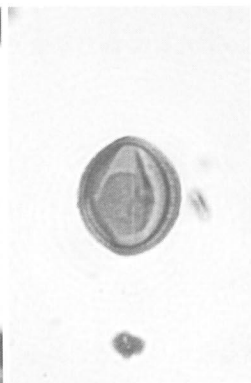
2 コナラ属コナラ亜属



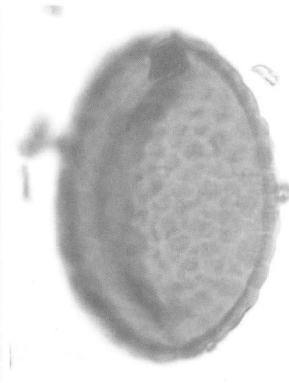
3 イネ科



4 カヤツリグサ科



5 ヨモギ属



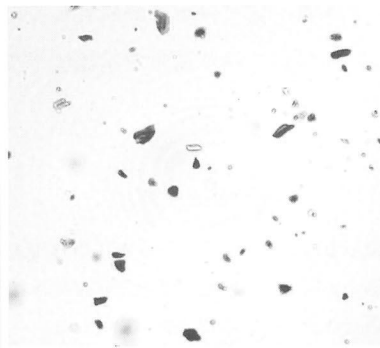
6 シダ植物単条溝胞子



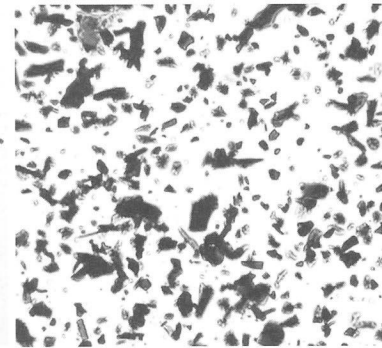
7 シダ植物三条溝胞子



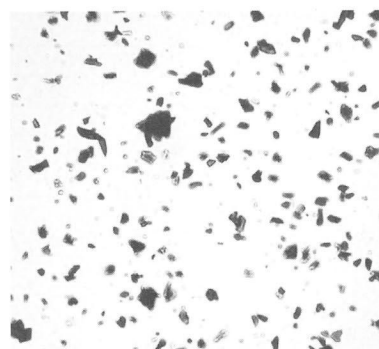
試料1 地山



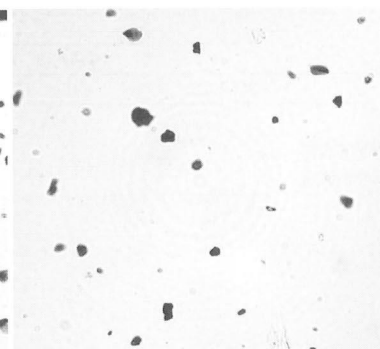
試料2 1号窯灰原横断面1R1層



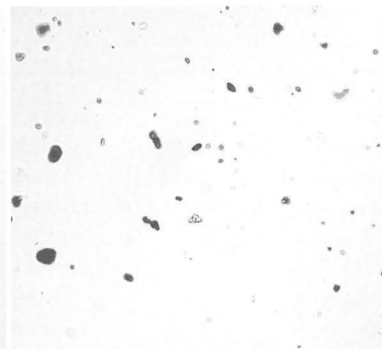
試料3 1号窯灰原横断面1F4層



試料4 1号窯灰原横断面1F3層上部



試料7 SD206 1層



試料8 SH201 1層

1-7 10 μm  
試料1 - 試料8 10 μm

写真12 汁谷窯跡群・汁谷遺跡の花粉・胞子

# 第6章 総括

## 第1節 遺構

### 1. 遺構からみた窯跡の構築順序

今回の調査では1号窯のほかに新たに2号窯が発見され、さらに1号窯灰原は、灰層の堆積状況と包含遺物の種類から異なる時期の2基の窯の灰原が重なっていると判断した。従来、単独窯と見なされていた汁谷窯跡地に少なくとも3基の窯跡が存在していることになる。また、GK層とMN層の間にはL層という間層があり、包含遺物の形態差もあるので、さらにもう1基存在している可能性もないわけではない。従って、1号窯の正確な基数の確定については将来の調査結果を待たざるを得ないが、本報告では中部灰層GK層と下部灰層MN層の両灰層を1基の灰原形成層として扱い、「1号B窯」の名称を与え、YEF Rの上部灰層に対応する窯には「1号A窯」の名称を与えた。

杯Hを主体とした1号B窯には、前述の通りGK層の新相とMN層の古相があり、この1号灰原の北端部を切って1号A窯が構築されている。さらに1号A窯に隣接して2号窯が所在している。1号A窯に伴う土坑205が2号窯の前庭部を破壊して設けられていることから、2号窯廃窯の後に1号A窯が構築されていることがわかる。このようにみると、汁谷窯跡群は3基の窯跡4時期に分かれ、その順序は、1号B窯MN層→1号B窯GK層→2号窯→1号A窯となる。この順序は、次節で述べる遺物の形態および器種構成の変化とも矛盾しない。

### 2. 窯跡と関連遺構

今回の調査並びに旧三原町教育委員会による調査では、窯跡に関連する遺構が検出されており、本項では各窯跡と対応関係にある遺構についてまとめを行っておきたい。

#### 【1号B窯MN層とSK201】

1号B窯MN層の関連遺構としてSK201がある。SK201は竪穴状遺構で、南東部付近から30個体以上の土器が出土した。大半は須恵器杯Hの蓋と身で、焼け歪みがあるが、ほぼ完形に近い製品である。東壁近くには火の使用を示す焼土面が認められ、住居址の要素をもつ。焼け歪みの製品は完形品の多さから什器として使用されたと推測されるが、煮沸用の土師器が出土していないので、本住居ではなく、窯焚き時の仮設住居の可能性が高い。或いは工房跡とも考えられるが、ロクロピットなど工房に伴う遺構は検出されていない。なお、焼け歪みの製品が集中しているということで、製品の選別場あるいは集積場としての見方もできようが、窯体近くの屋外作業場で選別作業や集積を行なうことのほうがはるかに効率的である。上屋が想定される竪穴状遺構内に製品を持ち込む必然性は全くなく、製品の選別場または集積場とは考え難い。

#### 【2号窯とSH201】

2号窯に関連する遺構としてSH201の方形住居跡がある。SH201は貼り床面が地震に伴う噴砂によって引き裂かれている。遺物の年代から想定される大地震としては天武13年(684)の白鳳南海地震があり、当該噴砂はこの白鳳南海地震に伴う可能性が高い。また、2号窯は側壁の崩壊状況と灰原の不形成から想定される操業期間の短さは大地震により損壊を受けたことを推測させるものであり、噴砂に伴う



SH201が2号窯稼働時の住居遺構の可能性が高いことを示す。なお、SH201の噴砂と出土遺物および2号窯の地震被災痕跡の問題については、本章第3節に記述しているのでここでは割愛する。

#### 【1号A窯Y E F R層と土坑群】

1号A窯に対応する関連遺構として、土坑205と旧三原町調査A地区の遺構群がある。A地区では斜面裾部にテラス状の平坦部が検出されている。この平坦部は県調査区にまで及んでおり、総延長は30m以上ある。工房関係の遺構は検出されていないが、作業スペースとして造成されたものと判断してよい。1号B窯操業時の仮設住居と推測されるSK201もこの平坦部の北端にあり、造成は1号B窯の開窯時に行なわれた可能性が高い。なお、平坦部の斜面際には、当該調査区のSD201に続くと思われる南北方向の溝（SD103）が検出されており、作業スペースを雨水から守る排水溝と判断される。埋土中から杯Bなどが出土しているので、2号窯か1号A窯操業時に新たに掘削されたものと思われる。

このほか、1号A窯関連の遺構として、SD103南端のSK106・SK109があり、このうちのSK106から多数の甕が出土した。甕はいずれも体部が途中で内側に折れて、口縁部が底部内面に陥没しており、使用には耐えないが、ほぼ完形品に近い。窯体から取り出した甕をSK106付近まで運び出して仮置きのまま遺棄した状況が想定される。SK106・SK109は灰原の縁辺部に位置しており、昇り降りのステップや製品の仮置場を兼ねた作業スペースとして設けられたものと考えられる。また、2号窯の前庭部を破壊して設けられた土坑205からは、比較的形のある遺物が多く出土し、この中にはSK106出土甕類と同じ特徴をもつ甕I129もあり、SK106と同様、一次的な置場などの作業スペースとして使用されたものと考えられる。

### 3. 窯体の構造

1号B窯、1号A窯については、窯体全部が調査区外にあり、また、2号窯についても検出部位は燃焼部のみで、窯体全体の発掘調査を実施していない。いずれも灰原、または窯体内からスサ混じりの窯壁片が出土しているので、窯体が半地下式構造であることは明らかであるが、それ以外の窯体構造は一切不明である。参考のために1号A窯と同時期または少し後出の洲本市の庄慶山1号窯跡の窯体図を挿図36（文献1）に掲載した。庄慶山1号窯跡は半地下式構造で、全長8.0m（実長）、焼成部最大床幅1.7m、焚口幅1.3mを測る。最大床幅の位置は焼成部の上寄りにあり、この付近を境にして次第に窄まり、排煙口に続く。燃焼部の奥行は約2m、幅1.2mで、焚口に1.7m×0.9mの舟底状ピットをもつ。舟底状ピットからは、幅0.4mのV字状の排水溝が取り付け、前庭部を貫く。前庭部は地山を掘り込んで造成されている。

これに対して、2号窯は焚口幅0.9m、燃焼部の奥行は2.8m、舟底状ピットは長径2.10m、短径0.82mを測る。1号A窯では庄慶山1号窯跡と同じく、窯体より続くと思われる排水溝が前庭部を縦断して掘られている。前庭部も地山を掘り込んで造成されており、その掘削範囲も庄慶山1号窯跡とほぼ同じである。以上、わずかな検出箇所からの比較のみで断定は難しいが、汁谷窯の窯体は庄慶山1号窯跡と同じような規模・構造をもつと推測される。

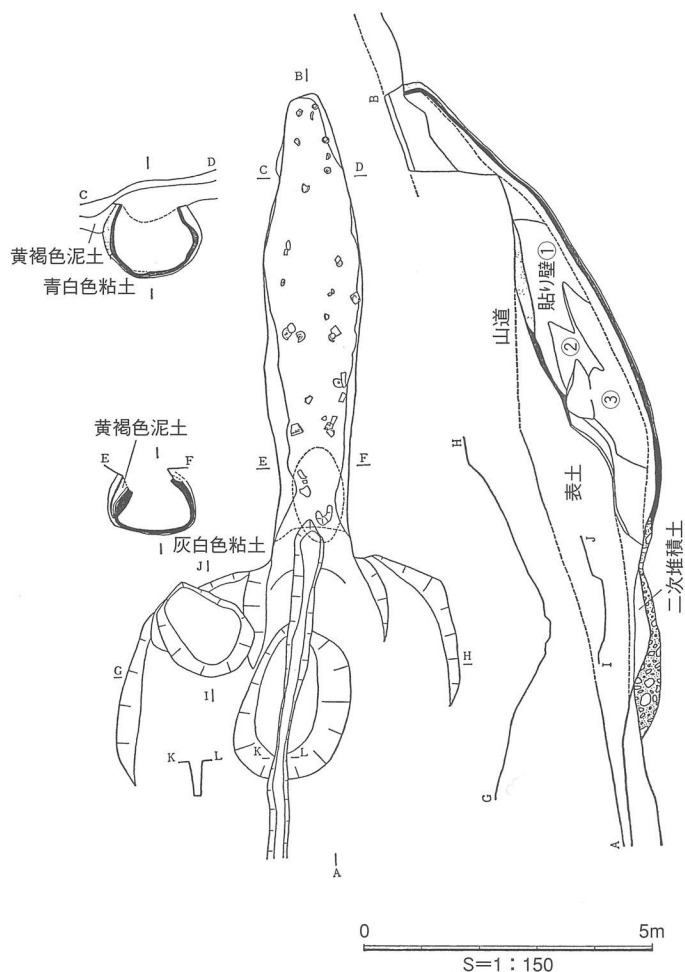
このほかに窯体について注目しておきたいのは2号窯において窯体の還元部が存在しないことである。前述の通り、スサ混じりの窯壁片が窯体舟底状ピット埋土層から出土しているので、天井架構の半地下式構造であることは明らかである。窯体の還元部の存在のない窯跡の発見事例は近年増加しており、例をあげれば、加古川市志方窯跡群中の投松1号窯（文献2）・京都府園部町（現南丹市）の壺ノ

谷11号窯・同18号窯（文献3）があげられる。投松1号窯では天井部から床面にいたるまで還元部が徹底して剥ぎ取られ、窯体周辺の平坦地に積み上げられていた。このように剥ぎ取られた窯壁材は砕いて粉にして新しい窯を構築する際に窯壁の混和材（シャモット）として利用するために行われたものと考えられる。シャモットを利用すると乾燥収縮および焼成収縮を少なくすることができ、窯の耐久性が増すということで、その利用は今日も広く陶芸の世界で行なわれている。

ところで、2号窯については第3章第4節で述べているように、側壁の崩壊状況等から地震により損壊したと推測している。窯壁片の包含は舟底状ピット内のみで、窯体の埋土中には含まれていない。また、窯体の側壁部には地山

の被熱硬化部がほとんど残存しないが、この地山の被熱硬化部の塊片および硬化還元部背後の被熱酸化部の崩落塊もほとんど埋土中に見ることができない。通常、地山の被熱硬化部は未風化の硬い礫を含むことが多く、砕いてシャモットとして利用するには扱いづらい。然るに、このようなシャモットにし難い被熱硬化部の崩落塊片までもが除かれているという状況は、窯体の損壊後に崩落土をすべて取り除き、窯体内の清掃を行なった結果と判断され、当初は窯の全面的な修復を目指したことを示す。結果的には窯体の修復は行なわれず、南隣に新たに1号A窯を構築している。恐らくは、側壁背後の地山の崩落が激しく修復を断念せざるを得なかったと推測される。

このように、2号窯の還元層の不存は直接的にはシャモット材の採取によるものではないが、除去された2号窯の天井の架構壁は1号A窯の構築に再利用されたと考えてよい。なお、2号窯の前庭部を掘り下げて、造成された1号A窯土坑205の南肩付近に窯壁片や被熱した酸化砂岩片が集中して出土しており、2号窯から取り除かれた窯壁の残骸の可能性が高い。



挿図36 庄慶山1号窯跡 窯体図（文献1より）

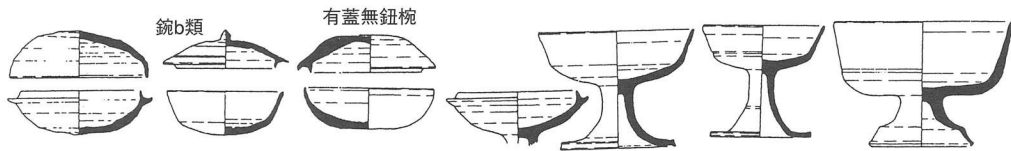
## 第2節 遺物

### 1. GK層の遺物について

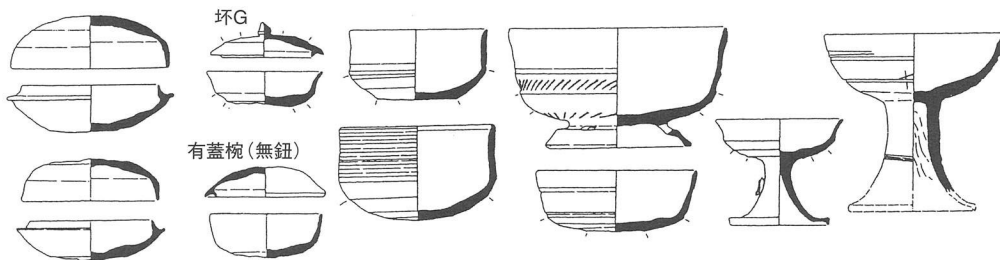
GK層出土の杯H形態は蓋と身のセットの天地上下を逆にして焼成されている。これを単なる焼成時

の製品の置き方の特徴と捉え、あくまでも従来の杯Hとしての形態を重視するか、あるいは置き方そのものが、蓋と身の形態の入れ替わりを示しているとするか見解の分かれるところであるが、本報告書では杯Hの身形態を蓋に、蓋形態を身にして実測図を作成している。その理由については、すでに第3章で触れている通り、第1に杯H身とすれば立ち上がりの高さが口縁よりも低いのが圧倒的に多く、明らかに蓋のかえりの形状を示しているものが多い。さらに口縁端部を内側に巻き込んでいる点（挿図27参照）など明らかにMN層の杯Hの受部の形態とは異なる。また、0605・0611など杯H身としては考え難い形態のものが存在すること。第2にMN層では含まれていない無台の杯（杯Gh）が多数存在しており、明らかに従前のセット関係が崩れている、などの点があげられる。

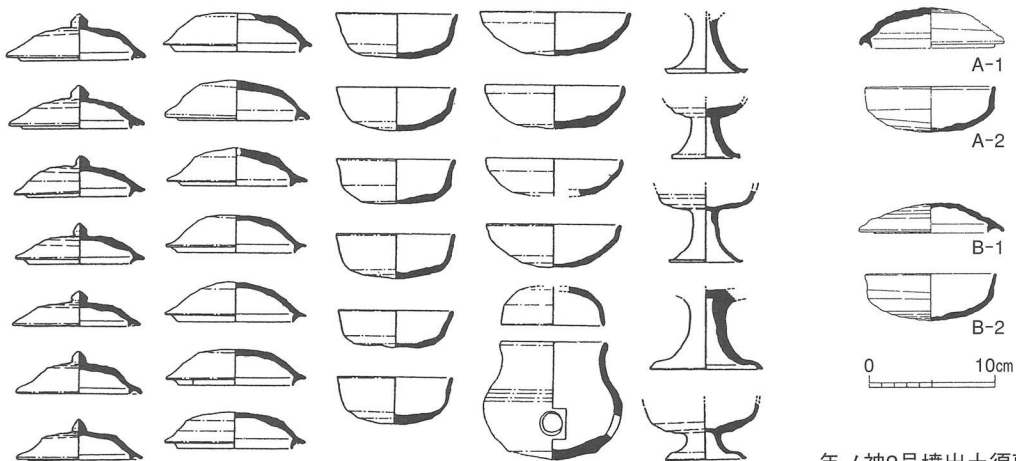
こうした杯Hの蓋と身の上下逆転例はすでに北九州市天観寺山窯跡群の調査において小田富士雄氏が指摘（文献4）されている。観寺山窯跡群における、該当窯跡としてはIV区第1号窯跡、向野山窯跡群、荘原池窯跡群があり、小田氏は「IV区1号窯において初めて生産の段階から上下の転倒を意識していたことが確認された」と記述している。その後、大野城市の牛頸窯跡群中の小田浦窯跡群（文献5）をはじめとする北九州の諸窯においても同様の上下逆転例が発見されている（文献6）。このうち



武生2期：王子保5号窯出土須恵器（文献8より）



射水2期新段階：天地C22号窯出土須恵器（文献8より）



牛頸窯跡群小田浦50-I号窯出土須恵器（文献5より）

年ノ神2号墳出土須恵器（文献8より）

挿図37 杯H蓋身天地逆転例

小田浦40-I号窯では杯身と蓋を天地逆転させたセット群とつまみとかえりを有する蓋と身のセット群が床面から発見されている。また、中通古墳群（文献7）においても杯H身の天地を逆転させたつまみのない蓋が杯身とセットにして副葬されている。同様の事例は北陸地方においても報告されており、近年、北陸地方の飛鳥時代須恵器の様相をまとめた望月氏は王子保5号窯、射水の天地C22号窯での事例をあげ、無鈕返り蓋と呼称（文献8）されている。このほか、兵庫県内においても、窯跡出土ではないが、三木市年ノ神2号墳の石室から、杯G身に杯H身の天地を逆にして蓋とした1組（A-1・2）と天井部にいてねいなヘラ削りを施すが、つまみのない蓋と杯G身が1組（B-1・2）の合わせて2組のセットが副葬されていた（文献9）。杯G身2個は底部にいてねいなヘラ削りを施した典型的な杯G身で、胎土・色調から杯G身2個とつまみのない蓋は同じ窯で生産されていると判断されるが、杯H身の天地を逆にして蓋としたもの（A-1）は異なる窯で生産されたものと思われ、前代の副葬品の転用の可能性もある。

以上の諸例からみると、GK層出土の杯H形態のものは、杯H身ではなく、すでに蓋としての意識のもとに製作されたと考えてよからう。杯Hから杯G形態中心への過渡期の現象と見なしてよい。なお、GK層出土の杯H類には焼成・胎土から明らかにMN層よりの混入と思われる一群のほかにも、0915のように外面にGK層特有の緑色の自然釉がかかり、MN層の蓋Hとは異なる色調のものも出土しており、GK層段階においても従来の杯H形態が存続している可能性があるが、GK層段階に従来の杯H身と蓋が伴うかどうかは、窯体の発掘が行なわれていない現時点では、MN層との遺物との混在の問題もあるので結論を出すのは難しい。

## 2. 各窯における器種構成の特徴

### 1号B窯MN層（古相）出土遺物

窯跡出土ではないが、SK201出土遺物もこの段階の一括資料として扱う。色調が暗灰色または黒灰色を主体とする。杯Hを中心器種とする。杯Gg（1034）が出土しているので、かえりのある蓋Gも出現していると思われるが、いわゆる杯H蓋を逆転させた無台の杯Ghは認められない。杯Hの受部径はMN層では10.9cm～13.8cm、SK201出土資料では12.2cm～13.3cmである。体部は直線的で、底部との境は明瞭なものが多く、底部はヘラ切り不調整である。立ち上がりの高さは、口縁よりわずかに高い程度で、1313・1314のように口縁部より下にあるものもある。蓋も天井部は平らで、ヘラ切り不調整である。その他の器種としては、平瓶、短頸壺などがある。甕の類には甕A<sub>1</sub>および甕B類がある。また、SK201では有蓋高杯や椀がまとまって出土している。

なお、MN層出土の杯H類中に底部外面に緑色の自然釉がかかり、受部の外縁を内側に巻き込むGK層段階の蓋Ghタイプのもものが若干数含まれる。これらはMN層のものではなく、GK層のからの混入の可能性が高い。今回調査区が1号B窯灰原の北端部ということもあり、MN層が1号B窯の古相の遺物を純粋包含する層ではなく、古相の遺物を主体としながらも若干のGK層の遺物が混じり込んでいる可能性がある。

### 1号B窯GK層（新相）出土遺物

外面に自然釉がかかり、明るい灰色を基本色調とする。杯Hの天地を逆転させた杯Gh、蓋Ghが主体である。杯Ghには蓋Ghを伴わないものが量産されており、重ね積みをして焼成されている。また、杯Gg蓋も一定量生産されている。このほかの器種には長頸壺・短頸壺・甕・高杯・横瓶・甕A<sub>1</sub>類・B類

窯 名 種	1号B窯			2号窯	1号A窯	
	古相	新相			窯体	E・F・R層
	MN層	K層	G層			
蓋H	 	?	?			
杯H	 	?	?			
蓋Gh	?	 	 	?		
杯Gh		 	 	 	 	 
蓋Gg	△	 			 	 
杯Gg				 	 	
蓋Gb				 	 	 
蓋B				?		
杯B					  	  
椀	 	○			○	



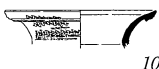
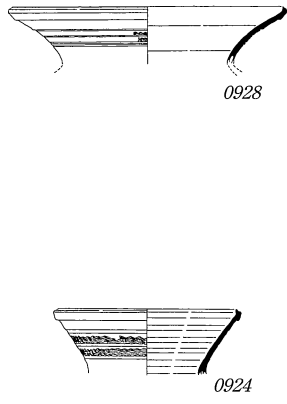
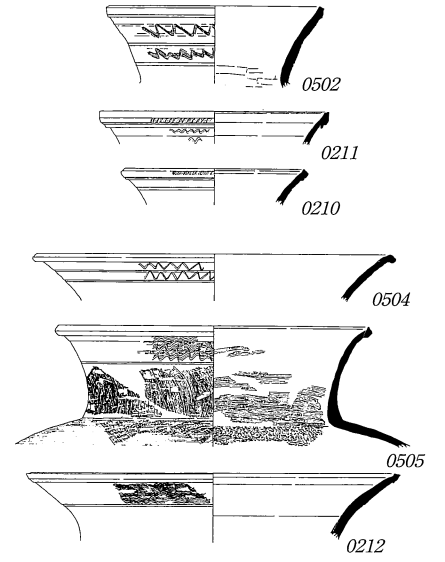
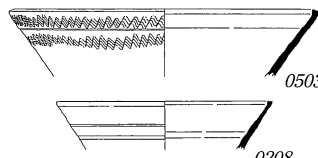
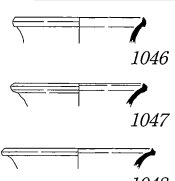
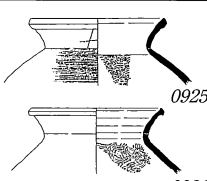
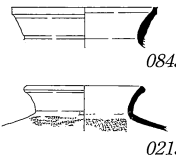

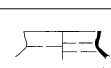

- 存在の可能性がほぼないと判断される器種
- 存在することが確実な器種
- △ 存在の可能性の高い器種
- ? 存在するかどうか不明の器種

挿図38 窯跡各層出土蓋・杯分類図 S=1:8

がある。次節で述べる通り、甕の中に2号窯と同じ当て具痕をもつものがあり、2号窯との時間的な連続性を示す。

## 2号窯出土遺物

窯体燃焼部からのごく限られた遺物しかなく全体の器種様相は不明であるが、杯Hの杯身のセットは確認できず、無台の杯Ghが主体を占める。かえりのある蓋Gが一定量あり、これと組み合わせ高台を有する杯Bと思われるものが1点(1203)あるので、杯Bも一定量生産されているものと思われる。杯Ggの底部のヘラ削りは省略され、ナデのみの調整に終わっている。2号窯の甕の当て具痕がGK層出土の甕および1号A窯EF層出土の甕の当て具痕と一致するものがあり、GK層操業と2号窯操業、さらに2号窯操業と1号A窯操業との時間的な連続性が認められる

層名 分類	MN層・SK201	GK層	YEFR層
A <sub>1</sub>	 1333		 0501 0209
A <sub>2</sub>	 1013	 0928 0924	 0502 0211 0210 0504 0505 0212
A <sub>3</sub>			 0503 0208
B	 1046 1047 1048	 0925 0926	 0843 0215
C			 0426
D	 1045		 0425

挿図39 窯跡各層出土甕分類図 S=1:12

## 1号A窯出土遺物

Y・E・F・R層の上部灰層群および土坑205・SK201上層・旧三原町教育委員会調査A地区出土遺物を含む。上位のY層と下位のF層のそれぞれの出土遺物群の中で、両層の破片同士が接合できるものがあるので、上位層と下位層間での形態や器種の違いなどは認められない。中心器種は、杯Bとかえりのある蓋Ggおよび杯Ghである。かえりのない蓋Bも少量存在するほか、円面硯などの特殊器種も出現している。杯Bは高台の端部が内側に突出する特徴があり、口径・器高は大小様々で一定せず、各種の大きさが見られる。

## 3. 各窯の遺物年代の検討

7世紀代の須恵器については多くの研究者によって編年案が提示されている。これらの編年案について、個々に検討することができないので、ここでは難波の編年を中心として陶邑編年や飛鳥編年との比較を行なっている佐藤隆氏の論考を参考にして汁谷窯跡群の須恵器の年代について検討を行いたい。挿図40は佐藤氏による難波編年図（文献10・文献11）で、要点は以下の通りである。

難波Ⅲ段階では須恵器杯Hの身蓋ともに法量が減少し、身の底部および蓋の天井部はヘラ切り不調整のものがほとんどである。杯Gなど新しい器形が出現する。難波Ⅲ新段階になると、杯H・杯Gが極限まで縮小し、数量的には杯Gが杯Hを凌駕し、杯Bが確実に所在する。難波Ⅳ古段階においては須恵器杯Hがほとんど見られなくなり、杯A・Bが主体を占める。杯B蓋はかえりをもつが、かえりのない類の蓋が共存した可能性がある。難波Ⅳ新段階はかえりのない類がほとんどである。各編年段階を暦年代にあてはめると、難波Ⅲ中段階が7世紀第2四半期後半～7世紀第3四半期前半、難波Ⅲ新段階がおおよそ7世紀第3四半期、難波Ⅳ古段階がおおよそ7世紀第4四半期、難波Ⅳ新段階がおおよそ8世紀第1四半期とされている。

挿図40で示した難波編年図の横に汁谷窯跡群の各窯出土須恵器を古い順に並べた。遺構や当て具の継続使用の状況から時間幅の長短は別として、1号B窯から1号A窯までは時間的に連続するものと考えている。各窯の遺物の特徴についてはすでに記述しているのでここでは割愛し、難波編年との対比を行なっておきたい。

まず、1号B窯MN層の杯Hの受部径は10.9cm～13.8cmで、SK201出土一括資料では受部径12.2cm～13.3cmである。底部はヘラ切り不調整で、直線的に立ち上がる体部をもち、底部との境は明瞭なものが多い。立ち上がりの高さも低く、杯Hとしては最終段階の形態であろう。難波Ⅲ中段階に該当すると考えたい。

1号B窯GK層は無台の杯Ghの生産と蓋Gの一定の生産に特徴付けられる。杯Hの上下逆転現象が見られる。杯Bの生産は認められない。難波Ⅲ新段階並行と考えたい。

2号窯についてはごく限られた遺物しかなく全体の器種様相は不明であるが、杯Hの杯身のセットは確認できず、無台の杯Ghが主体を占める。かえりのある蓋Gが一定量あり、これと組み合う杯Bも一定量生産されているものと思われる。難波編年では難波Ⅳ古段階に該当すると考えたい。

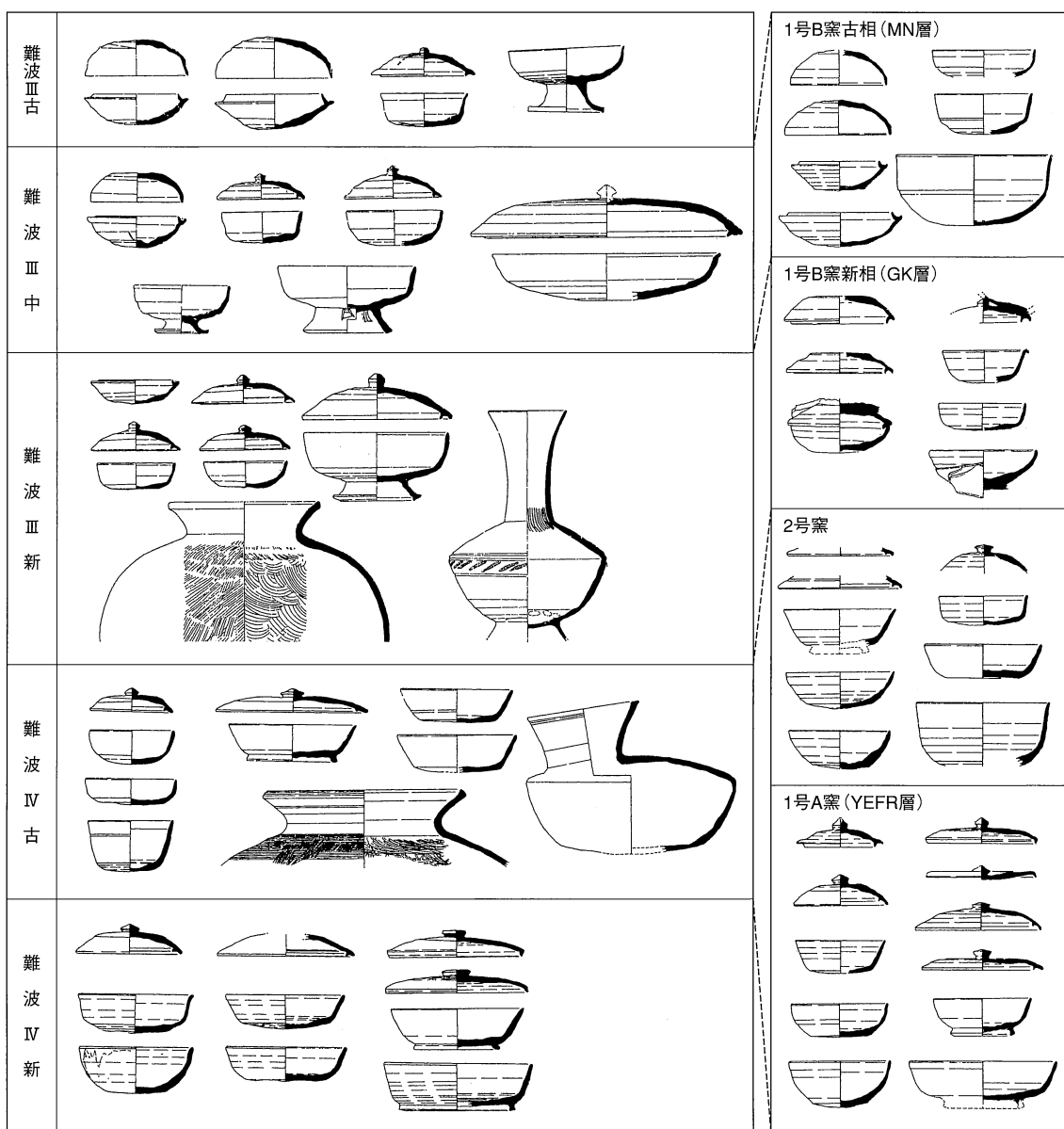
1号A窯では杯Bとかえりのある蓋Ggおよび杯Ghが主体である。かえりのない蓋Bも少量存在する。難波Ⅳ古段階に該当する。

この中で、杯Hの上下逆転現象が見られるGK層の位置付けが難しいが、難波Ⅲ新段階の杯G主体の様相はGK層における杯Gh主体の器種構成と共通するものであり、難波Ⅲ新段階に位置づけること

については特に問題はないと思われる。2号窯についても、出土遺物の点数が少ないという問題はあるが、杯Gh、杯Bとこれと組み合う蓋Ggの存在から難波IV古段階に該当させて差し支えない。

以上、難波編年案を参考にして各窯の操業年代を示すと、MN層が難波Ⅲ中（7世紀第2四半期後半～7世紀第3四半期前半）、GK層が難波Ⅲ新（7世紀第3四半期）、2号窯が難波IV古（7世紀第4四半期）、1号A窯が難波IV古段階から新段階（7世紀第4四半期～8世紀初め）ということになる。但し、難波編年案に示された暦年代がそのまま当該窯跡群の各窯の操業年代にそのまま適用できるかどうかは、生産地と消費地、地域差の問題もあり、さらに詳細な検討が必要である。

なお、大津市山ノ神窯跡群は、4号窯（古）を除く各窯の須恵器は汁谷窯跡群の2号窯および1号A窯の須恵器と共通する構成器種を有する。その型式は飛鳥Ⅲとされ、大津遷都（667年）後の7世紀後半代の操業年代が与えられて（文献12）おり、難波編年を参考にした汁谷2号窯より古く実年代が与えられている。しかしながら佐藤隆氏によれば、山ノ神窯跡群の須恵器型式は難波IV古段階に当たるとされ<sup>註1</sup>、難波編年を参考にすれば年代的な隔たりはそれほどないものと理解される。



挿図40 難波編年図（文献10より）および汁谷窯跡群出土須恵器 S=1:8



## 第3節 汁谷窯跡群における地震痕跡について

### 1. SH201の噴砂痕跡と出土遺物の問題

#### 【SH201出土遺物の問題】

SH201は貼り床面が地震に伴う噴砂によって引き裂かれている。噴砂であることは寒川氏に来跡のう え、確認していただき、第5章第1節に所見を頂いた。埋土層は噴砂によって引き裂かれていないの で、住居放棄後に堆積したものと考えられ、地震は住居使用時、もしくは廃絶まもない時期に発生した 可能性が高い。住居跡の年代を特定するのは出土土器群であるが、以下の通りいくつかの問題がある。





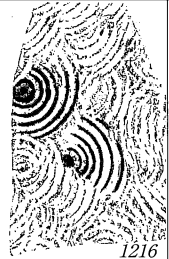






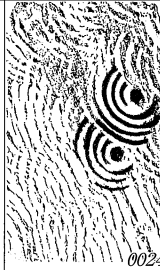


まず、周溝内出土の須恵器高杯(1426)や甕(1427・1428)は住居に伴う遺物群であるが、甕類は口 縁部を欠いており、高杯についても完形品に近いが、杯類と違って時期の特定が難しい。

また、埋土層は、黄灰細砂質シルト層を主とする住居廃棄後の流入土である。この層からは須恵器の 杯・蓋(1419~1423)類が出土しているが、このうちの杯H1921・1922が1号B窯MN層期の遺物と見 なされるのに対して、かえりのある須恵器の蓋1419は2号窯もしくは1号A窯期の時期の遺物の可能性 が高い。従って、両者は同時期の所産品と見なし難く、黄灰細砂質シルト層は異なる時期の遺物を巻き 込んで住居内に堆積した可能性が高いが、どちらが住居に伴う遺物かは発掘時においては識別できてい ない。SH201のすぐ横の斜面には複数の異なる時期の窯の灰原が重なっており、遺構内には新古どち らも時期の遺物の流入の可能性もある。特に、須恵器杯H身の1921は底部に焼成時に生じた大きな亀 裂痕を伴う明らかな破損品で、日常の什器の代替品としても使用し難い遺棄品である。灰原からの流入 の可能性が高く、住居に伴うものとは考え難いが、断定には至らない。このように、埋土層包含の遺物 についても確実に住居に伴う須恵器の特定ができない以上、年代の特定には至らない。

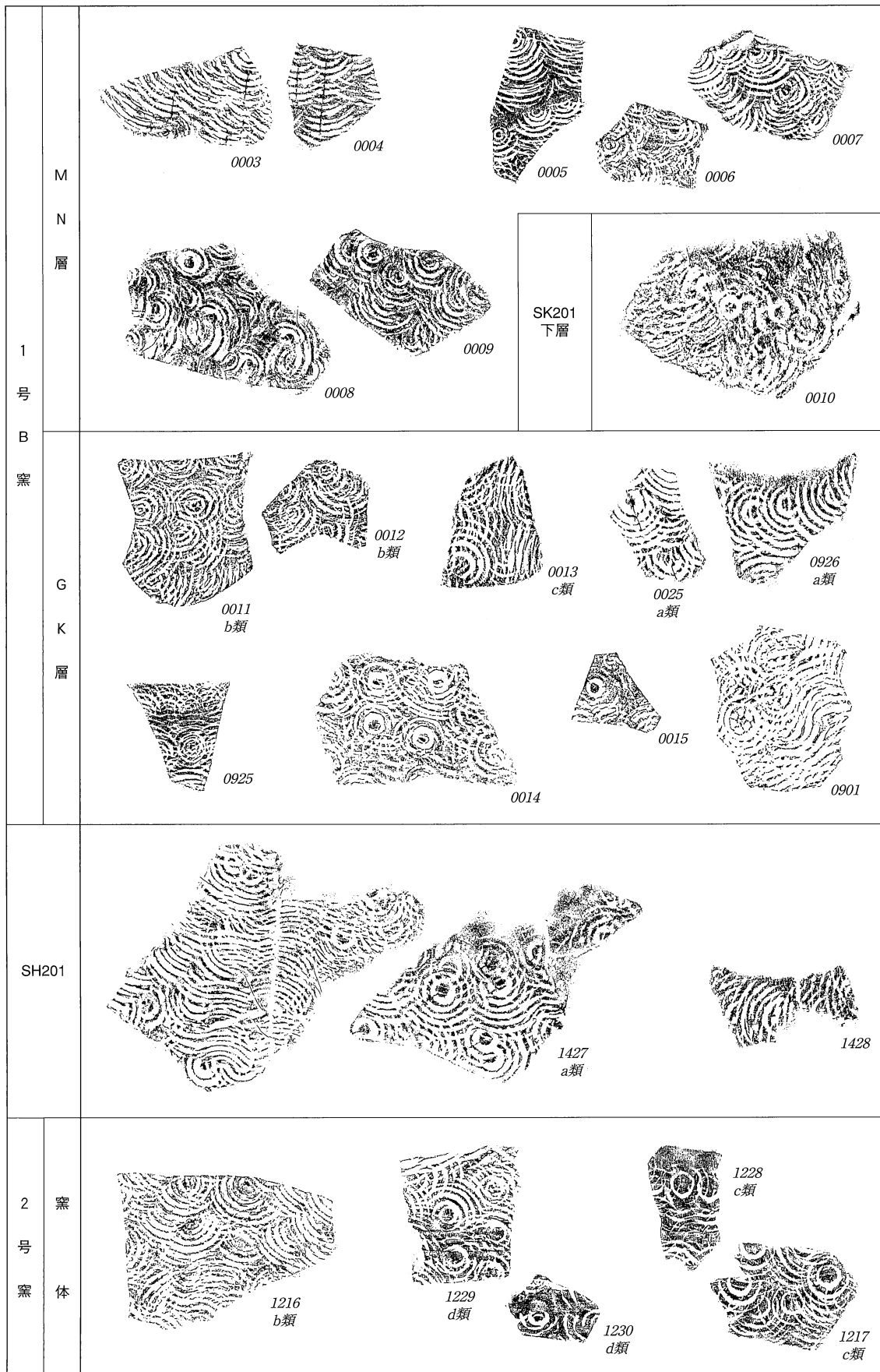
#### 【各窯出土甕の当て具痕】

そこで、甕の叩きの当て具痕に着目し、当て具痕から窯の特定を試みた。但し、①甕の出土点数は形 が大きい故に、同一固体の破片が多数存在すること、②当て具痕同士の重なりにより、当て具の抽出が 難しいこと、③灰原の性格上、遺物の混在は避けられず体部の破片のみでは混入かどうかの見極めが難 しいこと、④時間的な制約もあり、すべての種類の当て具痕を抽出したのではなく、識別可能なもの に限られている、などの問題点を含むが、挿図42と挿図43に抽出した当て具痕の拓本の一覧を作成し、 これをもとに同じ当て具痕が複数の窯跡・層・遺構にまたがるものを挿図41に提示した。

このうちのa類については本項で問題にしているSH201出土の甕の当て具痕であるので、次項で述べ ることとして、まず、b類とc類の当て具痕から見ておきたい。b類とc類の当て具痕はGK層と2号 窯出土甕に認められる。2号窯の甕はすべて窯体から出土したものである。また、この類の当て具痕を もつ甕はGK層において一定量存在する<sup>註2</sup>。従って、共通の当て具痕の存在は、GK層操業期から2号窯 操業期へ当て具が引き継がれ、継続使用されたことを示す。それはさらにGK層操業期から2号窯操業 期への時間的な連続性を意味している。このうち、c類の当て具痕は1号A窯においても一定数量認め られるので、1号A窯操業期まで継続使用されていたことになる。d類の当て具痕はGK層では発見さ れていないが、2号窯および1号A窯で出土しており、2号窯操業期に製作され、1号A窯操業期まで 継続使用されている可能性が高い。このほか、e・f類は1号A窯と旧三原町教育委員会A地区出土甕 に認められる当て具痕である。窯跡では1号A窯のみに認められるので、A地区出土甕の一群が1号A 窯で生産されたことを裏付ける。

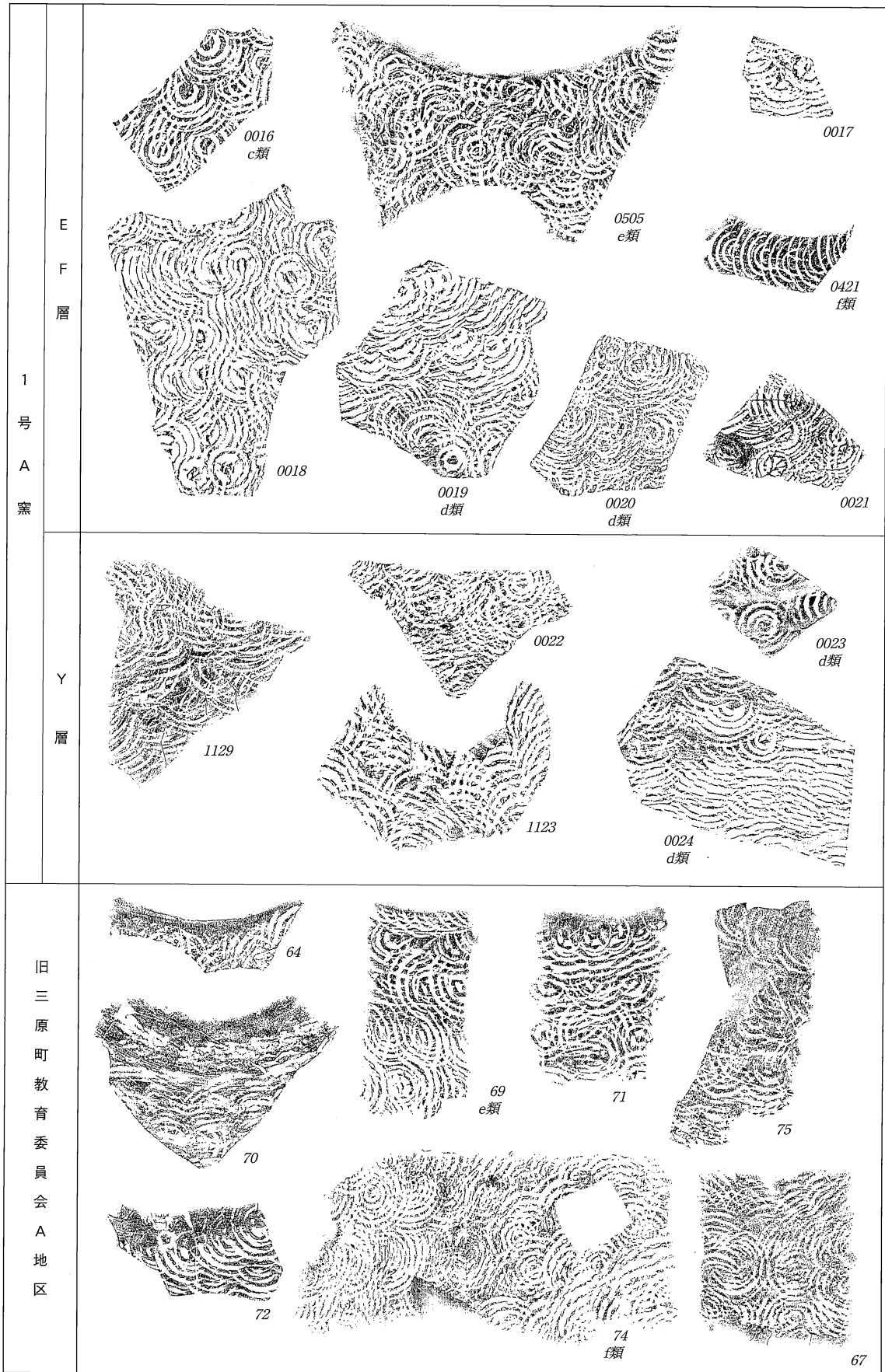
窯・遺構		分	類	a類	b類	c類	d類	e類	f類
SH201				 1427					
1号窯	G層			 0025  0926	 0011	 0013			
	窯体				 1216	 1217	 1229		
1号A窯	E層					 0016	 0019	 0505	 0421
	Y層					 0024			
旧三原町教育委員会A地区								 69	 74

挿図41 出土甕当て具相互関係図 S=1:4



0003~0025 実測図不掲載

挿図42 窯跡各層出土甕当て具痕拓本 (1) S=1:4



挿図43 窯跡各層出土甕当て具痕拓本 (2) S=1:4

### 【SH201出土甕と a 類の当て具痕】

a 類の当て具痕は窯跡では今のところ G K 層のみに認められる当て具痕で、2 号窯では確認できない。問題の SH201 周溝内出土甕 I427 は G K 層出土甕の a 類の当て具痕と照合の結果、一致することが判明し、G K 層操業期の製品である可能性が高いことがわかった。ただ、b 類と c 類の当て具が G K 層操業期から 2 号窯操業時へ引き継がれていることから、a 類の当て具も 2 号窯開窯時に引き継がれて使用されていた可能性もある。従って 2 号窯の限られた出土点数の中では a 類の当て具痕を残す甕が含まれていなかっただけとすると、2 号窯産の可能性も全くないわけではない。しかしながら、2 号窯開窯時には 2 号窯の製品そのものが手元にはなく、しかも、2 号窯の稼働期間はきわめて短いと推測されるので、2 号窯の製品である確率は極めて低く、G K 層操業期の製品である可能性の方がはるかに高い。

ところが、甕の使用時期に関してはどうであろうか。G K 層操業期から 2 号窯操業期への同じ当て具の継続使用が両期の時間的連続性を示していることを考えれば、2 号窯開窯時に 2 号窯の製品そのものが手元にないということは、G K 層操業期に生産された甕 (I427) が使用された可能性があることを示している。従って、出土甕 I427 が G K 層操業期の製品である可能性が高いと指摘できても、使用時期に関しては、G K 層操業期と 2 号窯操業期の両方に可能性がある。すなわち、SH201 の出土甕の当て具痕跡からは噴砂の発生時期が G K 層操業期か 2 号窯操業期のいずれかに絞ることはできるが、限定にまでは至らないということになる。

## 2. 2 号窯における地震被災と推断される痕跡について

### 【2 号窯の被災痕跡】

それでは窯跡では地震の痕跡なり、その影響を受けた跡が認められるのであろうか。この痕跡については、G K 層操業期の窯体が調査区外にあり、現段階では確認できない。2 号窯ではどうか、2 号窯についても、窯体の一部のみの検出に留まっている。ただ、直接の痕跡を示すものといえるかどうかはわからないが、状況的に地震の影響ではないかと思われる点がいくつか指摘できる。

第 1 の点は窯体の残存状況がきわめて悪いことである。その状況については第 3 章第 4 節で報告の通り、側壁の崩落が極めて激しく、壁が残存している箇所においても被熱酸化層の一部が残るが、還元層は右側壁の一部を除き、全く残存していない。埋土中に全く窯壁片が含まれていないので、検出当初は新しく構築する窯の壁材の混和材 (シャモット) に利用するために徹底的に壁の剥がしを行ない、その際に背後の基盤層の崩落を伴ったと考えた。ところが、シャモットは砕いて粉に近い状態にして混和するので、利用するのはスサ混じりの粘土を主体とした天井架構土で、地山が被熱で硬化した側壁の還元部の砕き取りまでは行なわない。そのかかる手間はもとより砕き取ったとしてもそれをシャモットにするために細かく砕く手間を考えると当然のことである。然るに、本窯の場合は地山の硬化還元部がほとんど認められないのである。右側壁に表面が還元した基盤岩の一部が残存しているので、側壁は素掘りのままで、粘土で被覆した形跡は全く認められない。従って、本来、剥がす必要のない側壁の地山の硬化還元部が存在しないということは、人的行為以外の要因を考えざるを得ない。その要因とは具体的には地震の発生ということになる。

このことを示す痕跡として、第 2 節で報告した焚口側の被熱硬化層 (幅約 10cm) のずれがある。この硬化層は基盤層から剥離し、全体が内側に傾くだけでなく、左端の一部が左隣の側壁前に重なっており、前後左右にかなり大きな土圧と振動を受けていたことを示している (遺構図版 9-g 参照)。寒川氏

のご教示によると地震が発生した場合、山の標高の高い側にある壁は上方からの大きな圧力を受けやすいということである。本窯の場合、右側壁が山の標高の高い側にあり、左側壁が標高の低い側（平野部側）にある。右側壁の焚口部の残存壁のずれと燃焼部の側壁背後の地山土の崩壊はそのような圧力を受けたということである。また、汁谷窯跡群周辺の地質は和泉層群北阿万累層に分類され、砂岩および砂岩優性の砂岩泥岩互層で構成されている。窯体の基盤層をみると、砂岩及び砂岩の風化土、泥岩の脈状粘土が互層になって堆積している。従って側壁の露出層は一様ではなく、露出層の背後の層も砂岩であったり、風化土であったりして一様ではない。地山の硬化還元部の不存在はこのような側壁の被熱硬化した露出部と背後の層の土質の違いによって崩落した可能性が高い。もちろん同じ土質であっても、揺れが生じた時には被熱硬化部とその背後の土の間は剥離しやすく、被熱硬化部の方が崩壊しやすいのは当然のことであろう。

第2点は、明瞭な灰原形成のないことから推測される2号窯の操業期間の短さである。舟底状ピットの埋土の状況から推測すると焼成回数は恐らく2回程度である。窯体の舟底状ピット内から出土した須恵器や窯壁片の焼結状態はきわめて良好である。全体に自然釉がかかっている破片もあるので、窯内の温度は1200℃以上上がっており、窯体の構造上に問題があったとは思われない。短期間での放棄について考えられる理由としては、窯体の損壊以外に考え難い。通常の窯の傷みは部分的な補修で済むはずであり、部分的な補修では済まないくらいの大きな損壊が生じたものと考えざるを得ない。

第3点は窯体埋土中での窯壁片および硬化還元部の不存在から推測される徹底した窯体内の清掃行為である。私達は当初は天井架構壁の落盤片のないことから、シャモット材の採取の行為のみを想定していたが、徹底した窯体内の清掃の状況は、2号窯の工人達が、当初、窯体の全面的な修復を試みようとした結果を示すものと判断される。恐らく清掃を行なってみたものの天井のアーチ部を支える窯壁背後の地山の崩壊が著しく、最終的に修復を断念して窯体を放棄し、隣に1号A窯を新しく構築したものと判断される。

以上の観点から2号窯の窯体は修復不可能な損壊を受けたものと推断され、その損壊は人為以外の大きな力によるもの、すなわちSH201における噴砂の存在から液状化現象を伴う大地震以外にはあり得ないと判断する。

#### 【2号窯出土遺物の実年代からの白鳳南海地震被災の検討】

2号窯と住居SH201が地震の被災に遭ったとすると、年代的にみて天武13年（684年）の白鳳南海地震（第5章第1節、寒川氏寄稿）による被災の可能性が最も高いが、2号窯の須恵器の年代が果たして684年の白鳳南海地震の発生年代と合致するのかどうかということを次に検証しておきたいと思う。

2号窯の須恵器の型式は、本章第2節で検討した通り、佐藤氏の難波IV古段階と並行すると考えている。難波IV古段階は定点年代を694年以前とし、およそ7世紀第4四半期の幅で考えられている。2号窯が被災した可能性の高い白鳳南海地震発生年の684年はこの7世紀第4四半期の幅の中に納まることになる。また、飛鳥編年との対比においても、2号窯の須恵器形態を飛鳥Ⅲ段階の大官大寺下層SK121（文献17）から飛鳥Ⅳ段階の藤原宮SD1901A（文献18）の間におけば、684年という年代もこの型式編年の幅のなかで納めることが可能であろう。また、2号窯放棄の後に構築された1号A窯の須恵器も難波IV古段階に該当させているが、2号窯の操業期間を短期間とし、2号窯の損壊後、時間を置くことなく1号A窯を構築し、生産を再開したとすれば、684年を挟んだ前と後ろの年代ということで、型式差を生むほどの時間的な差はなかったものと判断される。

## 第4節まとめにかえて

### 1. 淡路島の窯跡群と汁谷窯跡群

汁谷窯跡は淡路最古の窯（文献15）として知られている。以前は単独窯と考えられていたが、今回の発掘によって3基の窯が重複していたことが明らかとなった。このうちで最も古い1号B窯は、確かな実年代の比定は今後の検討課題ではあるが、7世紀半ば前後と考えており、淡路島で現在のところ最古の窯である。ただ、三原平野周辺には古墳時代後期の古墳群が分布しており、汁谷1号B窯より古く遡る窯跡が存在している可能性はある。三辻教授による淡路島における須恵器の胎土分析がほぼ完了し、淡路領域が確定しているため、他の生産地との判別が可能となった（第5章第2節）。今後、形式的に汁谷より遡る須恵器の胎土分析が行なわれれば、結果によっては汁谷窯跡より遡る窯跡の存在の可能性が出てくる。

汁谷では7世紀中頃前後に開窯し、継続して7世紀末頃まで生産が行なわれている。洲本市の庄慶山より早く開窯し、庄慶山1号窯と同時期かその直前に終了している。庄慶山1号窯の杯Bをみると高台の作り方が汁谷1号A窯の杯Bと共通しており、汁谷窯跡群との関係を窺わせる。工人の移動があったかどうかはともかく技術の伝播は行なわれたとみるべきであろう。

また、汁谷窯跡群周辺では次の8世紀後半の戸川池窯まで生産が行なわれていない。洲本市大野では庄慶山1号窯の北700mの地点に藤原宮の瓦を生産した<sup>どうじょうじ</sup>土生寺窯などがあり、また、9世紀代の木戸窯

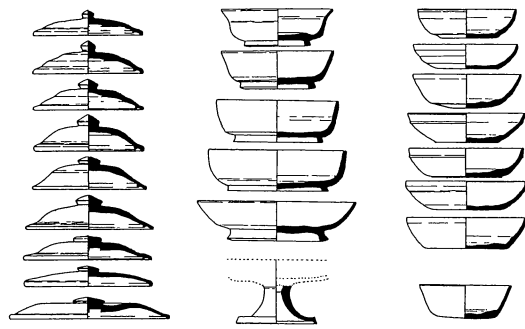


挿図44 淡路島の須恵器窯跡 分布図（元図 地質図徳島）

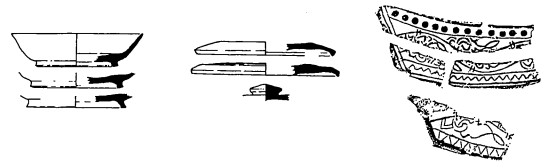
跡も発見されている。汁谷1号A窯の終了前後に洲本市大野周辺に生産の中心が移ったとみてよい。

汁谷窯跡群では古墳時代の器種から歴史時代の新しい器種への転換をみることができる。旧三原郡内に所在する淡路国府がいつ設置されたかはわからないが、汁谷窯跡群における生産器種の転換も淡路国の中心施設が旧三原郡内におかれたことと無関係ではあるまい。このことは南海道大野駅の比定地でもある洲本市内大野地区の庄慶山1号窯の成立においても指摘できることであり、窯跡群の成立が律令期の地方行政制度の整備との密接な関わりがあることを示しているといえる。

庄慶山1号窯跡



土生寺窯跡



挿図45 庄慶山1号窯跡および土生寺窯跡出土遺物  
(文献13より) S=1:8

## 2. 今後の課題

今回の調査では、遺物と遺構の検討から3基の窯跡の存在を想定したが、窯本体の調査は2号窯を除いては行っていない。遺物は4時期に分かれるので窯の数は4基になる可能性もあるが、正確な基数は今後の調査に委ねられる。

唯一窯体部が検出された2号窯についても燃焼部のみの調査に留まり窯全体の規模構造は不明であるが、検出された窯体部の残存状況は通常の須恵器窯とは全く異なる様相をみせている。地滑り等の直接的な痕跡を示すものではないが、側壁の被熱硬化層の剥落等は、2号窯関連住居の可能性の高いSH201における噴砂の存在と遺物の年代観から684年の白鳳南海地震の直接の被災を受けた結果と判断した。寒川氏の寄稿にあるように記録に残る南海地震では天武13年(684)の白鳳南海地震が最も古い<sup>註5</sup>が、考古学での発見例は極めて少なく、貴重な発見例となる。管見では、これまで発掘調査が行なわれた須恵器窯で地震による被災の報告例はなく、今後の窯跡研究のうえでも貴重な調査事例が提供されたことになる。また、今回の地震痕跡の発見によって、当該地域において南海地震にかかわる痕跡が発見される可能性が今後十二分にあることを示したことになる。

遺物の問題に関して述べる。まず、1号窯の遺物については、A窯とB窯という時期の異なる2基の窯の灰原の重複による混在化は避けざるを得ず、一応の分類を行なったうえで、図面・図版を作成したが、帰属窯の難しい器形もあり、本来とは異なる窯に帰属させている恐れは充分ある。この問題についても今後の窯本体の調査を待たざるを得ない。また、GK層における杯Hの上下天地逆転形態(蓋Gh、杯Gh)については、北九州諸窯や北陸で指摘されているように、杯H身の逆転の焼成は蓋の意識として製作されたものと判断した。本例では、明瞭な自然釉の付着状況から上下天地逆転として従来の杯H形態と区分できたが、もし、自然釉がなければ、杯Hの最終形態としていたであろう。事実、GK層においても釉のないものについては蓋か身か迷うものも存在しており、すべてを上下天地逆転として



とらえるべきかどうか結論を見出せていない。まして、遺跡から出土した場合、どちらが上か下かは区別がつかないのが現状であろう。生産地としては蓋として生産されていても消費地では身として使用される場合もあろうし、その逆の場合もあろう。ただ、地方窯においては、古墳時代から歴史時代への器種の転換の過渡的状況として、杯Gの導入に付随して杯Hの上下天地逆転現象も、起こり得ることも想定すべきではないかと思われる。

ところで、G K層操業期と2号窯の間では、甕の当て具の継続使用から判断されるところの時間的な連続性が想定されるが、構成器種に関しては一見不連続のように見える。G K層の杯H形態を上下天地逆転形態と見ずに、従来の杯Hと認識した場合では1型式分の空白期間が存在しているようにも見えてしまう。構成器種の不連続とは、具体的には杯H形態の消滅と定型化した杯Bの蓋身の突然の出現を指すが、陶器古窯址群のように中央に位置する窯跡群ではともかく律令初期の地方窯においては漸次的な器種構成の変化ではなく、極端に言えば、ある日突然、新器種が中心器種となり、古い器種に取って代わるということもあり得るのではないかと思われる。当該窯の場合、淡路国府の間近の地に位置しており、官に関わりの深い遺物も出土している。地方窯における突然の杯Bの出現と量産化はこのような律令期の地方行政組織の設置と密接な関係があるものと考えたい。<sup>註6</sup>

次に2号窯は操業期に白鳳南海地震が発生し、窯体が破損したことにより操業を停止したと判断した。このことによって、出土資料点数が少ないが、2号窯の須恵器に白鳳南海地震の発生年代の684年という定点年代が与えられることになり、7世紀後半代の須恵器編年研究のうえで、きわめて貴重な資料となるが、2号窯の地震被災という前提が崩れるとその根拠が失われてしまう危うさがあるのも事実である。それだけに2号窯の被災痕跡の認定には他の要因の可能性も含め種々検討のうえ、慎重を期したつもりではある。確実に地震の被災と断定するには、2号窯全体の発掘と今後の類例の発見を待たざるを得ないが、2号窯の窯体の状況は、稼動期間の短さも加えて地震の被災以外に考え難いと判断している。7世紀代の須恵器については、従来の編年観に対して新しい見解が示されていることも事実である。今回の報告では、時間的な制約もあり、これまで提示されている多くの編年案の検討を十分に踏まえたというわけではない。従って、今回はあくまでも684年という実年代案の提示ということであって、確定に至るには、今後、より多くの研究者による遺物の検討を経る必要があることはいうまでもない。

このほか、今回実施した炭化材の分析では2次林を形成する松類やアラカシ、シイ類などの同定結果が得られた。現代の陶芸の常識では火力のある松材が用いられるが、古代においては、特に松材に固執しておらず、伐採可能な雑木を用いている。このことは長野県豊科町の上ノ山・菖蒲平窯跡群における同定結果（文献19）などでも明らかである。また、植生の変化については今回の花粉分析では良好な結果は得られていないが、当該窯跡群のように平野部に面した丘陵部においては絶えず生活用の燃料採取のため伐採が行なわれたはずであり、2次林の形成が須恵器生産によるものかどうかは明らかにし得ないのもやむを得ないと思われる。

註1 佐藤隆氏は山ノ神窯跡群の須恵器を、難波編年では難波IV段階にあたとされている。また、同氏はこれまでに大津宮関連とされてきた土器群は、大津宮に関連する確たる考古学的根拠はないとして、同氏の検討してきた編年観から670年～680年を中心とする年代を想定されている。（文献11）

註2 2号窯の灰原の形成はほとんどないので、2号窯からG K層灰原への甕の混入の可能性はきわめて低い。

註3 SH201の噴砂は住居の廃絶まもない時期に発生した可能性もあるわけで、この場合は、G K層段階の操業時の住居遺構となる。

註4 近年提示された飛鳥編年は相原嘉之氏によれば（文献17）、以下の通りである。

飛鳥Ⅰ（小墾田宮推定地SD050、川原寺SD02、山田寺整地層、飛鳥池遺跡他）590年代～640年代

飛鳥Ⅱ（坂田寺SG100・水落遺跡石組堆積層出土土器）640年～660年

飛鳥Ⅲ（大官大寺SE116・SK121他）660年～670年

飛鳥Ⅳ（藤原宮SD1901A他）670年代に遡る可能性を含みながら680年～690年を主体とする。

これに対して小森俊寛氏によって提示された試案（文献18）は以下の通りである。

飛鳥Ⅰ＝A型式（小墾田宮推定地SD050、川原寺SD02）600年前後～630年代

飛鳥Ⅱ＝B型式（山田寺整地層、飛鳥池遺跡他）630年代～650年代

飛鳥Ⅲ＝C型式（坂田寺SG100・水落遺跡石組堆積層出土土器）650年代～670年代

飛鳥Ⅳ＝D型式（大官大寺SE116・SK121、藤原宮SD1901A他）670年代～690年代

両編年案は以上の通りであり、編年区分や絶対年代の設定でやや違いがある。ここではこれらの編年案に対して評価する立場ではないので、両編年案と対比させる形で汁谷窯跡群の各窯を当てはめてみる。

MN層 —— 飛鳥Ⅰ後半～飛鳥Ⅱ、小森編年B型式

GK層 —— 飛鳥Ⅱ、小森編年C型式

2号窯 —— 飛鳥Ⅲ～Ⅳ、小森編年D型式

1号A窯 —— 飛鳥Ⅲ～Ⅳ、小森編年D型式

註5 SH201の噴砂跡の発見が調査終了間際であり、この時点では2号窯に地震被災の痕跡の可能性はあることは全く想定していなかった。2号窯に地震被災痕跡の可能性が高いとわかったのは調査終了後の本報告書作成時においてである。従って、2号窯の調査時においては、シャモット材のための架構材の剥ぎ取りによるものと考え、記録図面等もそのような観点で作成していたために、掲載図面等に地震痕跡の提示としてはかなり不備があるものになったことは否めない。

註6 このような状況は例えば大津市山ノ神窯跡群における大津遷都以降の生産様相の変化とも共通するものと考えられる。

#### 文献註

1. 田辺昭三『須恵器大成』1981年 角川書店
2. 森内秀造・仁尾一人・岡本一秀・高木芳史『志方窯跡群Ⅱ 一投松支群一』2001年 兵庫県教育委員会
3. 門田誠一・浜中有紀・二宮早諸理他『壺ノ谷窯址群・桑ノ内遺跡発掘調査報告書』2000年 佛教大学校地調査委員会
4. 小田富士雄・武末純一他『天観寺山窯跡群』1977年 北九州市埋蔵文化財調査会
5. 舟山良一『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会 1992年
6. 舟山良一「第2編 原始・古代 第4章 牛頸窯跡群」『大野城市史』上巻 2005年
7. 舟山良一・佐藤昭則『牛頸中通遺跡群Ⅱ』大野城市教育委員会 1982年
8. 望月誠司「北陸地域における飛鳥時代須恵器の様相」『白門考古論叢 一稻生典太郎先生追悼考古学論集』2004年
9. 森内秀造・長濱誠司・松岡千寿他『年ノ神古墳群』2002年 兵庫県教育委員会
10. 佐藤隆「古代難波地域の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究 十一』2000年 財団法人大阪市文化財協会
11. 佐藤隆「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館 研究紀要』2000年 大阪歴史博物館
12. 須崎雪博・田中久雄『山ノ神遺跡発掘調査報告書Ⅲ 一重要遺跡山ノ神遺跡に係る確認調査一』2005年 大津市教育委員会
13. 西口壽生・玉田芳英「大官大寺下層土坑の出土土器」『奈良文化財研究所紀要 2001』2001年 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所
14. 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』1978年 奈良国立文化財研究所
15. 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 1977年
16. 浦上雅史「X 淡路島」『古代の土器 5-2 7世紀の土器（近畿西部編）』1998年 古代の土器研究会
17. 相原嘉之「I 大和 飛鳥・藤原地域の土器」『古代の土器 5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』1998年 古代の土器研究会
18. 小森俊寛「概説」『古代の土器 5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』1998年 古代の土器研究会
19. 田辺昭三・萩本勝・山田真一他『筑摩東山 上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告』1999年 豊科町東山遺跡調査会・豊科町教育委員会

# 報告書抄録

ふりがな	しるたにかまあとぐん・しるたにいせき							
書名	汁谷窯跡群・汁谷遺跡							
副書名	広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第298冊							
編著者名	森内秀造・藤田淳・寒川旭・三辻利一・山崎裕司・(株)古環境研究所							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5 TEL078-531-7011							
発行年月日	西暦2006(平成18)年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査番号					
汁谷窯跡群 汁谷遺跡	南あわじ市 神代黒道	2895156	2004143 2004144	34度 16分 20秒	134度 46分 45秒	本発掘調査 20040525～ 20040801 確認調査 20031126～ 20031127	812㎡	広域営農団地 農道整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
汁谷1号A窯 汁谷1号B窯 汁谷2号窯 汁谷遺跡	須恵器 窯跡 住居跡	古墳時代末～ 飛鳥時代		灰原 窯体 住居跡 溝 土坑		須恵器 弥生土器・石器	天武13年の白鳳南海 地震時と推測される 噴砂とそれによって 損壊した可能性の高 い窯跡 窯跡に関わる住居	

# 付 載 圃場整備事業に伴う汁谷窯跡・汁谷遺跡の発掘調査概要

南あわじ市教育委員会 山崎裕司

## 1. 調査の経緯

圃場整備事業（県営土地改良総合整備事業）に伴い、平成13年度に分布調査、平成14年度に遺跡範囲確認調査を行った。特に確認調査区44では、耕地畦畔斜面に沿って高さ約1 m、幅約8 mの断割を行ったところ、灰原と考えられる堆積層を確認することができた。調査区26・32においても、須恵器を含む包含層が確認された。また調査区8・12では弥生時代中期の土器を含む包含層を確認し、弥生時代の遺跡の存在も明らかになった。これらの結果を基に調整を行い、遺構・包含層に影響が及ぶと考えられる範囲について平成14年度に本発掘調査を行うことになった。

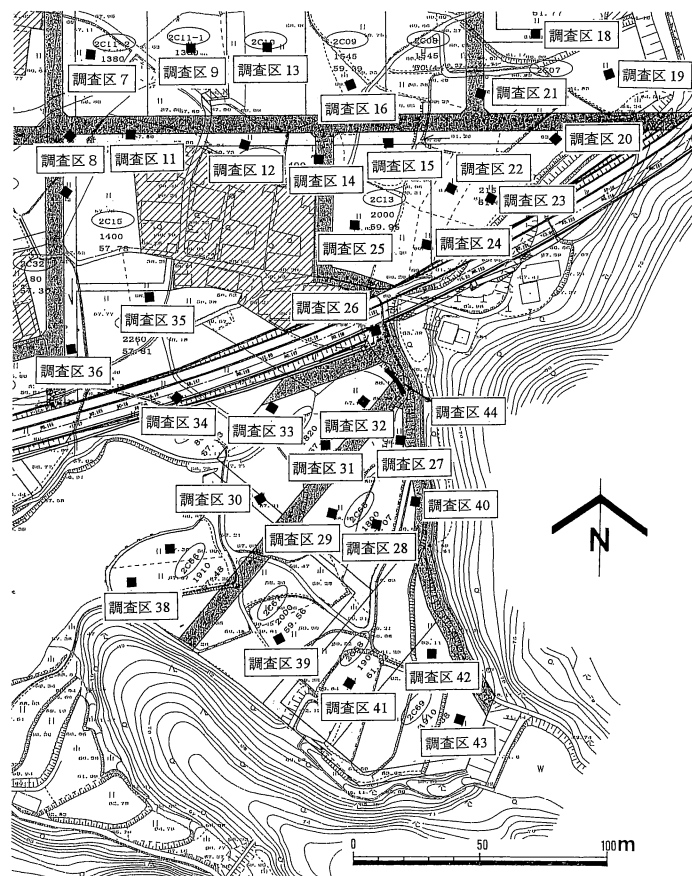
## 2. 本発掘調査の概要

確認調査区44周辺のA地区、調査区8周辺のB-1調査区、調査区12周辺のB-2地区で本発掘調査を行ったが、ここでは汁谷窯跡に関係するA地区のみ概要報告を行いたい。

A地区は南西に向かって傾斜する山裾に位置し、兵庫県教育委員会調査区とは農道を隔て南西に隣接する。A地区南西側の暗渠1・2は耕地に伴うもので、暗渠2より南西側では近現代の耕地造成によって灰原等は完全に削平されている。暗渠2の北東壁に続く斜面が確認調査区44を設定した耕地畦畔部分で、1 m以上に及ぶ高低差の為、畦畔の一部が地滑りをおこしている。暗渠2の北東側では灰原及び窯跡と関連すると思われる遺構が検出された。灰原出土遺物は整理作業中で詳しいことは述べられないが、杯Bに対応する新しい時期の灰原がかなりの範囲を覆っていると考えられる。ただしSD110周辺の灰原下層では蓋杯Hのみが出土する層が見られ、調査区東端にわずかにこの時期の灰原が残っている可能性がある。

### SD101

南西方向に向かって流れる自然流路である。北東側が極めて浅く、後述するように平坦部造成の影響を受けたと考えられる。切り合いからSD103より古いと考えられる。出土遺物は少ないが、蓋杯はHのみの出土である。



挿図46 確認調査区設定図 S=1:3,000

### SD102

SD101と同じような経路で流れる自然流路であるが、SD101よりも浅く、北東側は平坦部造成の影響により完全に削平されているようである。切り合いからSD103より古いと考えられる。窯壁片が多く出土している。出土遺物からSD101より新しいと考えられる。

### SD103

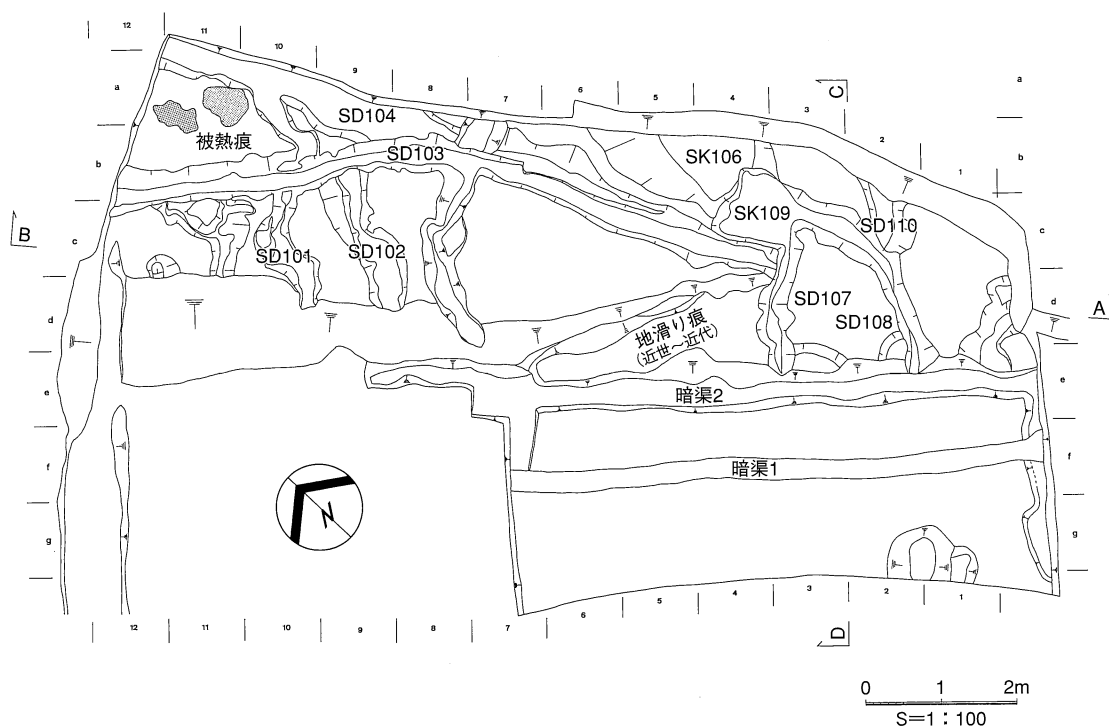
SD103は山裾に沿って人為的に掘削された溝である。SD103周囲には山裾を削りだしたと思われる平坦面が見られ、平坦面造成後にSD103が掘削されたと考えられる。SD104と交わる付近の溝底部が最も高く、南東と北西の双方向に緩やかに低くなっていく。北西方向へは兵庫県教育委員会調査区SD201もしくはSD206に続くと思われる。南東方向については、SD107に流れ込んでいた可能性が考えられる。杯Bが出土していることから新しい遺構と思われる。平瓶は比較的残りの良い2点が出土している。

### SD104

平坦部の東端を南方向へ流れる自然流路と思われる。SD101・102のようにSD103との切り合いが見られず、SD103に流れ込んでいたのではないかとと思われる。上述SD103出土の平瓶2点はSD104が流れ込む付近で出土している。杯Bが出土していることから新しい遺構と思われる。

### SK106

SK106は全体を検出していないが、長円形の土坑状を呈すると思われる。遺構内からは極めて多くの窯跡片と大型の甕が集中して出土している。甕は概して残りが良く、流れ込みでなく当初からここに置かれていたと考えられる。体部上半が陥没し、また自然釉が厚くかかっているものが大半である。杯Bの出土は確認していないが、これらの甕は杯Bと対応する時代と思われる。



挿図47 A地区遺構図

### SK109

SK106の底面より一段下がり、小さな平坦面となっている。SK106との切り合いは確認できず、同時期の連続する遺構であったと思われる。またSD103・107・108とも切り合いは見られない。堰状の小さな高まりを境にSD103の溝部分とSK109の平坦面にわかれており、SD107・108はSK109に繋がる流路と考えられる。

### SD110

流路状の遺構で、蓋杯はHのみが出土していることから、古い遺構である可能性が高い。先に述べたように、遺構の周辺の灰原下層では蓋杯Hのみが出土する層が見られ、平坦部の造成やSK106・109、SD107・108による削平を免れた古い時期の灰原が残っている可能性がある。

## 3. まとめ

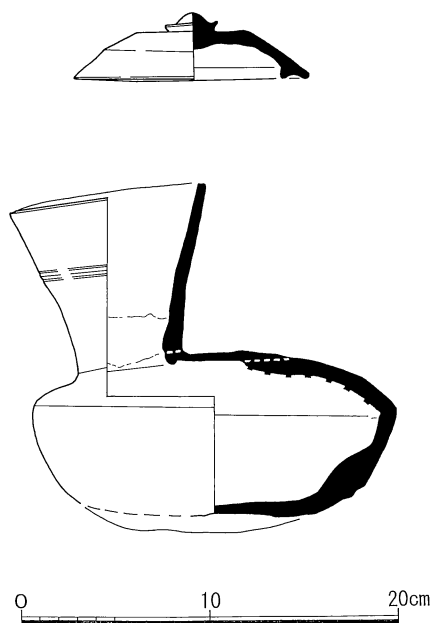
蓋杯Hのみが出土し、およそ1号B窯の古い方と対応する時期の遺構の可能性が高いのはSD101・110である。平坦部は兵庫県教育委員会調査区SK201周辺の平坦部からの延長と考えられることから、平坦部造成はおそらくSK201の時期まで遡る可能性が高い。ただしSD101・102は平坦部造成によって削平されたと考えられるため、SK201の時期では平坦部はSD101の北西側程度までしかなく、1号A窯の段階に至り、SD103やSK106・109等の遺構と関係して南東に拡張したと考えた方が良いと思われる。

SD103、SK106・109、SD107・108等、調査区のほとんどの遺構は1号A窯と対応する新しい遺構である。古い遺構のSD101・110からは窯壁片が出土していないのに対して、杯Bを出土する遺構からは窯壁片が一定数出土し、特にSD102、SK106からの出土が顕著であった。

平坦部北側では被熱痕が検出されており、窯と関係する何らかの作業がそこで行われていたと思われる。平坦部内のSD103はSD104を通じて流れ込む山水を利用する意図があったとも考えられる。

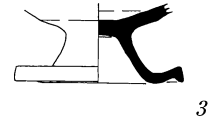
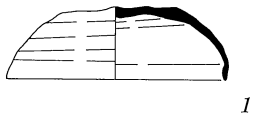
また平坦部は丁度SD103の南東端で終わっており、ほぼ同じ高さの平坦面をなすSK109がSD103を挟んで東側に位置し、続いて階段状の段差を経てSK106へ続く。これらのことから平坦部はSK109・106を通じて1号A窯の新しい方へ至る通路の役割もはたしていたのではないかと考えられる。SK106出土の甕はおそらく失敗作であろうが、遺構西側の肩部からの出土が多く、通路の片側に寄せて置かれていたのではないだろうか。

2号窯と対応するような遺構や灰原は今のところ確認できていない。

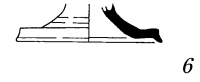
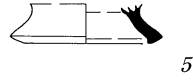


挿図48 灰原4-b中層 出土遺物

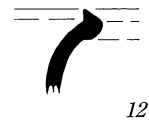
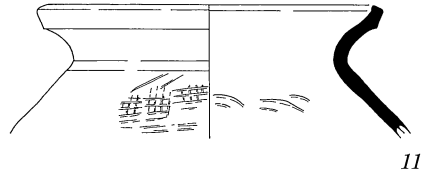
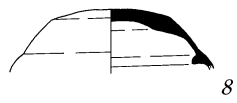
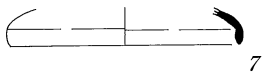
SD101



SD102



SD104



SD103

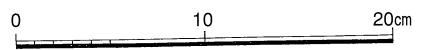
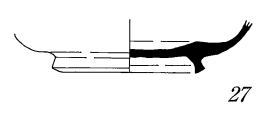
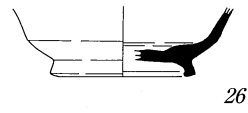
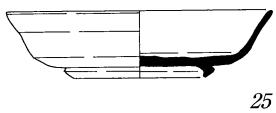
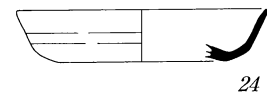
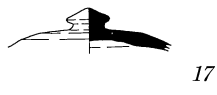
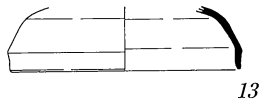


插图49 A地区出土须惠器(1)

SD103

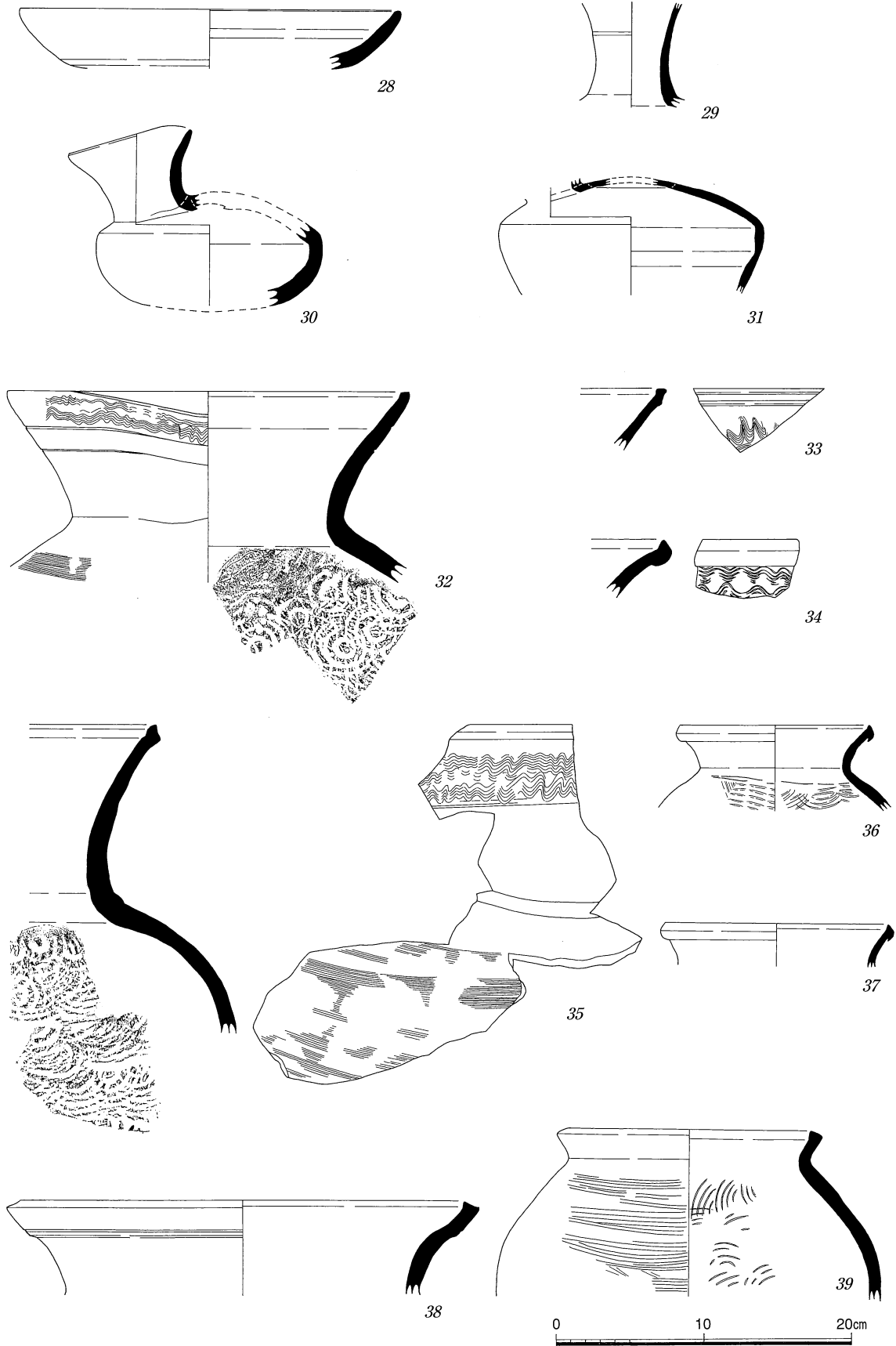
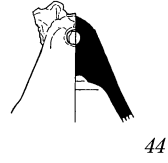
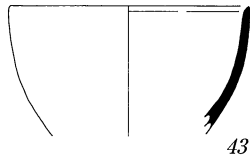
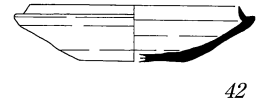
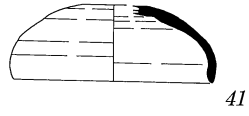
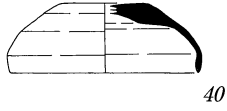


插图50 A地区出土须惠器(2)



SD110



SK106

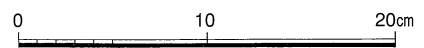
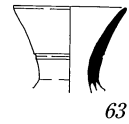
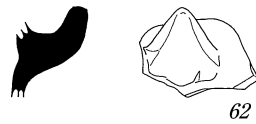
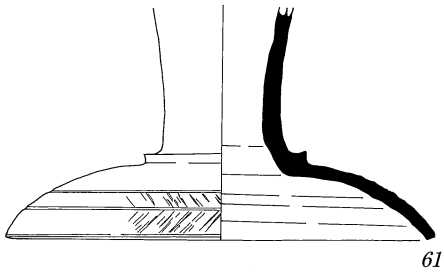
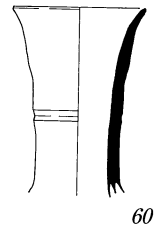
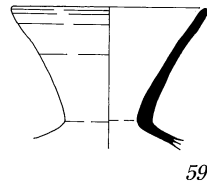
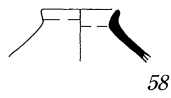
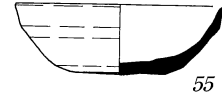
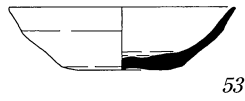
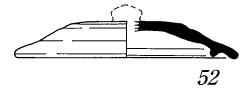
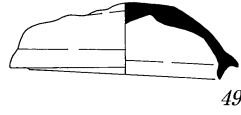
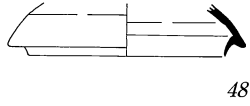
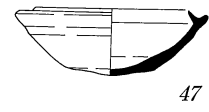
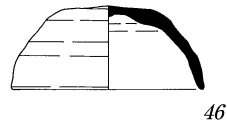
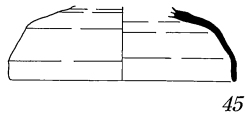


插图51 A地区出土須恵器(3)

SK106

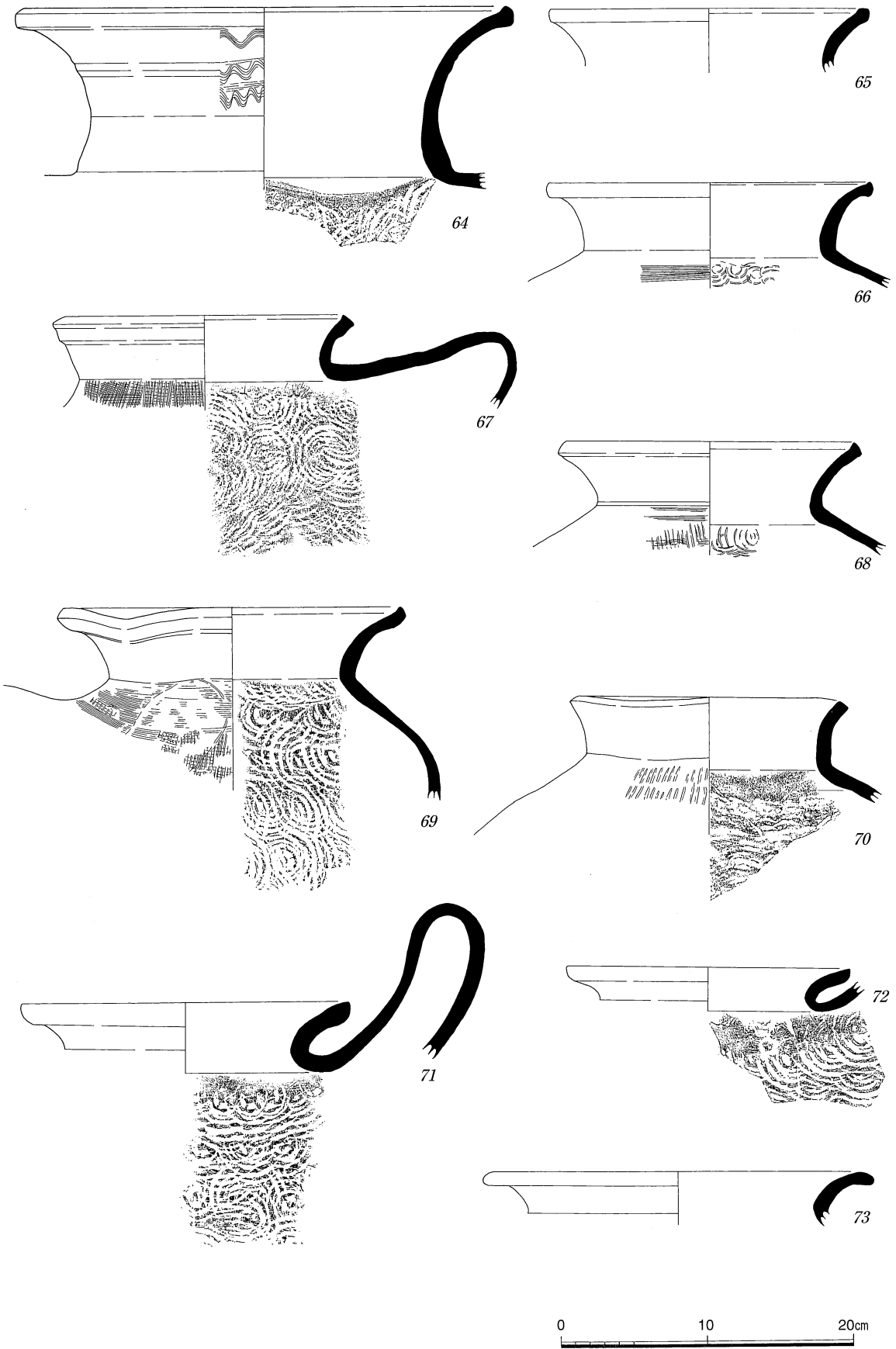
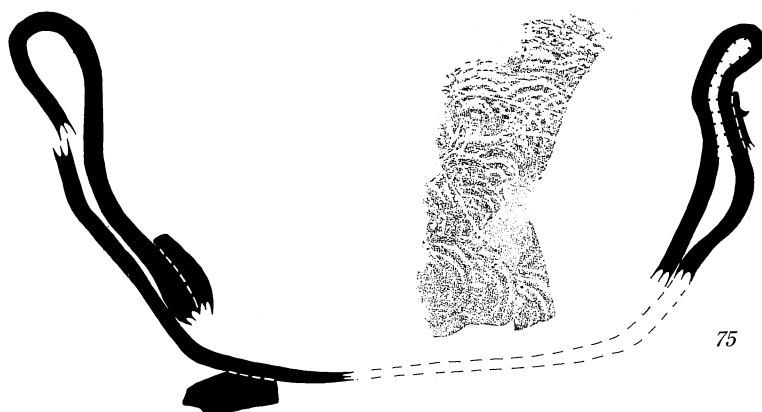
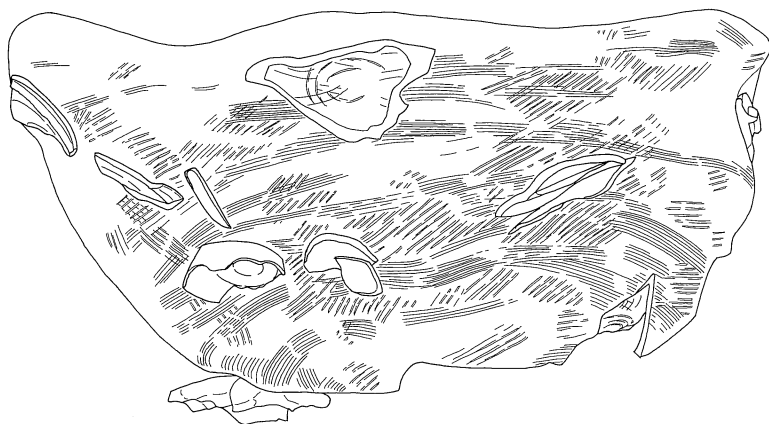


插图52 A地区出土须惠器(4)



0 10 20cm

插图53 A地区出土须惠器(5)



A地区  
灰原遺物出土状況  
(南東から)



A地区  
遺構完掘状況(南東から)



A地区  
SK106・109付近完掘状況  
(南から)

写真13 A地区遺構

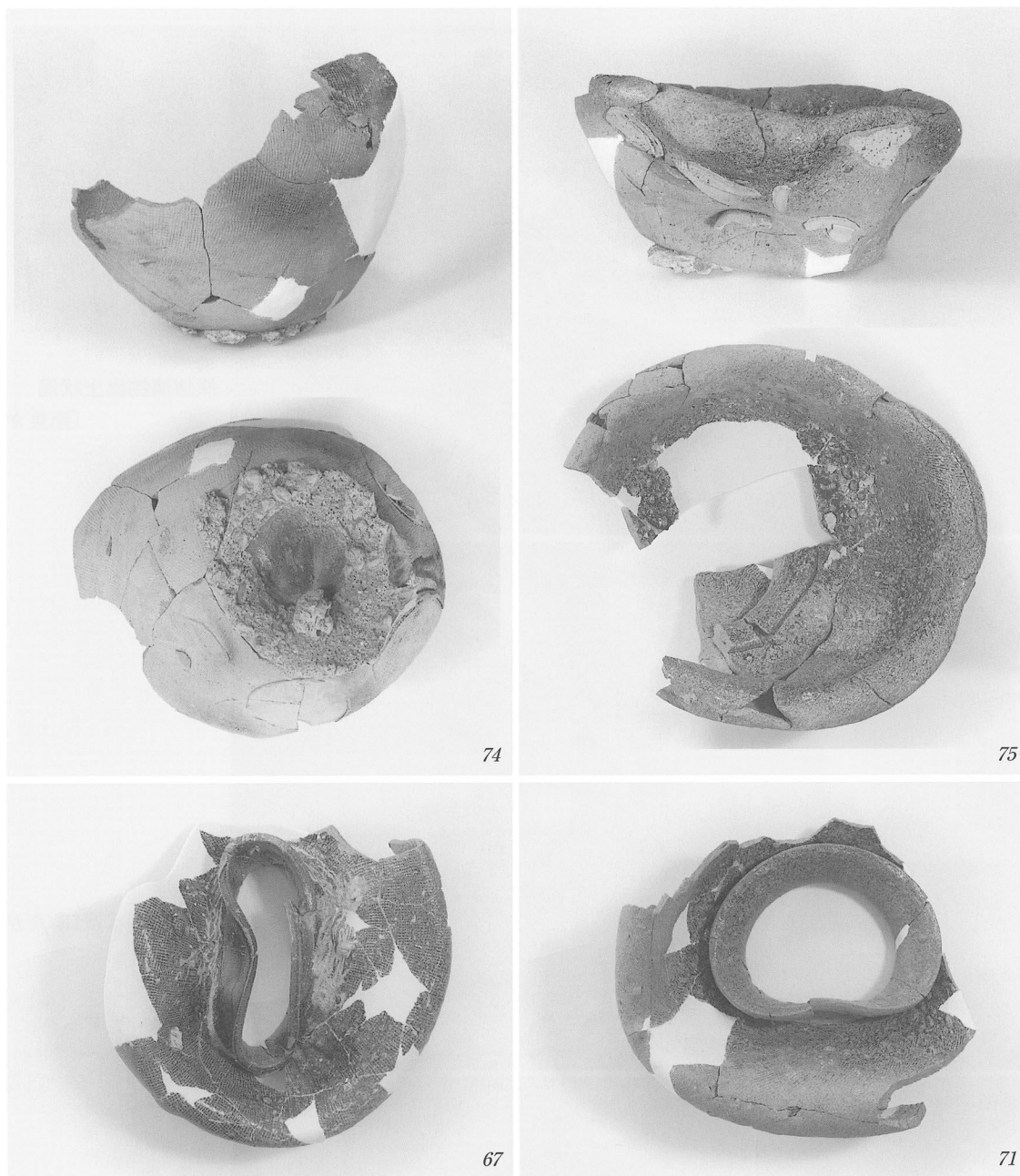


写真14 A地区出土甕

# 出土遺物一覽表

汁谷1号窯灰原

報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
0101	須恵器	蓋B	3	Y	全区	(11.1)	—	—
0102	須恵器	蓋B	3	Y	全区	(15.3)	—	—
0103	須恵器	蓋B	3	Y	N1区	(19.2)	—	—
0104	須恵器	蓋B	3	Y	N1区	(12.0)	—	—
0105	須恵器	蓋Gg	—	Y	全区	(9.9)	—	—
0106	須恵器	蓋Gg	3	Y	N1区	(10.3)	—	—
0107	須恵器	蓋Gb	—	Y	全区	(11.3)	—	—
0108	須恵器	蓋Gb	—	Y	全区	(12.2)	—	—
0109	須恵器	蓋Gb	3	Y	N1区	(11.2)	—	—
0110	須恵器	蓋Gb	3	Y	N2区	(12.5)	—	—
0111	須恵器	蓋Gb	—	Y	全区	(14.0)	—	—
0112	須恵器	蓋Gb	3	Y	N1区	(14.2)	—	—
0113a	須恵器	蓋Gb	3	Y	N1区	(13.4)	—	—
0113b	須恵器	杯B	3	Y	N1区	(12.8)	3.6	—
0114	須恵器	杯B	—	Y	S1・S2区	(11.9)	4.2	(6.4)
0115	須恵器	杯B	3	Y	全区	(12.4)	4.2	(7.2)
0116	須恵器	杯B	3	Y	N2区	(13.4)	3.3	8.5
0117	須恵器	杯B	3	Y	全区	(14.4)	3.9	(8.0)
0118	須恵器	杯B	3	Y	S1・S2区	—	3.6	(6.5)
0119	須恵器	杯B	—	Y	全区	—	—	(7.1)
0120	須恵器	杯B	3	Y	全区	—	—	(7.0)
0121	須恵器	杯Gh	4	Y	S区	(10.2)	3.1	(6.9)
0122	須恵器	杯Gh	4	Y	全区	(10.7)	2.9	6.3
0123	須恵器	杯Gh	—	Y	S区南端	(10.7)	3.8	6.1
0124	須恵器	杯Gh	4	Y	S区南端	(12.0)	4.0	—
0125	須恵器	杯Gh	—	Y	全区	(10.6)	4.0	6.7
0126	須恵器	杯Gh	4	Y	S1・S2区	11.0	4.4	6.0
0127	須恵器	杯Gh	—	Y	全区	(11.0)	3.9	(5.8)
0128	須恵器	杯Gh	4	Y	全区	12.0	4.3	7.0
0129	須恵器	杯Gg	4	FK	S区南端	(11.0)	3.2	(7.9)
0130	須恵器	杯Gg	—	Y	S1・S2区	(9.3)	4.7	(5.0)
0131	須恵器	椀	—	Y	全区	(16.8)	(9.1)	—
0132	須恵器	面碗	4	Y	全区	(14.9)	8.4	17.6
0133	須恵器	皿	—	Y	S1・S2区	(22.6)	(3.0)	—
0134	須恵器	高杯	—	Y	S1・S2区	(11.2)	(3.7)	—
0135	須恵器	高杯	—	Y	全区	—	(3.4)	—
0136	須恵器	高杯	—	Y	S1・S2区	—	(4.9)	(9.1)
0137	須恵器	高杯	—	Y	全区	—	(4.0)	(7.8)
0201	須恵器	短頸壺	4	Y	S1・S2区	(5.7)	(4.8)	—
0202	須恵器	短頸壺	—	Y	N1区	(6.0)	(3.2)	—
0203	須恵器	短頸壺	4	FK	S区南拡張部	(11.6)	(1.8)	—
0204	須恵器	壺蓋	—	Y	全区	(10.4)	—	—
0205	須恵器	平瓶	—	Y	N1区	(6.4)	(6.0)	—
0206	須恵器	平瓶	—	Y	全区	(6.8)	(4.6)	—
0207	須恵器	短頸壺	—	Y	S区	—	(10.7)	—
0208	須恵器	甗A3	4	Y	N2区	(32.6)	(7.6)	—
0209	須恵器	甗A1	4	Y	全区	(35.2)	(5.3)	—
0210	須恵器	甗A2	4	Y	N1区	(28.2)	(5.7)	—
0211	須恵器	甗A2	4	Y	全区	(35.6)	(5.2)	—
0212	須恵器	甗A2	4	Y	N1区	(56.2)	(10.6)	—
0213	須恵器	甗C	—	EB	N1区	(16.5)	(5.3)	—
0214	須恵器	甗B	4	Y	全区	(22.7)	(7.4)	—
0215	須恵器	甗B	4	Y	N2区	(18.2)	(7.1)	—
0216	須恵器	甗B	—	Y	S1・S2区	(20.1)	(7.8)	—
0217	須恵器	蓋Gh	—	Y	全区	(12.0)	—	—
0218	須恵器	蓋Gh	—	Y	N2区	(12.5)	—	—
0219	須恵器	蓋Gh	—	Y	全区	(12.1)	—	—
0220	須恵器	蓋Gh	—	Y	S区南端	(13.7)	—	—
0221	須恵器	杯H	—	Y	S1・S2区	(12.1)	(2.5)	—
0222	須恵器	杯H	—	Y	S1・S2区	(11.3)	2.9	—
0223	須恵器	杯H	—	Y	S1・S2区	(13.1)	3.3	(6.6)
0224	須恵器	杯H	—	Y	S2区	(12.1)	3.0	—
0301	須恵器	蓋B	5	E	横断面2	(12.2)	—	—
0302	須恵器	蓋B	5	E	横断面2	(12.8)	—	—
0303	須恵器	蓋B	—	FK	S区南拡張部	(19.7)	—	—
0304	須恵器	蓋Gg	5	D	S2区(中央サブトレ)	(9.8)	—	—
0305	須恵器	蓋Gg	—	EF	N2区(窯体左凹地)	(10.0)	—	—
0306	須恵器	蓋Gg	5	EF	N2区	(10.0)	—	—
0307	須恵器	蓋Gg	—	F	N2区	11.9	—	—
0308	須恵器	蓋Gb	—	F	N2区	11.1	—	—
0309	須恵器	蓋Gb	—	E	横断面2	(13.1)	—	—
0310	須恵器	蓋Gb	—	EF	全区	(12.4)	—	—
0311	須恵器	蓋Gb	—	F	横断面2	(12.9)	—	—
0312	須恵器	蓋Gb	—	F	横断面2	13.1	—	—
0313	須恵器	蓋Gb	—	F	全区	(13.0)	—	—
0314	須恵器	蓋Gb	5	EF	全区	14.3	—	—
0315	須恵器	蓋Gb	—	FK	S2区	13.9	—	—
0316	須恵器	蓋Gb	5	E	S2区	(13.1)	—	—
0317	須恵器	蓋Gb	—	E	N2区	(13.7)	—	—
0318	須恵器	蓋Gb	5	F	横断面2	13.6	—	—
0319	須恵器	蓋Gb	5	F	N1区	16.3	—	—
0320	須恵器	蓋Gb	—	F	N2区	15.6	—	—
0321	須恵器	蓋Gb	—	F	横断面2	—	—	—
0322	須恵器	杯B	5	F	N1区	(10.8)	3.2	(6.3)
0323	須恵器	杯B	—	F	縦断セクション	(11.3)	3.8	(5.8)
0324	須恵器	杯B	—	FK	全区	(12.0)	4.0	(6.0)
0325	須恵器	杯B	—	D	S2区	(12.0)	3.6	(6.8)
0326	須恵器	杯B	5	F	N2区	(12.8)	3.5	(6.5)

報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
0327	須恵器	杯B	5	EF	縦断群内	(13.0)	3.2	(8.3)
0328	須恵器	杯B	5	D	縦断	(13.3)	4.3	(6.7)
0329	須恵器	杯B		F	縦断	(12.8)	3.7	8.7
0330	須恵器	杯B	5	EF	N2区	(16.3)	5.0	—
0331	須恵器	杯B		EF	N1区	—	(2.2)	—
0332	須恵器	杯B	5	EF・Y	全区	—	(2.7)	(7.6)
0333	須恵器	杯Gh	5	EB	N1区	(10.5)	3.5	6.7
0334	須恵器	杯Gh		F	横断面2	(10.3)	3.8	7.4
0335	須恵器	杯Gh	5	F	横断面2	(11.1)	3.8	6.0
0336	須恵器	杯Gh		F	横断面2	(10.8)	3.9	6.8
0337	須恵器	杯Gh	5	EB	N1区	11.8	4.1	7.1
0338	須恵器	杯Gh	5	EB	N1区	(11.1)	5.2	6.3
0339	須恵器	杯Gh	5	E	N1・N2区	(11.0)	(3.5)	7.1
0340	須恵器	杯Gg	5	F	横断面2	(10.8)	3.3	6.7
0341	須恵器	杯Gg		E	N1・N2区	(10.2)	3.4	(8.5)
0342	須恵器	杯Gg		F	縦断セクション	(9.7)	3.7	(6.9)
0343	須恵器	杯Gg		EF	表土	11.0	3.2	—
0401	須恵器	高杯	6	EF	N2区	(11.7)	6.5	8.4
0402	須恵器	高杯	6	EF	N2区	—	(4.2)	7.9
0403	須恵器	高杯		F	S2区	—	(3.2)	8.6
0404	須恵器	はそう	6	E	横断面2	—	(4.3)	—
0405	須恵器	はそう	6	EF	N2区(西端)	—	(6.3)	—
0406	須恵器	平瓶		FK	N2区	(5.9)	(4.3)	—
0407	須恵器	短頸壺		F	N2区	(7.8)	(3.4)	—
0408	須恵器	壺蓋		F	全区	—	—	—
0409	須恵器	壺蓋		F	横断面2	(10.8)	—	—
0410	須恵器	短頸壺?		E	縦断セクション	—	(5.5)	(8.0)
0411	須恵器	平瓶		EF	N2区(西端)	—	(7.4)	—
0412	須恵器	不明	6	EB	N1区	—	(3.8)	—
0413	須恵器	壺 脚部		F	N2区	—	(2.3)	(11.1)
0414	須恵器	椀 脚部		EF	N2区	—	(4.6)	(10.0)
0415	須恵器	たこ壺	6	EF	N2区	—	(8.2)	—
0416	須恵器	たこ壺	6	F	N2区	—	(7.6)	—
0417	須恵器	長頸壺?	6	EF	N2区	—	(9.2)	—
0418	須恵器	鉢	6	EF	N2区	(20.1)	(8.3)	—
0419	須恵器	鉢	6	F	横断面2	(37.2)	(9.9)	—
0420	須恵器	横瓶	6	F	N2区	(10.8)	(5.2)	—
0421	須恵器	甕B	7	EB	N1区	(20.2)	(6.1)	—
0422	須恵器	甕B	7	D	N1・N2区	(18.2)	(6.4)	—
0423	須恵器	甕B	7	D	縦断セクション	(25.6)	(9.0)	—
0424	土師器	甕B	7	F	N2区	(21.9)	(5.3)	—
0425	須恵器	甕D	7	EF	縦断群内	(17.1)	(7.1)	—
0426	須恵器	甕C	6	EF	全区	(17.9)	(6.4)	—
0427	須恵器	甕B		F	N2区	(17.1)	(6.2)	—
0501	須恵器	甕A1	7	F	N2区	(28.4)	(12.6)	—
0502	須恵器	甕A2	7	F	N2区	(32.8)	(12.9)	—
0503	須恵器	甕A3	7	F	N2区	(46.2)	(10.6)	—
0504	須恵器	甕A2	7	F	横断面2	(54.6)	(7.3)	—
0505	須恵器	甕A2	7	F・Y	灰面検出中(主に北半)	(48.1)	(18.6)	—
0506	須恵器	蓋Gg		EF	N2区(西端)	(13.0)	—	—
0507	須恵器	蓋Gh		F	N2区	(11.7)	—	—
0508	須恵器	蓋Gh		F	横断面2	(11.4)	—	—
0509	須恵器	蓋Gh		F	N2区	(12.4)	—	—
0510a	須恵器	蓋Gh		F	N1区	(12.1)	—	—
0510b	須恵器	杯		F	N1区	(11.1)	—	—
0511	須恵器	蓋Gh		FY	S1区	(13.2)	—	—
0512	須恵器	蓋Gb		R	N1区 排水溝	(12.3)	—	—
0513	須恵器	蓋Gb		R	N1区 排水溝	(13.1)	—	—
0514	須恵器	蓋Gb		R	N1区 排水溝	(13.0)	—	—
0515	須恵器	杯B?		R	N1区 排水溝	(13.1)	2.7	(9.3)
0516	須恵器	杯Gg		R	N1区 排水溝	(11.6)	(9.8)	(8.9)
0517	須恵器	杯H		R	S2区 排水溝	(12.4)	(2.1)	—
0518	須恵器	杯H		R	S2区 排水溝	(12.9)	(2.1)	—
0601	須恵器	蓋Gg		FK	N2区	11.2	—	—
0602	須恵器	蓋Gg	8	FK	N2区	(10.0)	—	—
0603	須恵器	蓋Gg	8	FK	S2区	10.5	—	—
0604	須恵器	蓋Gg	8	FK	S1区	(11.1)	—	—
0605	須恵器	蓋Gh	8	FK	S1区南拡張部	(10.7)	—	—
0606	須恵器	蓋Gh		FK	N2区(西端)	(11.2)	—	—
0607	須恵器	蓋Gh		FK	S1区	(11.1)	—	—
0608	須恵器	蓋Gh		FK	N2区	(11.9)	—	—
0609	須恵器	蓋Gh		FGK	横断面2	(12.2)	—	—
0610	須恵器	蓋Gh		FK	S1区	(12.2)	—	—
0611	須恵器	蓋Gh		FK	N2区	(14.1)	—	—
0612a	須恵器	蓋Gh		FK	N2区(西端)	(11.9)	—	—
0612b	須恵器	杯Gh		FK	N2区(西端)	(10.7)	—	—
0613a	須恵器	蓋Gh		FK	S2区南拡張部	(12.4)	—	—
0613b	須恵器	杯Gh		FK	S2区南拡張部	(11.4)	(2.3)	—
0614a	須恵器	蓋Gh		FK	N2区(西端)	(12.6)	—	—
0614b	須恵器	杯Gh		FK	N2区(西端)	(10.8)	(1.4)	—
0615a	須恵器	蓋Gh		FK	N2区	(12.2)	—	—
0615b	須恵器	杯Gh		FK	N2区	(12.9)	2.3	—
0616a	須恵器	蓋Gh		FK	N2区	(12.1)	—	—
0616b	須恵器	杯Gh		FK	N2区	10.8	(1.4)	—
0617	須恵器	杯H		FK	N2区	(12.9)	2.1	(8.2)
0618	須恵器	杯H		FK	S1区	(11.2)	3.3	—
0619	須恵器	杯H		FM	N2区	(12.4)	2.8	6.5
0620	須恵器	杯H		FK	N2区	(12.3)	4.1	(6.0)
0621	須恵器	杯H		FK	N2区	(13.2)	3.0	(6.5)
0622	須恵器	杯H		FK	N2区	(13.8)	(4.0)	—
0623	須恵器	杯Gh		F	S1区	(11.7)	3.0	—
0624	須恵器	杯Gg		FK	N1区	(11.2)	3.5	(7.2)
0625	須恵器	椀		FM	N2区	(10.7)	5.7	—
0626	須恵器	椀		FM	N2区	(13.0)	5.3	—

報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
0627	須恵器	台付皿?		FK	全区	(21.8)	(2.3)	—
0628	須恵器	台付椀		FK	S1区	—	(4.9)	—
0629	須恵器	台付椀	8	FK	S2区	—	(3.9)	(12.1)
0630	須恵器	台付椀		FK	S2区	—	(2.5)	(13.9)
0631	須恵器	高杯	8	FK	S2区	—	(4.3)	(6.8)
0632	須恵器	高杯	8	FK	S1区	—	(6.2)	—
0633	須恵器	高杯	8	FK	全区	—	(7.4)	—
0634	須恵器	高杯		FK	全区	—	(7.0)	—
0635	須恵器	平瓶	8	FK	横断面2	(3.6)	(4.2)	—
0636	須恵器	横瓶		FK	S1区	(11.0)	(5.4)	—
0637	須恵器	横瓶		FM	N2区西端	(10.9)	(4.6)	—
0638	須恵器	こしぎ	8	FGK	横断面2	—	(3.7)	—
0639	須恵器	鉢		FKM	S2区	(25.9)	(7.3)	—
0701	須恵器	長頸壺	8	FK	N2区(西端)	(8.0?)	(8.4)	—
0702	須恵器	長頸壺	8	FK	S1区南拡張部	—	(2.0)	(11.7)
0703	須恵器	壺脚?		FK	S2区	—	4.2	—
0704	須恵器	壺蓋	8	FK	S1区南拡張部	(11.2)	(2.7)	—
0705	須恵器	短頸壺		FK	N2区(西端)	(8.7)	(9.4)	—
0706	須恵器	壺	8	FKM	S2区	—	(6.9)	—
0707	須恵器	壺		FK	S1区	—	(7.7)	—
0708	須恵器	壺		FK	S2区	—	(4.7)	—
0709	須恵器	甕B		FK	S1区	(11.2)	(5.8)	—
0710	須恵器	甕B		FK	S2区	(15.1)	(4.7)	—
0711	須恵器	甕B		FK	N2区(西端)	(18.3)	(7.2)	—
0712	須恵器	甕B	8	FK	S2区	(19.7)	(9.1)	—
0713	須恵器	甕B	8	FK	N2区(西端)	(21.8)	(8.6)	—
0714	須恵器	甕B		Y-FG	全区	(16.4)	(7.3)	—
0715	須恵器	甕A1	8	FK	S1区	(33.5)	(7.0)	—
0716	須恵器	甕A1	8	FK	S2区	(35.3)	(7.1)	—
0717	須恵器	甕A2	8	FK	全区	(31.8)	(7.7)	—
0718	須恵器	甕B		FK	S1区	(23.6)	(11.7)	—
0719	須恵器	甕D		FK	S1区	(19.9)	—	—
0801	須恵器	蓋Gg	9	G	横断面2	10.8	—	—
0802	須恵器	蓋Gh	9	G	横断面2	(11.4)	—	—
0803	須恵器	蓋Gh		G	横断面2	(11.3)	—	—
0804	須恵器	蓋Gh	9	G	横断面2	(12.0)	—	—
0805	須恵器	蓋Gh	9	G	横断面2	(11.5)	—	—
0806	須恵器	蓋Gh	9	G	横断面2	(12.0)	3.2	—
0807	須恵器	蓋H	9	G	横断面2	(11.8)	3.6	—
0808	須恵器	杯H	9	G	横断面2	(11.7)	3.4	(5.4)
0809	須恵器	杯H	9	G	横断面2	(12.0)	(2.9)	—
0810	須恵器	杯H	9	G	横断面2	(12.4)	3.4	(6.0)
0811	須恵器	杯Gh	9	G	横断面2	(11.7)	(2.8)	(7.9)
0812	須恵器	杯Gh	9	G	横断面2	(10.8)	(2.6)	7.5
0813	須恵器	杯Gh		G	横断面2	—	(1.7)	(7.5)
0814	須恵器	杯Gh	9	G	横断面2	—	(3.5)	—
0815	須恵器	はそう	9	G	横断面2	(9.0)	(4.1)	—
0816	須恵器	はそう	9	G	横断面2	(10.0)	(6.6)	—
0817	須恵器	はそう	9	G	横断面2	—	(3.7)	(5.5)
0818	須恵器	杯Gg		G	横断面2	(9.1)	—	(7.0)
0819	須恵器	高杯脚		G	横断面2	—	(3.4)	—
0820	須恵器	椀		G	横断面2	9.0	(2.9)	—
0821	須恵器	壺蓋		G	横断面2	(8.8)	—	—
0822	須恵器	蓋Gg	10	K	横断面2	—	—	—
0823	須恵器	蓋Gg	10	K	横断面2	(12.0)	—	—
0824	須恵器	蓋Gg	10	K	横断面2	(13.0)	—	—
0825	須恵器	蓋Gh	10	K	横断面2	(12.2)	—	—
0826	須恵器	蓋Gh		K	横断面2	(11.8)	3.4	—
0827	須恵器	蓋H		K	横断面2	(9.6)	—	—
0828	須恵器	蓋H		K	横断面2	(11.0)	(3.4)	(7.5)
0829	須恵器	杯H		K	横断面2	(13.2)	(3.5)	(7.6)
0830	須恵器	杯H		K	横断面2	(12.7)	(3.6)	(6.1)
0831	須恵器	杯H		K	横断面2	(12.0)	(4.7)	5.3
0832	須恵器	杯Gh	10	K	横断面1	(12.2)	3.8	(7.1)
0833	須恵器	杯Gh		K	横断面2	(12.8)	3.4	(4.9)
0834	須恵器	杯Gh		K	横断面2	(9.9)	(3.8)	(6.2)
0835	須恵器	杯Gh	10	K	横断面1	(11.8)	2.7	(6.5)
0836	須恵器	杯Gh		K	横断面2	(11.6)	(1.5)	(4.3)
0837	須恵器	杯Gh		K	横断面2	—	(4.1)	—
0838	須恵器	平瓶		K	横断面2	(10.0)	(3.0)	—
0839	須恵器	はそう		K	横断面2	(10.0)	(3.5)	—
0840	須恵器	高杯	10	K	横断面2	—	(10.5)	—
0841	須恵器	長頸壺	10	K	横断面2	(9.4)	(7.5)	—
0842	須恵器	短頸壺		K	横断面2	—	(6.4)	—
0843	須恵器	甕B		K	横断面2	(23.0)	—	—
0901a	須恵器	蓋Gh	10	FK	S2区	11.8	3.2	—
0901b	須恵器	杯Gh	10	FK	S2区	11.1	—	—
0902	須恵器	蓋Gh	10	K	全区	(12.4)	—	—
0903	須恵器	蓋Gh・杯Gh	10	K	全区	(12.2)	—	—
0904	須恵器	蓋Gh	10	K	全区	12.4	3.2	(7.5)
0905	須恵器	杯Gh		K	S1区南拡張部	(11.2)	3.2	(7.1)
0906	須恵器	杯Gh		K	S1区南拡張部	(10.7)	3.4	—
0907	須恵器	杯Gh	10	K	全区	(11.0)	2.8	(5.4)
0908	須恵器	杯Gh		K	全区	(11.5)	5.1	(5.9)
0909	須恵器	杯Gh		K	S1区	(11.6)	3.9	6.5
0910	須恵器	杯Gh	10	K	S1区	10.5	4.2	6.8
0911	須恵器	杯Gh		K	S2区拡張部	(11.8)	(1.3)	(6.2)
0912	須恵器	杯Gh		K	S1区	—	3.1	(6.2)
0913	須恵器	杯Gg		K	N1区・南拡張	(9.5)	—	—
0914	須恵器	蓋H		K	S2区拡張部	(10.8)	3.7	6.5
0915	須恵器	蓋H		K	S1区	(11.6)	3.8	—
0916	須恵器	蓋H		K	S2区南拡張部	(12.1)	3.1	5.5
0917	須恵器	杯H	10	K	S1区	(12.2)	3.8	(6.4)
0918	須恵器	杯H	10	K	全区	(12.6)	—	—



報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
0919	須恵器	蓋	10	K	S1区	(24.4)	(6.9)	—
0920	須恵器	鉢	10	K	横断面2(整形時南半)	(24.1)	(7.6)	—
0921	須恵器	埴瓶?	10	K	全区	(8.0)	(5.3)	—
0922	須恵器	壺蓋		K	S2区・拡張部	—	—	—
0923	須恵器	短頸壺		K	全区	(5.6)	(3.6)	—
0924	須恵器	甕A2	10	K	全区	(27.9)	(10.4)	—
0925	須恵器	甕B		K	S1区	(20.8)	(10.5)	—
0926	須恵器	甕B		K	全区	(20.3)	(10.4)	—
0927	須恵器	甕B		K	全区	(19.4)	(4.2)	—
0928	須恵器	甕A1		K	全区	(42.4)	(9.1)	—
1001	須恵器	蓋G		L	S2区拡張部	—	—	—
1002	須恵器	蓋Gh		L	S2区拡張部	(11.1)	—	—
1003	須恵器	杯Gh		L	横断面2	(10.5)	4.2	(5.4)
1004	須恵器	杯Gg		L	横断面2	(10.8)	3.2	(7.2)
1005	須恵器	蓋H	11	L	横断面2	(11.3)	4.9	—
1006	須恵器	杯H		L	S2区拡張部	(10.8)	(2.4)	—
1007	須恵器	杯H		L	S2区拡張部	(11.4)	(3.4)	—
1008	須恵器	杯H		L	S2区拡張部	(12.1)	3.9	(6.2)
1009	須恵器	壺		L	横断面2	—	(4.2)	5.0
1010	須恵器	はそう		L	横断面2	(9.8)	(4.2)	—
1011	須恵器	高杯	11	L	S2区拡張部	—	(6.3)	(8.7)
1012	須恵器	短頸壺		L	横断面2	—	(7.9)	—
1013	須恵器	甕A2	11	L	S2区拡張部	(23.6)	(6.0)	—
1014	須恵器	蓋H		M4M5	横断面2	(11.1)	—	—
1015	須恵器	蓋H	11	M	横断面2	(11.8)	2.9	—
1016	須恵器	蓋H	11	L-N3	S1区南西隅	(11.4)	—	—
1017	須恵器	蓋H	11	M4M5	横断面2	(10.2)	—	—
1018	須恵器	蓋H	11	M4M5	横断面2	(11.6)	4.0	—
1019	須恵器	蓋H		N1	横断面2	(10.0)	—	—
1020	須恵器	蓋H		N1	横断面2	(9.6)	—	—
1021	須恵器	杯H(蓋Gh?)		M4M5	横断面2	(10.5)	(3.9)	—
1022	須恵器	杯H	11	MN	S1区南西隅	(10.9)	(3.3)	(5.7)
1023	須恵器	杯H		M	横断面2	(11.0)	(3.7)	(4.1)
1024	須恵器	杯H		N1	横断面2	(11.9)	(2.8)	(4.7)
1025	須恵器	杯H	11	M4M5	横断面2	(12.2)	(2.7)	(6.4)
1026	須恵器	杯H	11	M4M5	横断面2	(12.2)	2.7	(5.1)
1027	須恵器	杯H		MN	1区南西隅	(12.2)	3.1	(5.3)
1028	須恵器	杯H		N1	横断面2	(12.3)	(3.9)	(6.2)
1029	須恵器	杯H		MN	S1区南西隅	(12.8)	(3.4)	(6.5)
1030	須恵器	杯H	11	MN	S1区南西隅	(13.8)	3.9	(5.7)
1031	須恵器	杯H	11	N1	横断面2	(13.0)	3.7	(6.6)
1032	須恵器	杯H	11	M4M5	横断面2	(13.1)	3.3	(5.6)
1033	須恵器	杯H		M4M5	横断面2	(12.4)	(2.9)	(5.9)
1034	須恵器	杯Gg	11	N1	横断面2	(11.4)	(3.0)	—
1035	須恵器	椀	11	N1	横断面2	(10.8)	4.5	(5.6)
1036	須恵器	短頸壺	11	N1	横断面2	(8.1)	(3.3)	—
1037	須恵器	椀?		N1	横断面2	(14.8)	(5.1)	—
1038	須恵器	はそう		N1	横断面2	(9.7)	(2.5)	—
1039	須恵器	平瓶	11	N1	横断面2	(8.9)	(4.8)	—
1040	須恵器	平瓶	11	N1	横断面2	—	(8.5)	(16.7)
1041	須恵器	台脚	11	M4M5	横断面2	—	(4.3)	(22.4)
1042	須恵器	高杯	11	MN	全区	—	(2.4)	(7.8)
1043	須恵器	高杯	11	M	横断面2	—	(6.8)	—
1044	須恵器	高杯	11	MN	S1区南西隅	—	(4.4)	(11.8)
1045	須恵器	短頸壺	11	M	横断面2	(12.0)	(4.3)	—
1046	須恵器	甕B	11	N1	横断面2	(19.7)	(4.0)	—
1047	須恵器	甕B	11	M4M5	横断面2	(19.9)	(3.6)	—
1048	須恵器	甕B	11	M4M5	横断面2	(22.8)	(3.2)	—

土坑205

報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
1101	須恵器	蓋Gg	12		横断セクション ①③~⑦層	(10.7)	—	—
1102	須恵器	蓋Gb			⑩⑪層	—	—	(9.6)
1103	須恵器	蓋Gb			横断セクション ①③~⑦層	(12.2)	—	—
1104	須恵器	蓋Gb			⑥⑧層	(11.7)	—	—
1105	須恵器	蓋Gb	12		⑥⑧層	(11.4)	—	—
1106	須恵器	杯B			⑥⑧層	(11.8)	(4.6)	—
1107	須恵器	杯Gh			全区	(10.8)	3.7	(4.9)
1108	須恵器	杯Gh			⑥⑧層	(10.2)	3.9	—
1109	須恵器	杯Gh			⑥⑧層	(11.2)	3.9	—
1110	須恵器	杯Gh			全区	10.8	3.7	6.9
1111	須恵器	杯Gh			横断セクション ①③~⑦層	(11.6)	3.3	7.0
1112	須恵器	杯Gh	12		横断セクション ⑩⑪層	(11.5)	—	—
1113	須恵器	杯Gh			⑥⑧層	—	3.1	6.9
1114	須恵器	杯Gh	12		全区	(11.3)	4.3	—
1115	須恵器	杯Gg			1S区黄色土	(11.7)	(3.1)	(8.3)
1116	須恵器	杯Gg			⑥⑧層	—	(3.0)	(6.2)
1117	須恵器	杯Gg			横断セクション ⑩⑪層	(10.2)	(3.5)	—
1118	須恵器	杯Gg			サブトレ ⑥⑧層	(9.6)	(4.0)	—
1119	須恵器	壺	12		⑥⑧層	—	(11.8)	—
1120	須恵器	壺			サブトレ ⑥⑧層	—	(4.2)	(9.1)
1121	須恵器	壺	12		サブトレ	—	(14.8)	(8.3)
1122	須恵器	壺			⑥⑧層	—	(15.9)	(11.2)
1123	須恵器	横瓶	12		1S区黄色土	(10.8)	(9.5)	—
1124	須恵器	高杯			⑥⑧層	—	(4.1)	(8.6)
1125	須恵器	壺脚台			サブトレ ⑥⑧層	—	(5.3)	(21.0)
1126	須恵器	甕			全区	(19.0)	(5.0)	—
1127	須恵器	甕			全区	(22.6)	(2.7)	—
1128	須恵器	甕			サブトレ ⑥⑧層	(22.7)	(10.2)	—
1129	須恵器	甕	12		⑥⑧層	—	(15.3)	—

汁谷2号窯窯体

報告番号	種 別	器 種	写真図版	層区分	遺 構 ・ 区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
1201	須恵器	蓋Gb	13		窯体舟底状ビット下層	(12.1)	—	—
1202	須恵器	蓋Gb	13		窯体舟底状ビット下層	(12.0)	—	—
1203	須恵器	杯B?	13		窯体舟底状ビット下層	(12.7)	(4.1)	—
1204	須恵器	杯Gg	13		窯体舟底状ビット下層	(13.0)	(3.7)	8.0
1205	須恵器	杯Gh			窯体舟底状ビット下層	(11.0)	(2.9)	(7.6)
1206	須恵器	杯Gh	13		窯体舟底状ビット下層	11.4	3.7	6.9
1207	須恵器	杯Gh	13		窯体舟底状ビット下層	12.2	4.2	7.4
1208	須恵器	杯Gh	13		窯体舟底状ビット下層	(11.2)	4.3	(6.2)
1209	須恵器	杯Gh	13		窯体舟底状ビット下層	10.1	4.4	5.9
1210	須恵器	椀	13		窯体舟底状ビット下層	(9.0)	4.9	(5.6)
1211	須恵器	椀	13		窯体舟底状ビット下層	(14.8)	(7.2)	—
1212	須恵器	高杯	13		窯体舟底状ビット下層	—	(8.4)	8.3
1213	須恵器	甕B			窯体舟底状ビット下層	(23.6)	(4.3)	—
1214	須恵器	平瓶			窯体舟底状ビット下層	(6.6)	(3.1)	—
1215	須恵器	平瓶?			窯体舟底状ビット下層	—	(8.2)	—
1216	須恵器	甕破片	13		窯体舟底状ビット下層	—	—	—
1217	須恵器	甕破片			窯体舟底状ビット下層	—	—	—
1218	須恵器	蓋G	13		窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	—	—
1219	須恵器	蓋G			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	—	—
1220	須恵器	蓋Gb	13		窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	(14.0)	—	—
1221	須恵器	蓋Gb	13		窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	(13.2)	—	—
1222	須恵器	杯			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	(12.1)	3.4	—
1223	須恵器	杯Gg	13		窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	(9.7)	(3.3)	(7.7)
1224	須恵器	杯Gh			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	(3.8)	6.6
1225	須恵器	杯Gh			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	3.5	5.9
1226	須恵器	高杯			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	(6.3)	—
1227	須恵器	甕B			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	(15.2)	(3.9)	—
1228	須恵器	甕破片	13		窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	—	—
1229	須恵器	甕破片	13		窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	—	—
1230	須恵器	甕破片			窯体内埋土 (舟底状ビット上層)	—	—	—
1231	須恵器	蓋G			窯本体流土層	(11.4)	—	—
1232	須恵器	蓋H			窯本体流土層	(12.5)	3.6	—
1233	須恵器	杯Gg			窯本体流土層	10.0	3.4	6.8
1234	土師器	高杯			窯本体流土層	—	(4.9)	(9.7)
1235	須恵器	甕A3			窯本体流土層	(28.4)	(8.2)	—
1236	須恵器	甕B			窯本体流土層	(15.6)	(3.8)	—

汁谷遺跡

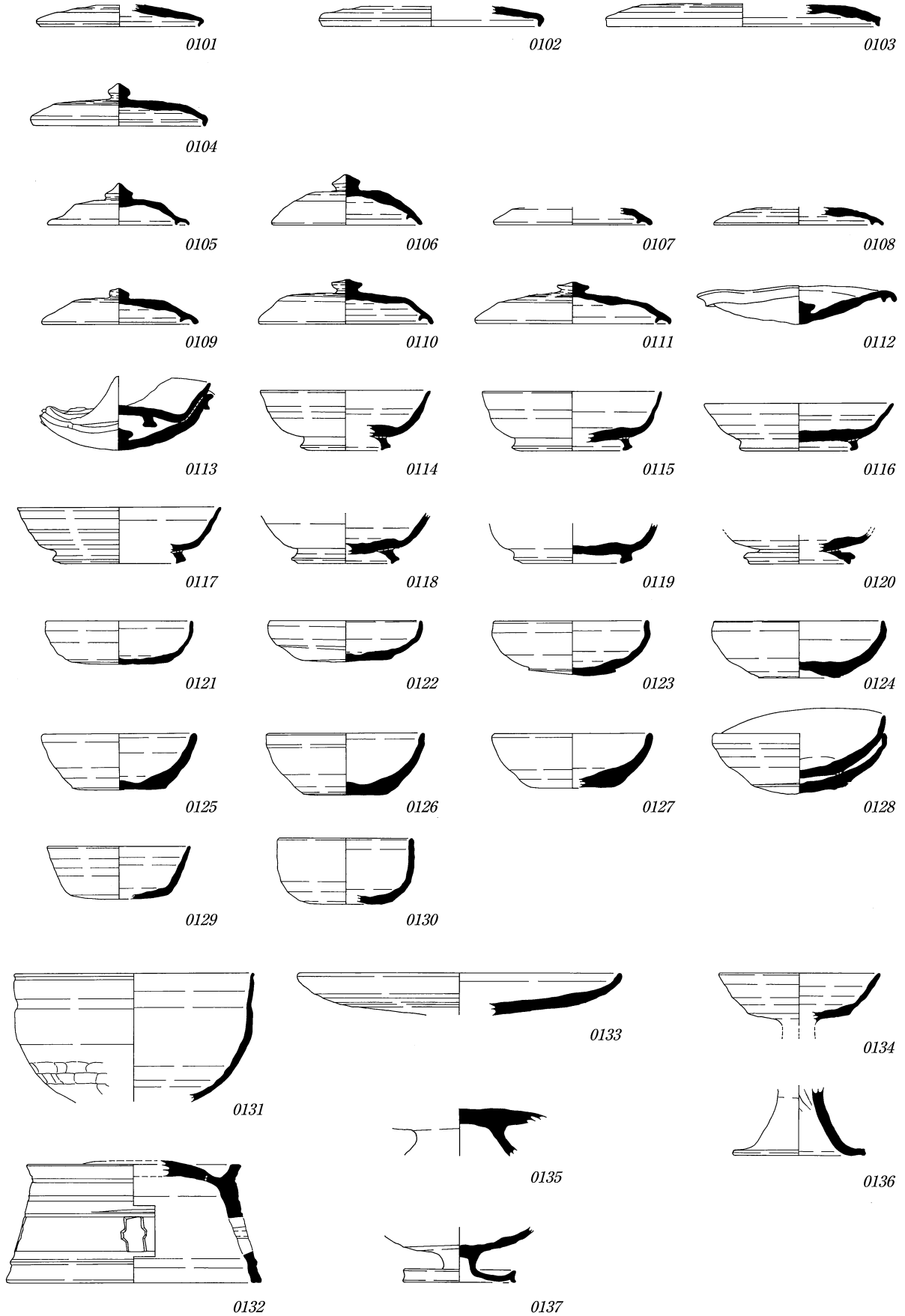
報告番号	種 別	器 種	写真図版	層区分	遺 構 ・ 区	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
1301	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	11.2	3.7	—
1302	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	(10.2)	3.5	—
1303	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	13.0	4.7	—
1304	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	11.1	4.3	—
1305	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	(11.5)	3.8	—
1306	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	13.9	5.0	—
1307	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	12.7	4.8	—
1308	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	(12.0)	—	—
1309	須恵器	蓋H			SK201 床面	(11.2)	3.7	—
1310	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	12.6	3.7	—
1311	須恵器	蓋H	14		SK201 床面	12.0	4.0	—
1312	須恵器	蓋H			SK201 床面	13.6	4.1	5.3
1313	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.2	3.6	6.3
1314	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.8	3.3	4.9
1315	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.2	3.4	5.4
1316	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.6	3.5	5.5
1317	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.3	3.5	6.9
1318	須恵器	杯H	14		SK201 床面	13.3	2.9	6.3
1319	須恵器	杯H	14		SK201 床面	13.1	4.0	7.4
1320	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.7	3.7	5.9
1321	須恵器	杯H	14		SK201 床面	13.2	3.7	5.6
1322	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.7	3.9	5.9
1323	須恵器	杯H	14		SK201 床面	12.9	2.6	5.9
1324	須恵器	杯Gg	15		SK201 床面	(11.0)	4.4	(6.4)
1325	須恵器	椀	15		SK201 床面	11.9	5.7	—
1326	須恵器	椀			SK201 床面	(12.2)	(7.6)	—
1327	須恵器	椀	15		SK201 床面	17.3	9.0	—
1328	須恵器	有蓋高杯	15		SK201 床面	(13.3)	(12.9)	9.7
1329	須恵器	有蓋高杯	15		SK201 床面	(13.8)	(11.1)	—
1330	須恵器	有蓋高杯	15		SK201 床面	(14.2)	(11.8)	(10.2)
1331	須恵器	短頸壺			SK201 床面	(7.0)	(1.4)	—
1332	須恵器	壺 (1331の体部?)	15		SK201 床面	—	(7.7)	—
1333	須恵器	甕A1	15		SK201 床面	(32.4)	(12.7)	—
1401	須恵器	蓋Gb	16		SK201 上層	(13.0)	—	—
1402	須恵器	蓋Gb	16		SK201 上層	(13.2)	—	—
1403	須恵器	蓋Gb	16		SK201 上層	(12.0)	—	—
1404	須恵器	蓋Gb	16		SK201 上層	(11.3)	—	—
1405	須恵器	蓋Gb	16		SK201 上層	(11.8)	—	—
1406	須恵器	蓋Gg			SK201 上層	(10.8)	—	—
1407	須恵器	杯Gh	16		SK201 上層	(10.5)	3.7	7.0
1408	須恵器	杯Gh			SK201 上層	(11.5)	4.1	7.3
1409	須恵器	杯B	16		SK201 上層	—	(2.5)	(7.6)
1410	須恵器	短頸壺?			SK201 上層	—	(6.5)	—
1411	須恵器	壺			SK201 上層	—	(9.2)	—
1412	須恵器	短頸壺	16		SK201 上層	9.5	14.1	—
1413	須恵器	甕破片	16		SK201 上層	—	(3.9)	—
1414	須恵器	甕D			SK201 上層	(20.4)	(7.0)	—
1415	須恵器	甕B			SK201 上層	(22.1)	(6.7)	—

報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
1416	須恵器	壺蓋			床面又は上層	9.9	—	—
1417	須恵器	高杯	15		床面又は上層	—	(3.1)	7.2
1418	須恵器	高杯	15		床面又は上層	—	(2.8)	7.0
1419	須恵器	蓋Gg	17		SH202 暗褐色土層	(11.0)	—	—
1420	須恵器	蓋H			SH202 暗褐色土層	(11.3)	—	—
1421	須恵器	杯H	17		SH202 暗褐色土層	(11.0)	2.9	5.2
1422	須恵器	杯H			SH202 暗褐色土層	(13.5)	(3.3)	—
1423	須恵器	平瓶			SH202 暗褐色土層	—	(6.9)	—
1424	土師器	甕	17		SH202 暗褐色土層	(21.0)	8.2	—
1425	土師器	甕	17		SH202 暗褐色土層	(12.8)	(4.2)	—
1426	須恵器	高杯	17		SH202 周溝内	(10.9)	5.3	(7.8)
1427	須恵器	甕破片	17		SH202 周溝内	—	(7.0)	—
1428	須恵器	甕B	17		SH202 周溝内	(16.7)	(6.7)	—
1501	須恵器	蓋Bb			SK206	(16.0)	—	—
1502	須恵器	杯Gg			SK206	(10.9)	3.3	(7.3)
1503	須恵器	杯Gh			SK206	(10.8)	(5.5)	6.6
1504	須恵器	杯B			SK206	—	(2.0)	(9.9)
1505	須恵器	甕B			SK206	(19.0)	(3.6)	—
1506	須恵器	甕Aa			SK206	—	(4.8)	—
1507	須恵器	高杯			SK206	—	(3.8)	(7.7)
1508	須恵器	蓋Bb			SK210	(12.1)	2.2	—
1509	須恵器	杯Gg			SK211	9.4	3.5	8.4
1510	須恵器	杯Gh			SD205	(11.9)	3.4	(6.7)
1511	須恵器	蓋H?			SD205	(12.6)	3.4	—
1512	須恵器	甕			SD205	(19.7)	(5.1)	—
1513	須恵器	蓋Gg			SD206	(11.9)	—	—
1514	須恵器	蓋H			SD206	(12.3)	—	—
1515	須恵器	杯H			SD206	(12.3)	(2.4)	—
1516	須恵器	甕			SD206	(22.1)	(2.6)	—
1517	須恵器	甕			SD206	—	(4.3)	—
1518	須恵器	甕A1			SD206、SK201下層	—	(3.5)	—
1519	須恵器	杯Gh			SD208	(9.9)	3.5	(5.7)
1520	須恵器	杯B			SD208	—	(4.5)	(7.5)
1521	須恵器	高杯			SD208	—	(5.1)	—
1522	須恵器	平瓶			SD208	(8.4)	(4.6)	—
1523	須恵器	高杯?			SD213	—	(2.1)	(5.8)
1524	須恵器	杯B			SD213	—	(1.5)	(7.9)
1525	須恵器	蓋			包含層	—	—	—
1526	須恵器	すり鉢			包含層	—	(1.9)	(13.1)
1527	須恵器	皿?			包含層	(23.1)	(4.1)	—
1528	土製品	蛸壺?			包含層	—	(3.5)	—
1601	弥生土器	甕?	18		P201	—	(9.9)	—
1602	弥生土器	甕			土坑205 2区黄色土	—	(3.3)	(5.5)
1603	弥生土器	高杯	18		SD209	(19.3)	(5.7)	—
1604	弥生土器	器台脚	18		SD209	—	(5.1)	(16.5)
1605	弥生土器	高杯	18		SD209	—	(6.6)	—
1606	弥生土器	壺	18		SD209	(19.6)	(7.2)	—
1607	弥生土器	台付鉢 or 台付無頸壺	18		SD209	—	(10.6)	(16.0)
1608	弥生土器	高杯	18		SD209	—	(9.0)	(6.9)
1609	弥生土器	甕	18		SD209	(33.9)	(12.3)	—
1610	弥生土器	甕底部	18		SD209	—	(8.5)	11.2
1611	弥生土器	壺底部	18		SD209	—	(10.0)	(10.4)
1612	弥生土器	壺底部	18		SD209	—	(7.8)	(12.0)
1613	弥生土器	壺底部			SD209	—	(4.4)	7.2

報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
0003	須恵器	甕破片	挿図42	M				
0004	須恵器	甕破片	挿図42	L				
0005	須恵器	甕破片	挿図42	M				
0006	須恵器	甕破片	挿図42	M				
0007	須恵器	甕破片	挿図42	M				
0008	須恵器	甕破片	挿図42	M				
0009	須恵器	甕破片	挿図42	M				
0010	須恵器	甕破片	挿図42	SK201下層				
0011	須恵器	甕破片	挿図42	GK				
0012	須恵器	甕破片	挿図42	GK				
0013	須恵器	甕破片	挿図42	GK				
0014	須恵器	甕破片	挿図42	GK				
0015	須恵器	甕破片	挿図42	GK				
0016	須恵器	甕破片	挿図43	EF				
0017	須恵器	甕破片	挿図43	EF				
0018	須恵器	甕破片	挿図43	EF				
0019	須恵器	甕破片	挿図43	EF				
0020	須恵器	甕破片	挿図43	EF				
0021	須恵器	甕破片	挿図43	F?				
0022	須恵器	甕破片	挿図43	Y				
0023	須恵器	甕破片	挿図43	Y				
0024	須恵器	甕破片	挿図43	Y				
0025	須恵器	甕破片	挿図42	K				

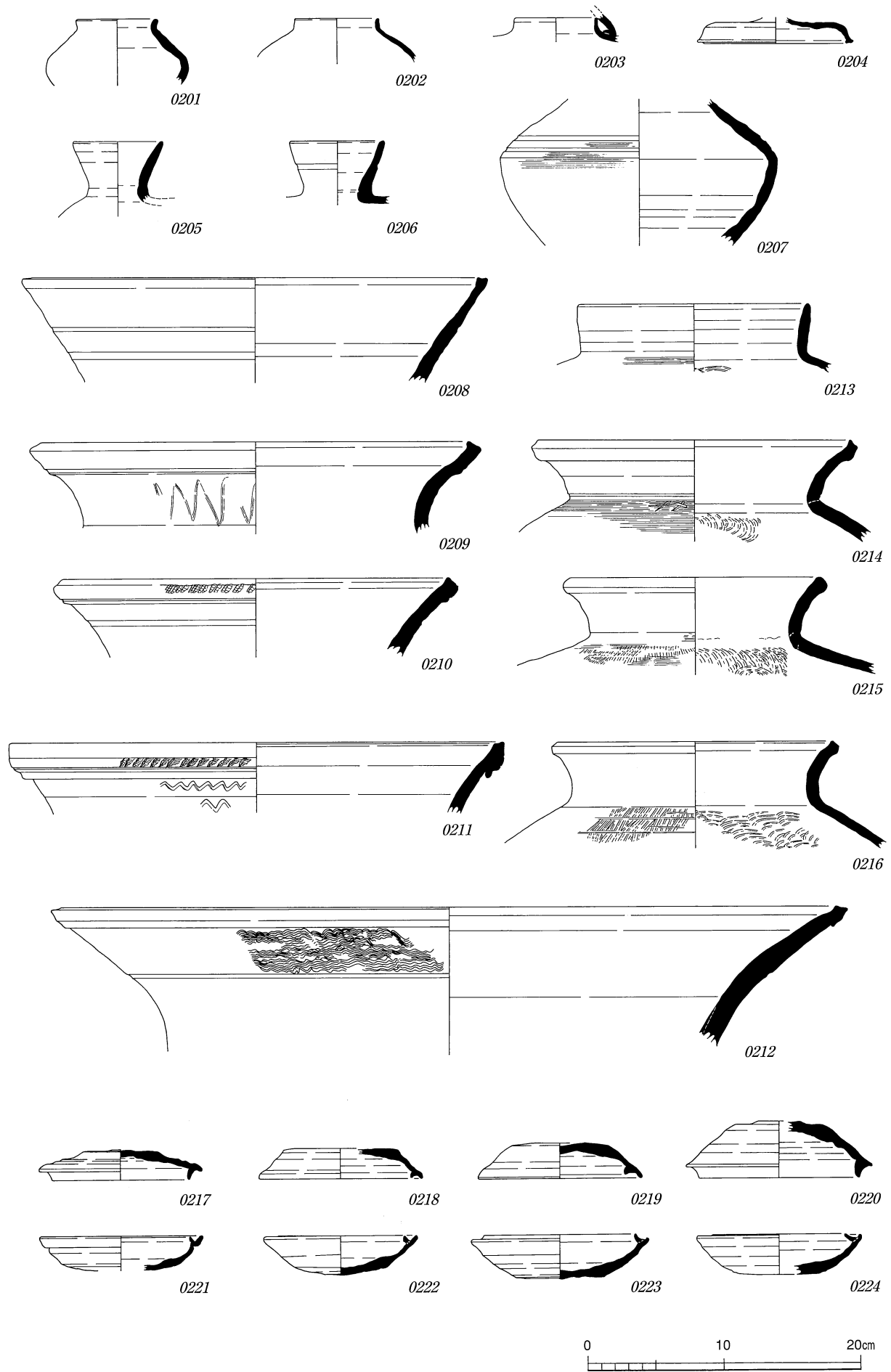
報告番号	種別	器種	写真図版	層区分	遺構・区	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
S1	石器	有茎式石鏃	19		SD209	31.5	16.5	4.2
S2	石器	石鏃	19		SD209	34.7	11.6	4.9
S3	石器	石鏃	19		SD209	32.0	20.5	11.0
S4	石器	削器	19		SD209	40.5	34.8	7.5
S5	石器	楔形石器	19		SD209	31.5	33.3	8.0
S6	石器	楔形石器	19		SD209	45.8	46.0	8.0

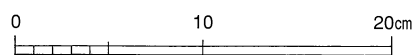
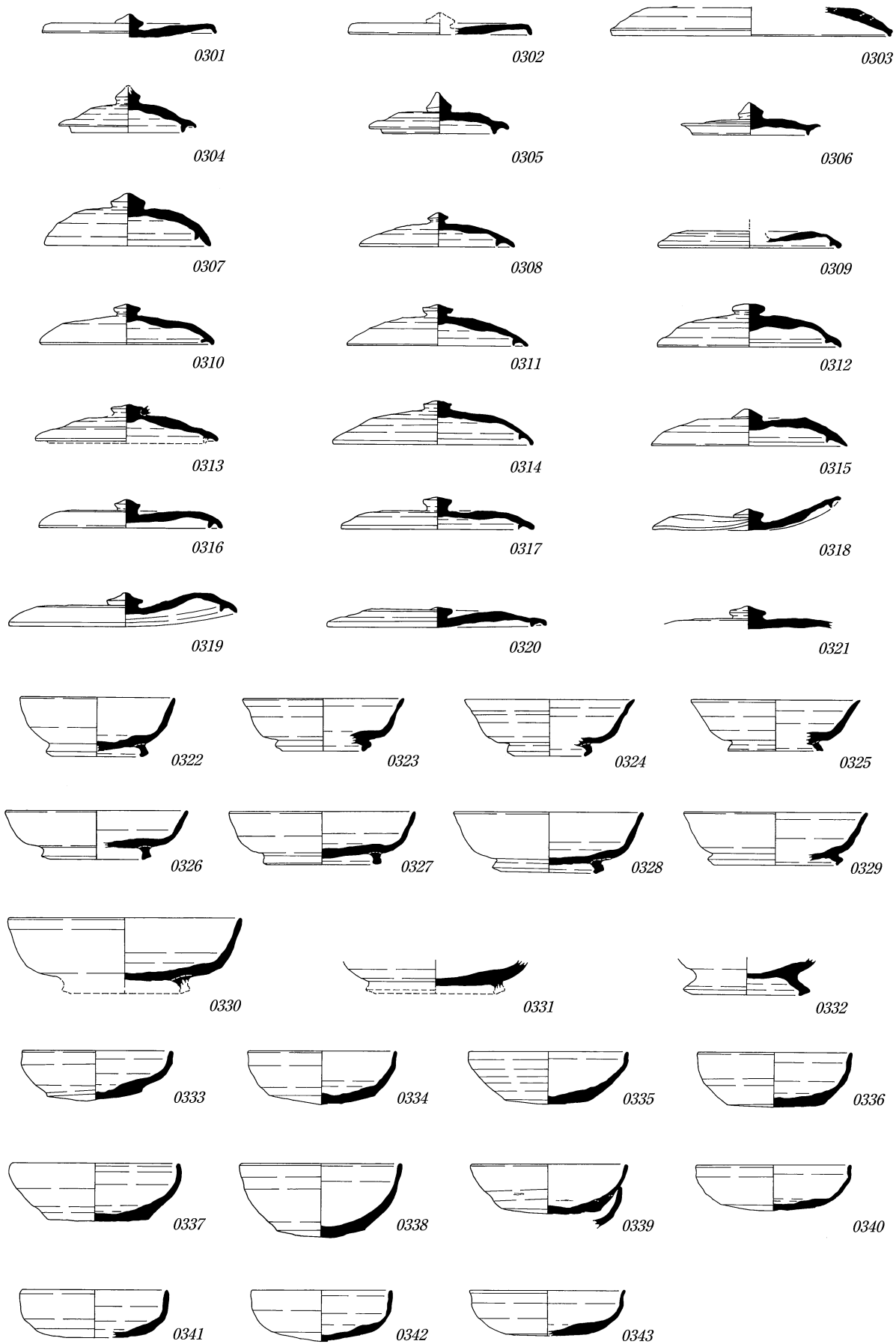
# 圖 面



第2図

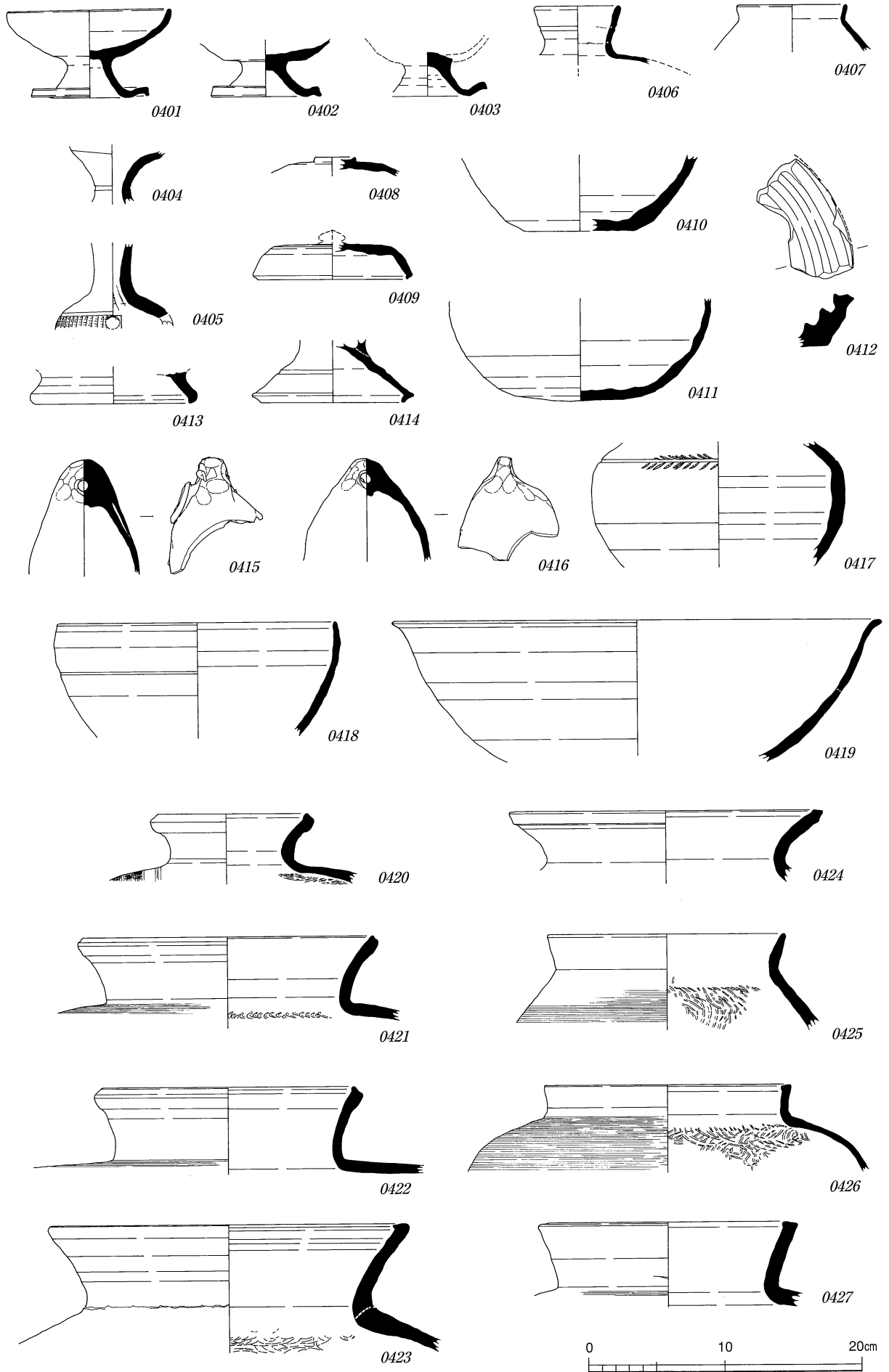
1号窯 Y層出土遺物





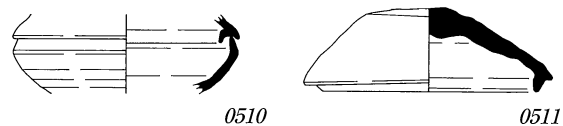
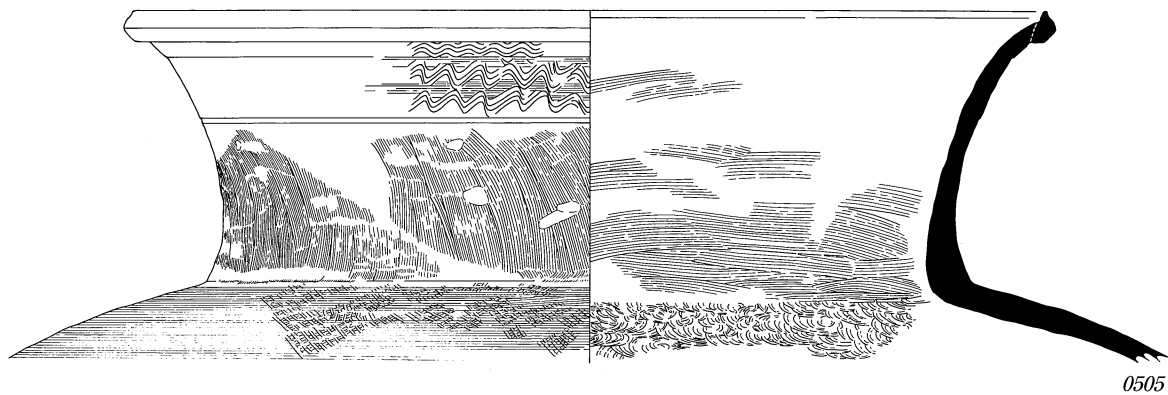
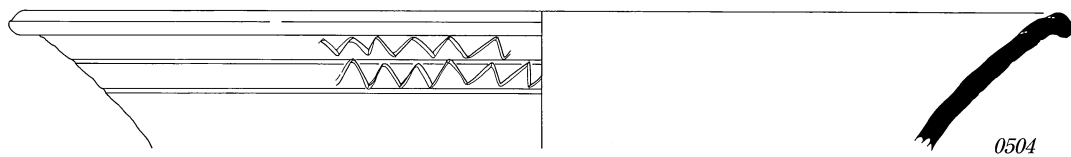
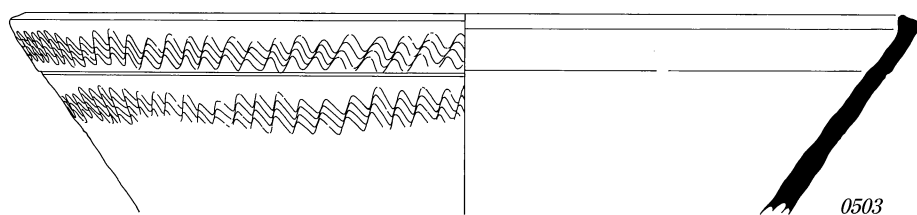
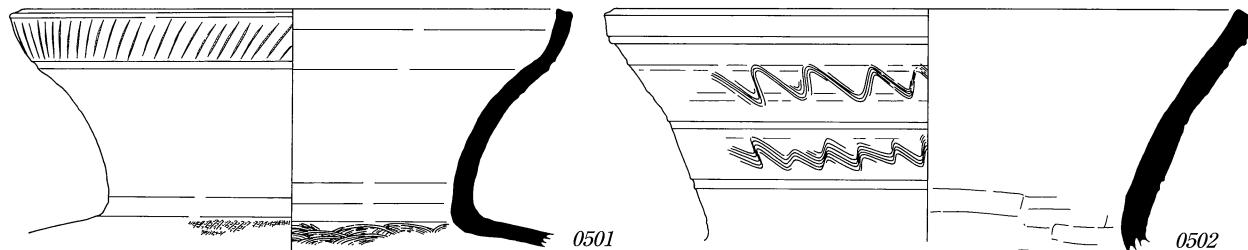
第4图

1号窰 E·F層出土遺物

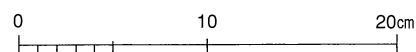
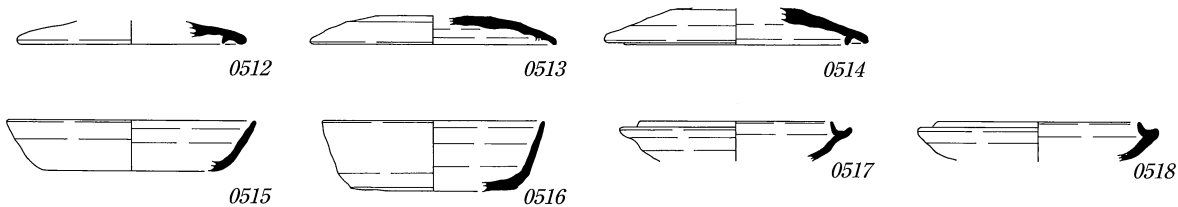




E・F層

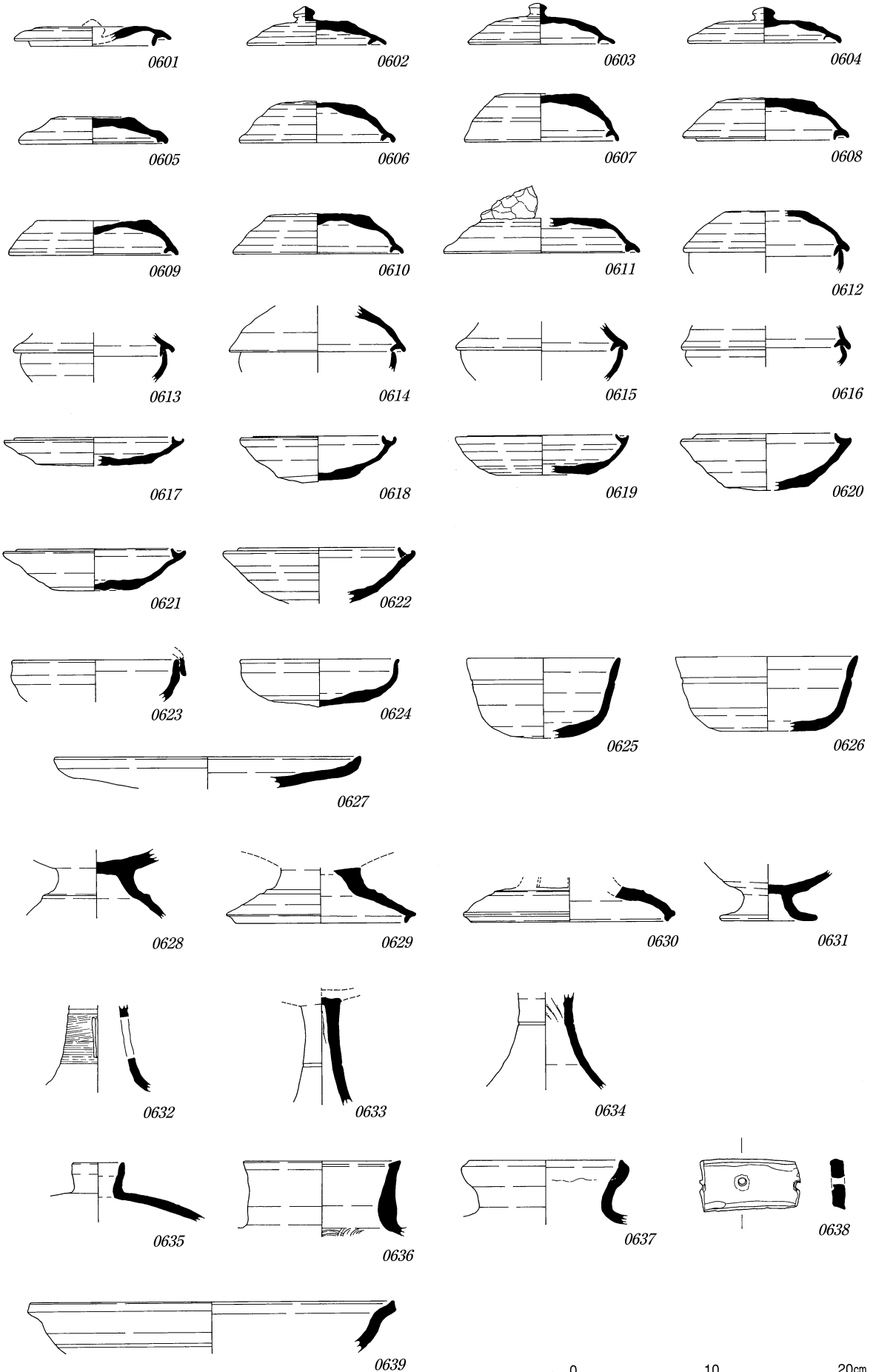


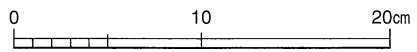
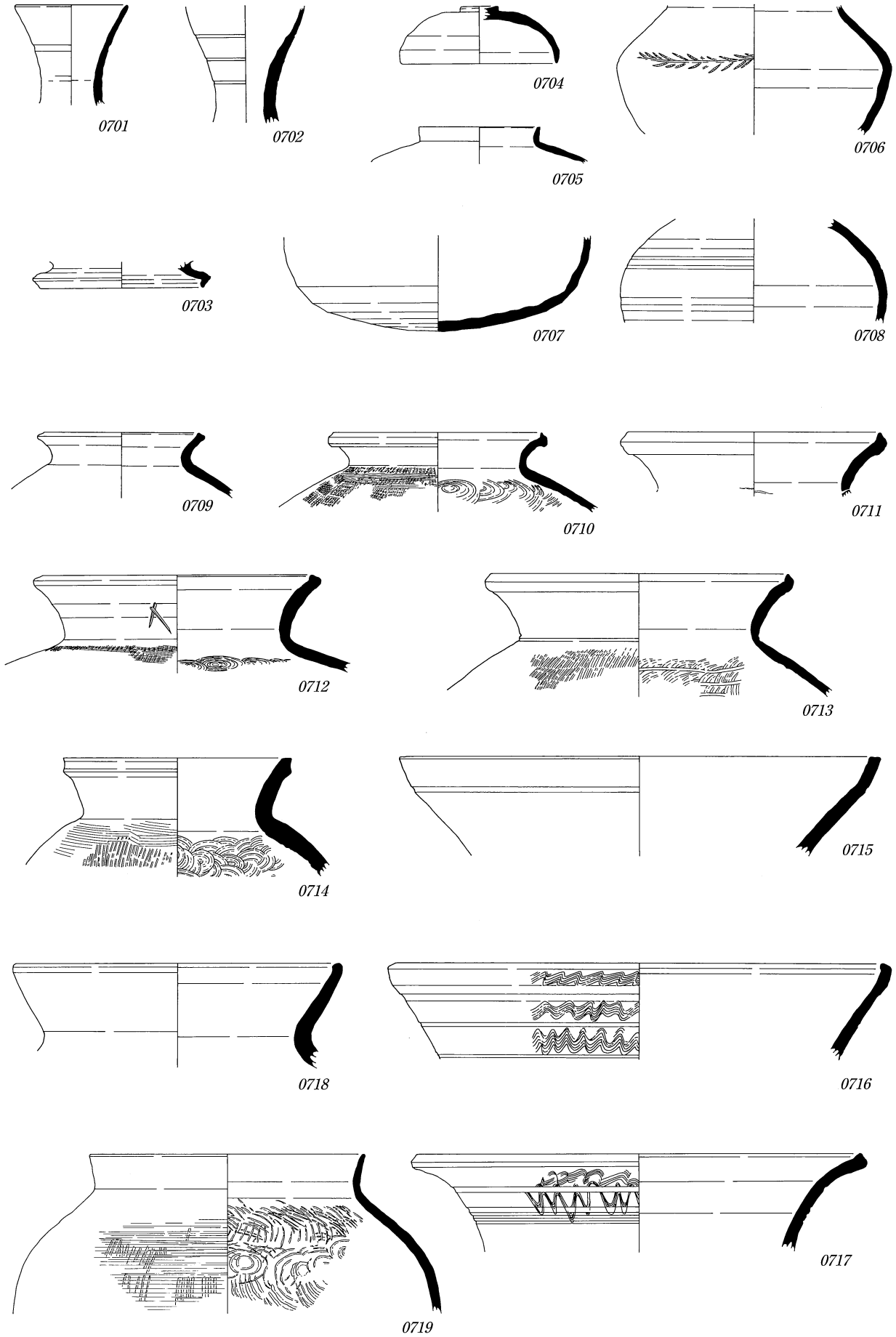
R層



第6图

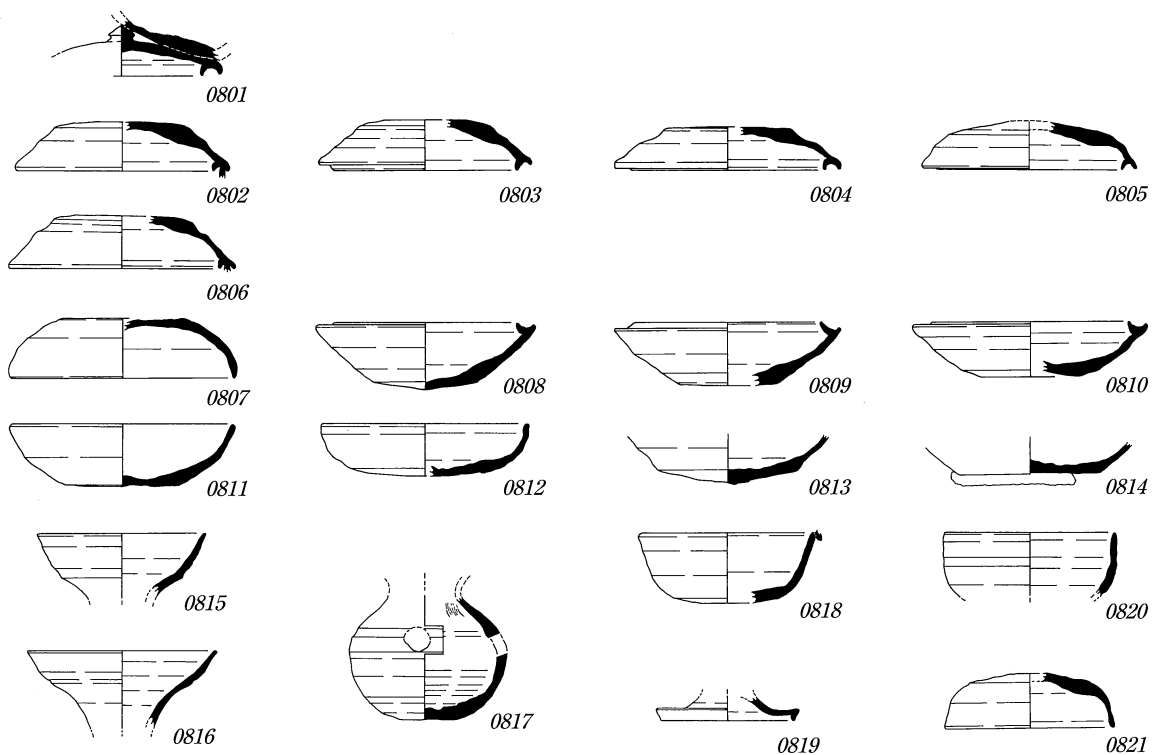
1号窟 F·K层出土遗物



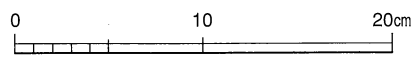
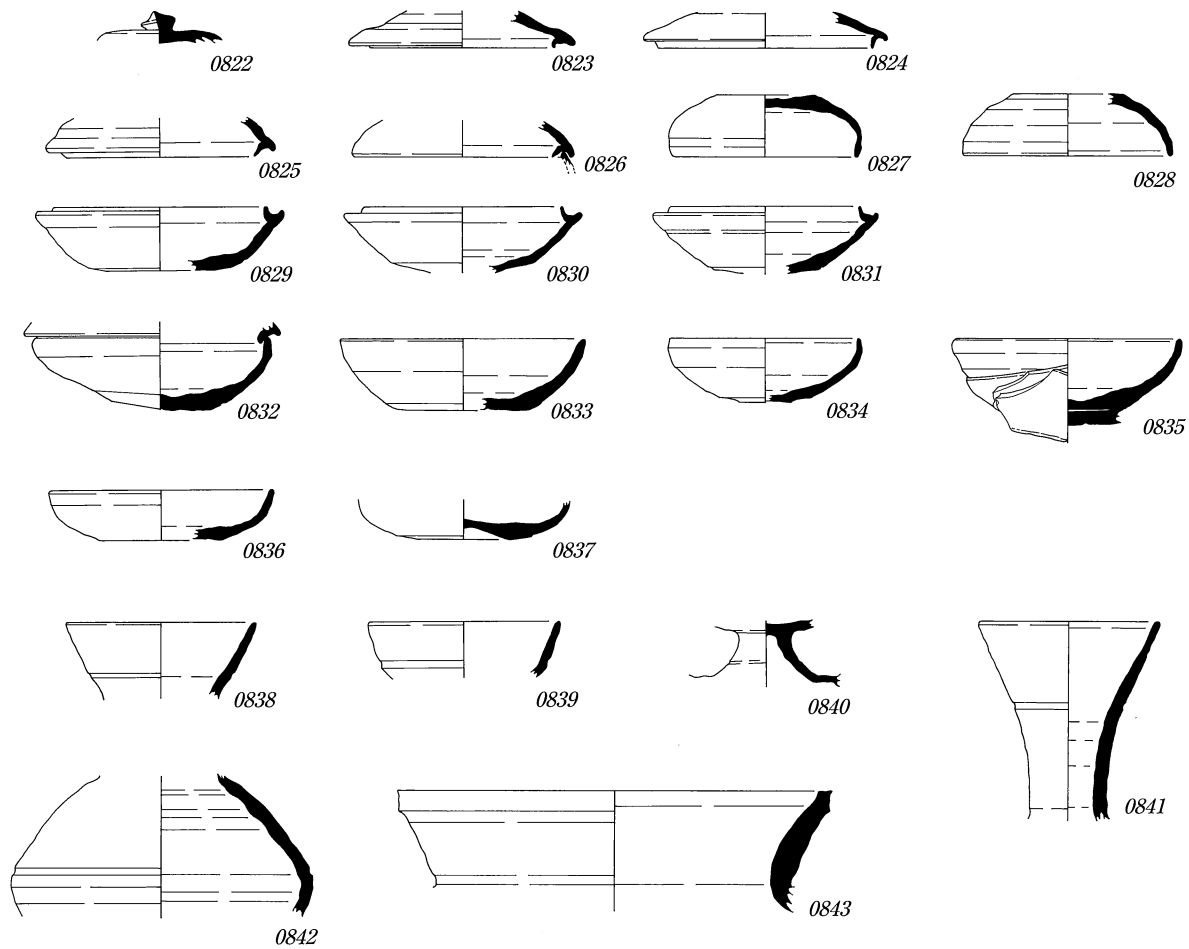


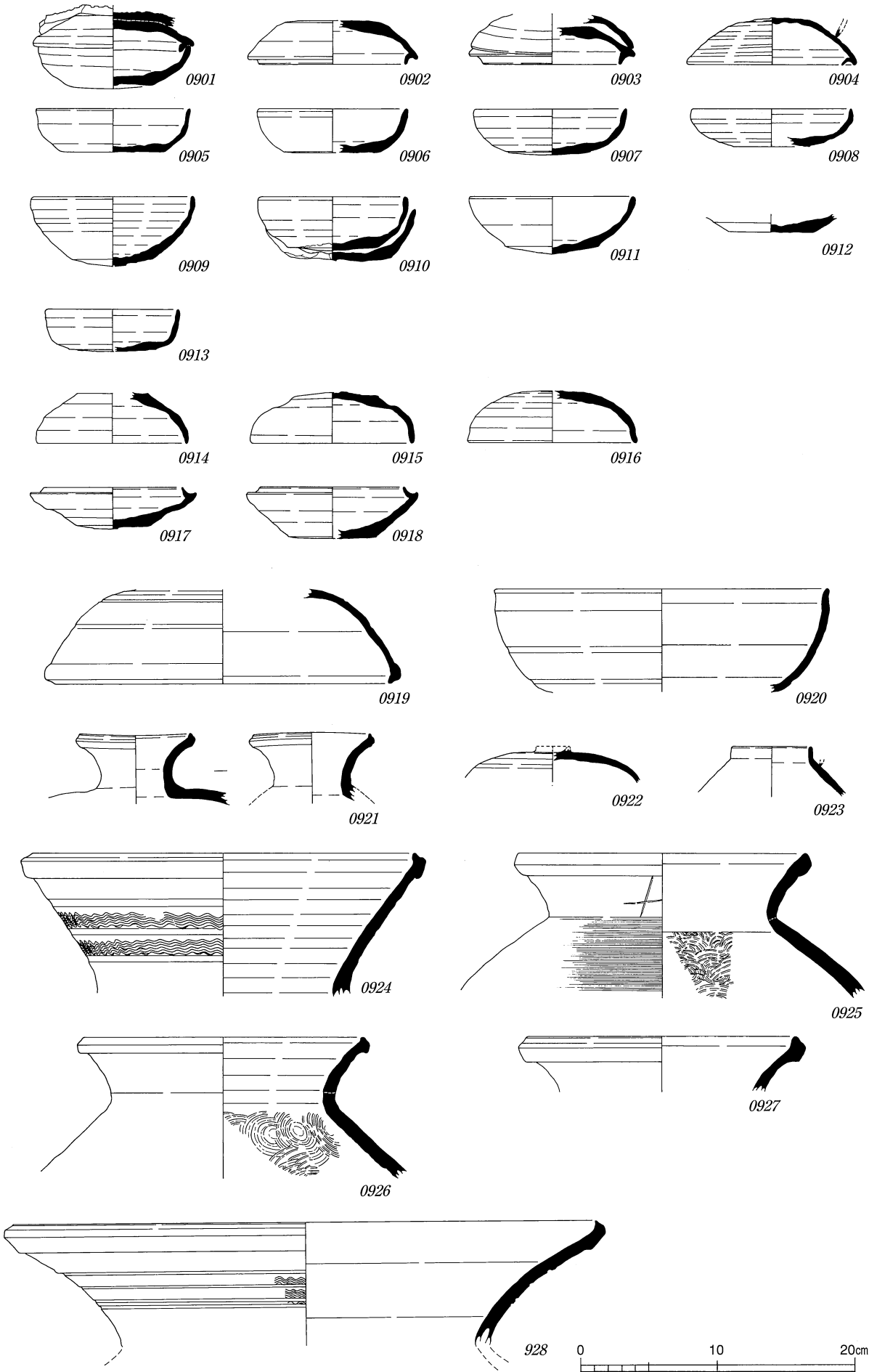
1 号窯 G 層・K 層出土遺物

G 層



K 層

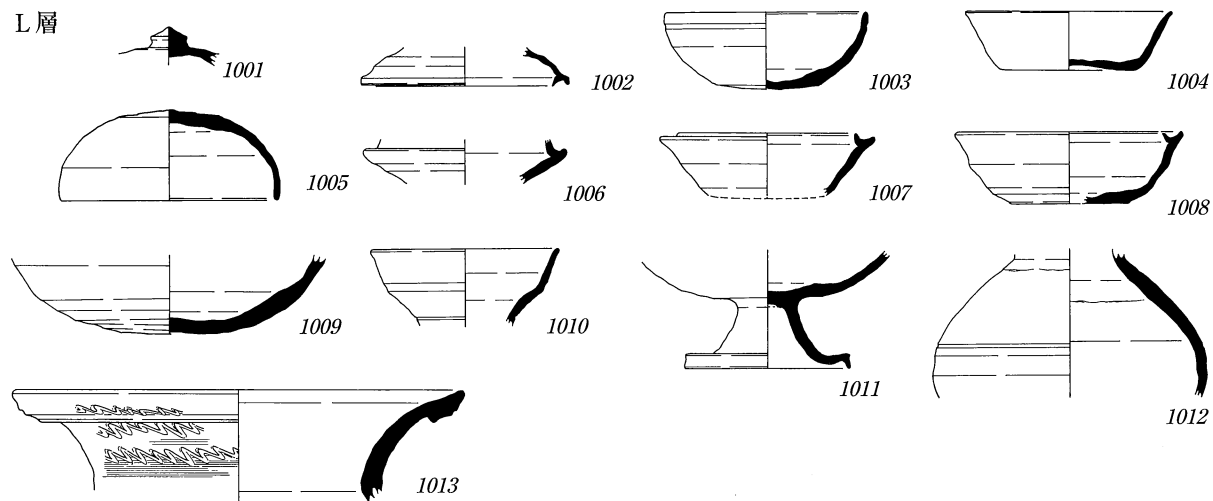




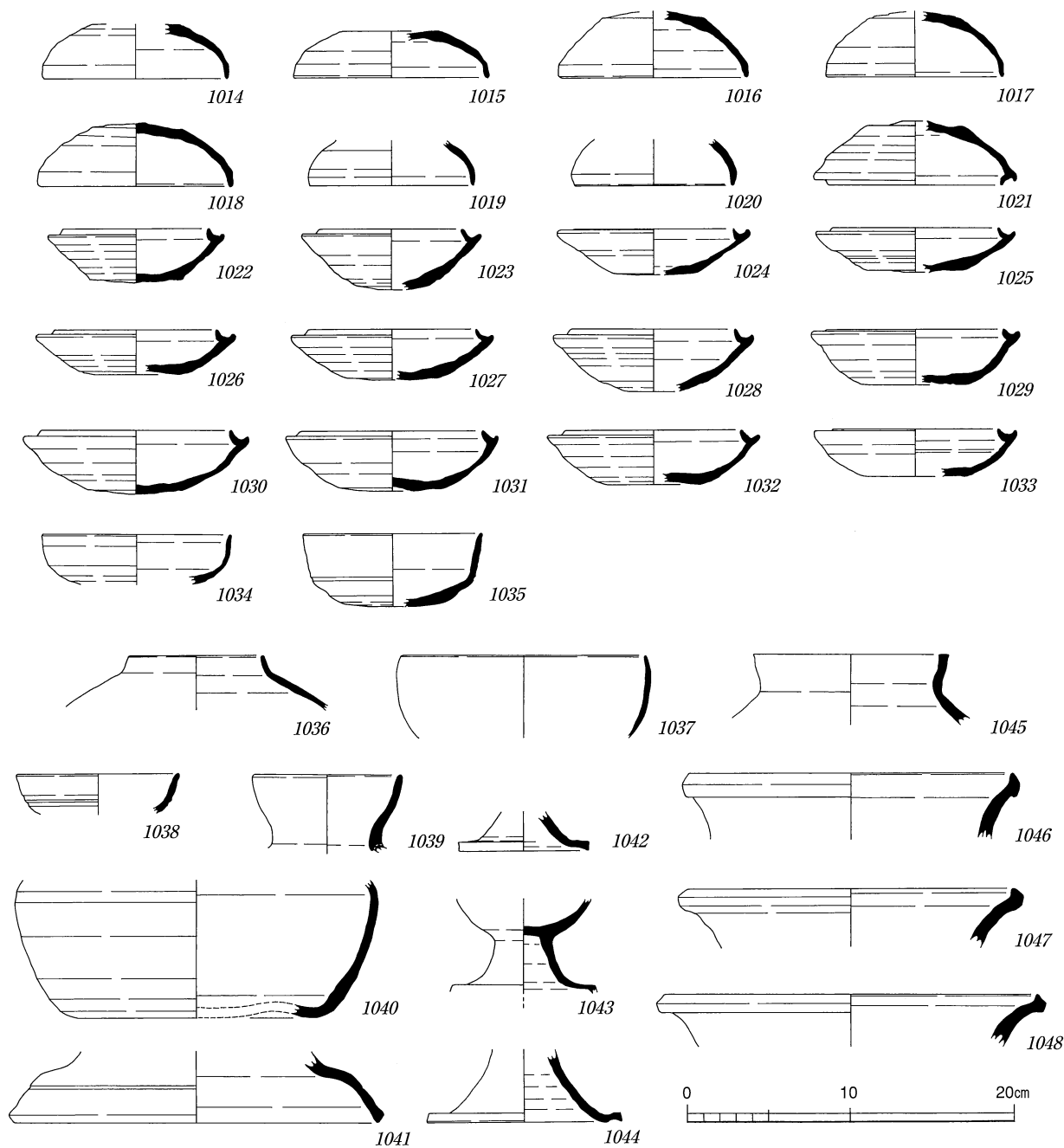
第10図

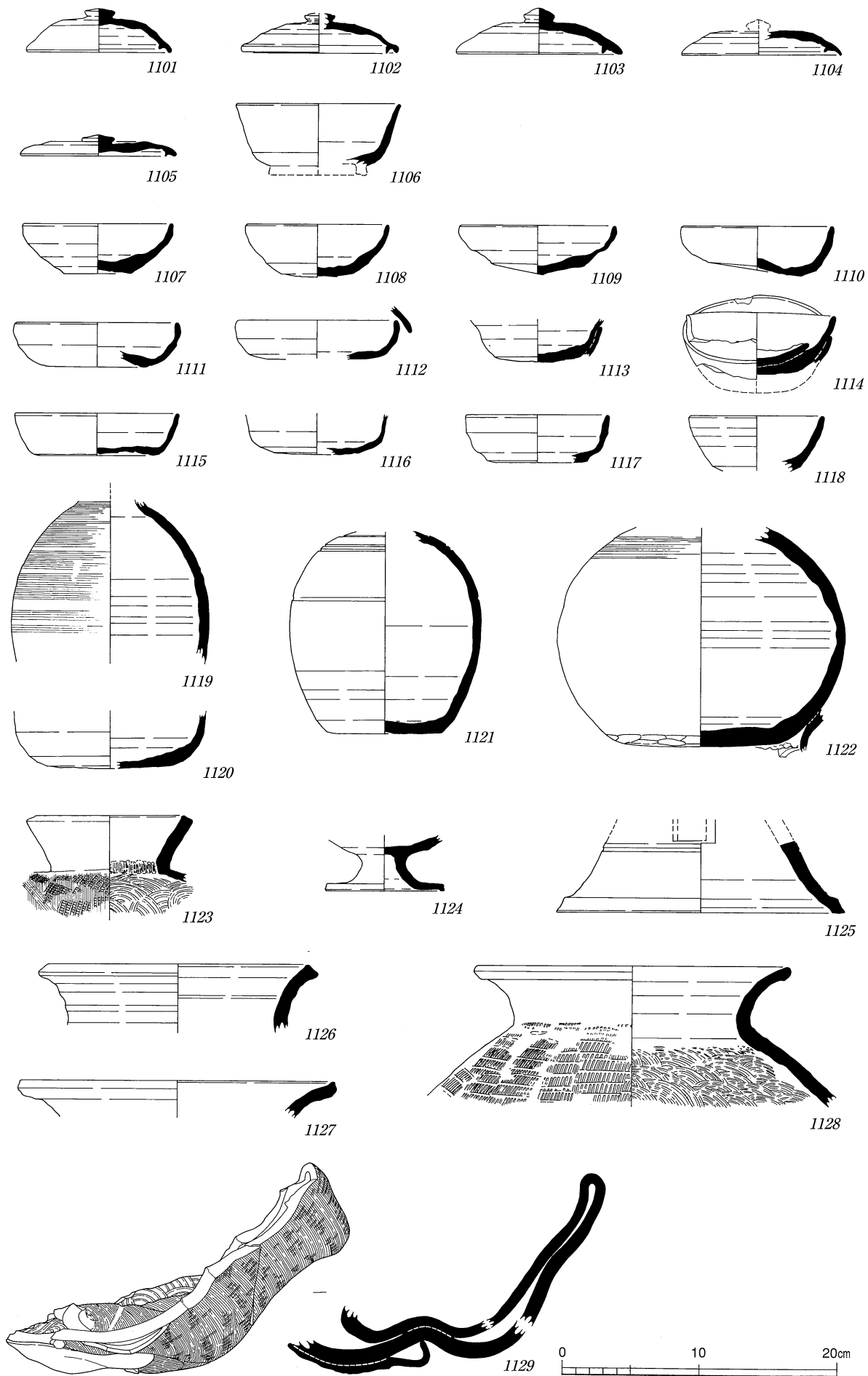
1号窯 L・M・N層出土遺物

L層



M・N層

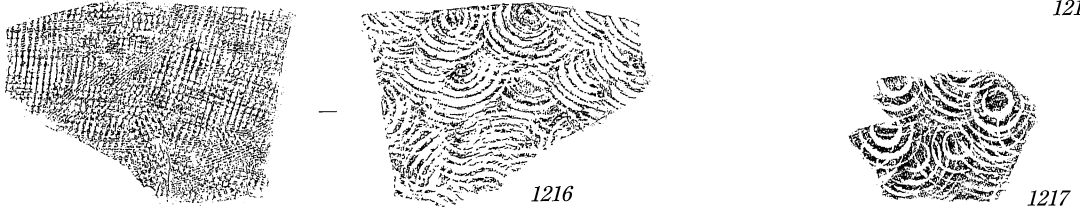
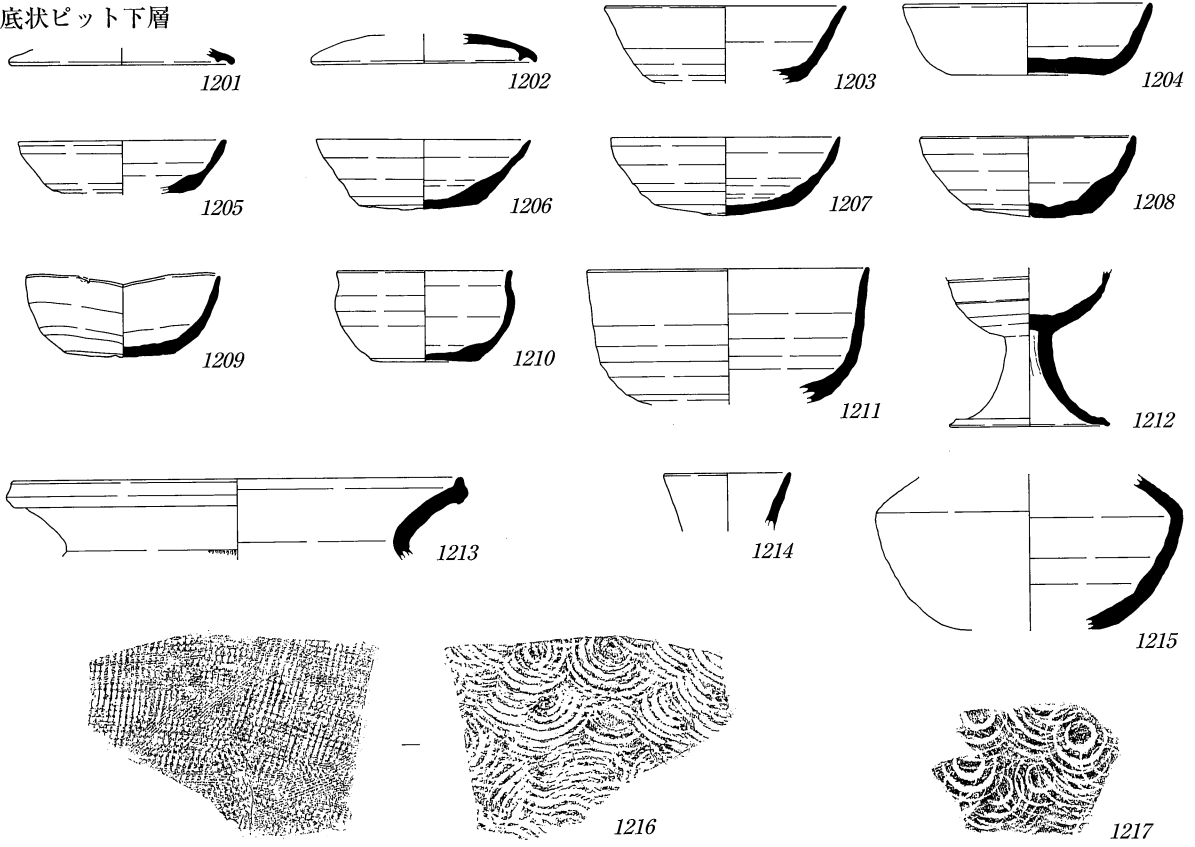




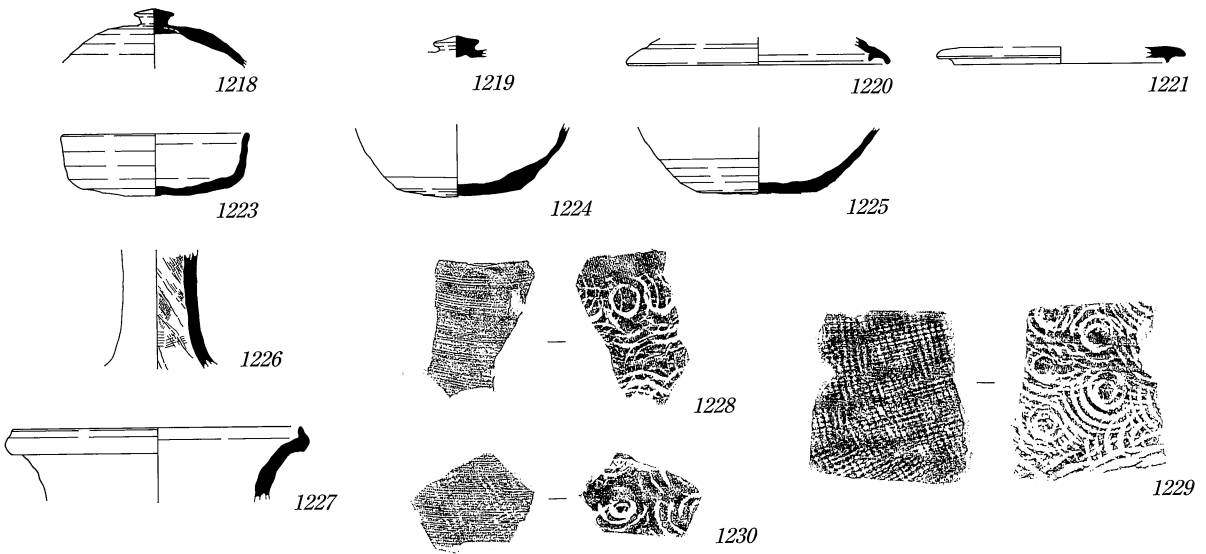
第12図

2号窯 窯体出土遺物

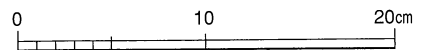
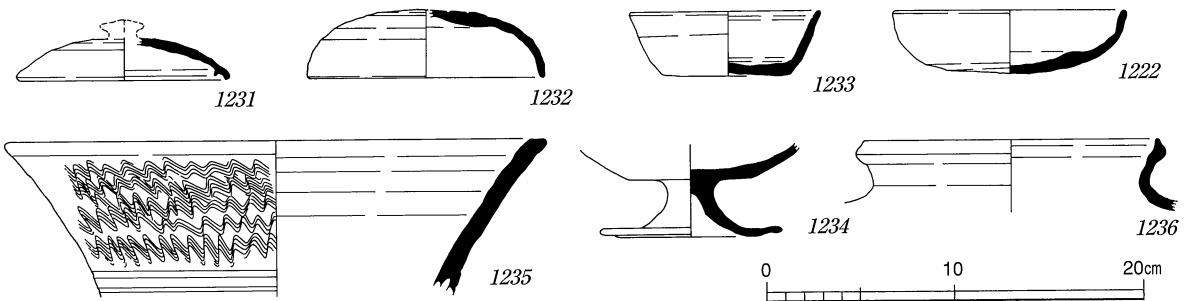
舟底状ピット下層



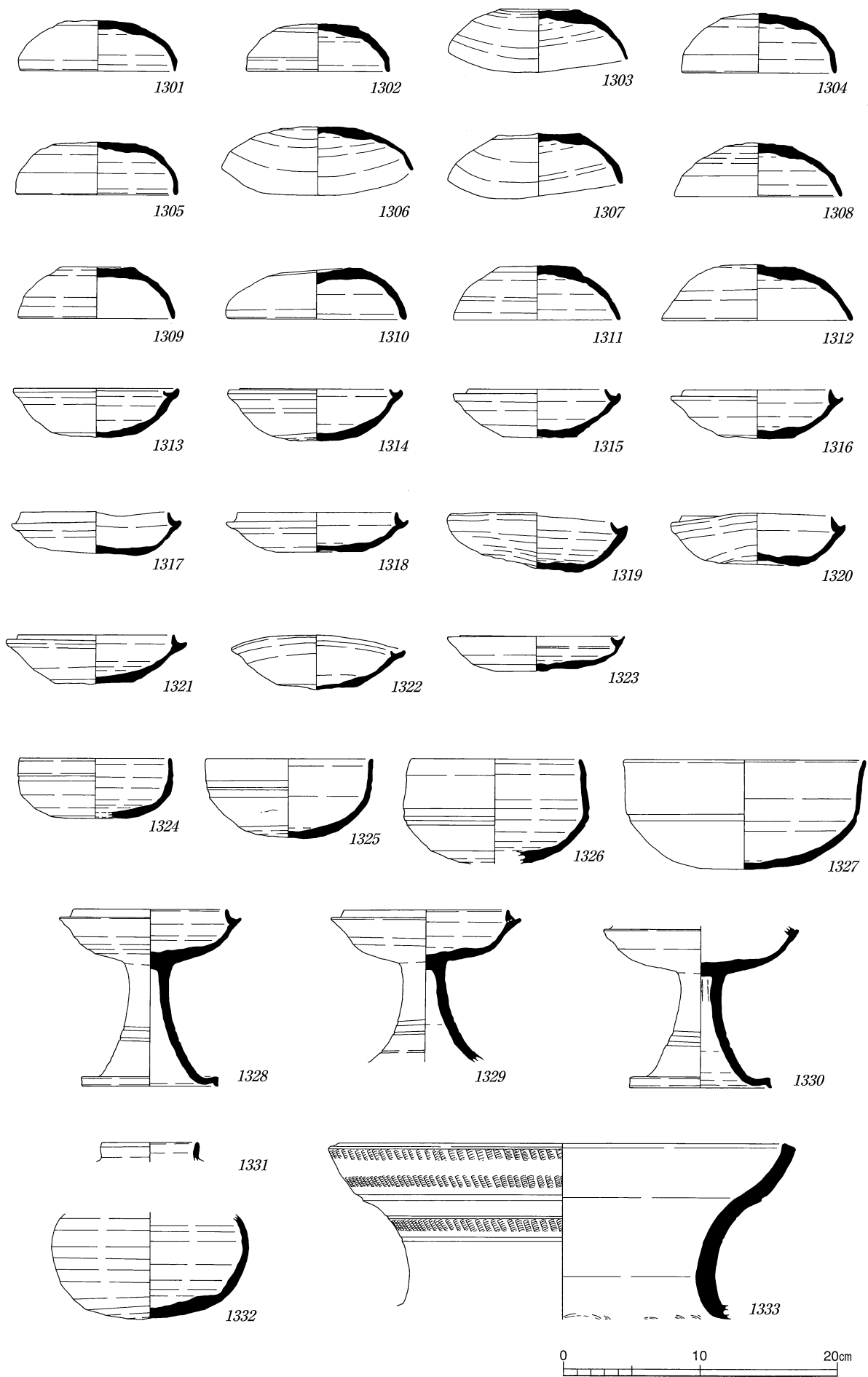
舟底状ピット上層



流土層



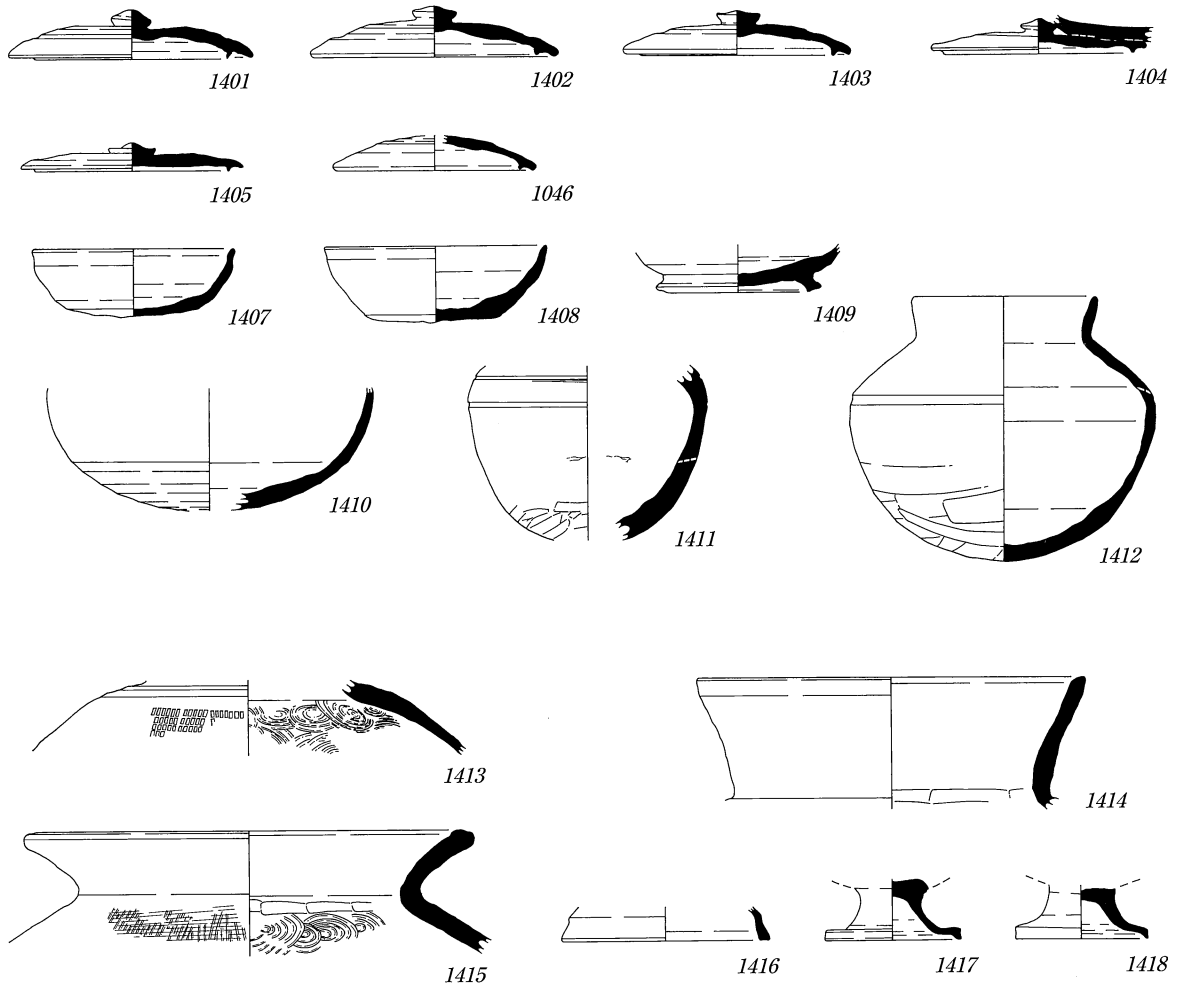




第14図

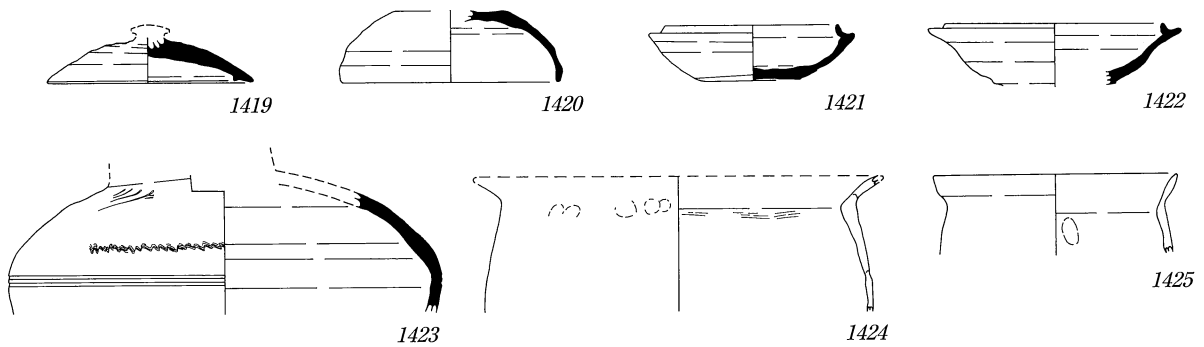
汁谷遺跡 SK201上層・SH201出土遺物

SK201上層

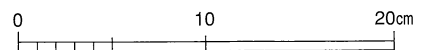
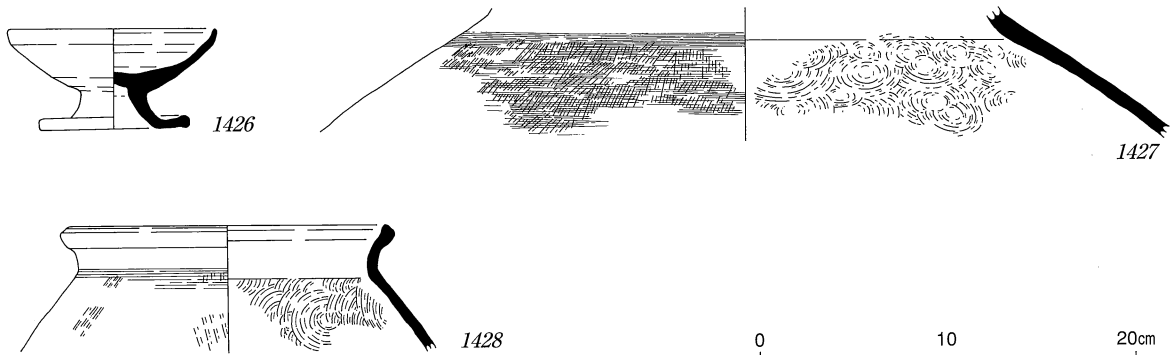


SH201

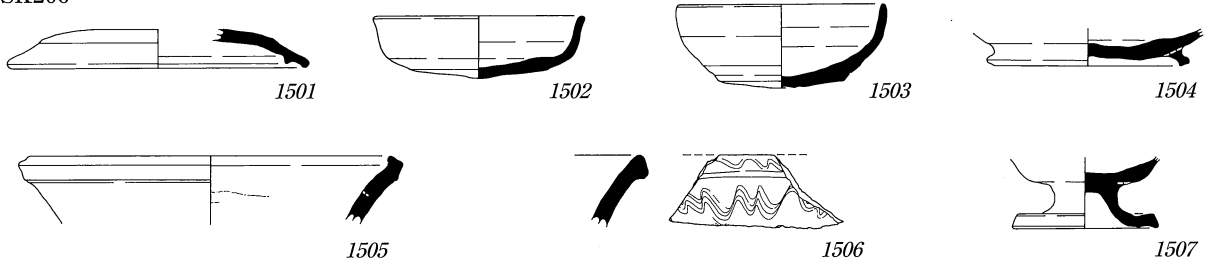
暗褐色土



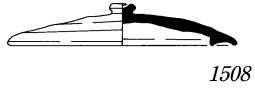
周溝



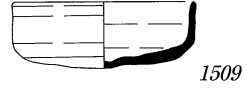
SK206



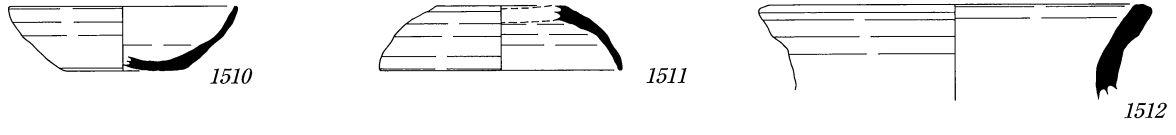
S K 210



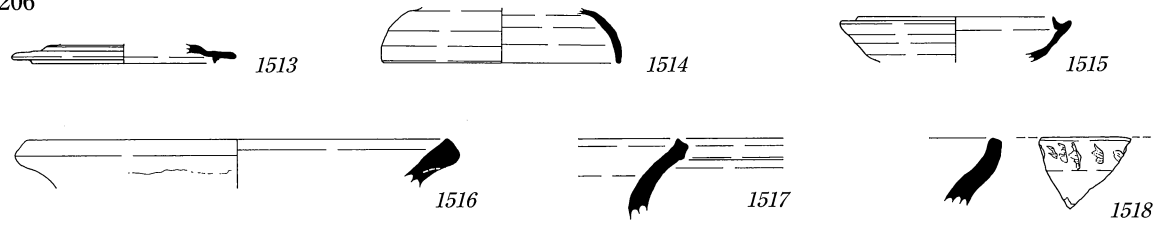
SK211



SD205



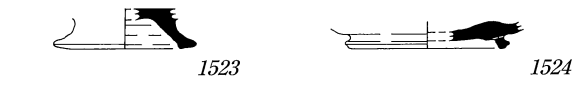
SD206



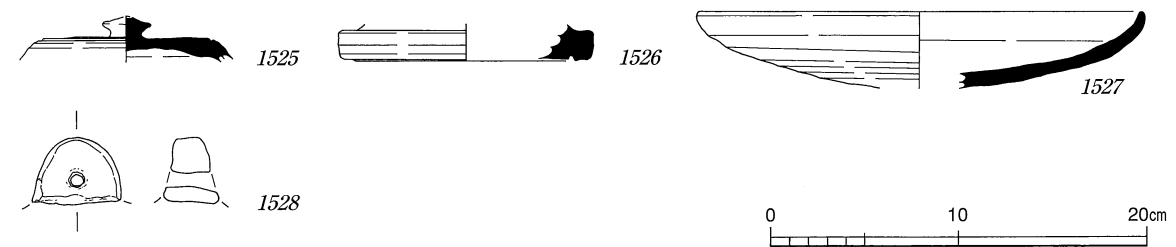
SD208



SD213



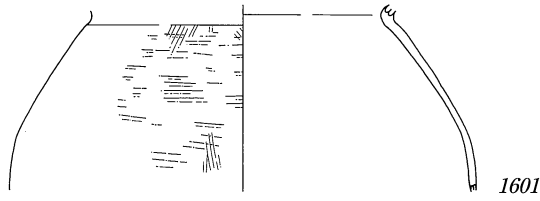
包含層



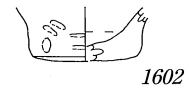
第16図

汁谷遺跡 SD209出土遺物

Po201



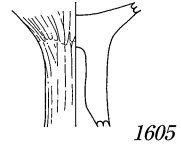
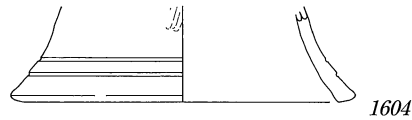
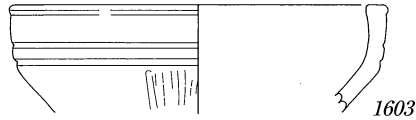
2号窯流土層



1601

1602

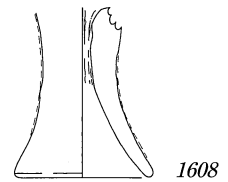
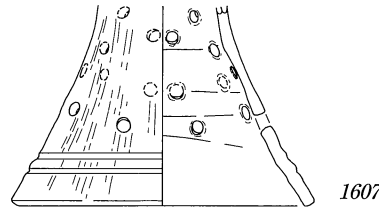
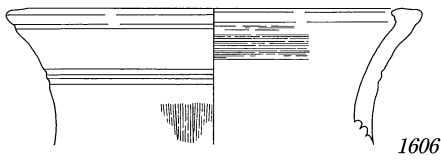
SD209



1603

1604

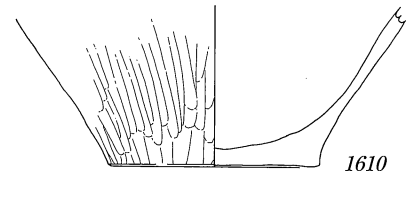
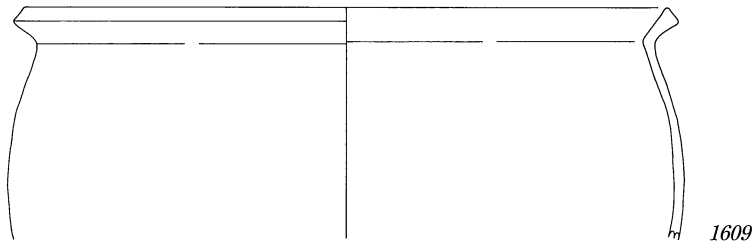
1605



1606

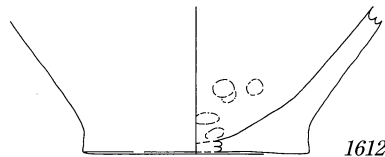
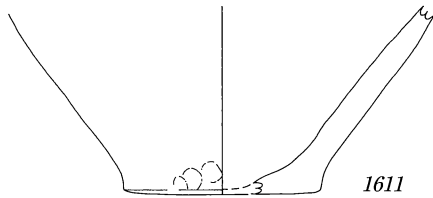
1607

1608



1609

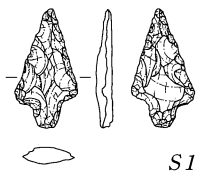
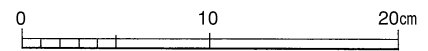
1610



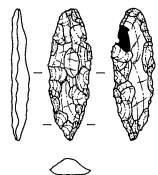
1611

1612

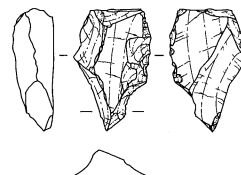
1613



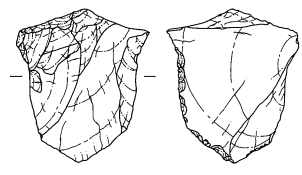
S1



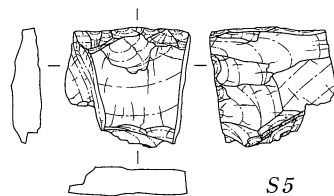
S2



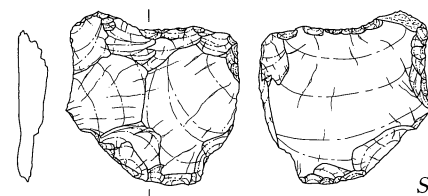
S3



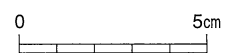
S4



S5



S6



# 遺構写真図版



a) 汁谷窯跡群・汁谷遺跡遠景（西から）



b) 汁谷窯跡群・汁谷遺跡全景（西から）



a) 1・2号窯全景（灰原検出時）西から



b) 1・2号窯全景（調査後）西から



a) 1号窯灰原縦断面



b) 1号窯灰原縦断面細部  
(中央より東)



c) 1号窯灰原縦断面細部  
(中央より西)





a) 1号窯灰原全景



b) 1号窯灰原横断面 (中央排水溝より北)



c) 1号窯灰原横断面 (中央排水溝)



d) 1号窯灰原横断面 (中央排水溝より南)



e) 1号窯灰原横断面 (南端)



a) 1号窯前庭部排水溝



b) 1号窯完掘状況（北西から）



a) 2号窯前庭部  
(1号窯土坑205)  
縦横断面



b) 2号窯前庭部  
(1号窯土坑205)  
縦断面



c) 2号窯前庭部  
(1号窯土坑205)  
完掘状況



a) 2号窯全景



b) 2号窯全景



a) 2号窯断面1 (西から)



b) 2号窯断面1 (西から)



c) 2号窯断面2 (西から)



d) 2号窯断面2 細部 (西から)



e) 2号窯断面2 細部 (西から)



f) 2号窯断面3



g) 2号窯断面3 細部



h) 2号窯断面3 細部



a) 2号窯舟底状ピット検出状況 (南から)



b) 2号窯舟底状ピット (西から)



c) 2号窯舟底状ピット縦横断面 (北から)



d) 2号窯舟底状ピット横断面 (西から)



e) 2号窯右側壁 (西から)



f) 2号窯右側壁 (西から)



g) 2号窯右側壁 (北東から)



h) 2号窯左側壁 (西から)



a) 汁谷遺跡全景（西から）



b) 汁谷遺跡全景（東から）



a) SK201全景 (北から)



b) SK201土器出土状況 (西から)





a) SK201東西断面 (南から)



b) SK201南北断面 (西から)



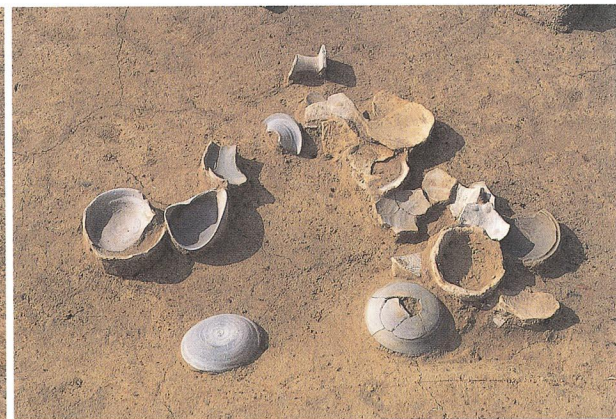
c) SK201東西断面 (南から)



d) SK201焼土 (東から)



e) SK201土器出土状況 (東から)



f) SK201土器出土状況 (南から)



g) SK201東辺土器出土状況 (西から)



h) SK201上層土器出土状況 (北から)



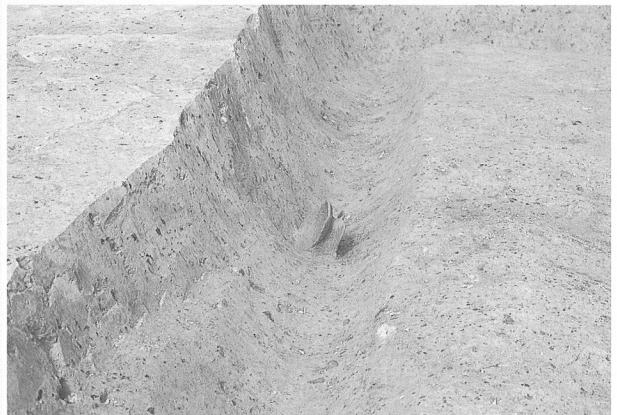
a) SH201全景 (西から)



b) SH201周壁溝検出状況 (西から)



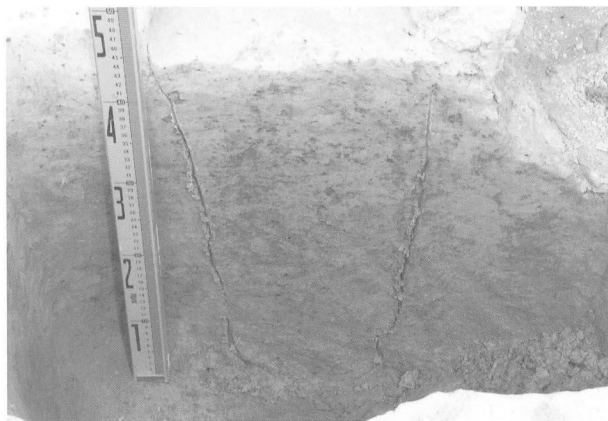
c) SH201断面 (北から)



d) SH201周壁溝内土器出土状況 (西から)



a) SB201全景 (西から)



b) SB201ピット1 断ち割り (西から)



c) SB201ピット2 断ち割り (南から)



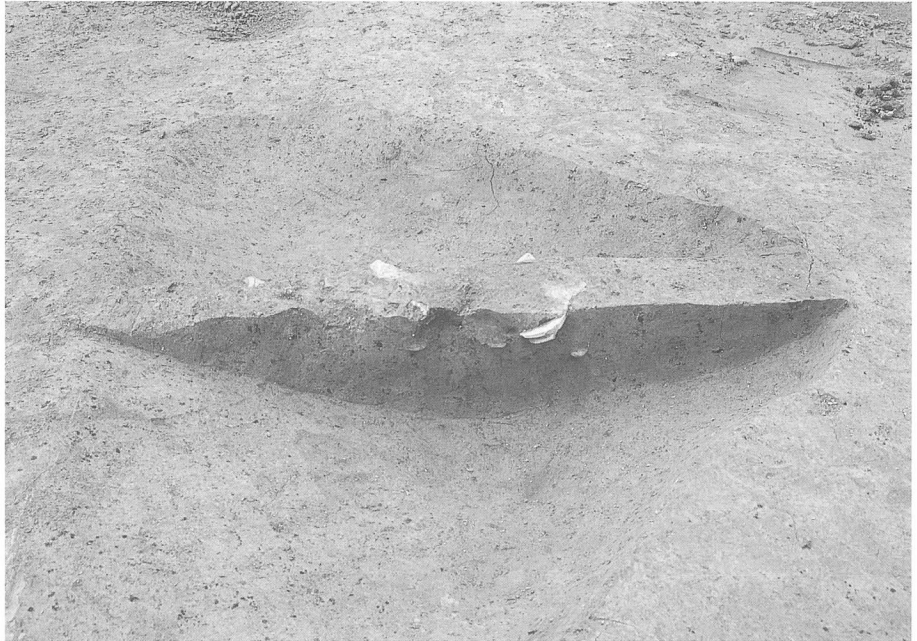
d) SB201ピット4 断ち割り (西から)



e) SB201ピット5 断ち割り (北から)



a) SK204断面 (北から)



b) SK206断面 (北から)



c) SK207断面 (南西から)



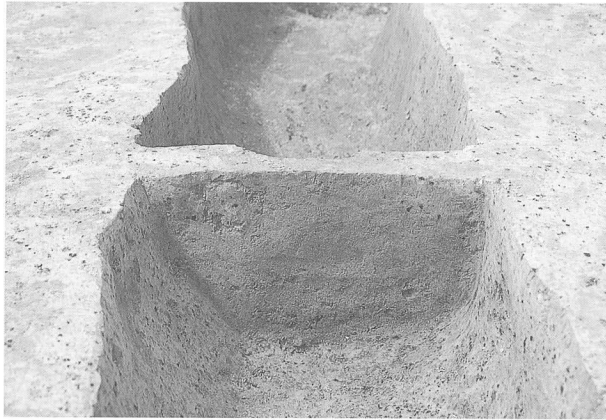
a) SK210完掘状況（南から）



b) SK210断面（南から）



c) SK211土器出土状況（南から）



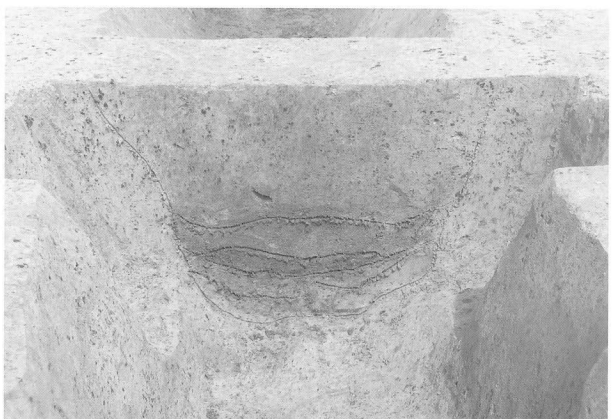
a) SD205断面 (北から)



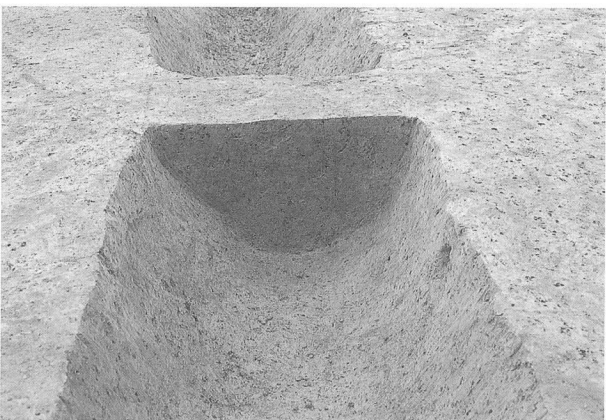
b) SD205断面 (北から)



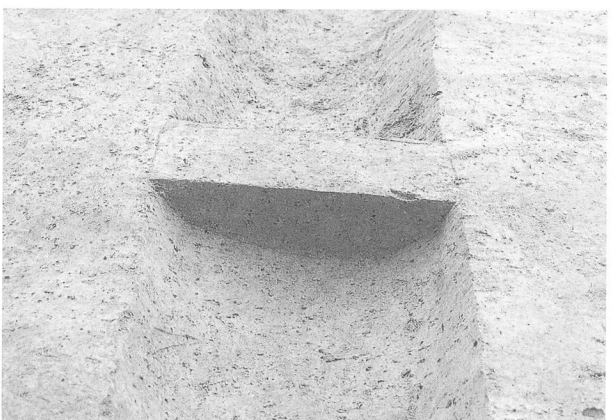
c) SD206断面 (東から)



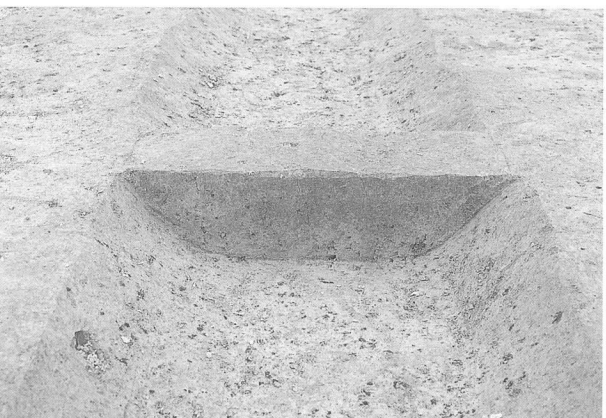
d) SD206断面 (東から)



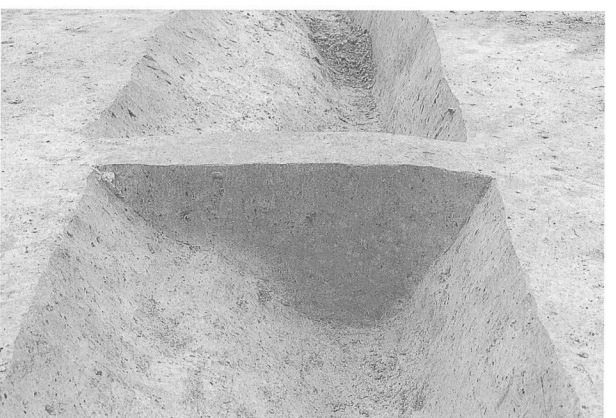
e) SD210断面 (南から)



f) SD211断面 (東から)



g) SD212断面 (西から)



h) SD213断面 (西から)



a) SD209全景 (南から)



b) SD209断面 (北から)



c) SD209内土器出土状況  
(北西から)



a) 噴砂A断面 (北から)



b) 噴砂A断面 (北から)



c) 噴砂B断面 (西から)



# 遺物写真図版



a. 1号窯Y E F層出土須恵器



b. 1号窯G K層出土須恵器



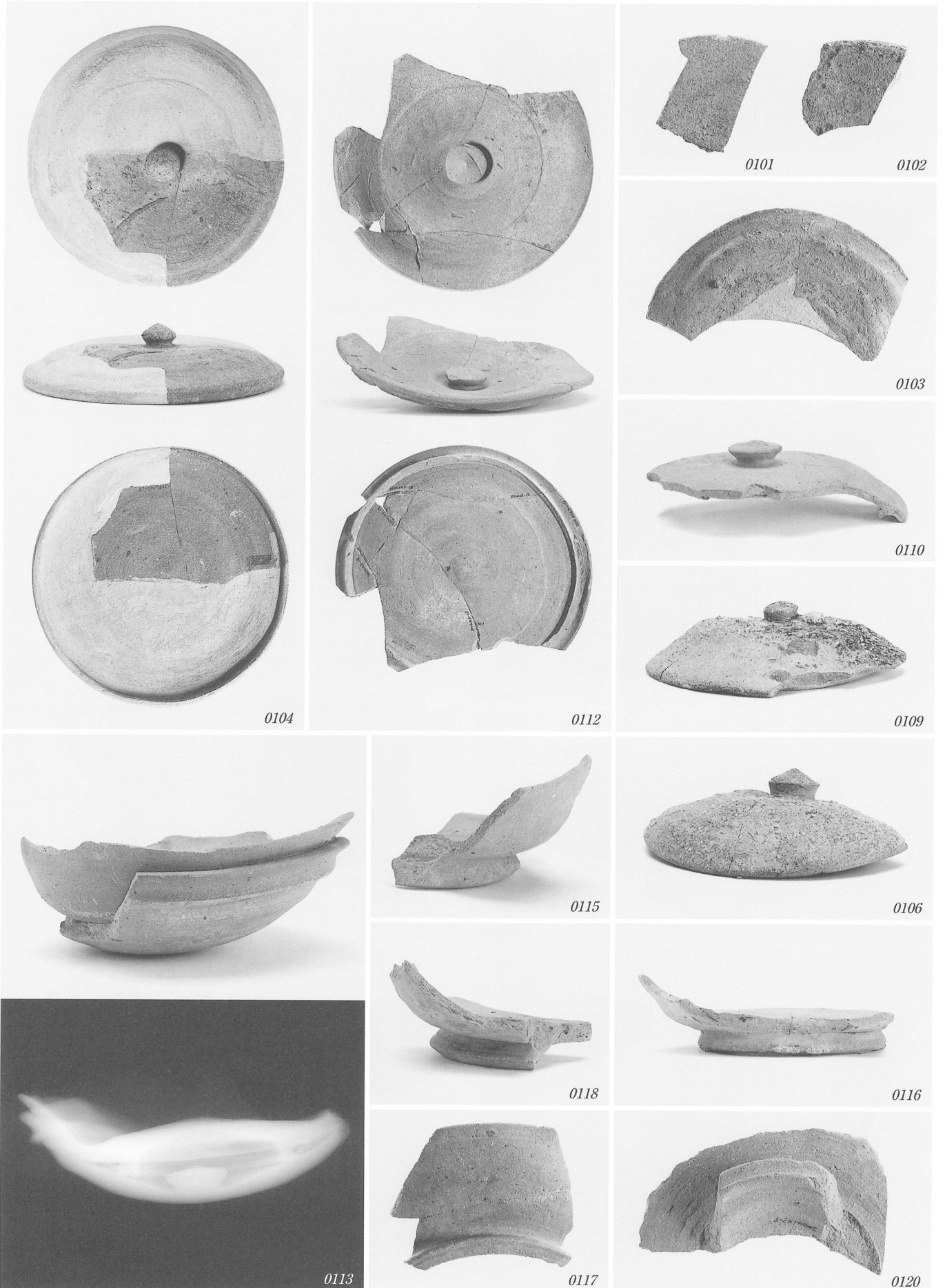
a. 1号窯MN層出土須恵器



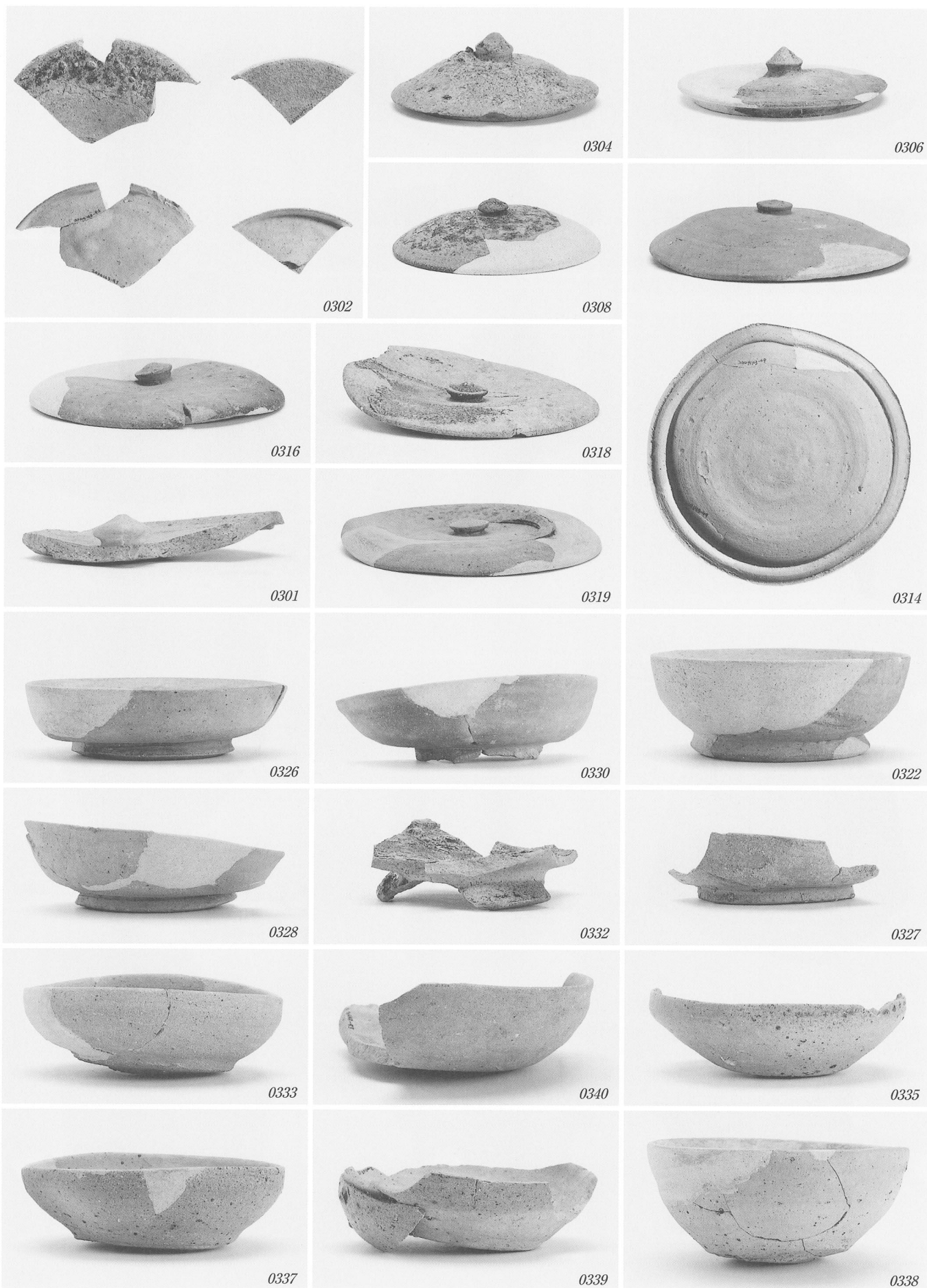
b. 2号窯出土須恵器

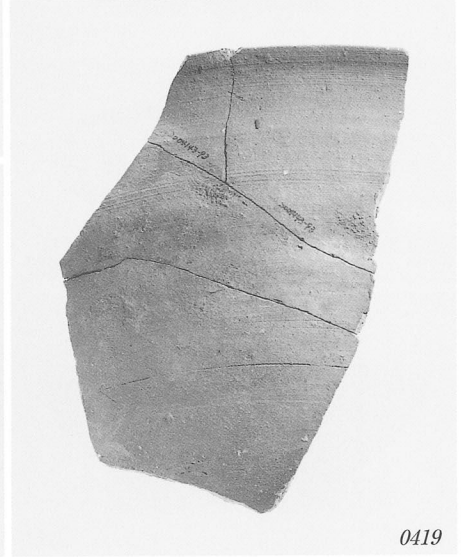
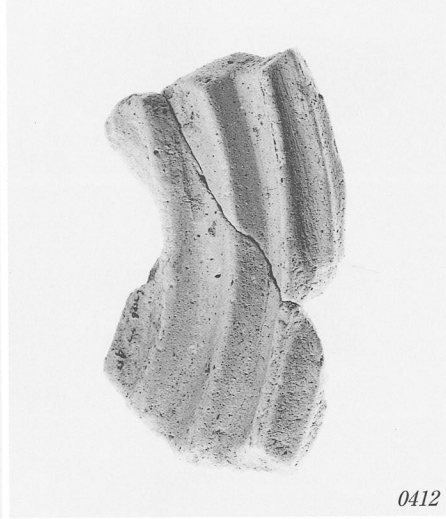
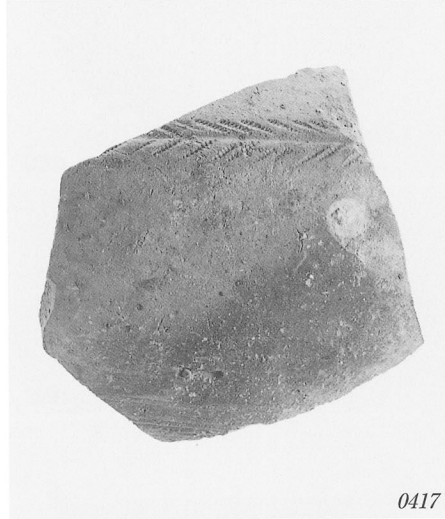
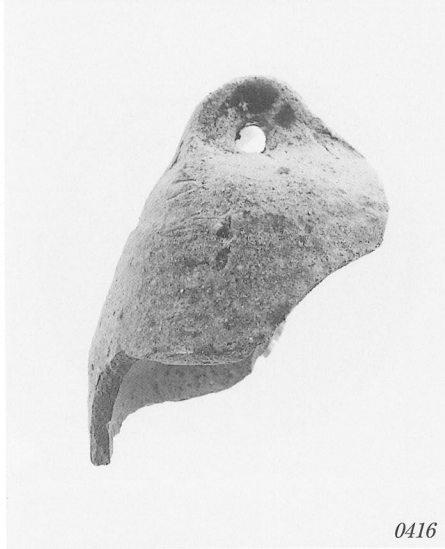
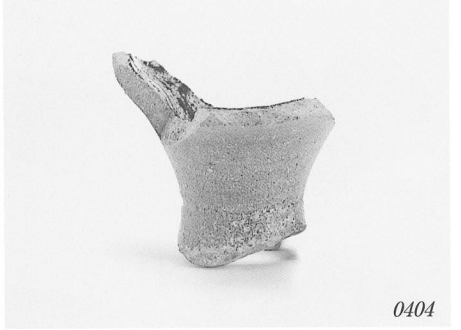


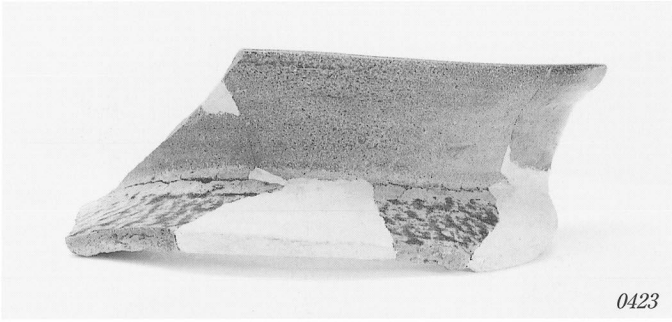
c. 汁谷遺跡SK201出土須恵器



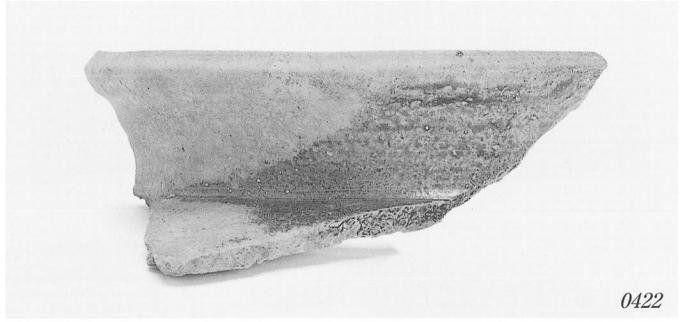








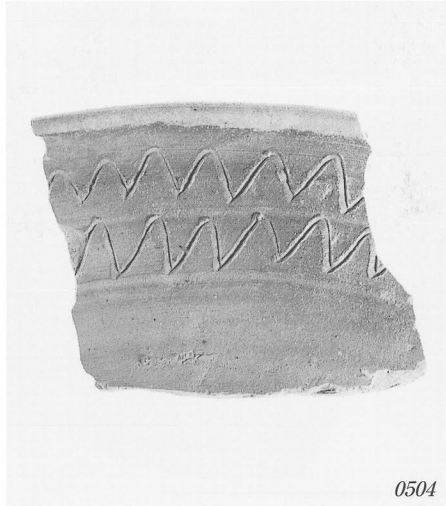
0423



0422



0502



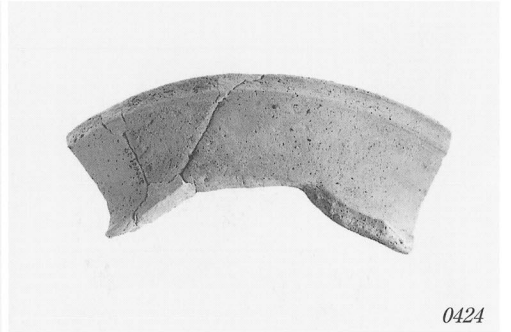
0504



0503



0501



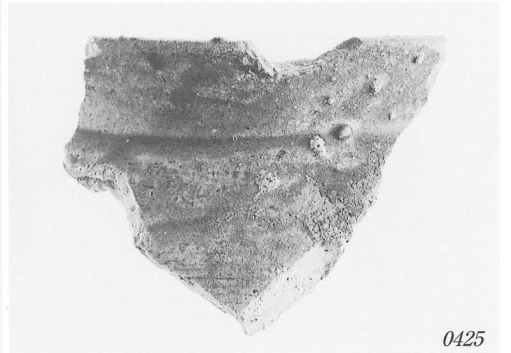
0424



0421



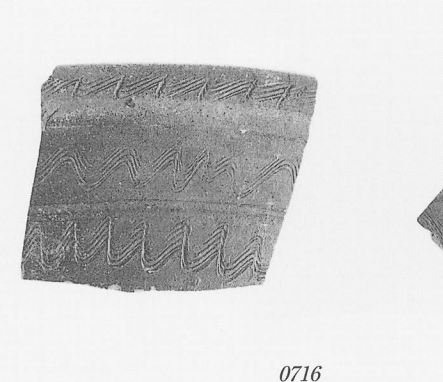
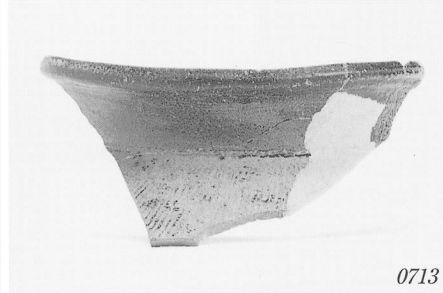
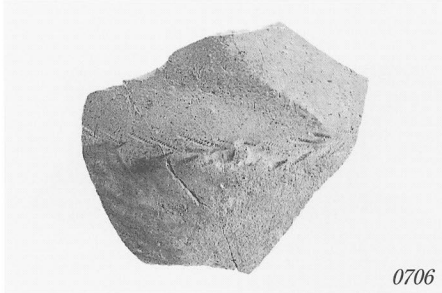
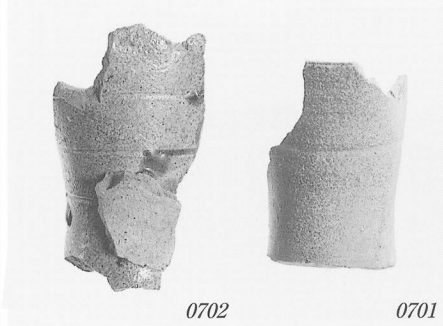
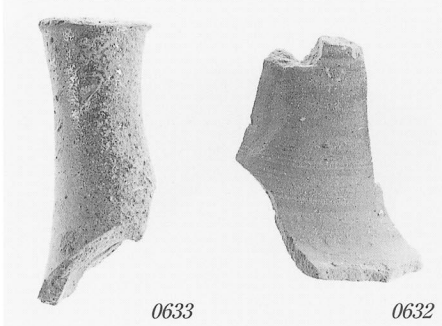
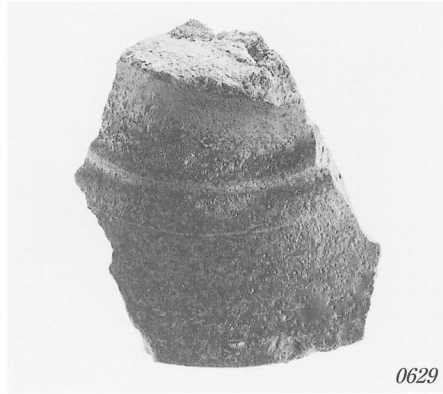
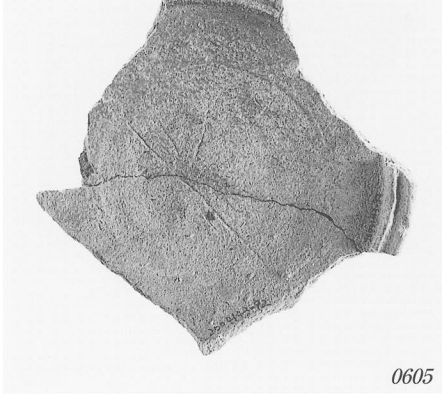
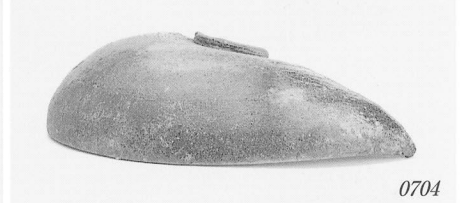
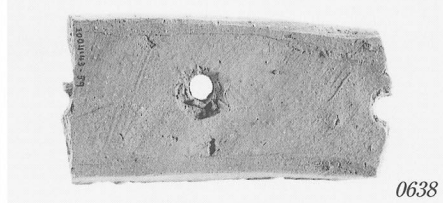
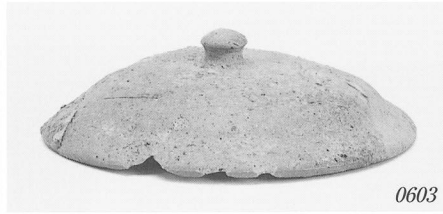
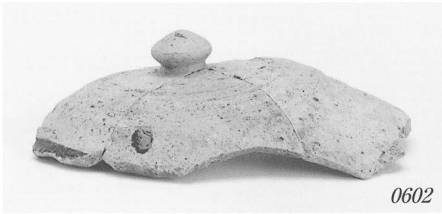
0505

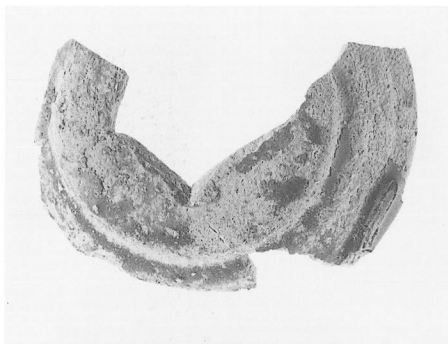


0425



1号窯 F K層出土須恵器





0805



0806



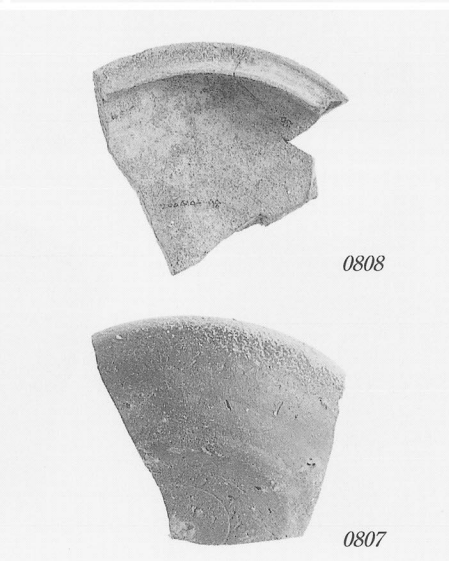
0802



0804



0811



0814



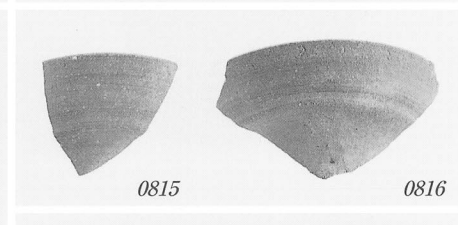
0801



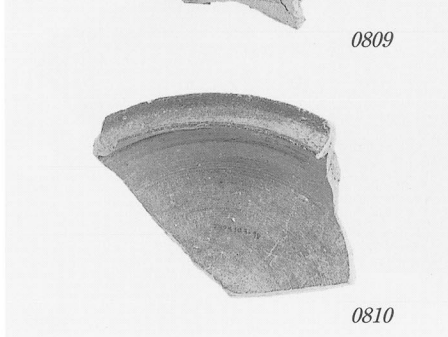
0812



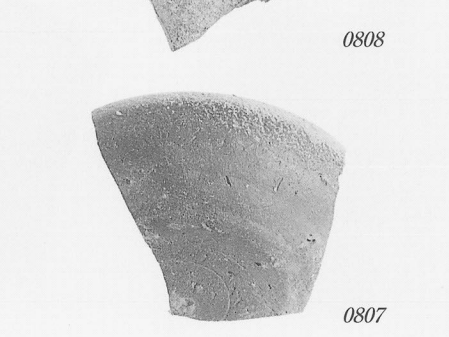
0808



0816



0809

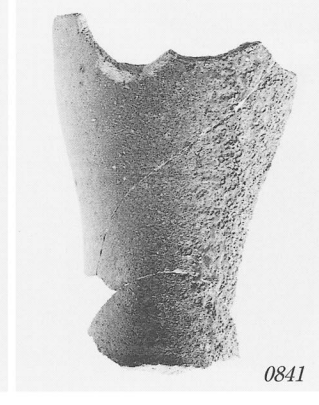
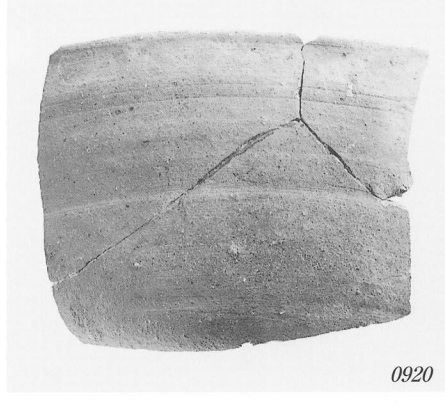
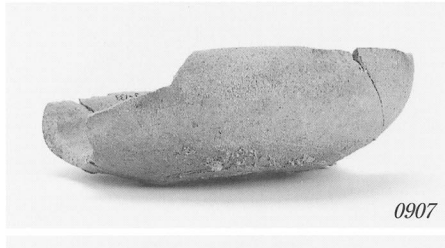
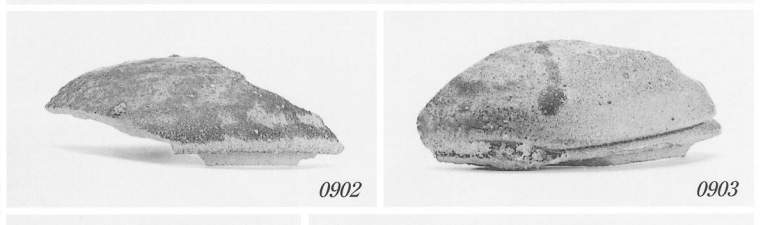
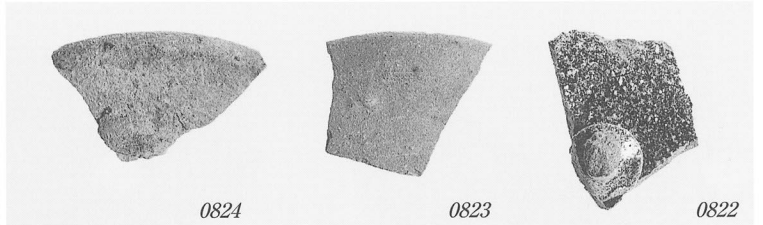


0807



0817

1号窯G・K層出土須恵器2



0901

0824

0823

0822

0902

0903

0825

0904

0832

0835

0910

0907

0918

0917

0919

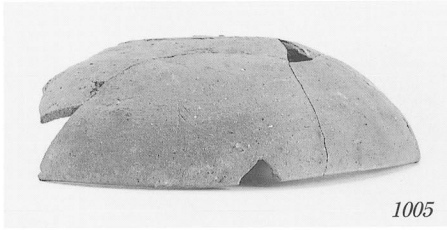
0921

0840

0920

0841

0924



1005



1011



1013



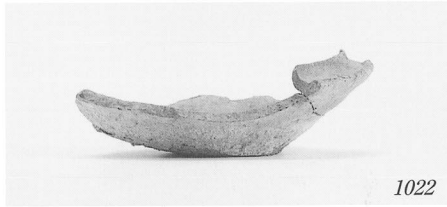
1025



1031



1032



1022



1026



1030



1017



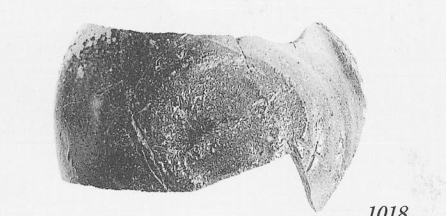
1016



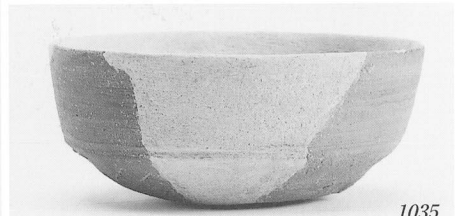
1034



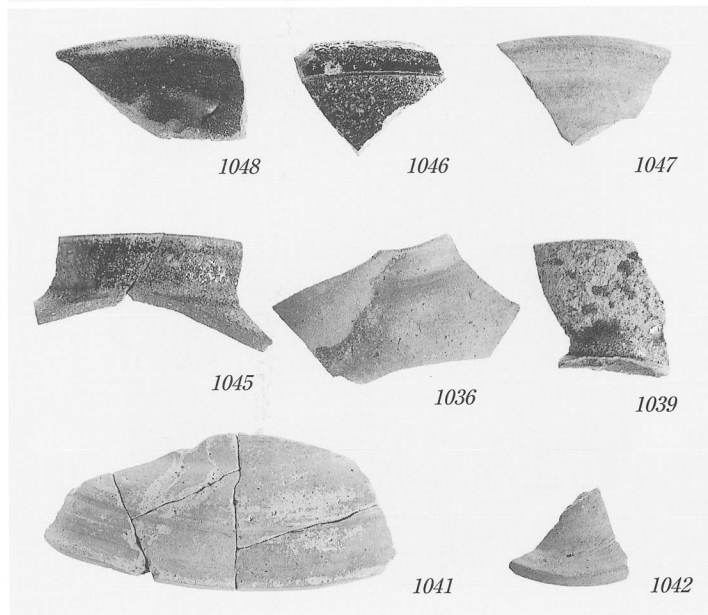
1015



1018



1035



1048

1046

1047

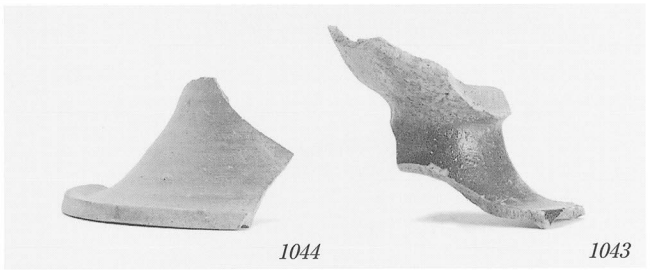
1045

1036

1039

1041

1042



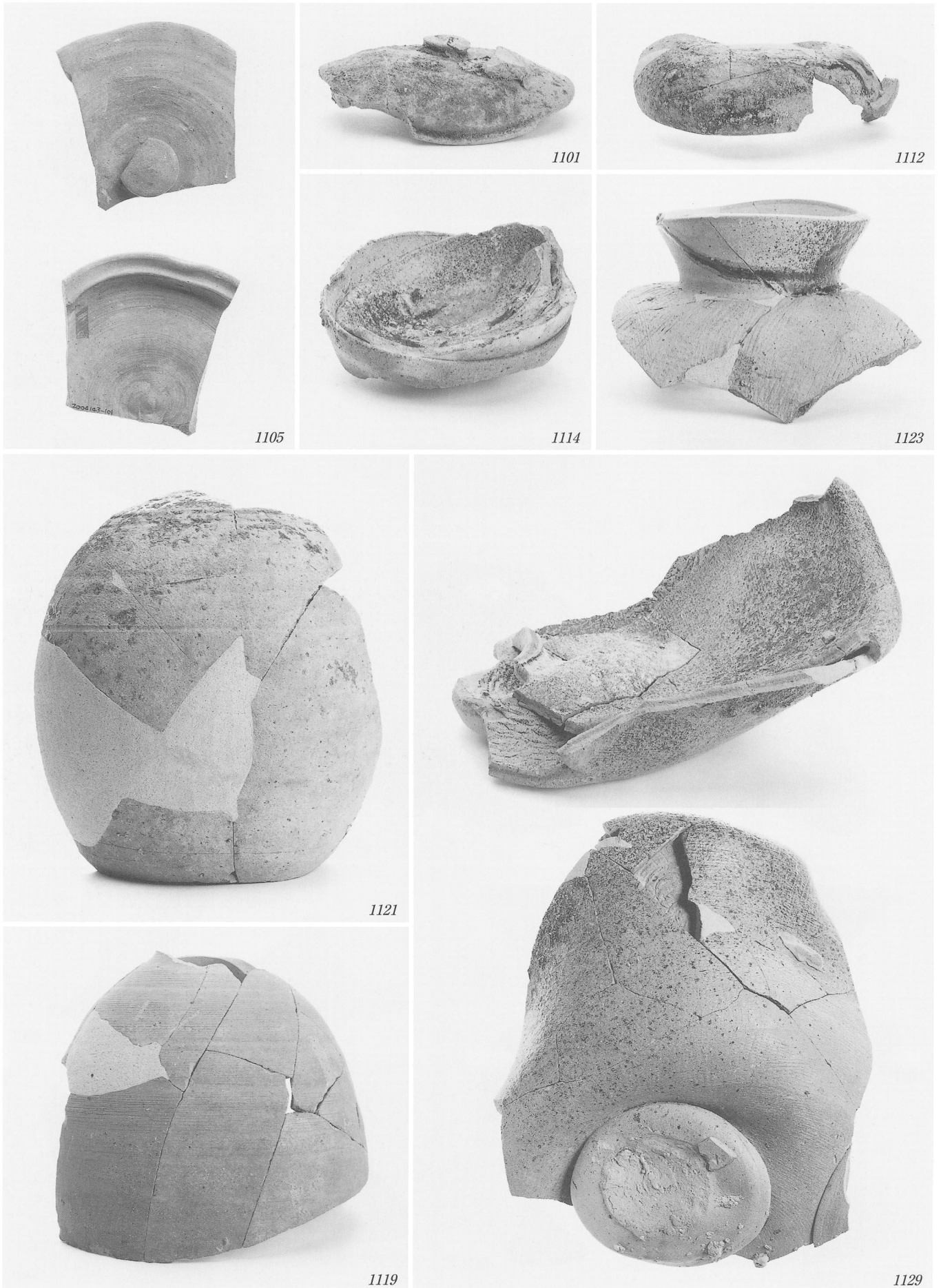
1044

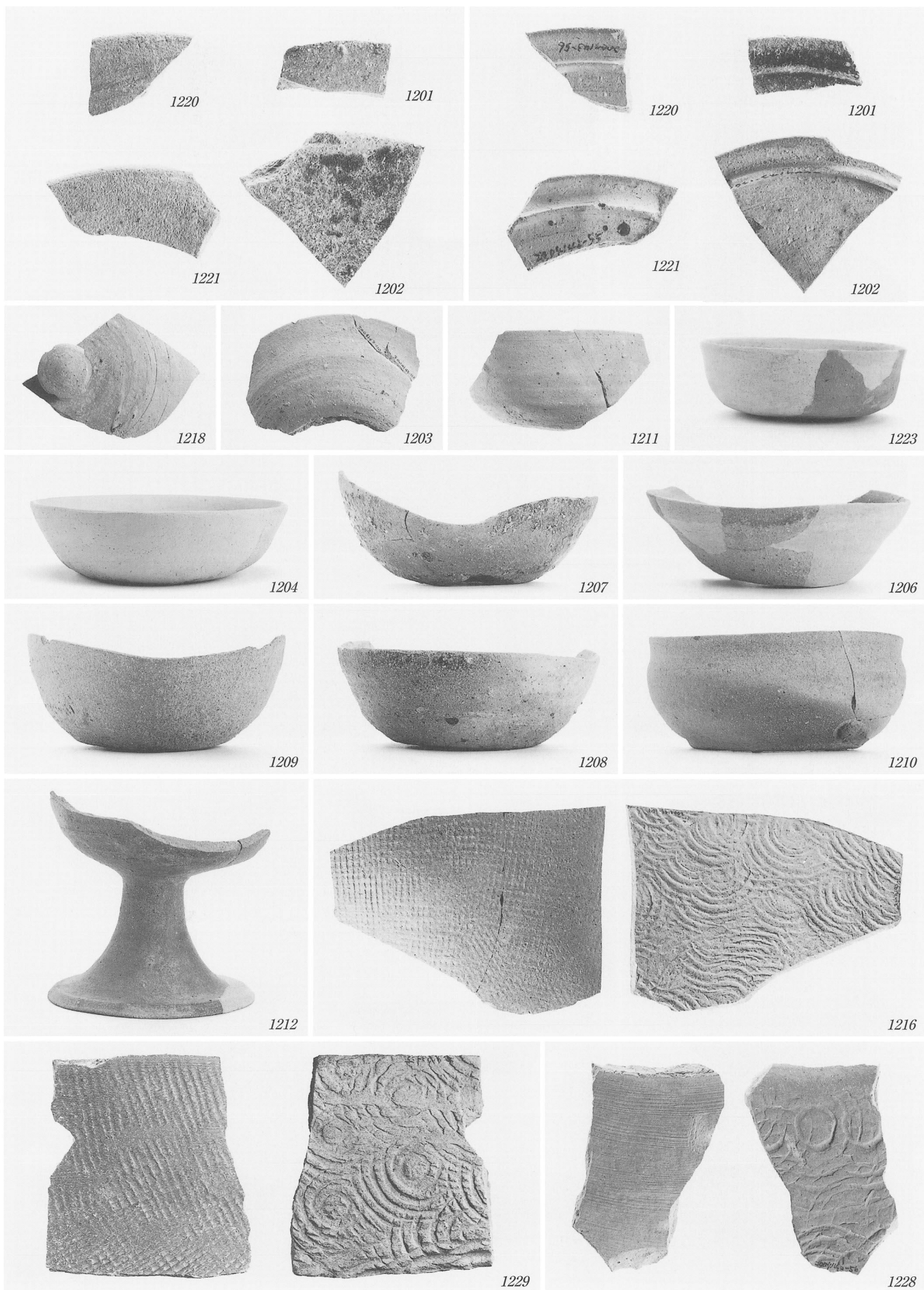
1043

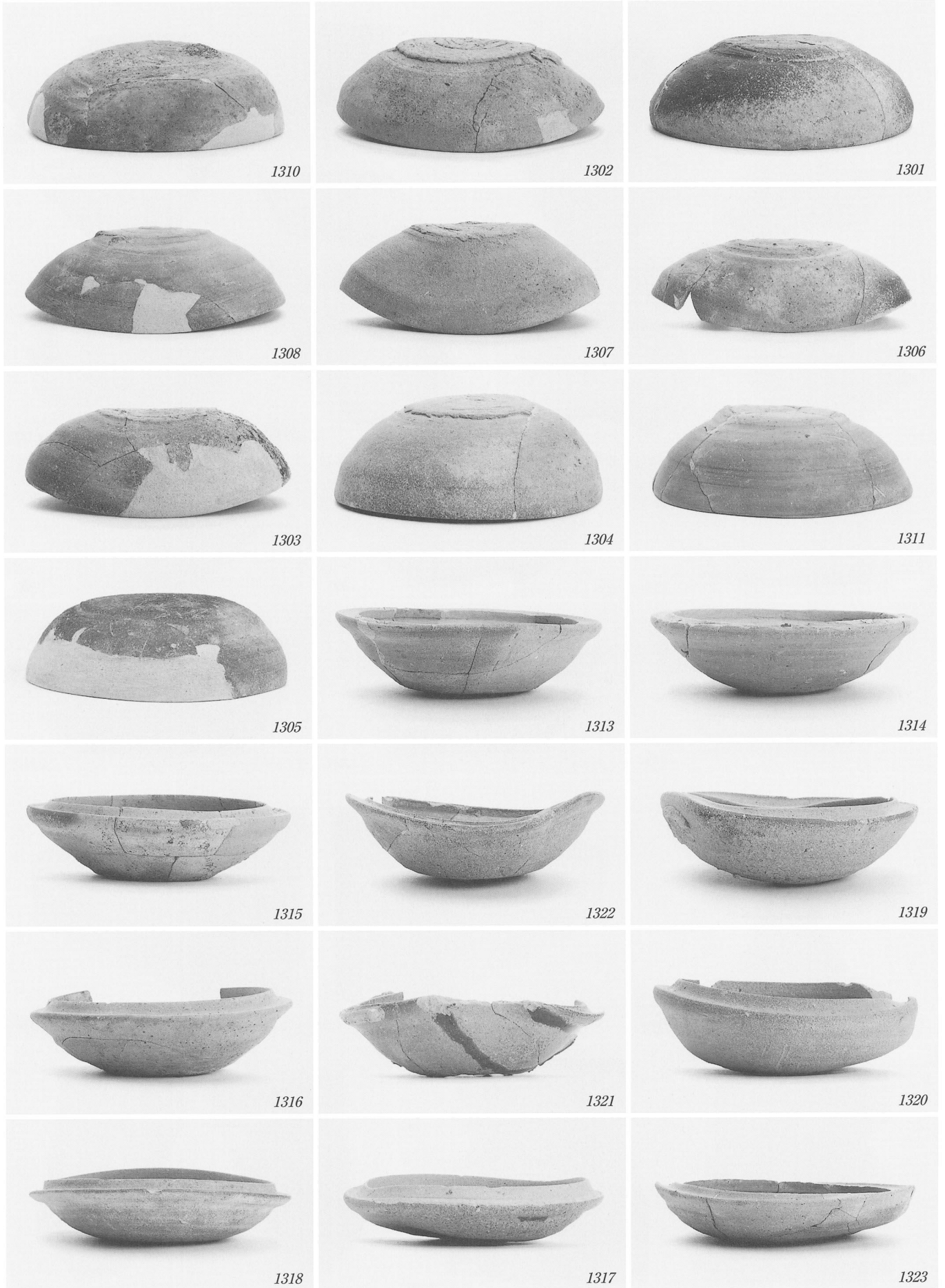


1040

1号窯土坑205出土須恵器





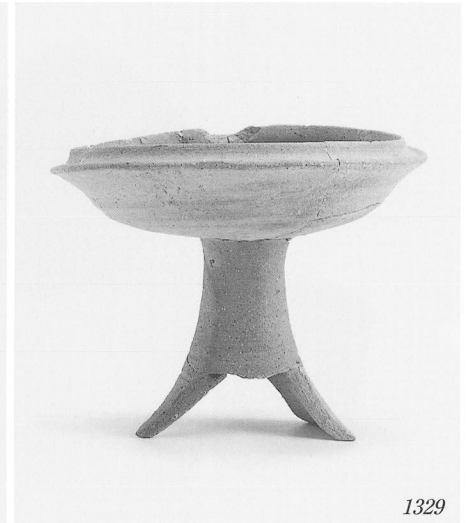




1330



1328



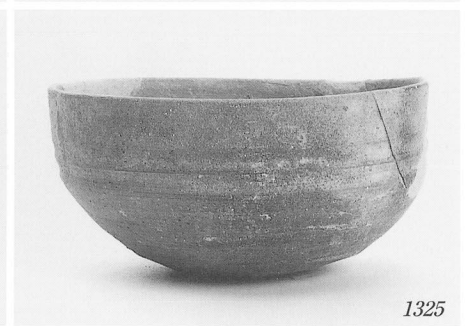
1329



1418



1327



1325



1417



1332

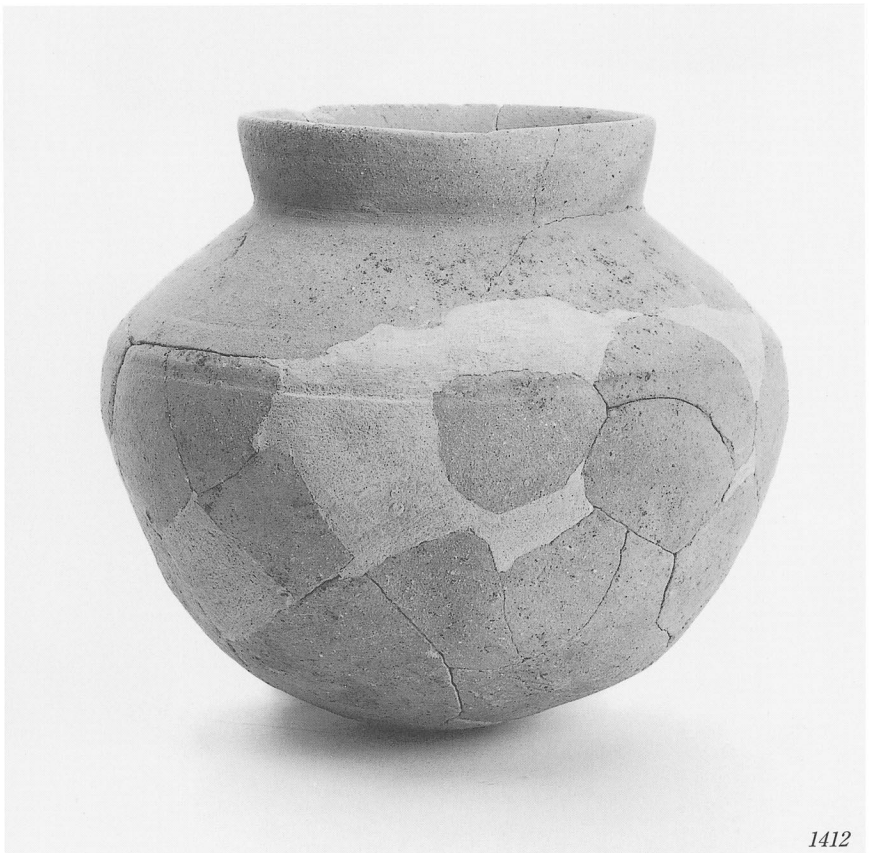
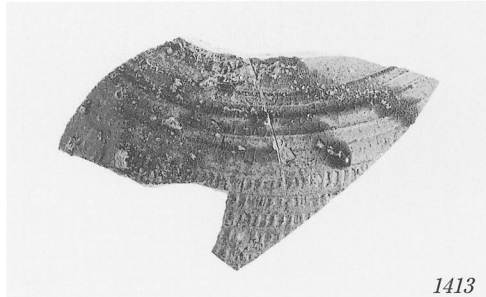
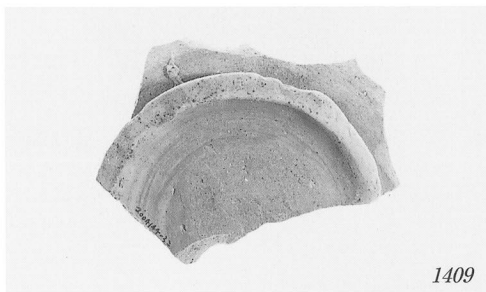
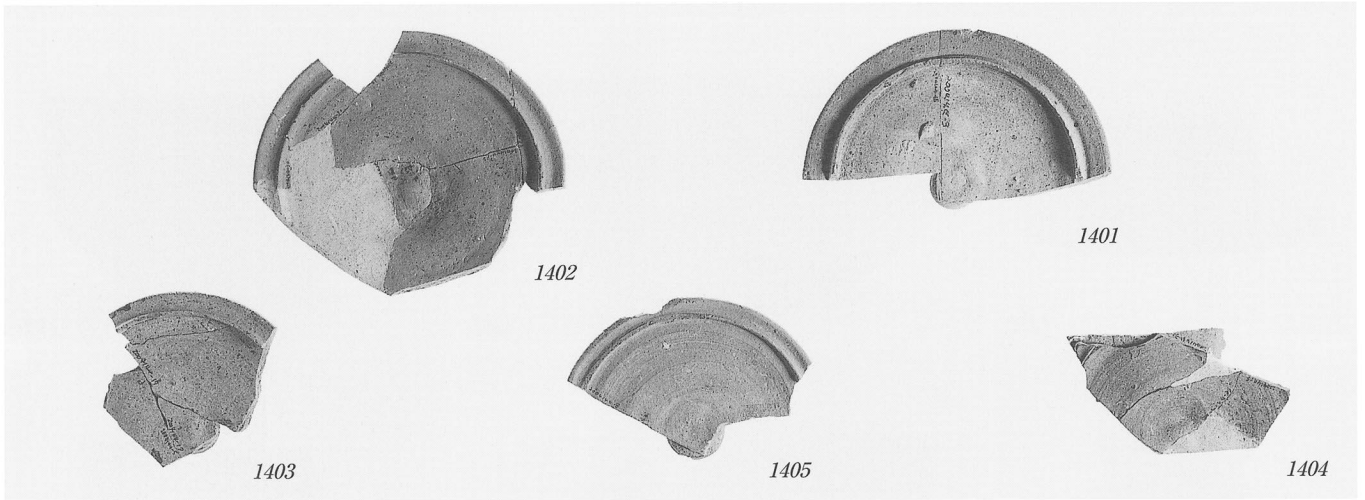
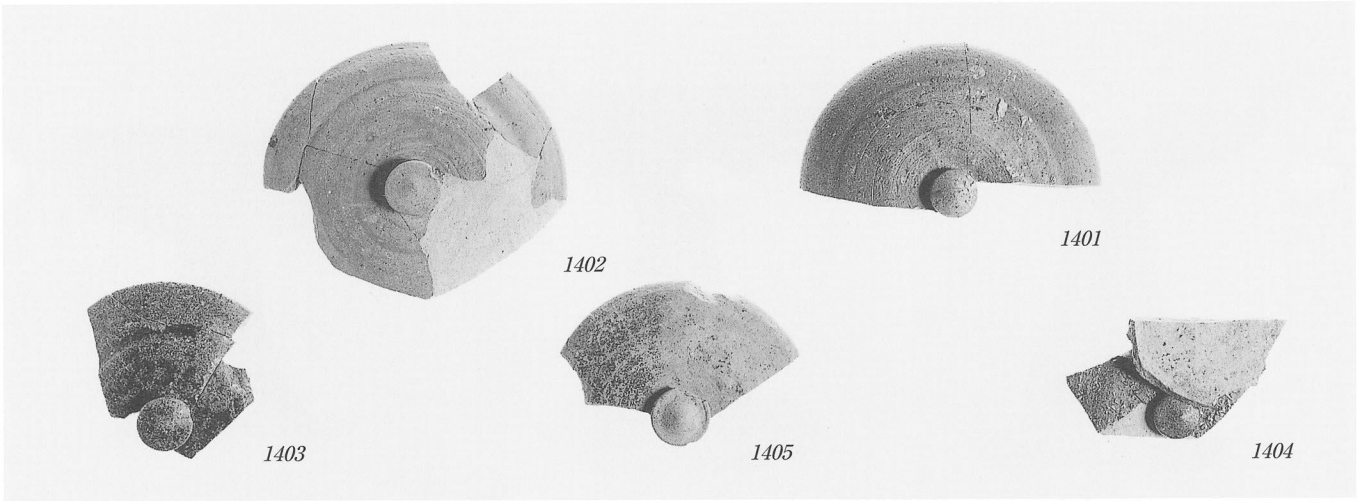


1324



1333

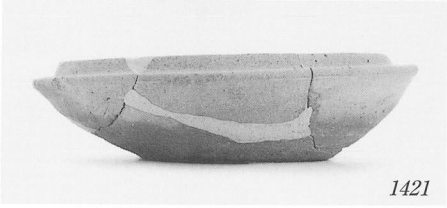




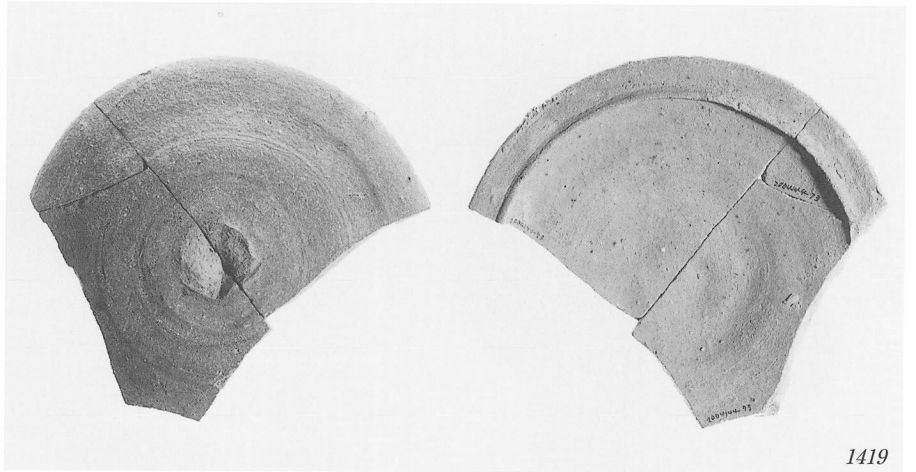
1412



1426



1421



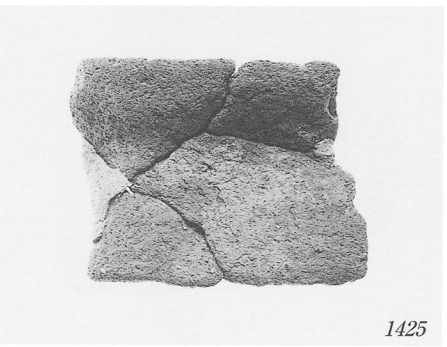
1419



1428



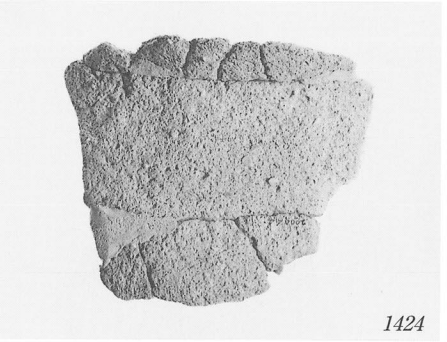
1427(表)



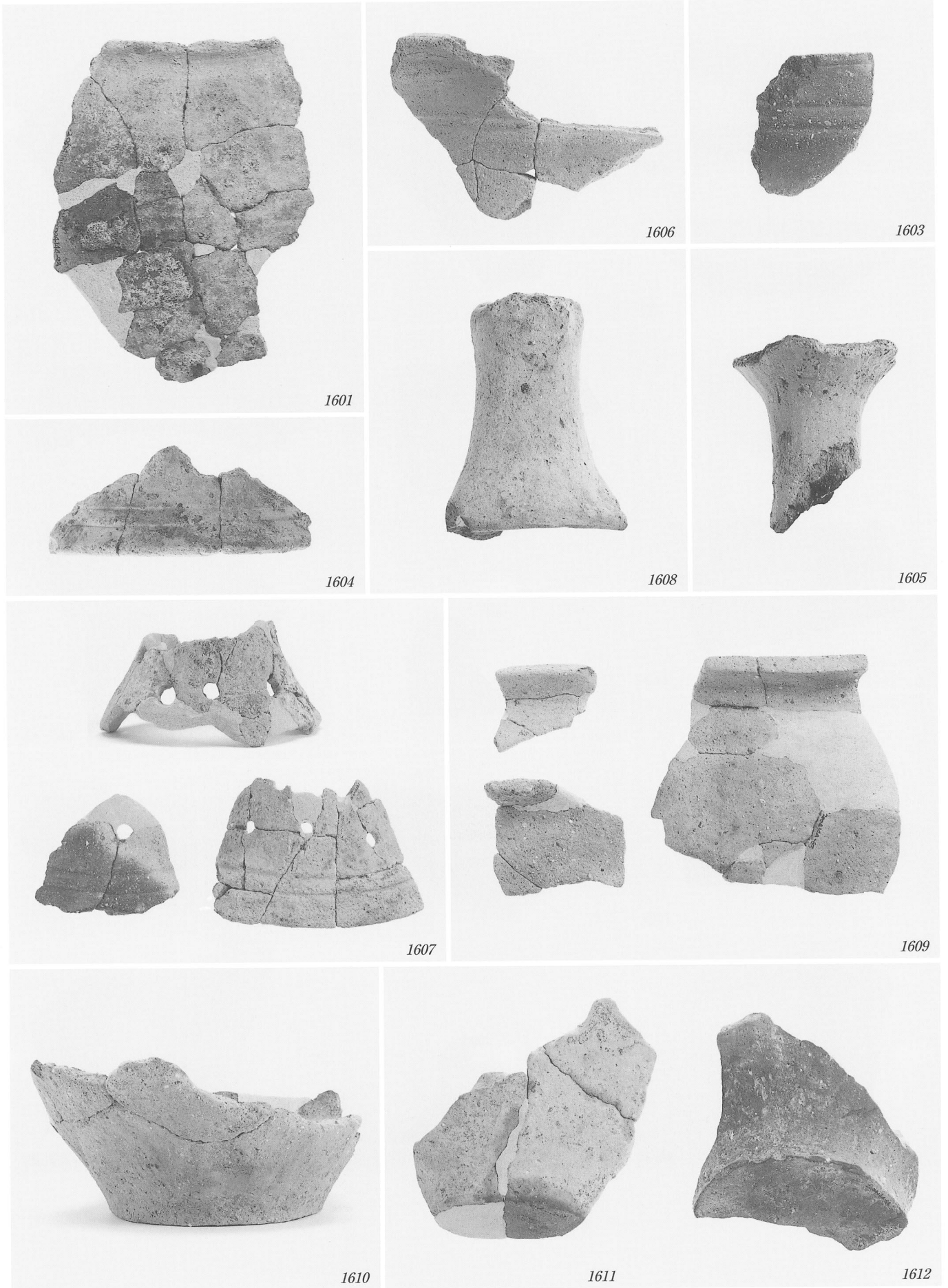
1425

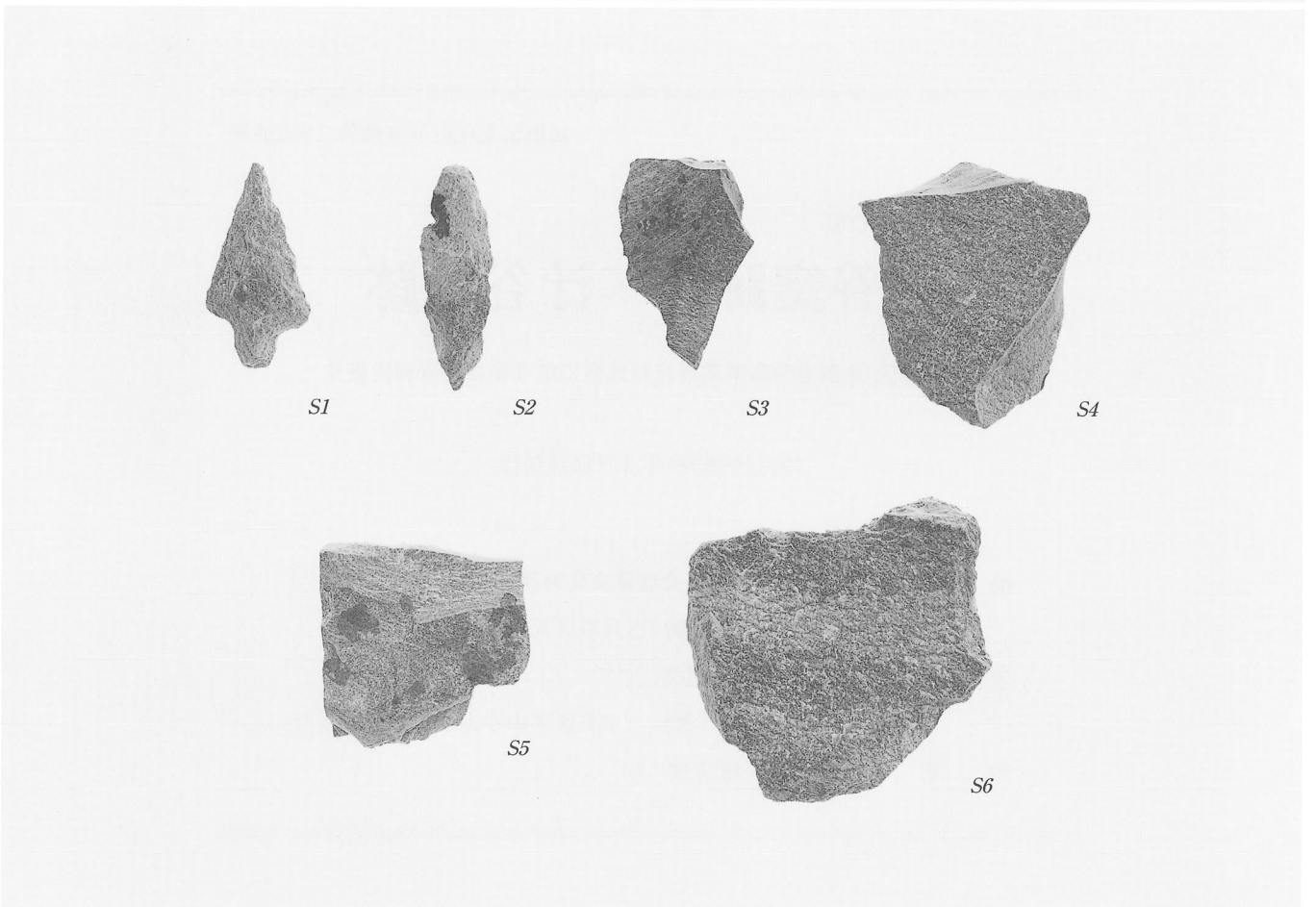
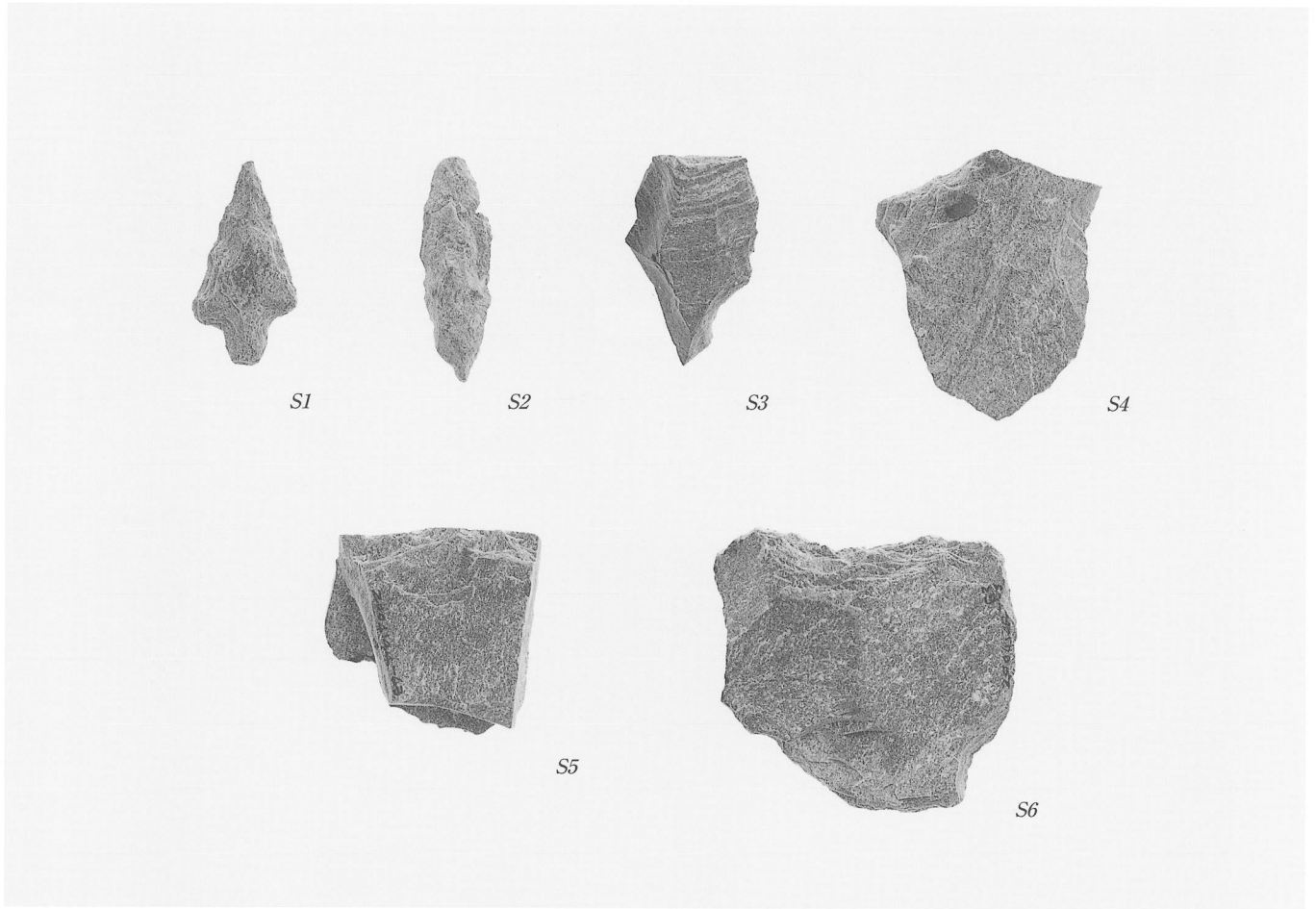


1427(裏)



1424





---

---

兵庫県文化財調査報告 第298冊

南あわじ市

# 汁谷窯跡群・汁谷遺跡

広域営農団地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅱ

2006(平成18)年3月20日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号  
印刷 株式会社 精文舎

---

---